今　泉　遺　跡

1．遺　跡　名　今泉遺跡（略号１１７５）
2．所　在　地　岩手県水沢市佐野
3．調 査 主 体　岩手県教育委員会・日本道路公団
4．調 査 担 当　岩手県教育委員会
5．調 査 期 間　昭和50年６月９日～９月12日
6．調査対象面積　約1935㎡
7．発掘調査面積　約1809㎡

第１図　今泉遺跡地形図　1：1000

Ⅰ　遺跡の立地と層序

(1)　遺跡の立地

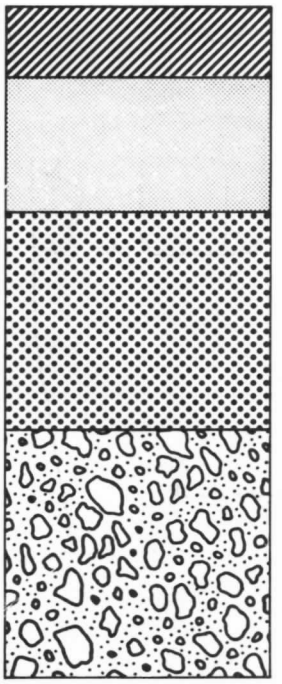
本遺跡は水沢市の北端、水沢市佐野に所在する。水沢段丘の北縁に位置し、胆沢川を眼下に見下す段丘崖上の平坦面に形成されている。尚、胆沢川は東流して北上川に注ぐ。海抜約54～55mで、現河床との比高は約4～5mとなっている。

段丘崖は、胆沢川そのものの水力によりかなり侵蝕されている。また、水沢段丘の北縁は、大勢としては胆沢川の流れに沿って北東方向に張り出す形となるが、本遺跡周辺では開田事業などでかなり原地形とは異なっている様子である。

土地利用の現状は畑地であるが、土地の人によれば、かつては宅地・墓地があり、また遺跡の南半は水田であったとのことである。

(2)　遺跡の層序

表土から基盤の礫層に至るまで4層に大別される。表土下のⅡ層とした上面が遺構検出面であり、遺構の多くはⅢ層上面にまで達している。段丘崖縁の遺構は、水力の侵蝕によりその大半を失っている例もある。



Ⅰ．茶色のシルト質土。耕作土。12～14cm。

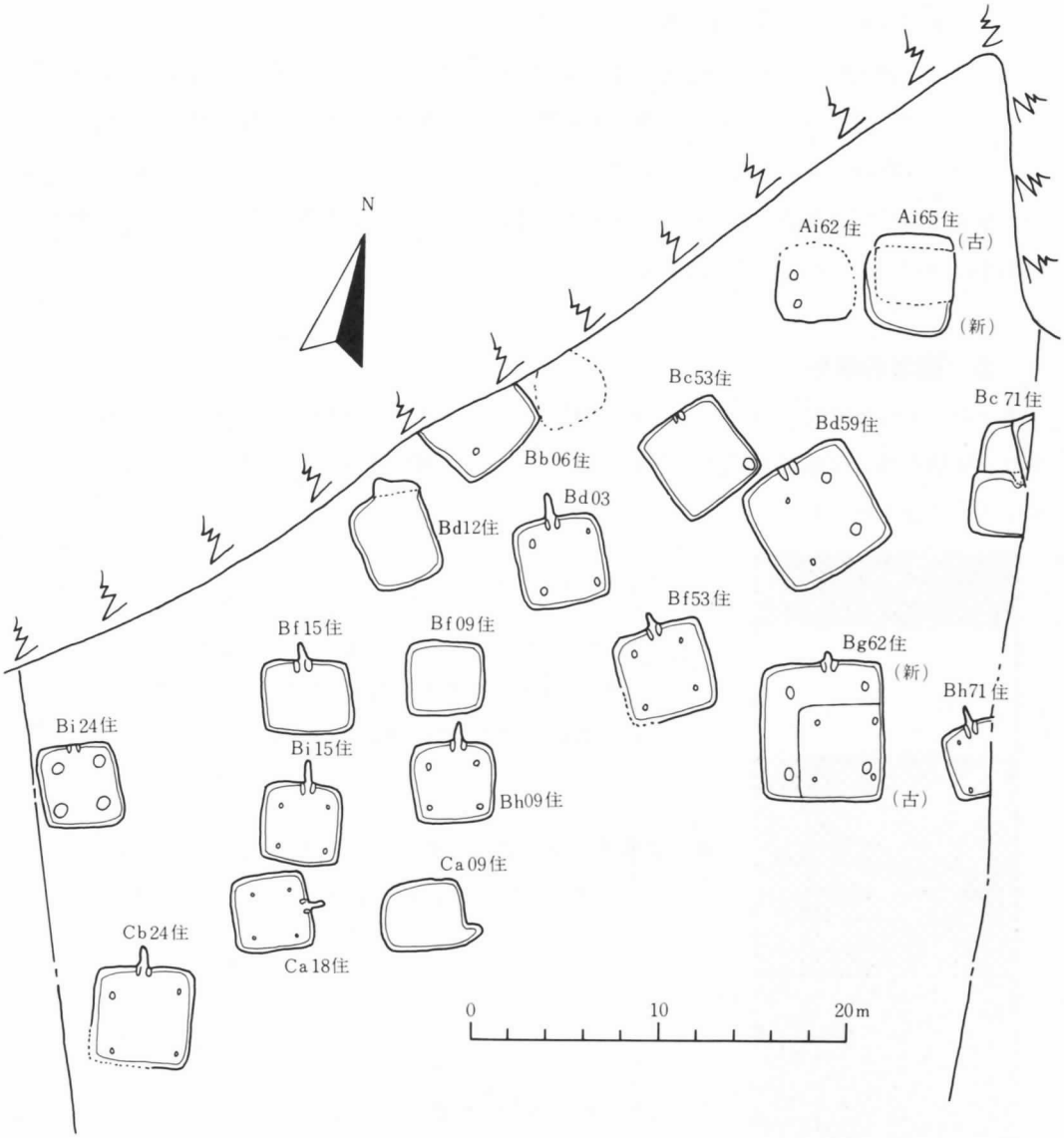
Ⅱ．暗褐色シルト質土。表面は茶がかる。湿気のある場合にはやや粘性・締まりあり。乾燥時にはクラックが入る。北側で25cm。南側で60～80cm。遺構検出面。

Ⅲ．黄褐色シルト質土。粘性弱で乾燥するとサラサラしている。南側で1.4～1.5mの厚さ。

Ⅳ．基盤の段丘礫層。砂粒中に人頭大の礫が存在。最底でも3m以上はある。

第2図　今泉遺跡・層序概念図

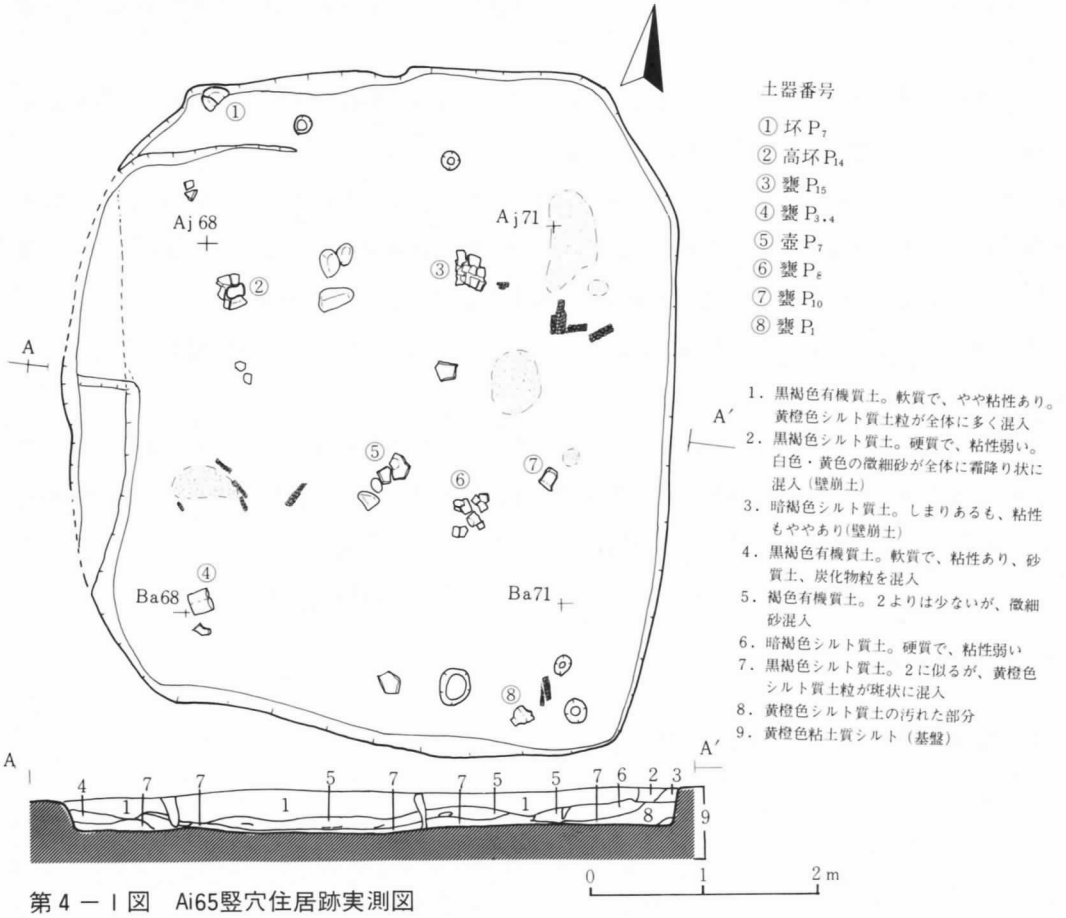
第3図　遺構配置図


N
Ai62住
Ai65住
(古)
(新)
Bc53住
Bc 71住
Bd59住
Bb06住
Bd03
Bd12住
Bf53住
Bf15住
Bf09住
Bg62住
(新)
Bh71住
Bi24住
Bi15住
Bh09住
(古)
Ca09住
Cb24住
Ca18住
0
10
20m

以下については、概念図を示して土性を註記する。

II　発見された遺構と遺物

Ai65竪穴住居跡（第4図・第1表）



第4－1図　Ai65竪穴住居跡実測図

遺跡の西北隅の現在の段丘崖直近に位置。耕作土直下の暗褐色シルト質土層上面（本遺跡の遺構検出面はすべてこれと同一であるので、以下の説明では、それには特に触れないこととする）に検出。

西方に隣接するAi62住居跡と一部重複し、またAi65（以下には住居跡は省略する）自体に於いても、新・旧の重複が見られる。図中の竪穴住居床面上に、北辺・西辺が一部2本見られるのがそれであり、新期のものは旧のものよりやや南方と、南へずれた位置で重複している。

重複関係その他の理由で平面形は判然とはしないが、前述の一部残存の壁からすると、少な

くとも新期のものは一辺4.5m（推定）・床面積20.25m²（推定）程の正方形となるようである。住居中軸線（推定される北壁と南壁の中点を結んだ線）の方向は、ほぼ磁北に一致する。

遺構内に堆積している層は、大別して三層になる。

第１層　黒褐色有機質土層。軟質でやや粘性がある。壁際に一部壁の崩土と思われるブロックがある。

第２層　褐色有機質土層。締まりがあってやや硬質。粘性は弱い。新期の住居跡内にのみ分布する。

第３層　黒褐色シルト質土層。締まりがあってやや硬質。粘性は弱い。この層の上面がある時期の生活面と思われ、土器片他が同一のレベルに分布する。

床面は比較的平坦面が多い。床面上（ある時期の生活面）に５箇所の焼土塊と炭化材７個がみられる。壁はほぼ垂直に立ち上がり、ほぼ24cm前後（遺構検出面まで。以下壁高については同じである）の壁高となる。他に５箇所（うち１個は旧のもの）の浅いピットがある。

それらの各ピットはいずれも浅く、位置も不整で、柱穴と認めるべき積極的な根拠を示すものはない。

カマドと明確に認め得るものは存在しない。新期住居跡の北東隅一帯と、南東隅の一部に焼土の分布がみられたが、何れも７層の上にのり床面は焼けておらず、カマド・炉とは認め難い。

その他周溝・貯蔵穴など特記すべき施設は存在しない。

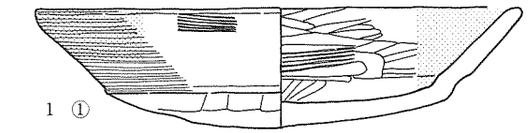
年代決定に資するものとしては、新・旧の床面上出土の土師器類が挙げられる。

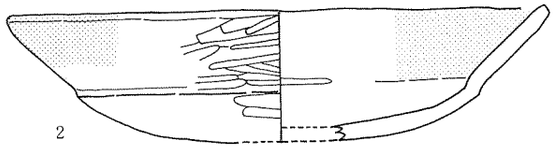
（遺　　物）

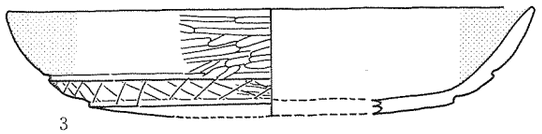
Ⅰ　土師器（第４－２図　１～９）

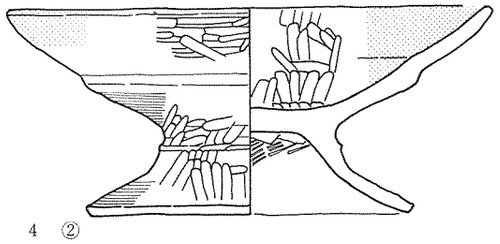
第１表

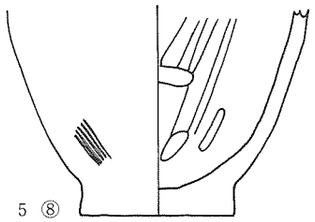
分類	平面図上の土器番号	実測図番号	調 口縁部 内面	調 口縁部 外面	調 体部上半 内面	調 体部上半 外面	調 体部下半 内面	調 体部下半 外面	調 底部 内面	調 底部 外面	器高	口径	底径	備考
甕	⑦	6	刷毛目	横ナデ	刷毛目のちミガキ	刷毛目	刷毛目のちミガキ	刷毛目部分ナデ	ナデ	ヘラケズリ	10.2	13.8	5.8	
		8	欠失	欠失	欠失	欠失	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ			9.0	
	⑧	5	欠失	欠失	欠失	欠失	ヘラミガキ	刷毛目	ヘラミガキ	ヘラケズリ(?)			6.7	
	③	9	欠失	欠失	欠失	欠失	刷毛目	刷毛目のちミガキ	刷毛目	ミガキ(?)			7.0	
壺	⑤	7	欠失	欠失	欠失	欠失	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ			7.8	
坏		3	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキのち交叉する沈線文	ヘラミガキ	ヘラミガキ	4.6＋α	22.6	15.6	内黒
	①	1	ヘラミガキ	横ナデ	ヘラミガキ	横ナデ	ヘラミガキ	ヘラケズリ	ヘラミガキ	ヘラケズリ	5.1	20.3		内黒
		2	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	5.6	23.2		内黒
高坏	②	4	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	刷毛目のちミガキ(?)	ヘラミガキ横ナデ	8.8	20.8	14.0	内黒

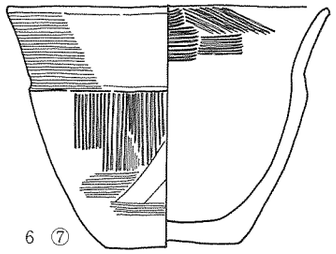


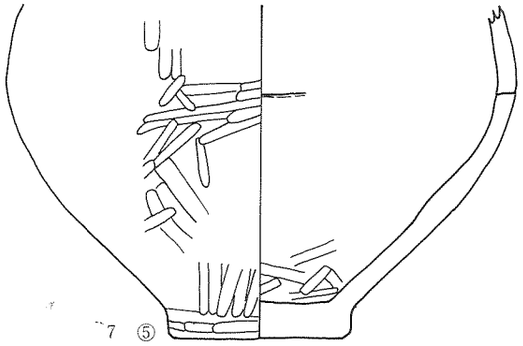


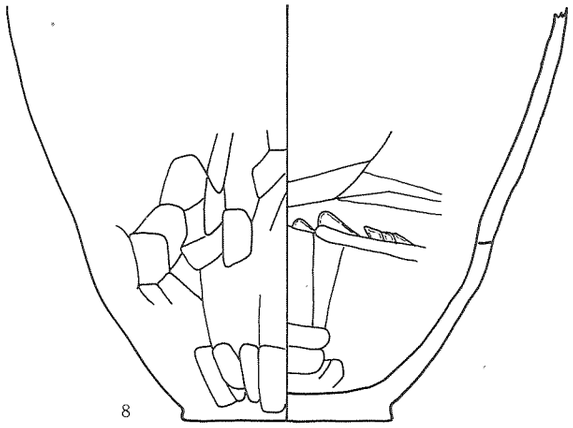


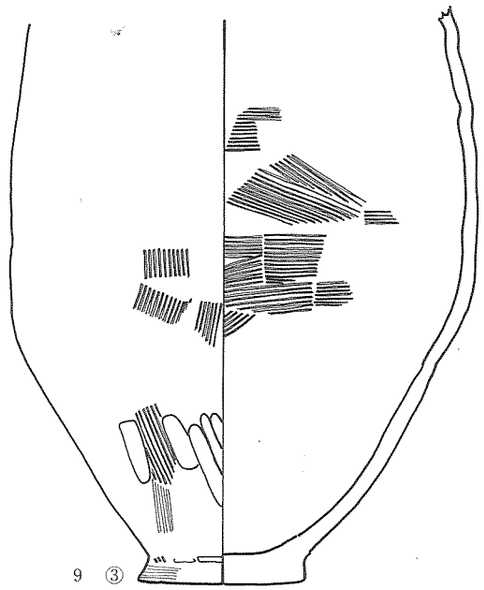


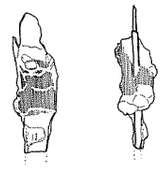




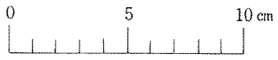








※各遺物実測図に付した番号は、1.2.……が実測番号であり、①②……が遺構平面図上に記載された遺物番号を表わしている。
以下の図版についても同様である。



第４－２図　Ai65竪穴住居跡出土遺物実測図

II 鉄　器

釣針形（同10）：逆刺様の突出部まで備えているので、釣針と断言できるであろう。正確な断面形は錆などのために判然としないが、やや薄手で長方形ないし長楕円形を呈するようにみえる。上端部を欠失しているので、糸との連結部分の形状は知り得ない。

刀子形（同11）：断面形が楔形をなし、柄と思われる木質も残存しているので、刀子と推定した。比較的良好な残存状態である。柄と接する部分の身の上部に棒状の鉄の部分があるが、何らかの特別な工夫かもしれない。

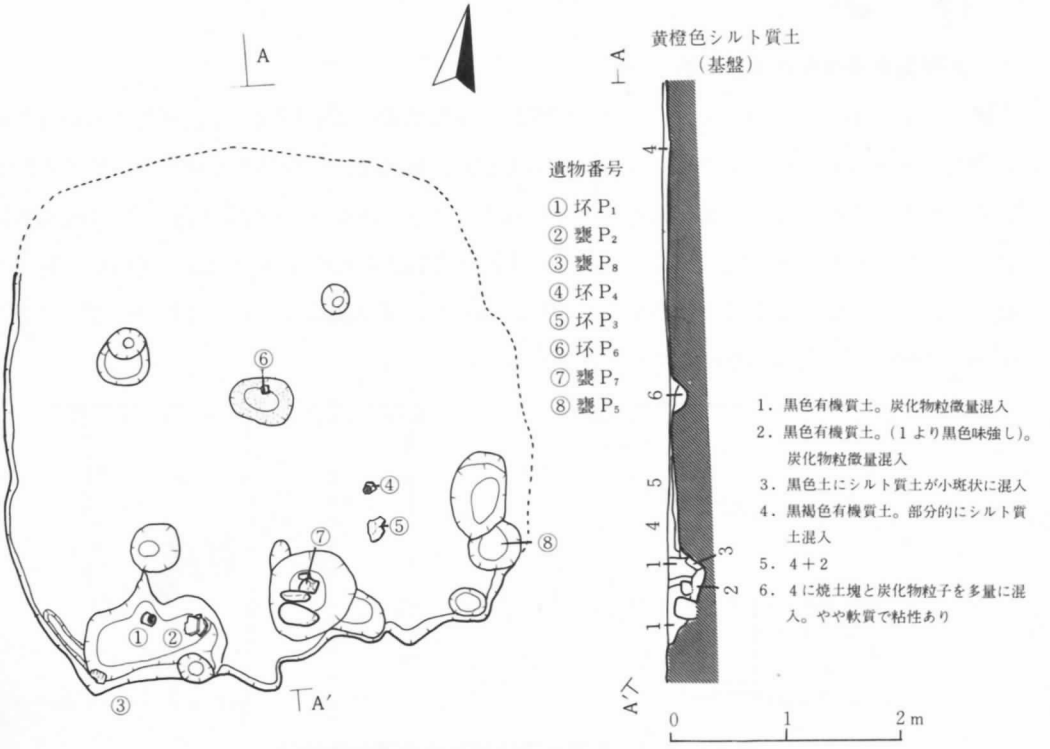
Ai62竪穴住居跡（第５図）

前述のAi65の西隣に検出。残存状況が非常に悪く、特に北半にそれが著しい。東端部付近で一部Ai65と重複。その他、増・改築等の事実はみられない。

平面形は特に北・東両辺が不明のため判然とはしないが、残存両辺からすると一辺４ｍ（推定）前後、床面積16m²（推定）のやや中央部の膨らんだ方形になるもののようである。中軸線の方向は、磁北からやや西に偏する。

遺構内に堆積した土層は、大略二層からなる。

第１層　黒褐色有機質土層。遺構全体にみられ、本来的な遺構覆土であったと思われる。



第５－Ｉ図　Ai62竪穴住居跡実測図

第２層　黒色有機質土層。床面上にうがたれたピットの覆土である。

床面は、南壁沿いの部分に多くピット類がうがたれている他は、比較的平坦部分が多く、北半にそれが著しい。壁高は、南壁の一部では10cm前後、北半部では判然としない程非常に浅い。床面上に大小11個のピットが存在する。

そのうち壁際を離れ中央部に寄っている３個は、平均径40cm、平均深さ（床面から）20cmを測り、柱穴となる可能性がある。南東部にはそれがみられない。尚、西北のものには、掘り方・柱あたりも一応見て取れる。配置は大略対角線上にのるといってよい。

カマドと明らかに見做し得るものはないが、床面ほぼ中央に50×30cm、深さ10cmの楕円形の浅い掘り込みがあり、その中に焼土が充塡していたので、あるいはこれが炉として用いられた可能性がある。

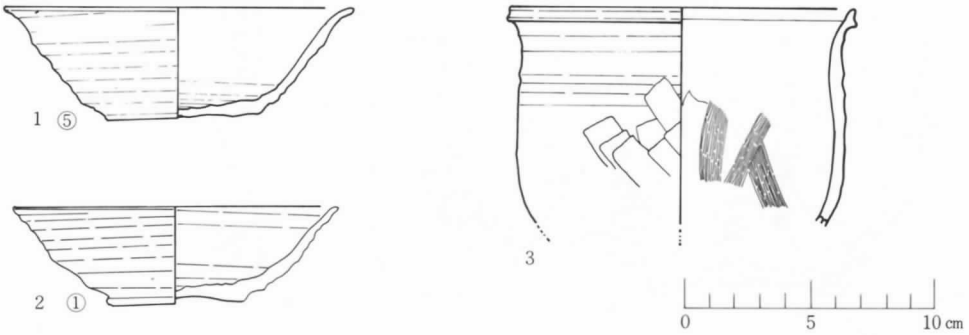
床面上にみられるその他の施設としては、南壁の中央付近に長楕円形ないし長方形の、西南隅付近にほぼ円形の掘り込みがあり、その中に前者には土器片、後者には土器片と長大な礫が入っていた。これら両者は、一応貯蔵穴的なものと考えておく。尚、東南隅にも円形等の掘り込みがあり、貯蔵穴とも考えられるが、遺物等もないので性格不明としておく。

当遺構の年代推定に資するものは、床面上出土の坏と貯蔵穴中出土の甕の各土器類である。

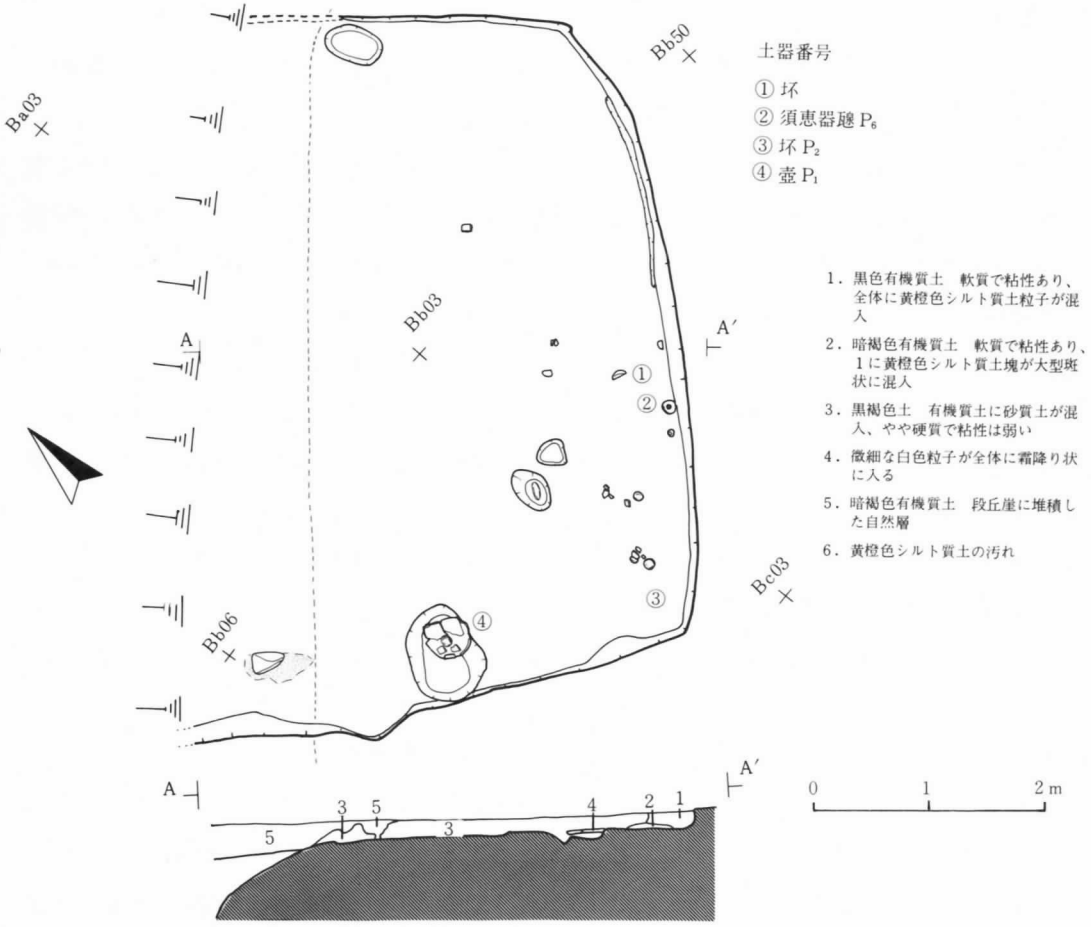
（遺　　物）

Ⅰ　土師器質のロクロ成形土器

坏１・２（第５－２図１・２）：ロクロ成形。回転糸切による切離しで、調整はみられない。両者共に体部は底部からやや外反気味に立ち上がる。器表面には内外共にロクロ成形時の凹凸がみられる。内面には箆ミガキ調整や、黒色処理等はみられない。（尚本土器のように、成形にロクロを使用したことが明らかで、しかも色調が須恵器のそれのような所謂「燻べ色」を呈しないものを、いかなる範疇に含めればいいかについては種々議論のあるところなので、ここでは一応標記のような名称を与えておいた。）



第５－２図　Ai62竪穴住居跡出土遺物実測図



第６－Ｉ図　Bb06竪穴住居跡実測図

甕（同３）：所謂「長胴形」までいかない中型の甕。成形にロクロを使用。体下半部にやや膨らみを持つ。口縁は緩く外反するが、口唇部には直立した突帯を繞らし、ロクロ成形のものにみられる強く屈曲する口縁を印象づけている。体部上半外面には横走するロクロ成形痕、下半には縦方向の箆削り調整痕がみられる。内面上半は外面に同じ、下半には縦・斜方向の箆ナデ様の調整痕がみられる。

以上は一括遺物と見做されてよいであろう。

Bb06竪穴住居跡（第６図　第２表）

遺跡敷地の北縁中央部に検出した。現在の段丘崖に臨み、その北半は胆沢川の侵蝕のため削

り取られ欠失している。

他の住居跡との重複関係や増改築の事実は認められないが、東南辺の一部はロクロ土師器・須恵器等を若干量出土する焼土を伴うピットに隣接する。

既述の通り侵蝕により北半を欠くので正確な平面形は不明であるが、残存する東・西壁と南壁からすると、一辺5～5.5m(推定) 前後、床面積25～30.25m²(推定) 程度の、中央にやや膨らみを持つ方形になるように思われる。住居の中軸線の方向は、磁北から約50°西に偏している。

遺構内に堆積した土層は大別して二層からなる。

第1層　黒色有機質土層。軟質で粘性を持つ。藪の根等の作用であろう。

第2層　黒褐色土層。有機質土に砂質土が混じりやや硬い。遺構の主たる覆土である。尚、北端の段丘崖へと落ち込む部分には、草木根による有機質土や、基盤の黄橙色シルト質土の崩れ等の土層がみられる。

床面には一部凹凸もみられるが、おおむね平坦である。凹凸部の一部に黄橙色粘土質シルトを貼った部分もみられるが、全面を貼り床にはしていない。

壁の立ち上がりは急であるが、自然力による削平のためか壁高は深くて20cm前後と比較的浅い。床面上には大小4個のピットがある。それらのうち、配置からみて柱穴の可能性のあるものは西南部のものであるが、それとても浅いものであり、積極的には主張し難い。

カマドないし炉と認めてよいものは残っていないが、西壁の中央部付近の床面に焼土が堆積し、その上に礫がのっている。後述の貯蔵穴様のものとの位置関係を考え合わせると、あるいはこれがカマドの痕跡とも考えられるが、袖部などの痕跡は全くみられないため、それも積極的には主張し難い。ここでは侵蝕により削り取られた可能性の方が大きいのであろう。

その他西壁直下中央やや南に楕円形の掘り込みがあり、その中に大形の壺型土器が据えられていた。これが所謂「貯蔵穴」の典型的なものであろう。これと正反対の東壁中央部にも楕円形の掘り込みがあるが、これには遺物もなく、貯蔵穴とする積極的証拠に欠ける。

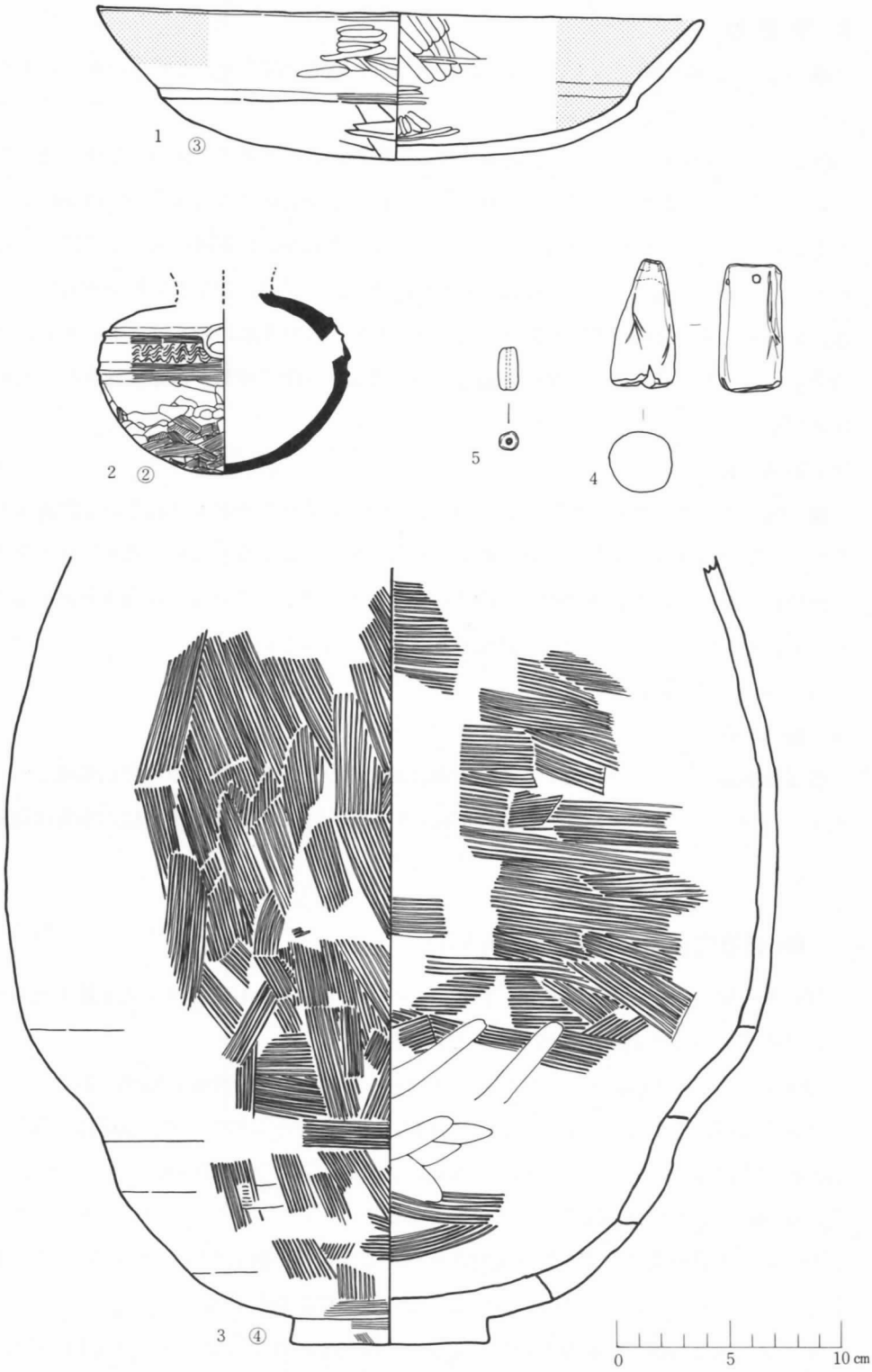
さらに南壁直下東半部に周溝状の凹みが一部みられる。その他特記すべき遺構はない。

遺構の年代推定の資料としては、床面上出土の土師器坏、貯蔵穴出土の土師器壺等があり、問題はあるが床面出土の須恵器瓶もそれに加える。

(遺　　物)

I　土師器 (第6－2図・1・3)　　第2表

分類	土器番号	平面図の上	実測番号	調整 口縁部 内面	調整 口縁部 外面	調整 体部上半 内面	調整 体部上半 外面	調整 体部下半 内面	調整 体部下半 外面	調整 底部 内面	調整 底部 外面	器高	口径	底径	備考
壺	④		3	横ナデ 刷毛目	刷毛目のち ヘラナデ	刷毛目 ヘラナデ	刷毛目 ヘラナデ	刷毛目 ヘラナデ	刷毛目 ヘラナデ	刷毛目	刷毛目	35+α		8.9	
坏	③		1	ヘラミガキ(?)	ヘラミガキ(?)	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラケズリ	ヘラミガキ(?)	ヘラケズリ	6.5	26.9		内黒口縁
				ヘラミガキ	ヘラミガキ					ヘラミガキ	ヘラケズリ	6.5	26.9		
				ヘラミガキ	ヘラミガキ					ヘラミガキ	ヘラミガキ(?)				



第6－2図　Bb06竪穴住居跡出土遺物実測図

II　須恵器

聰（同２）；南壁中央直下の床面上に検出した。頸部を欠くが、それは恐らくあまり高く（長く）なるものではないであろう。

胎土の質・焼成ともに良好で、緻密で硬い。色調は濃い灰色で、典型的な燻べ色。

肩部にはロクロ成形痕が残存し、肩部直下から体部中央までに文様帯が区画される。文様帯の上下限は、その両側を沈線状に凹めることによって強調される隆線状のものによって区切られる。従って上下限ともに、隆線状のものの両側には、工具でなでた痕跡が顕著に残存している。文様帯内部には横走する櫛描波状文が施される。また上限の隆線は、そのまま注口部周縁の隆帯へと連続する。体部下半から底部にかけては、篦削り調整が入念に施され、丸底に仕上げられる。

III　石製品

錘（同４）；適当な名称を知らないのでこう呼ぶ。棹秤りのおもり状ないし釣鐘状の形状を有し、上端から下方へ１孔、それと直交する形でもう１孔がうがたれ、逆Ｔ字状となり、都合３個の孔口を有する。下底面中央に溝状の刻み目がつけられている。表面は全面入念に研磨され、光沢を有する。記号風の刻み目もあるが、定かではない。

ちなみに重量は51.5ｇである。

IV　装飾品

管玉状製品（同５）；土製である。表面は研磨され、土師器坏内面の黒色処理と同様の漆黒を呈し、光沢がある。縦断面は長楕円形に近い長方形をなす。彩色その他の事実は認められない。

Ｂc53竪穴住居跡（第７図・第３表）

遺跡敷地中央やや北寄りに検出。耕作によりかなり削平されており、表土除去後直ちに床面上に位置する遺物の上端が露出した程であった。

他の遺構との重複関係あるいは増改築の何れも認められない単独の遺構である。

平面形は攪乱を受けずかなりきれいに残存し、端正な正方形をなす。規模は一辺５ｍ、床面積25m²程度になろう。住居の中軸線の方向は、磁北から48°西に振れる。

遺構内に堆積した土層は大別して二層となる。

第１層　主要覆土である黒色有機質土。ベースはシルト質土であったのだろうが、有機質土化しており、粘性も強い。基盤の黄橙色シルト質土粒が少量混入。

第２層　床面に接する数量からなり、恐らくは貼床的なものであろう。焼土粒混入の黒色有機質土、暗褐色有機質土等があり、何れも粘性が強い。

第7－1図　Bc53竪穴住居跡実測図

床面の状況は、担当者の不注意から遺構東半のそれを3cm程掘り下げ過ぎたので正確は期し難いが、あまり凹凸は無いことだけは確かで、比較的平坦面が広かったといえよう。壁は残存部は良好な状態を示しており、垂直に近く立ち上がり、壁高は前記の通り削平を受けたために浅く14～20cm前後である。床面上には大小13個のピット類がある。

そのうち柱穴と明らかに解し得るものは東南部の1個のみで、痕跡かと思われるものは西北部の1個である。前者は径50cm、深さ30cm程で、柱あたりは判明しなかった。その他のピットには、少なくとも主柱穴と見做し得るものはない。

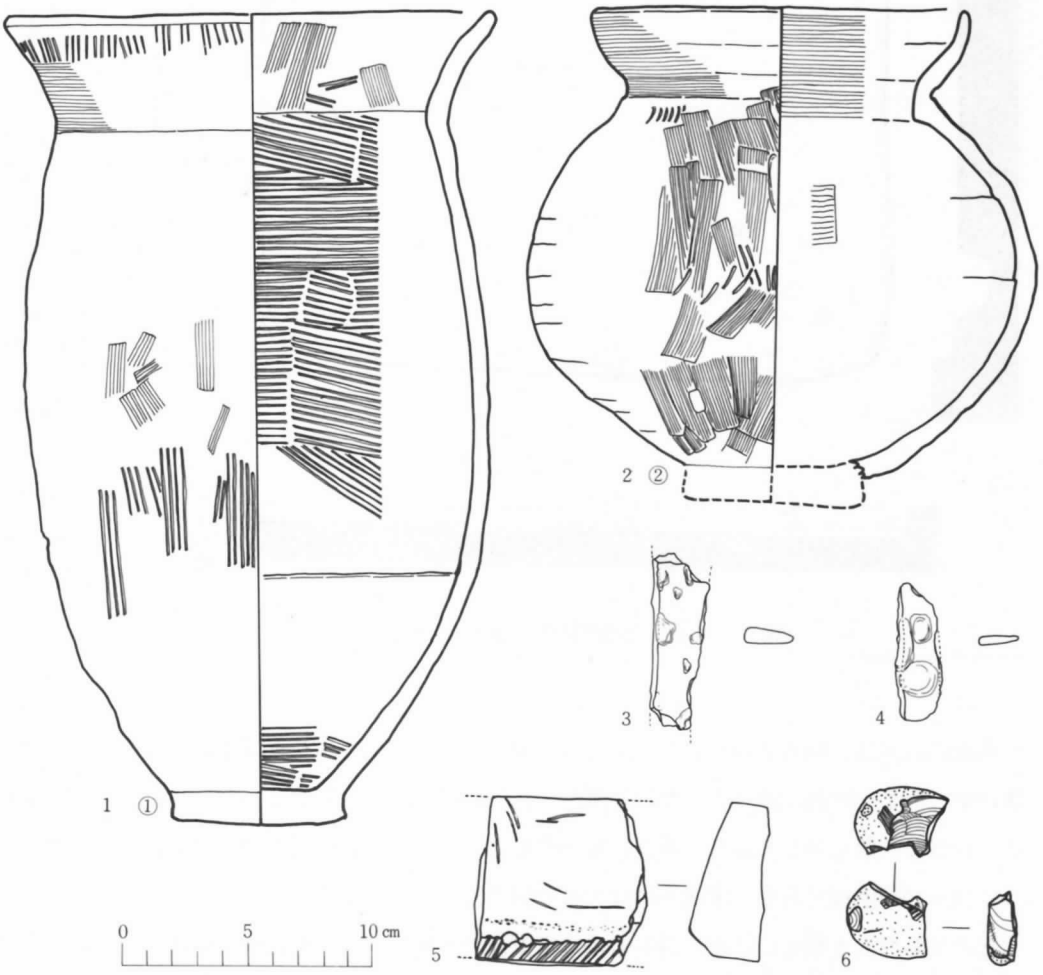
カマドは北壁中央に構築されている。壁に接して黄色粘土質シルトを2列土手状に南へ70cm

程延ばして袖部となし、袖部南端には河原石を門の字状に立てて芯とする。その場合の礫相互の間口35～40cm、深さは25～30cm。火床はやや掘り凹めてあり、そこは全面焼けている。支脚やその機能を果たすべき礫などは火床上にはみられないが、土師器甕片が1個存在した。

煙道は入念に調査したが検出できなかったので、これは本遺構のカマドには土中をうがって構築するような煙道はなかったというべきなのであろう。

その他の施設としては、北東隅に不整形で浅い掘り込みがあり、その底面から土師器片を若干量検出した。これだけでは積極的証左とはいい難いが、カマドとの位置関係を考慮して、貯蔵穴的な機能を想定したい。

その他には、床面ほぼ中央部に人頭大の礫がみられるが、その周囲には何らの異常も認めら



第7－2図　Bc53竪穴住居跡出土遺物実測図

れず、性格不明といっておく。

周溝はない。

最後に、東壁中央やや南部が外方に張り出しているが、これは本遺構のように少なくとも平面形の残存状況の良好なものに於いては、そこに何らかの意味があるような気がしてならない。

遺構年代推定の手掛りとしては、床面出土の土師器甕と、鉄製品等がある。

(遺　物)

I　土師器（第7－2図・1・2）　第3表

分類	平面図上の土器番号	実測図番号	調整								器高	口径	底径	備考
			口縁部		体部上半		体部下半		底部					
			内面	外面	内面	外面	内面	外面	内面	外面				
甕	①	1	刷毛目のち ヘラナデ	刷毛目のち 横ナデ	刷毛目	刷毛目のち ヘラナデ	刷毛目のち ヘラナデ	刷毛目	刷毛目	ヘラナデ	32.5	19.6	6.9	
壺	②	2	横ナデ	横ナデ	ヘラナデ		ヘラミガキ	ヘラナデ(?)	欠失	欠失	20.0	15.2	7.5	
坏														須恵器

II　石製品

砥石（同5）；床面出土の破損品。三面を研磨している。一面には原石を切り出すか、周縁の形を整える際につけられたと思われるノミ痕状の平行する凹みがみられる。材質は流紋岩質凝灰岩である。

III　鉄　器（同3・4）；覆土出土であるが参考のために掲げた。断面形をなし、刀子的なものであろうか。時代不明。

IV　黒耀石片（同6）；これも覆土出土。黒耀石原石をほぼ半割し、その断面をあたかも掻器ないし削器の刃部のようにつくり出している。一部縁片には使用痕とも見做し得る細かい破砕部がある。

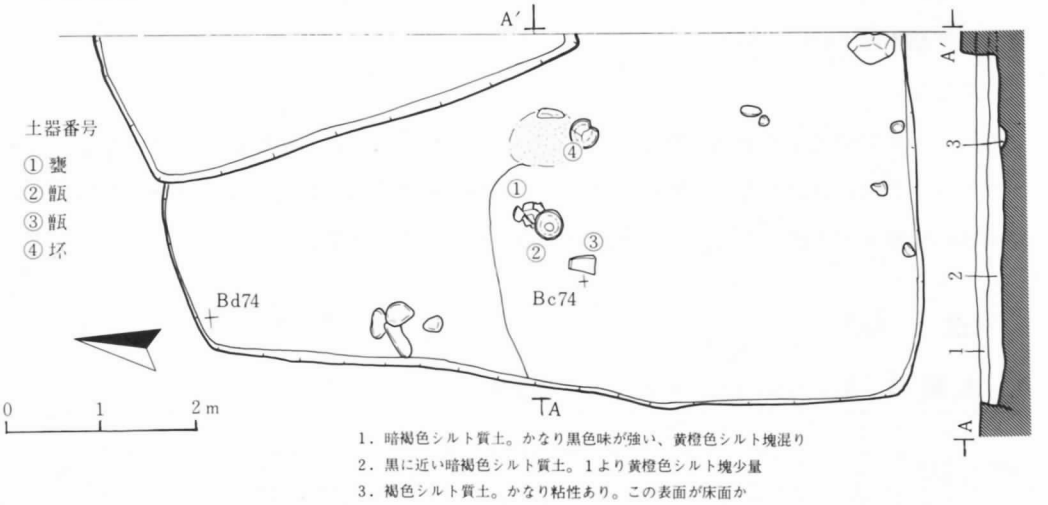
Bc71竪穴住居跡（第8図・第4表）

遺跡敷地東辺部中央やや北に検出。耕作により削平され残存状況は不良。東半は高速道路用地外にわたるので、その部分は未調査である。

二棟の住居跡が重複しており、東に偏するものが新期のものである。

平面形は両者ともに不明としか言えないが、強いて述べると、新期のものは一辺3.5m(推定)床面積12.25m²(推定)前後の規模の方形になるのではないかと思われ、その中軸線は磁北から25°程西に偏するようである。

旧期のものも同様に推定すると、一辺3.4m、床面積11.56m²程の方形をなすと思われる。遺構中軸線の方向は、磁北にほぼ一致し、約5°西に振れるのみである。



第8－1図　Bc71竪穴住居跡実測図

遺構内に堆積した土層はすべてで三層である。

第1層　暗褐色シルト質土層。かなり黒色味が強い。締まりがあり、粘性はあまりない。黄橙色シルト質土塊の混じり具合の差が新旧両遺構の区別の手掛りであって、前者の方がやや多い。

第2層　黒色に近い暗褐色シルト質土。第1層より黄橙色シルト質土塊量がやや少ない。以上が遺構内覆土である。

第3層　褐色シルト質土。基盤の黄橙色シルト質土の汚れたものであろう。かなり粘性がある。この層の上面がある時期の生活面であろう。

床面形状は両者ともに大略平面をなし、ピット類その他はない。壁高は残存状態が良くないので浅く、平均14cmを測るのみ。

Bc71住　第4表

分類	土器番号	平面図上の番号	実測図	調整 口縁部 内面	口縁部 外面	体部上半 内面	体部上半 外面	体部下半 内面	体部下半 外面	底部 内面	底部 外面	器高	口径	底径	備考
甕				横ナデ(?)	横ナデ(?)	ヘラナデ(?)	刷毛目								
				横ナデ	横ナデ	ヘラミガキ(?)	刷毛目								
	①		3	横ナデ(?)	横ナデ(?)	刷毛目のち？	刷毛目のち？	欠失	欠失	欠失	欠失		15.5		
坏	④		1	ヘラミガキ	横ナデ(?)	ヘラミガキ	横ナデ	ヘラミガキ	ヘラケズリ	ヘラミガキ(?)	ヘラケズリ	5	17.5		内黒
甑	②		2	ヘラミガキのち横ナデ	刷毛目のち横ナデ	刷毛目のちヘラミガキ	刷毛目	ヘラミガキ	刷毛目			14	19～18.5	7.5	
	③									ヘラミガキ	ヘラミガキ				

従って、柱穴を想定させるものはない。

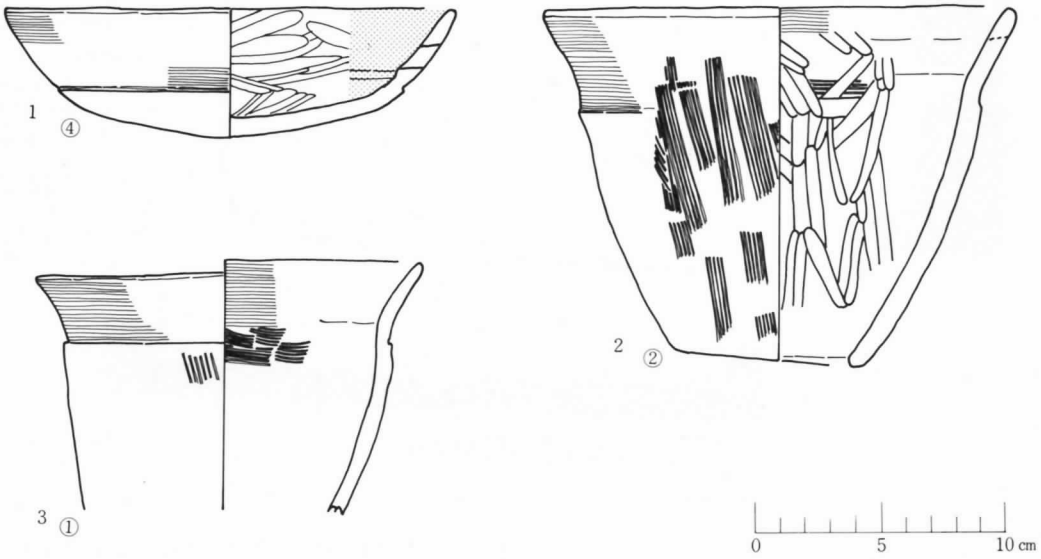
炉ないしカマドと見做し得るものは存在しないが、旧期住居跡北辺のほぼ中央と思われる部分に焼土の集積がみられ、その上に礫がのり、しかもその周辺に遺物が多くみられる。あるいはこれがカマドの痕跡かもしれぬ。

その他の施設は特にない。

年代推定の資料となし得るものは、新期には皆無、旧期では床面上出土の土師器甕・甑・坏などである。

(遺　物)

I　**土師器**（第8－2図・1・2・3）

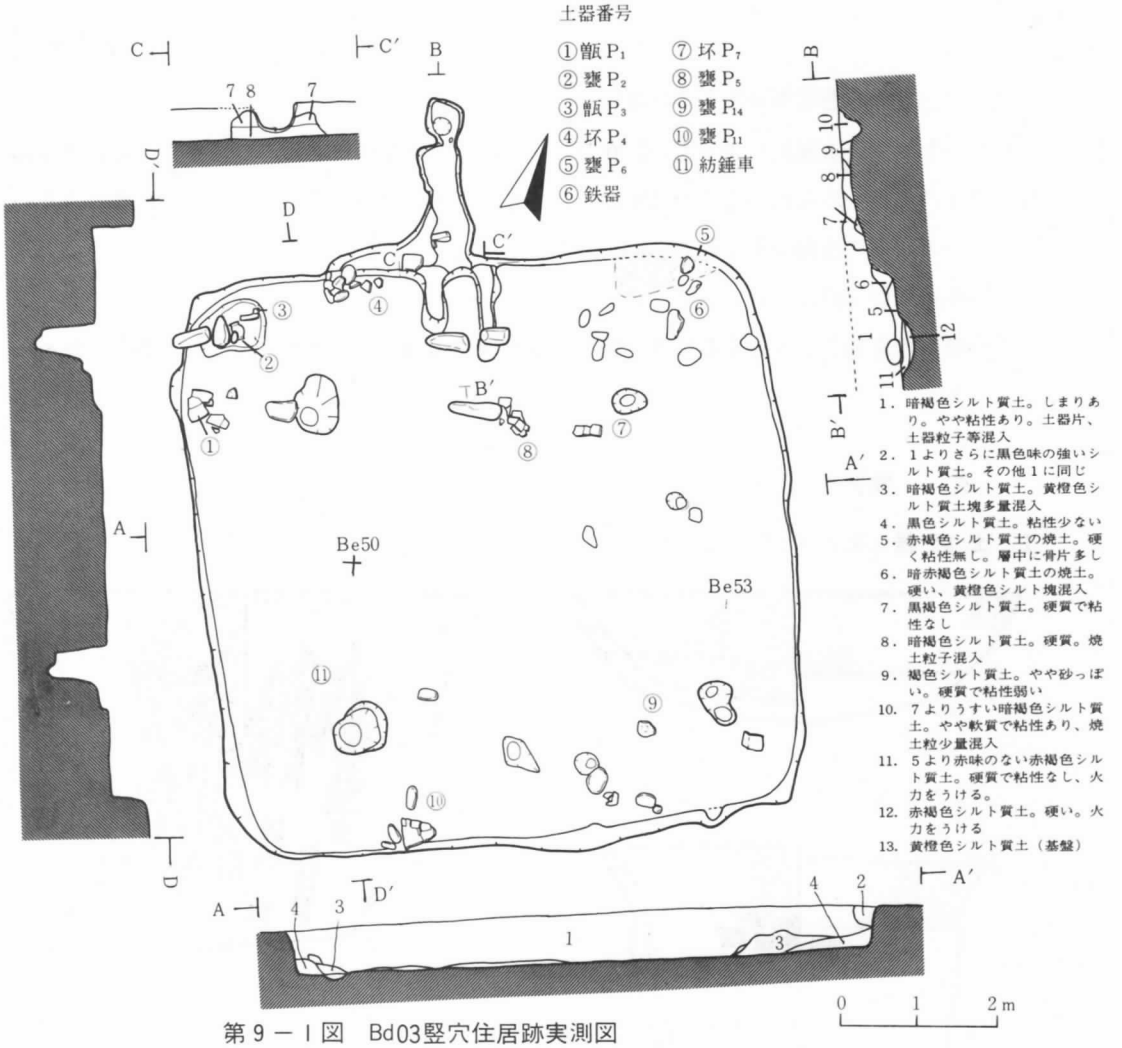


第8－2図　Bc71竪穴住居跡出土遺物実測図

Bd03竪穴住居跡（第9図・第5表）

遺跡敷地内ほぼ中央やや北寄りで、既述のBb06の南隣に検出。本調査の最初に検出した遺構である。他の遺構との重複関係・遺構内での増改築の事実は何れもなく、一部の掘り過ぎを除けば保存状態の良好な単一の遺構である。

遺構の平面形は、四隅にやや丸味を持つきれいな正方形をなし、その規模は南北4.7m×東西4.7m、床面積22.09㎡程度になる。住居の中軸線（北壁中央にあるカマドの中心点と南壁の中点を結ぶ線は）は、磁北より約24°西に振れる。



第9－1図　Bd03竪穴住居跡実測図

遺構内に堆積した土層は単純で、大別して二層からなる。

第1層　暗褐色シルト質土層。覆土の大半を占め、本遺跡の覆土に最も多くみられるものの一つ。締まりがあるが、粘性もややあり、土器片・土器粒子・炭化物粒等が混入。

第2層　暗ないし黒褐色シルト質土層。床面に接して堆積しているが、壁際に多いという特徴もある。黄橙色シルト質土塊もみられ、壁の崩土でもあろう。床面直上にみられるものは生活による汚れであって、貼床とまではいえないと思われる。

床面の残存状況は非常に良好で、殆んど平坦である。壁の残存状況も良く、ほぼ垂直に立ち上がり、壁高は30～35cmである。床面上に大小8個のピット・掘り込み類があり、他には25個の礫と北東隅壁直下の焼土集積部がみられる。

前記のピット・掘り込み類のうち、少なくとも主柱穴と認め得るものは、ほぼ対角線上にのる形で分布しているやや大きめのピット4個であろう。特に西半（西北隅と西南隅）の2個は掘り方・柱あたりの両者を認めることができ、良好な残存状態を示している。それによると、

掘り方はほぼ円形をなし、その径30～40cm、柱あたりの径20cm前後、深さ40～50cm程である。

カマドは、他の多くの例と同一で、正確に北壁の中央に構築される。黄色粘土質シルトを袖部構築用に用いること、焚口部に長大な川原石を「門の字」状に作り出すことも同様である。但し現状では水平に架せられる礫はその部位に存在しなかったが、焚口南部床面上にある礫がそれであろう。焚口間口60cm・高さ25cm、カマド奥行70cmの規模である。

煙道は本遺構に於いては存在し、北壁中央部から北に基盤を掘り込んで作ってある。カマド火床が住居壁とぶつかる部分で一段（15cm）高くなり、それから煙道としてやや浅めになりながら、そのまま北方へ１ｍ延びる。その先端部には煙出しが作られ、円形で上径20cm・下底径10cm・深さ20cmの規模である。

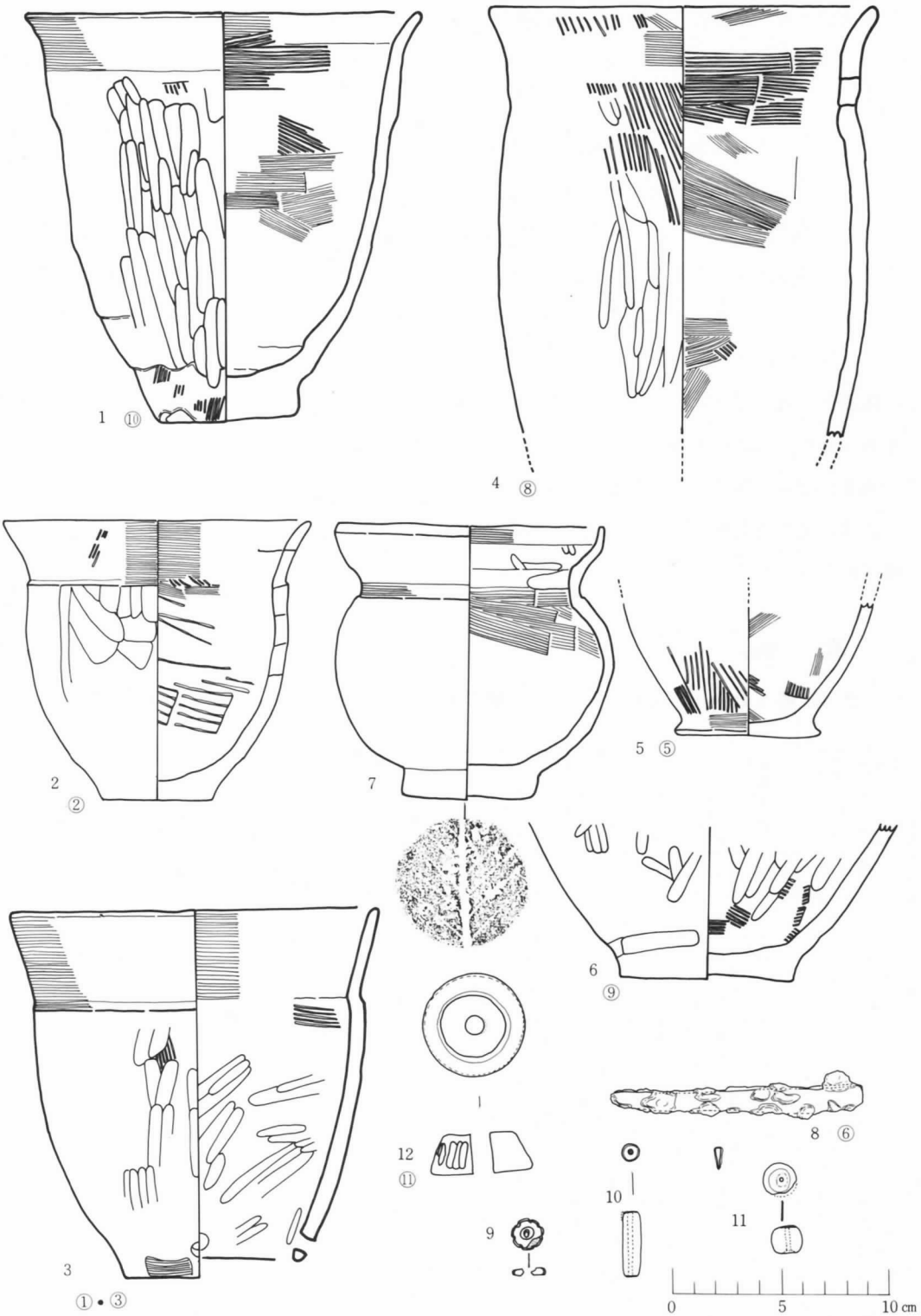
床面上のその他の施設としては、西北隅に楕円形の掘り込みがあり、その中に礫・土師器等がみられた。恐らく貯蔵穴と見做してよいのであろう。反対側の東北隅の床面に焼土があり、その上に礫が３個のっていたが、床面は焼けておらず、性格不明の焼土としておく。

年代決定の資料としては、床面上・貯蔵穴中出土の土師群がある。尚、本住居跡には須恵器の出土はみなかった。

（遺　　物）

Ⅰ　土 師 器（第９－２図・１～７）　　第５表

分類	平面図上の土器番号	実測図番号	調整 口縁部 内面	調整 口縁部 外面	調整 体部上半 内面	調整 体部上半 外面	調整 体部下半 内面	調整 体部下半 外面	調整 底面 内面	調整 底面 外面	器高	口径	底径	備考
甕	②	2	刷毛目(?)のち横ナデ	刷毛目のち横ナデ(?)	刷毛目のち横ナデ(?)	ヘラケズリ	刷毛目のちヘラナデ	ヘラケズリ(?)	刷毛目		12.9	12 14(?)	5.1 (?)	
	⑨	6	欠失	欠失	欠失	欠失	刷毛目のちヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ or掻取痕(?)	ヘラケズリ ヘラミガキ			8.0	
	⑤	5	欠失	欠失	欠失	欠失	刷毛目のち?	刷毛目	横ナデないしヘラナデ(?)	刷毛目,横ナデ 木葉痕			6.7	
			横ナデ	横ナデ	ヘラナデ ヘラミガキ	刷毛目								
			横ナデ(?)	横ナデ(?)										
	⑩	1	刷毛目のち横ナデ	刷毛目のち横ナデ	刷毛目	刷毛目のちヘラミガキ	ヘラナデ 又はミガキ	刷毛目のちヘラミガキ	ヘラナデor ヘラミガキ	ヘラミガキ(?) 木葉痕	19.0	18.4	6.3	
														須恵器
	⑧	4	刷毛目のちヘラナデ(?)	刷毛目のち横ナデ	刷毛目のちヘラナデ	刷毛目のちヘラミガキ（又はヘラ削り）	刷毛目のちヘラナデ	ヘラミガキ(?)	欠失	欠失	19.8	18.0		
壺		7	横ナデ その下ヘラミガキ(?)	横ナデ(?)	ヘラナデ(?)	ヘラミガキ orヘラナデ	ヘラナデ	ヘラミガキ orヘラナデ	ヘラナデ(?)	ヘラミガキ	12.6	12.3	6	
甑	①・③	3	横ナデ	横ナデ	刷毛目のちヘラミガキ	刷毛目のちヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ ヘラナデ			17.0	16.8	8.1	
														多孔式



第９－２図　Bd03竪穴住居跡出土遺物実測図

II　鉄　　器

刀子形製品（同８）；一側縁が薄くなり、断面形態が楔形をなすものである。比較的良好な残存状態。

III　装 飾 品

覆土出土のものであるが、一括して取り扱った。

花弁形製品（同９）；覆土出土の石製品。両面と周縁を入念に研磨した後、周縁の７箇所に刻み目を入れる如く細く研磨して、都合７弁の花弁状に作り出している。中央に孔がうがたれるが、それは両面からなされたもので、中心部が最も細くなり、またその両面に於ける中心部がずれている。これは、石器時代の石器にみられる特徴に一致するもので、穿孔に金属器を用いなかった可能性がある。従って、その所属年代にはかなり疑問が生ずるが、一応ここに掲げておく。

管玉状製品（同10）；床面出土の土製品。縦断面形はほぼ長方形をなす。表面は入念に研磨され、さらにあたかも土師器坏に於けると同様に黒色処理されたかのような漆黒色をなし、光沢を持つ。彩色等は認められない。

トンボ玉状製品（同11）；覆土出土の土製品。縦断面形は正方形に近いが、やはり本来的には球形であろう。管玉状製品程には箆ミガキが施されず、光沢もない。また、黒色処理様の色調・光沢もともにない。破損部からすると、胎土は黒味がかった灰色である。彩色の痕は認められない。

IV　土 製 品

紡錘車（同12）；全面入念に箆ミガキで仕上げている。全体的に稜にやや丸味をおびる。中心の孔の周縁は鋭角的である。ちなみに重量は46ｇである。

Bd12竪穴住居跡（第10図・第６表）

遺跡敷地ほぼ中央の北端部、現在の段丘崖に直近の位置にあり、既述のＢb06の西隣にあたる。

北端部に於いて二棟が重複していることが微かに認められるが、増・改築等の事実は認められない。

平面形は、旧期住居跡については不明。新期住居跡については、北壁中央部がやや乱れているが、大略長方形をなし、その規模は長辺（南北方向）５ｍ（推定）、短辺（東西方向）４ｍ、床面積20m²程となろう。住居中軸線の方向は、磁北から約33°西に振れる。

旧期住居跡内に堆積した土層は、段丘崖直近の北端部に微かに残存しているのみであるが、二層からなる。

第１層　暗褐色シルト質土層。硬質で粘性が弱く、やや砂っぽい。

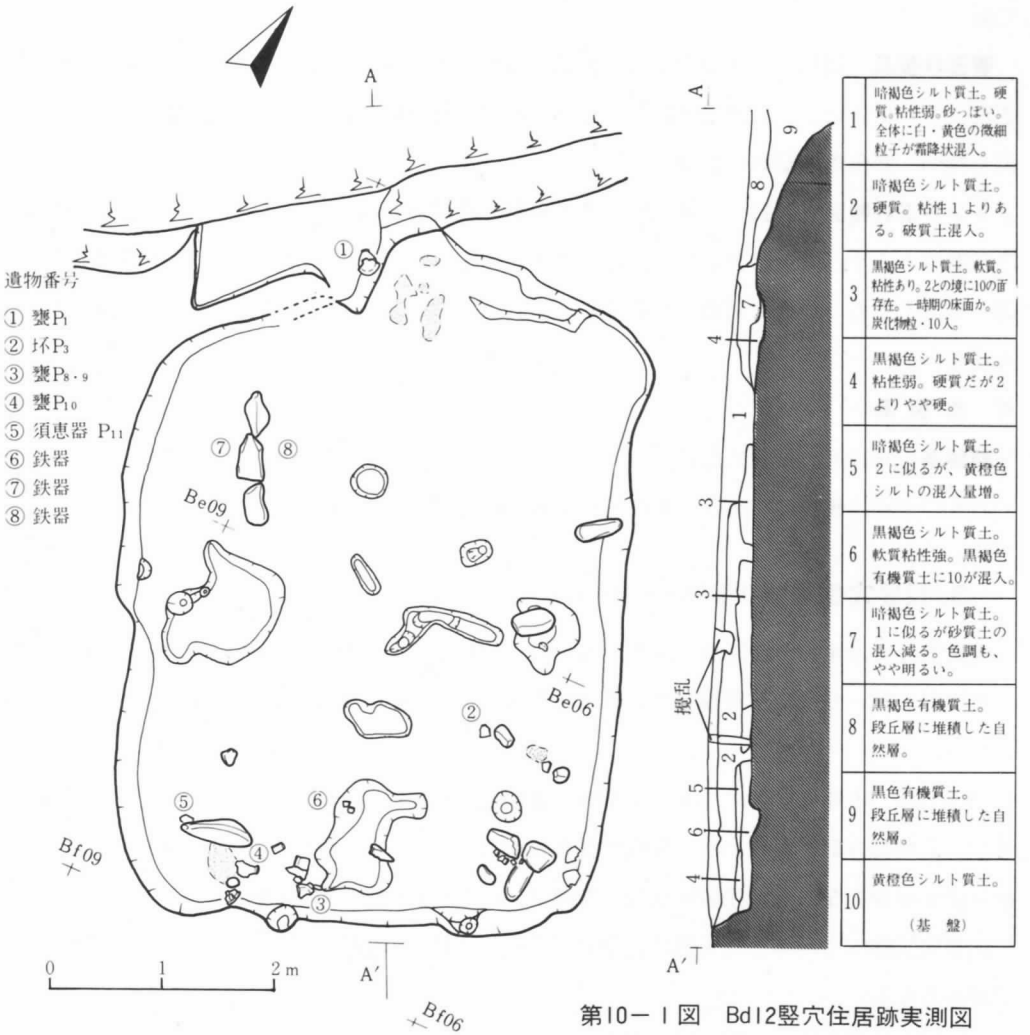
第２層　床面直上に堆積した黒褐色シルト質土層。硬質で粘性は弱い。その上面に焼土がのり、一時期の生活面ないし何らかの施設の痕跡を示すものであろう。

新期住居跡内の堆積土層は大別し三層からなる。

第１層　暗褐色シルト質土。硬質で粘性弱く砂っぽい。

第２層　暗褐色シルト質土。砂質で第１層よりは粘性が強い。以上の二層が主体的な遺構覆土である。

第３層、床面直上に堆積した土層。この上面が一時期の生活面である。貼床と主張できる程には全面に分布しないし、締まりもない。黒褐色あるいは暗褐色のシルト質土で、おおむね軟質で粘性が強い。炭化物粒その他が混じる。



第10－１図　Bd12竪穴住居跡実測図

床面の状況は、旧期住居跡については不明。新期住居跡は、他例に比しピット類・礫・焼土等が多く変化に富む。壁高は旧期住居跡については不明であるが、焼土のある部分で遺構検出面から測ると30cm程になる。新期住居跡は南壁で測ると40cm程である。床面上や壁直下に合計14個のピット・掘り込みがあり、別に5箇所に礫の分布がみられる。

それらのうち、何らかの形で柱穴に関連すると思われるものは5個あり、うち3個は床面上に、2個は壁直下に存在する。それらの平均径は24cm、深さは5～10cm。現状で規則的な配置を明らかに示すものは壁直下の2個のみであるが、床面上のものもそれに礫の分布を加味して考える（礫がそれぞれ四隅に近く分布する点）と、少なくとも主柱穴は大略対角線にのるような形で、四隅に1本ずつあったと推定できる（後述のBi24などに於いて、柱穴掘り方中に礫が存在する例がある）。また、南壁直下の2個のものは、上家構造ないし出入り口等の推定に資料を提供できるものと思われる。

炉ないしカマドについては、旧期住居跡では不明であるが、焼土が一部残存し、その部分の床面が浅く凹んでいることを把えると、あるいはカマド火床の痕跡かとも思われる。とすると、その設置位置は、少なくとも北壁のいずこかということになる。

新期住居跡については、西南隅と東南隅に焼土塊がみられるが、何れもカマドないし炉と見做すことはできない。

床面上のその他の施設については、まず周溝はみられないし、貯蔵穴と見做し得るものもない。ただ床面中央部に長楕円形の掘り込みがみられるが、現状では性格不明としかいえない。同様に、床面上に分布する礫についても、その周辺に何らの異常も認められないので、作業台その他の機能を推定することもできず、性格不明である。それより既述したように柱穴関連のものと見做した方がよいのであろう。但し、西北隅の3個が一列に配列されたような印象を与えることは、やや人為的なものを感じさせる。

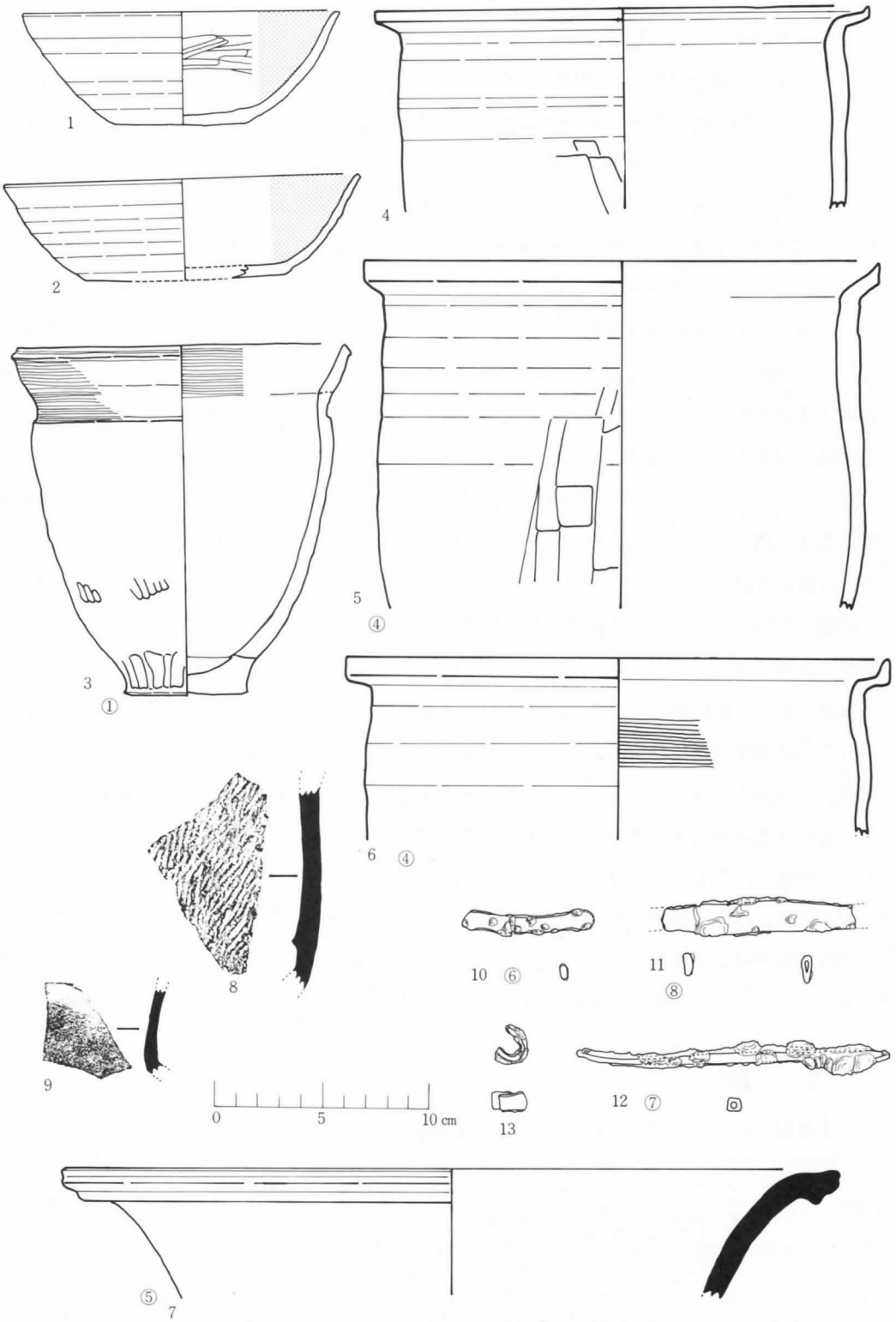
遺構の年代推定の手掛りとしては、旧期住居跡については焼土西隣出土の土師器甕が、新期住居跡については床面出土の土師器甕・坏・須恵器甕が挙げられる。

（遺　　物）

Ⅰ　土師器（第10－2図・1～6）

第6表

分類	平面図上の土器番号	実測図番号	調 口縁部 内面	調 口縁部 外面	調 体部上半 内面	調 体部上半 外面	調 体部下半 内面	調 体部下半 外面	調 底部 内面	調 底部 外面	器高	口径	底径	備考
甕	①	3	横ナデ	横ナデ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	凹凸あり	ミガキ(?) 木葉痕(?)	16.3	15.8	5.8	
	⑤	7	ロクロ成形	ロクロ成形	欠失	欠失	欠失	欠失	欠失			36.2		須恵器



第10－2図　Bd12竪穴住居跡出土遺物実測図

甕	④	5	ロクロ 水挽痕	ロクロ 水挽痕	ロクロ 水挽痕	ロクロ 水挽痕	ロクロ 水挽痕	ヘラケズリ	欠　失	欠　失		23.9		
		4	ロクロ 水挽痕	ロクロ 水挽痕	ロクロ 水挽痕	ヘラケズリ						23.0		
	④	6	ロクロ 水挽痕	ロクロ 水挽痕		ロクロ 水　挽						25.3		
壺						ロ ク ロ								須恵器
坏		1	ヘラミガキ					ロクロ水挽 のち ヘラケズリ	ヘラミガキ	回転糸切 のち ヘラミガキ	5.6	15(?)	5.7	
		2	ヘラミガキ	磨　滅	ヘラミガキ	ロクロ 水挽痕	ヘラミガキ		ヘラミガキ(?)	回転糸切(?) のち ヘラケズリ(?)	5.3	15.6 (推)	5.8 (推)	
						ロ ク ロ			ヘラミガキ	ヘラケズリ(?)	5			
				ヘラナデ		ヘラケズリ								
										回転糸切				
				ロクロ成形										
			ヘラミガキ	ロクロ水挽	ヘラミガキ	ロクロ水挽	ヘラミガキ	ロクロ水挽	ヘラミガキ	回転糸切 のち ヘラケズリ(?)				内　黒

II　須 恵 器

甕（同７）；黒味がかった紫色を呈す大型品。口縁部のみである。外反する口縁の端部が肥厚しているが、これは本来はもっと強く屈曲し、しかも鋭い稜を持つ口縁が変形し、丸味を帯びたものであろう。

その他に覆土出土のものも参考までに掲げた。

III　鉄　　器

刀子形製品１・２（同10・11）；刃部と思われる部分の断面形が楔形をなし、それ以外の部分の断面は長方形をなすものをこれとした。１の断面は中空状をなし、あるいは鍛造品か。

釘形製品（同12）；断面が方形をなす長大なものをこう名付けた。

鐶状製品（同13）；偏平な断面を持ち、恐らくは楕円形の形状をなすと思われるものをこう呼んだ。刃物の柄の端にはめ、刃物と柄の装着を確実にするような機能を持つのであろうか。

Bd59竪穴住居跡（第11図・第７表）

遺跡敷地中央やや東寄りに検出。他の遺構との重複あるいは遺構内での増改築の事実は認められず、保存の良好な単一の遺構である。

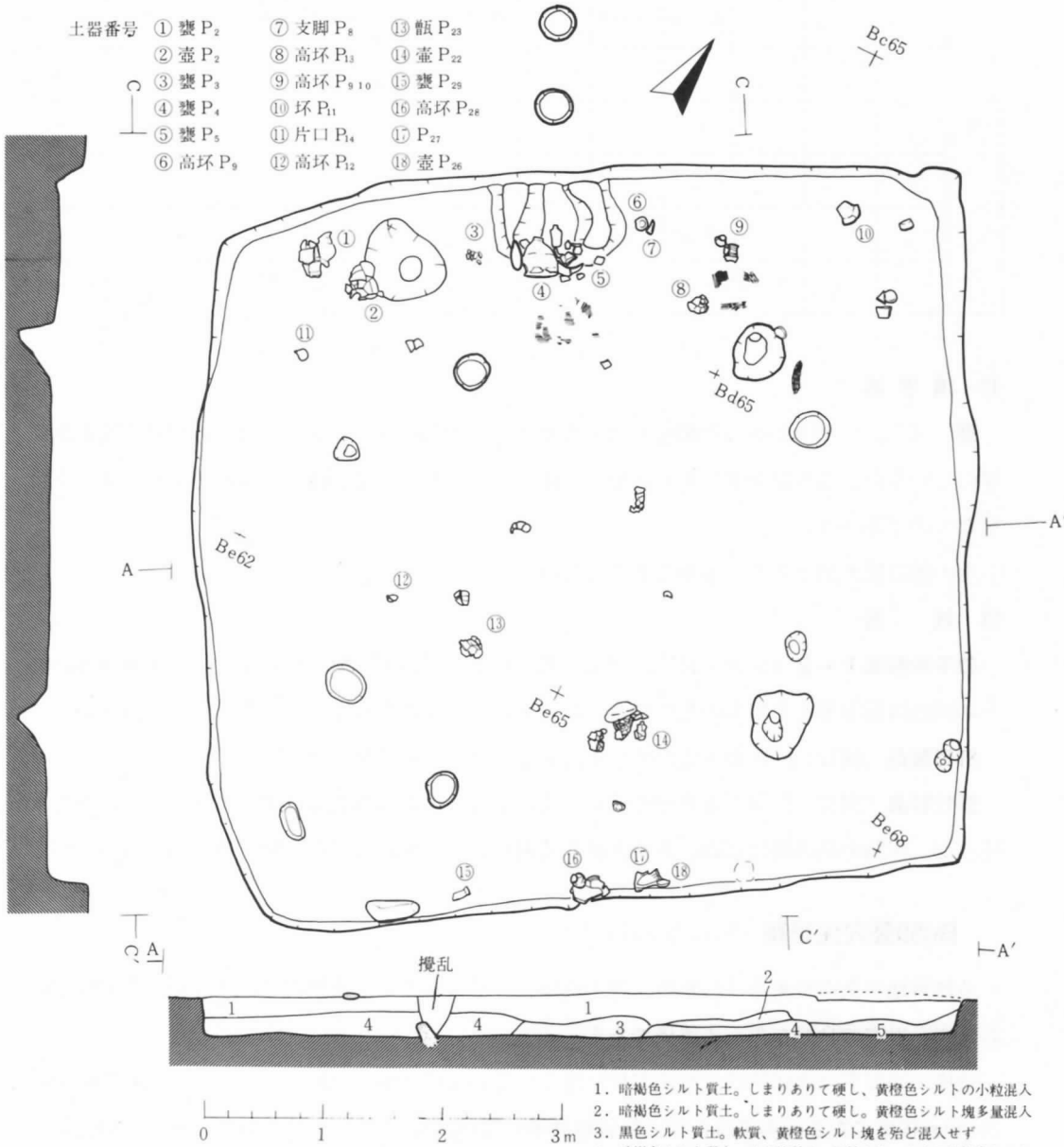
遺構の平面形は比較的端正な正方形に近く。その規模は南北6.2m×東西6.5m、　床面積約40.30m²程度である。本遺跡の竪穴住居跡群中ではBg62に次ぎ第二位の規模であり、最大級のクラスに入る。住居の中軸線（カマドの中心に一致する北壁の中点と南壁の中点を結ぶ線）は、

磁北より約42°西に振れる。

遺構内に堆積した土層は大略二層からなる。

第一層　明褐色シルト質土層。かなり締まりがあって硬く、粘性はあまりない。本遺跡に最も多くみられる遺構覆土である。

第２層　床面に接して堆積した暗褐色ないし黒色のシルト質土層群を一括した。何れも１層に比し軟質で粘性がある。炭化物粒等が混じる。数枚の層に分かれ、その堆積ぶりにやや不自



1．暗褐色シルト質土。しまりありて硬し、黄橙色シルトの小粒混入
2．暗褐色シルト質土。しまりありて硬し。黄橙色シルト塊多量混入
3．黒色シルト質土。軟質、黄橙色シルト塊を殆ど混入せず
4．暗褐色シルト質土。やや軟質で、粘性あり。2より黄橙色シルト塊の量少ない
5．暗褐色シルト質土。4に殆ど同じであるが黒味がやや弱い

第11－1図　Bd59竪穴住居跡実測図

然なものがあるが、意図的なものかどうかは判然とし難い。

床面の残存状況は非常に良好で、殆んど平坦である。壁の状況も同様に非常に良好で、ほぼ垂直に立ち上がり、壁高は30～40cmである。床面上に大小12個のピット・掘り込み類がある。

そのうち少なくとも主柱穴と認めてよいものは、ほぼ対角線上にのる位置関係にある4個であろうか。特に東半の2個（東北隅と東南隅）のものからは、掘り方・柱あたりの両者をも窺うことができる。それによると、ほぼ円形の掘り方径50cm前後、柱あたり径15～20cm、深さ30cm前後である。尚掘り方壁の何れかの半分が垂直をなさず、傾斜を持つものもある事実も認められ、柱を建てる際あるいは抜き取る際の有様を推測させる資料となろう。

カマドは正確に北壁の中央部に構築されている。他の例と同様に、黄色粘土質シルトによって壁から2本の土手状の袖部を南へ作り出す。袖部の南端焚口部には、やはり同様に長大な礫を「門の字」状に構築する。推定されるカマドの規模は間口50cm、奥行70cm、高さ30cm前後等である。火床部はこれも同様に多少掘り凹めてある。明白に土中に構築された煙道と認められるものは入念に調査したにもかかわらず、検出し得なかった。しかし、カマドの北隣にピットが存在することを考え合わせると、やはり何らかの形式の煙道が存在したのであろう。あるいは後述のCa18にみられたトンネル式の煙道を見落した可能性もなくはない。

床面上のその他の施設としては、カマド左隣にほぼ円形の掘り込みがあり、その周縁に土師器が置かれていた。これは貯蔵穴と見做されてよいものであろう。周溝は認められない。尚、南壁中央やや西（西南隅付近）の壁直下に礫があるが、これもあるいは住居の構造に何らかの関連を有するものかもしれない。

その他特殊例ではあるが、カマド焚口前とその右隣の床面に炭化した植物繊維の広がりが部分的にみられた。現場での観察によると、編んだような繊維の交叉がみられた。従ってあるいは床面上に何らかの植物質の敷物が存在した可能性もある。

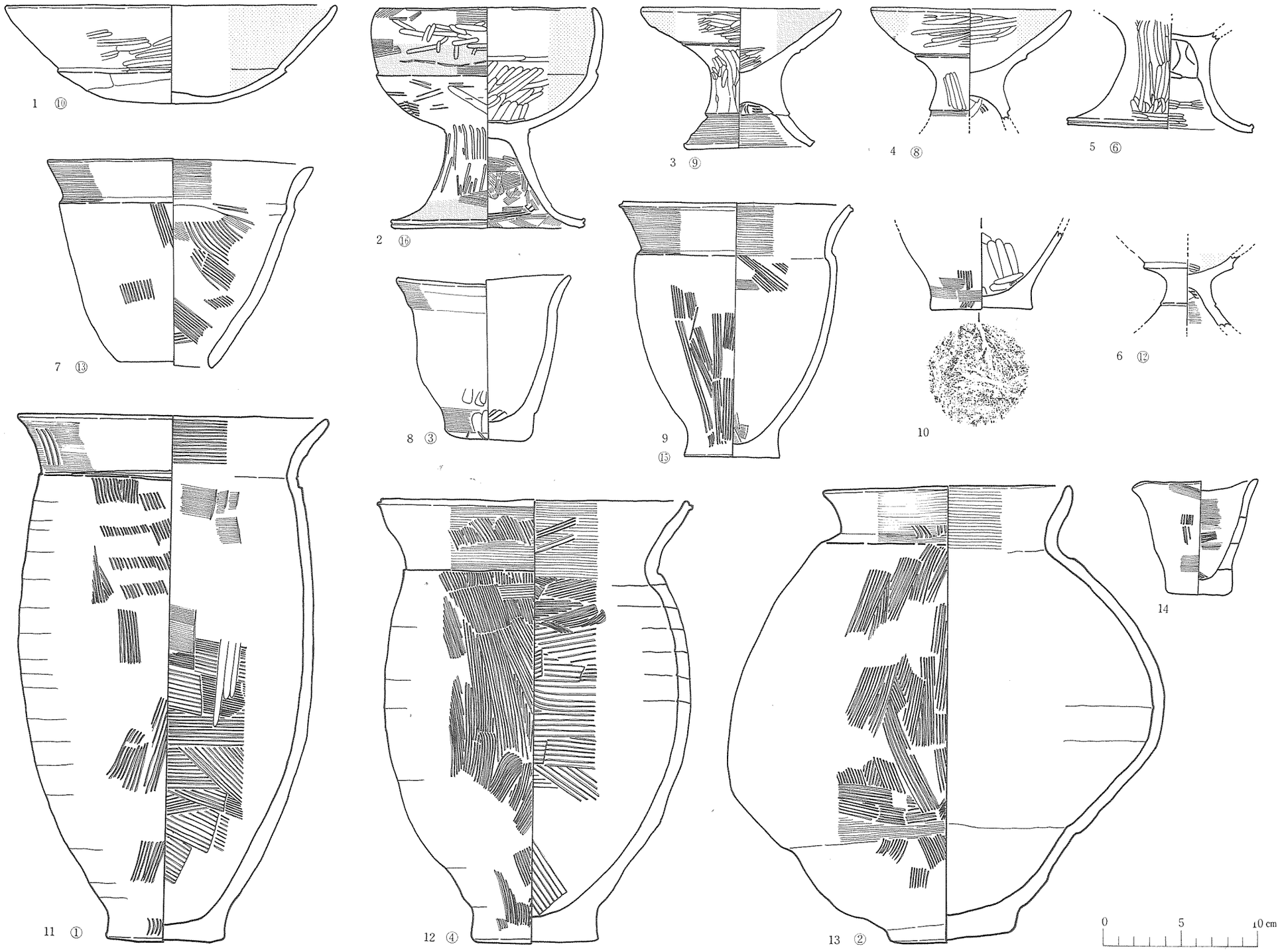
年代推定の資料としては、カマド中・カマド周辺・床面上等出土の土師器群がある。

（遺　物）

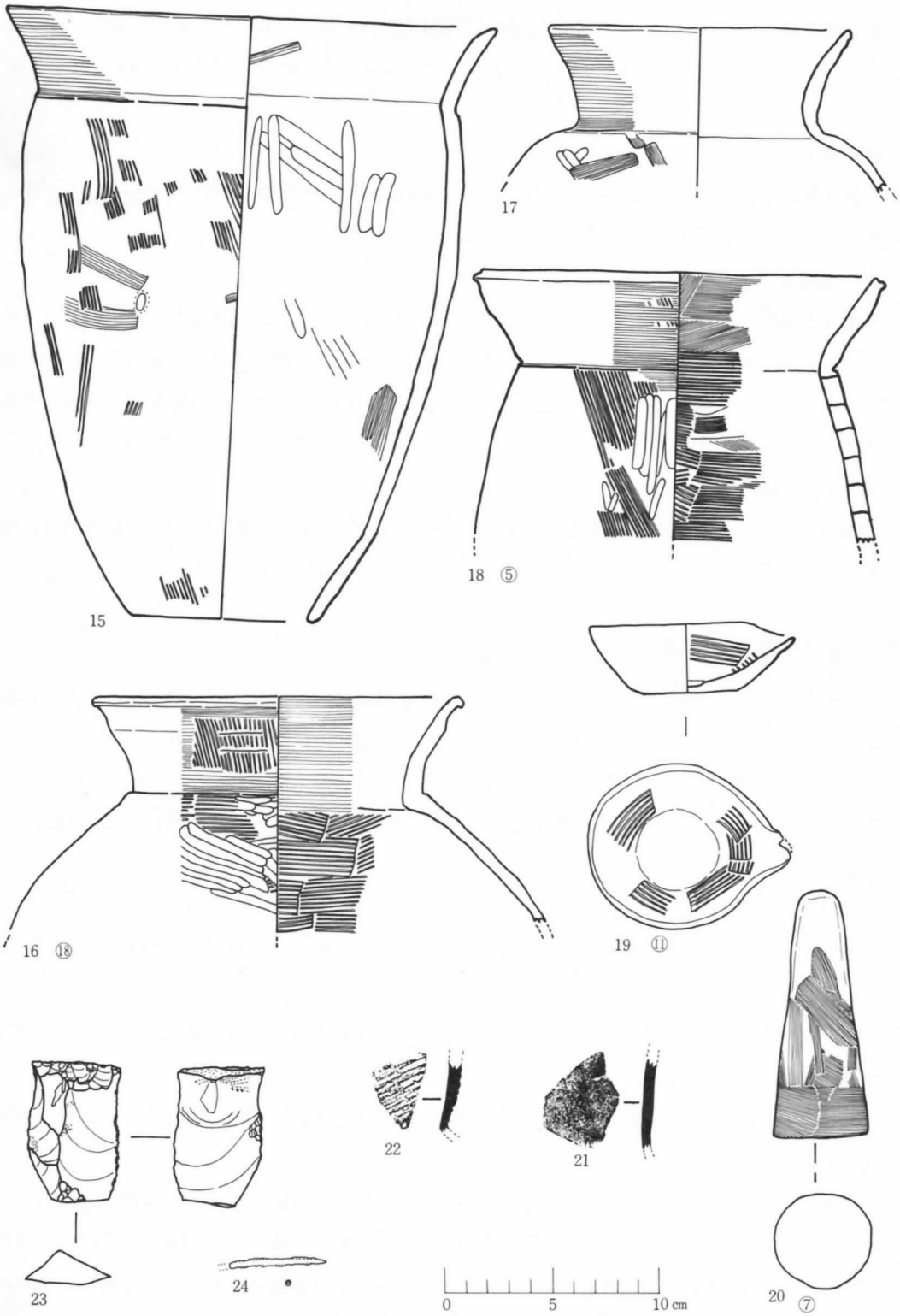
Ⅰ　土師器（第11－2・3・図1～19）　第7表

分類	平面図上の土器番号	実測図番号	調整								器高	口径	底径	備考
			口縁部		体部上半		体部下半		底部					
			内面	外面	内面	外面	内面	外面	内面	外面				
甕	①	11	刷毛目	刷毛目のち横ナデ	刷毛目のちヘラナデ	刷毛目	刷毛目のち部分的にヘラミガキ	刷毛目	刷毛目		33.8	20.0	7.6	
	④	12	刷毛目のち横ナデ	刷毛目のち横ナデ	刷毛目	刷毛目	刷毛目	刷毛目	刷毛目	刷毛目ヘラミガキ(?)	28.6	20.2	8.2	
	⑤	18	刷毛目のち横ナデ	刷毛目のち横ナデ	刷毛目	刷毛目のちヘラミガキ	欠失	欠失	欠失	欠失	?	19.2		

甕		14	刷毛目のち横ナデ	刷毛目のち横ナデ(?)	刷毛目のち横ナデ	刷毛目のち横ナデ	刷毛目のち横ナデ	ヘラナデ(?)	刷毛目	木葉痕	7.5	8.1	3.4	褶珍
	⑮	19	横ナデ	横ナデ	刷毛目のちヘラミガキ又はヘラナデ	刷毛目	刷毛目のちヘラミガキ又はヘラナデ	刷毛目のちヘラナデ(?)	刷毛目	ヘラガキ(?)	16.3	5.1	6.1	
		17	横ナデ(?)	横ナデ(?)	不明	ヘラナデ	欠失	欠失	欠失	欠失		14.0		
									刷毛目	刷毛目木葉痕			6.6	
									刷毛目	木葉痕			8	
		10	欠失	欠失	欠失	欠失	刷毛目のちヘラミガキ	刷毛目	ヘラナデ	刷毛目木葉痕			6.6	
	③	8	横ナデ(?)	横ナデ(?)	横ナデ(?)	ヘラミガキ(?)	横ナデ(?)	ヘラナデ	ナデツケ	木葉痕	10.7	11.3	5.8	
										木葉痕			8	
壺	②	13	横ナデ(?)	刷毛目のち横ナデ	刷毛目	刷毛目	刷毛目ヘラミガキ	刷毛目	ヘラミガキ	木葉痕	2905	15.9	8.2	
	⑱	16	横ナデ	刷毛目のち横ナデ	刷毛目	刷毛目のちヘラミガキ(?)	欠失	欠失	欠失	欠失		16.4		
										木葉痕			8.5	
														須恵器
			不明	不明	不明	不明	不明	不明	欠失	欠失				褶珍
坏	⑩	1	ヘラミガキ	ヘラミガキ(とナデ?)	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	刷毛目のちナデ	ヘラミガキ	ヘラケズリのちヘラミガキ	6.3	20.9		内黒 丸底坏 or Ⅲ
			ヘラミガキ	横ナデ					ヘラミガキ	ヘラケズリ				
			ヘラミガキ	ヘラミガキ					ヘラミガキ	ヘラミガキ(?)				
			ヘラミガキ	ヘラミガキ					ヘラミガキ	ヘラミガキ(?)				
			ヘラミガキ	ヘラミガキ										
			ヘラミガキ											
					ヘラミガキ									
				ヘラミガキ					ヘラミガキ					
高坏	⑯	2	ヘラミガキ	ヘラナデとヘラミガキ(?)			ヘラミガキ	ヘラケズリのちミガキ	刷毛目ナデツケヘラナデ	ヘラミガキ	14.1	14.0	脚径12.5	内黒彩色
	⑨	3	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ(?)	ヘラミガキ	ヘラミガキ	横ナデ下ヘラナデ	ヘラミガキ下ヘラミガキ	9.1	13.0	8.2	口縁・内黒
	⑧	4	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ナデツケ(?)	ヘラミガキ	8(推)	12.9(脚径)		内黒
	⑥	5	欠失	欠失	欠失	欠失	欠失	欠失	ヘラミガキ(ナデツケのちミガキ)	ヘラミガキ	7(?)		12.0	内黒
	⑫	6	ヘラミガキ	ヘラミガキ			ヘラミガキ	横ナデ(?)	ヘラナデナデツケ	ヘラミガキヘラナデ			1.7	内黒
甑	⑬	7	横ナデ	横ナデ	刷毛目	刷毛目	刷毛目	刷毛目			13(推)	16.8	5.5	
		15	ヘラミガキ(?)(ヘラナデあり)	刷毛目のち横ナデ	ヘラミガキ(?)	刷毛目部分的ヘラナデ	ヘラナデとヘラミガキ	刷毛目			28.1	22.6	8.4	
片口	⑪	19	ヘラナデ(?)	ヘラナデとヘラミガキ(?)	刷毛目	ヘラミガキ横ナデ			ナデツケ	ヘラミガキのちヘラナデ	3.5	長10 短8	4.2	



第11－2図　Bd59竪穴住居跡出土遺物実測図



第11－3図　Bd59竪穴住居跡出土遺物実測図

II　**須恵器**（同21・22）；破片ではあるが、床面上から2個出土したので掲げておく。22は表面に叩き目の縄目が顕著にみられるが、裏面には特に何もみられない。21は、あるいは長頸の何らかの器形になるものであるかもしれない。

III　**鉄器**

針状製品（同24）；釘とするには細すぎると思われる、断面形が円形のものを一応こう呼んだ。

IV　**土製品**

カマド支脚（同20）；カマド火床上ではなく、カマド外の右隣に検出した。とすると、この種の支脚は、カマド火床に固定される（礫を火床に埋め込み、直立させるなどの例あり）ものではなく、使用に際してカマドに着脱するものなのであろうか。表面には刷毛目様調整痕や横ナデ調整の痕がみられ、比較的入念に作ってある。

V　**石　　器**

剝片（同23）；覆土出土であるが、参考までに掲げた。頁岩製の縦長剝片で、打撃面・打撃瘤・フィシャー・リング等が良好にみられる。縄文時代晩期のものであろうか。

Bf09竪穴住居跡（第12図・第8表）

遺跡敷地ほぼ中央部に検出。他の遺構との重複関係はない。遺構内での増改築の痕は一部疑問箇所はあるが、はっきりとそれと見做し得るものはない。保存状態は不良。

平面形は四隅に丸味があり、中央部が弧状に微かに膨らむ大略方形をなし、その規模は南北3.9m×東西4.1m、床面積15.99m²程度となる。住居中軸線の方向(南北両壁の中点を結ぶ線)は、磁北から約11°45′西に振れる。

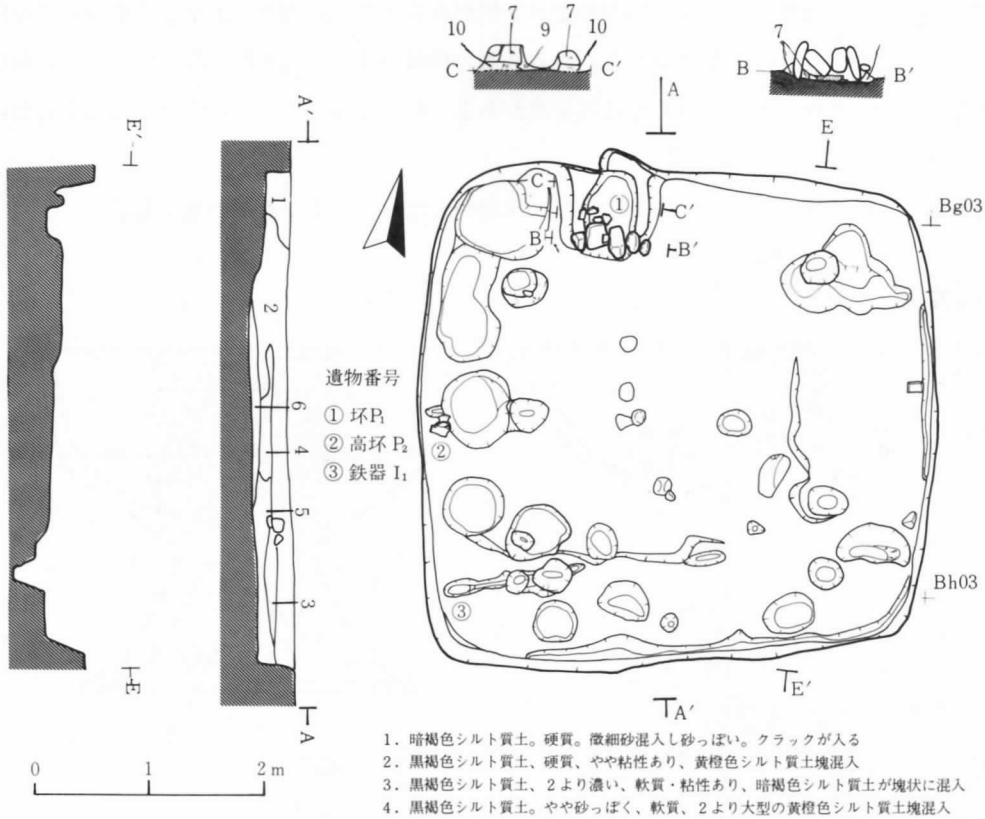
遺構内に堆積した土層は大略三層をなす。

第1層　暗乃至黒褐色のシルト質土層。締まりがあって硬いが、粘性もややある。覆土上半の大部分を占める。

第2層　黒褐色シルト質土層。数層からなるが、基盤の黄橙色シルト質土塊を混入する点に特徴がある。第一層に比し、やや軟質で粘性が強い。

第3層　黒褐色シルト質土層。軟質で粘性もある。床面直上に堆積したものであるが、貼床的なものとは考えられない。

床面の状況は、今泉遺跡内では珍らしくピット類・掘り込み類が多くあり、凹凸が激しい。その中には、床面がほぼ方形に低くなる部分なども含まれる。それが、南壁と東壁にほぼ併行することから、あたかも増改築があったかのような印象を与えるのであるが、土層・柱穴等の観察からしてその痕跡とは認められず、もともとこのような凹みの部分を有する住居であると



1．暗褐色シルト質土。硬質。微細砂混入し砂っぽい。クラックが入る
2．黒褐色シルト質土、硬質、やや粘性あり、黄橙色シルト質土塊混入
3．黒褐色シルト質土、2より濃い、軟質・粘性あり、暗褐色シルト質土が塊状に混入
4．黒褐色シルト質土。やや砂っぽく、軟質、2より大型の黄橙色シルト質土塊混入
5．黒褐色シルト質土。軟質で粘性あり。3より小型の黄橙色シルト質土粒が霜降り状に混入
6．黒褐色シルト質土。軟質で粘性あり、2より小型の黄橙色シルト質土塊混入
7．黄橙色粘土質シルト。カマド袖
8．焼土
9．黒色土、黄橙色シルト質土塊と焼土塊混入
10．黄橙色シルト質土（基盤）

第12－1図　Bf09竪穴住居跡実測図

理解した。壁高は30cm前後である。

床面上のピット類のうち、少なくとも主柱穴と認めてよいと思われるものは、ほぼ対角線上にのる4個であろう。円形で、平均径31cm、平均深さ19cmである。

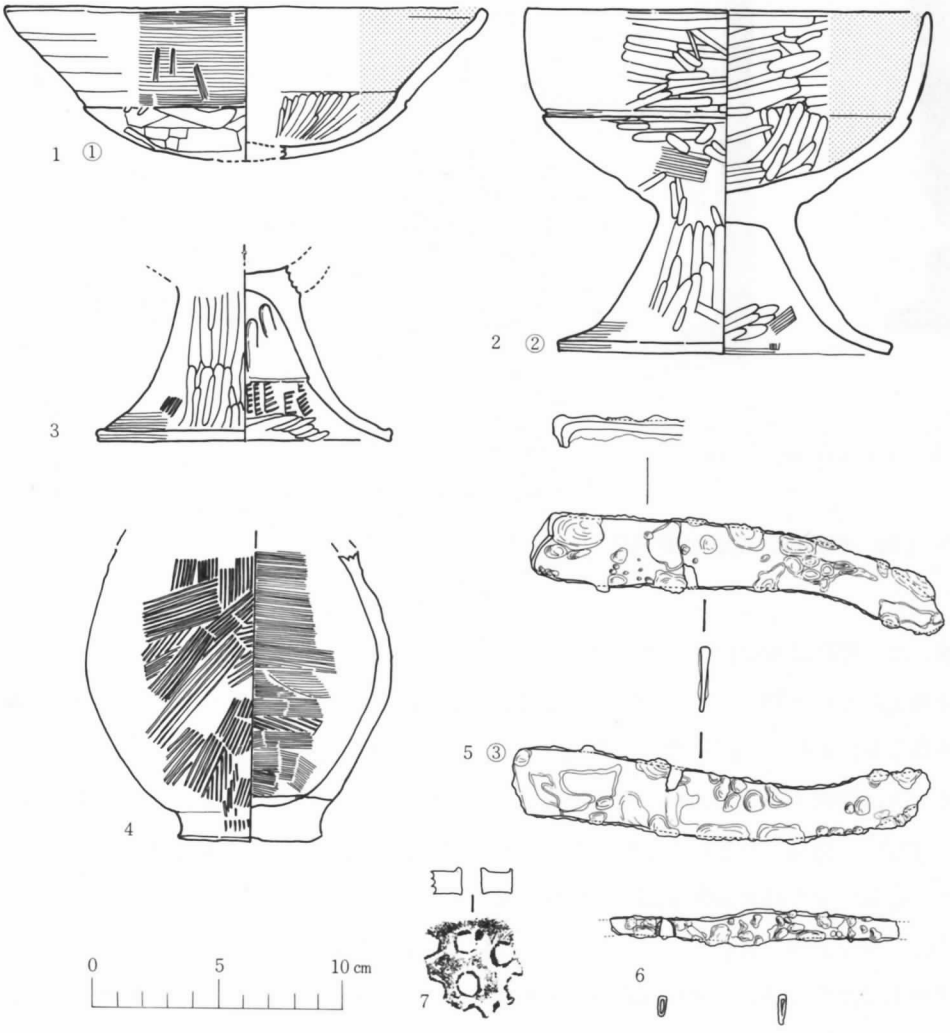
カマドは他例の多くと同様に北壁に構築されるが、その中央部ではなくやや左方（西方）に寄った部分に構築されている点が例外的である。煙道の痕跡は土中には殆んど認められず、カマドの北端が少々外方に張り出した程度のものである。その他の点は他例に共通する点が多いので、詳細な説明は省略する。焚口部の「門の字」状の礫のうち、上に架せられるものは半折し床面上に落ちている。焚口の間口75cm・高さ30cm、袖部奥行60cmである。火床部はやや凹みその支脚その他の施設は認められない。

床面上のその他の施設としては、まず西北隅に方形に近い掘り込みがある。やや浅めで、しかも遺物その他の出土がみられないが、カマドとの位置関係からして貯蔵穴の可能性がある。周溝と思われるものは、東壁直下の中央部分と南壁直下のほぼ全域にみられる。さらに、特に

西壁と南壁に沿う床面には、浅い円形のピット列がみられる。遺物等の出土をみないので性格は不明であるが、そのうち南壁側にみられる２個の位置関係は整然としたものであり、あるいは住居に関連する何らかの遺構となる可能性がある。但し、浅いので主柱穴などにはならないのであろう。

年代推定の資料としては、少ないながらも床面から出土した土師器その他がある。

（遺　　物）



第12－２図　Bf09竪穴住居跡出土遺物実測図

Ⅰ　**土 師 器**（第12－２図・１～４・７）

第8表

分類	土器番号	平面図上の実測図番号	調整 口縁部 内面	口縁部 外面	体部上半 内面	体部上半 外面	体部下半 内面	体部下半 外面	底部 内面	底部 外面	器高	口径	底径	備考
甕														須恵器
			横ナデ(?)		ヘラミガキ又はヘラナデ	ヘラミガキ(?)								
壺		4			刷毛目のちヘラナデ(?)	刷毛目	刷毛目のちヘラナデ(?)	刷毛目ヘラケズリ	刷毛目のちヘラナデ(?)	刷毛目(?)	13(?)		5.8	
坏	①	1	ヘラミガキ	横ナデ	ヘラミガキ	横ナデ	ヘラミガキ	ヘラケズリ	ヘラミガキ	ヘラケズリ	6.2	19.3		
高坏	②	2	ヘラミガキ	ヘラミガキ(?)	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	刷毛目のちヘラミガキ	刷毛目ヘラミガキナデ	ヘラミガキ横ナデ	13.7	16.0	13.2	
		3	欠失	欠失	欠失	欠失	欠失	欠失	ヘラミガキ、刷毛目、ヘラナデ、ナデツケ	刷毛目ヘラミガキのち横ナデ	6.0	4.8	11.8	坏底部内黒
									ヘラミガキナデツケ	刷毛目のちヘラミガキ				
甑		7												多孔式

II 鉄　器

鎌形製品（同5）；ほぼ完全な、床面出土のもの。全体的に薄手で、形状はブーメラン形に湾曲している。一端が折り返してあり、他端はやや細くなっている。断面形は薄い楔形をなす。

刀子形製品（同6）；床面出土の破損品。薄手で断面形が楔形をなす部分と、長方形をなす部分とからなるもので、前者を刃部、後者を柄に差し込む部分と想定した。断面には何れにも中空部がみられる。

Bf15竪穴住居跡（第13図）

遺跡敷地中央やや西寄りの、現段丘崖北縁から南にやや南下した地点に検出した。

他の遺構との重複関係・遺構内での増改築の相方ともに認められない。しかし遺構の残存状況は概して不良である。

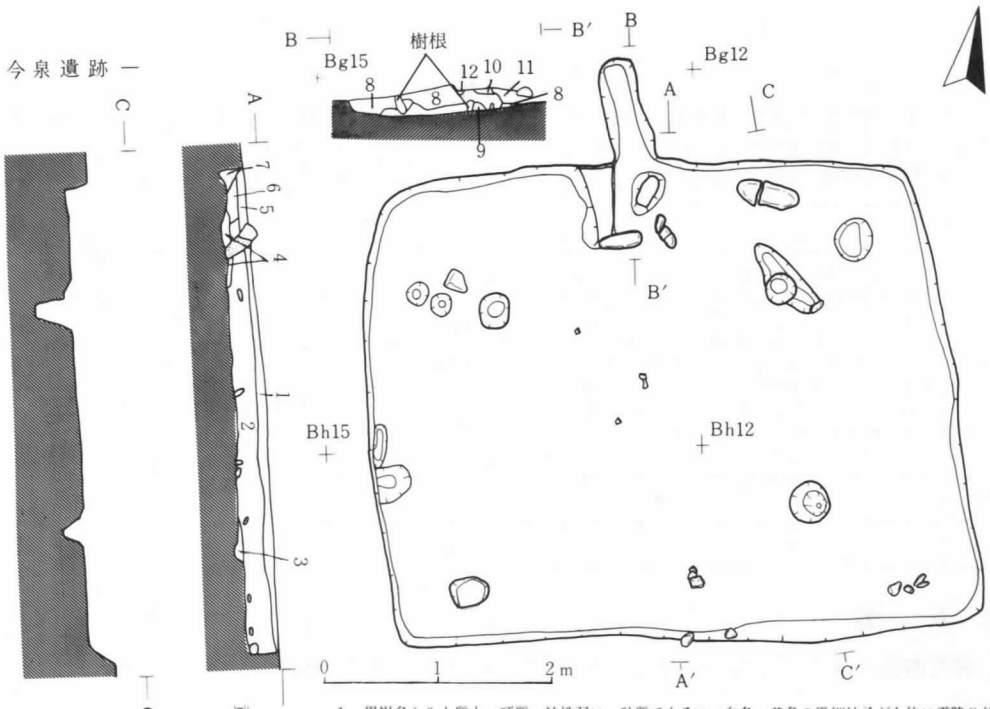
平面形は遺存状況が不良であるので正確は期し難いが、調査結果によると横長の長方形をなし、その規模は東西4.7m×南北3.7m（推定）、床面積17.39m²（推定）程になるようである。住居中軸線の方向（北壁中央のカマドの中心と南壁の中点を結ぶ線）は、磁北から約13°30′西に振れる。

住居内に堆積した土層は、大略二層である。

第1層　黒褐色シルト質土層。砂っぽくてもろく、粘性もあまりない。

第2層　黒褐色シルト質土層。第1層よりは砂っぽくなく、有機物量が増加する。しかし比較的硬質で、粘性もそれ程ない。炭化物粒少量が混入。その他の層はカマド周辺に数層が認められただけで、非常に単純である。

床面はほぼ平坦であり、傾斜は殆んどない。現壁高は21cmとやや浅めである。床面上に10個のピット・掘り込み類と、2個の礫が存在した。



1．黒褐色シルト質土。硬質・粘性弱い。砂質でもろい。白色・黄色の微細粒子が全体に霜降り状に入る
2．黒褐色シルト質土。硬質。粘性弱い。1より砂量少なく、有機質土が増す。炭化物粒少量。黄橙色シルト質土粒混入
3．黒褐色有機質土。軟質で、粘性あり。黄橙色シルト質土が斑状に混入
4．黒褐色有機質土。やや軟質で粘性あり。黄橙色シルト質土が少量混入。焼土粒子混入
5．暗褐色土。1に似るが、黄橙色シルト質土で汚される
6．暗褐色土。硬質で、粘性弱い。2に似るが黄橙色シルト質土、焼土粒で汚される
7．黒褐色土。やや硬質でしまりあり。黄橙色シルト質土の斑状混入が少ない
8．黒褐色有機質土。砂質土まじり、硬く、粘性弱い。焼土粒子混入
9．暗褐色有機質土。軟質で、やや粘性あり
10．暗褐色シルト質土。硬く、粘性弱い。白色微細砂が霜降り状に入る
11．暗褐色シルト質土。軟く、やや粘性あり、焼土粒子混入

第13図　Bf15竪穴住居跡実測図

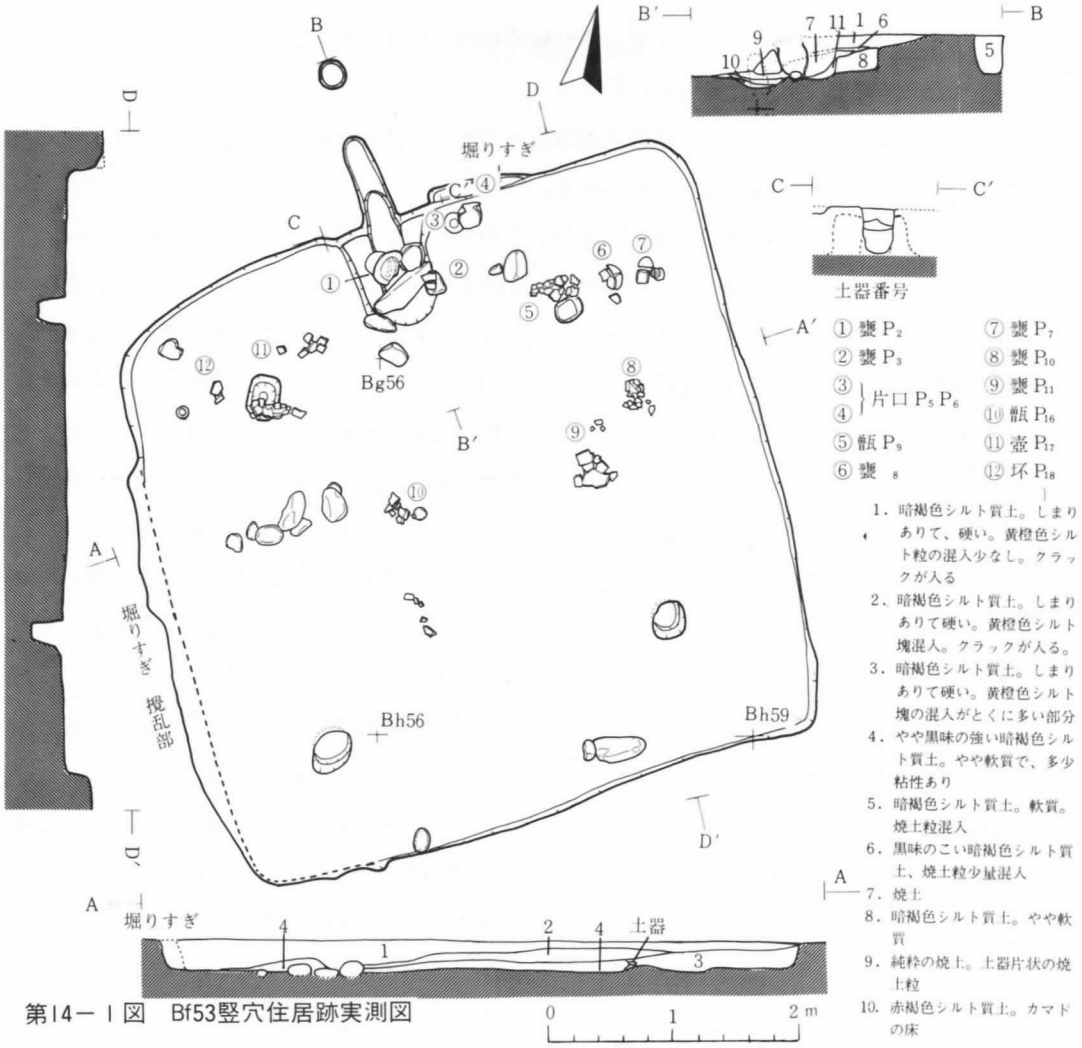
ピット類のうち、少なくとも主柱穴と認めてよいものは、ほぼ対角線上に並ぶやや大きめの4個であろう。それらは大略円形をなし、平均径27cm・平均の深さ22cm程である。他に西壁中央やや南方の壁直下に2個のピットがあるが、これは住居に関連する何らかの施設の痕跡かもしれない。

床面上にはその他の施設は認められない。

カマドは他の例と同様に正確に北壁中央に作られている。但し、遺存状態は不良であり、袖部東半は破壊されている（その他、焚口部の礫が倒壊するなど、当遺跡中では「破壊」という印象の強い遺構である）。袖部の構築法・焚口部に於ける礫の使用などは、他の例と共通するものである。焚口の間口75cm・高さ25cm、カマド奥行65～70cmと規模にも共通点が多い。

カマド火床と煙道の結合部には段はなく、カマド火床と煙道底はほぼ同レベルをなす。煙道は北方へ80cm程延びて終結し、その端部には煙出し用と認めるべき特別な施設はない。また、その部分の底部には、礫・土器片等も認められない。

年代推定の資料となし得る程に良好な遺物は出土しなかったが、カマド・煙道の特徴等からある程度の推定はなし得る。



第14－1図　Bf53竪穴住居跡実測図

Bf53竪穴住居跡（第14図・第9表）

調査区域のほぼ中央、やや東寄りに検出した。他の遺構との重複関係、遺構内での増改築の事実、何れも認められない。

遺構の平面形は、四隅に微かに丸味のつくやや不整な正方形をなし、その規模は東西4.8 m（推定）×南北4.9m、床面積23.52m²（推定）となろう。西壁の大部分と西南隅・北壁のカマドの両側の一部は、調査時に於ける掘り過ぎと、樹根による攪乱でやや乱れている。住居の中軸線の方向（北壁中央にあるカマドの中心と南壁の中点を結ぶ線）は、磁北から約30°西に振れている。

遺構内に堆積した土層は、大別して二層からなる。

第1層　暗褐色シルト質土層。比較的締まりがあって硬い。乾燥するとクラックが入る。覆土の上半を占める。尚、人為的に投入されたと思われる人頭大の礫が多く存在する部分もあった。

第２層　黒乃至暗褐色シルト質土層。やや粘性が強くなり、黄橙色シルト質土塊・遺物等の混入量が増加する。貼床は認められない。

床面はほぼ平坦といってよく、遺存状態は良好である。壁高は30cm前後。床面上には合計４個のピットと、４箇所の礫の分布がみられる。

上記４個のピットは、ほぼ対角線上に並び、そのすべてを主柱穴と認めてよいものであろう。形状は円形で、平均径25～30cm・平均深さ25～30cmをなす。尚、南半の２個はやや傾斜を持つ。

カマドは既述の通り、正確に北壁の中央部に取り付けられる。カマド本体の構築方法は、黄橙色粘土質シルトを用いて袖部を構築する点・焚口部に「門の字」状に礫を配置する点・燃焼部床がやや凹む点等々、多くの例にほぼ共通する特徴で示される。焚口部の間口60cm・高さ20cm、袖部奥行70cm程である。本体中には、土師器甕２個が遺存していた。煙道は顕著に発達し北壁から北に70cm程延びる。燃焼部床と同じレベルをなす部分が、北壁から30cm延びた所で15cm程高くなり、その先の50cmは徐々に浅くなって自然に終結する。その端部より北40cmの所に径20cm・深さ30cm程の円形ピットがある。位置的には正に煙出しに相当するが、煙道部とトンネル状に連結する事実は認められない。しかし覆土に若干の焼土粒を混入しているので、一応煙出しの可能性が大きいものと見做しておく。本例は今泉遺跡中で、カマド遺存状況が最良のものの一つに数えられる。

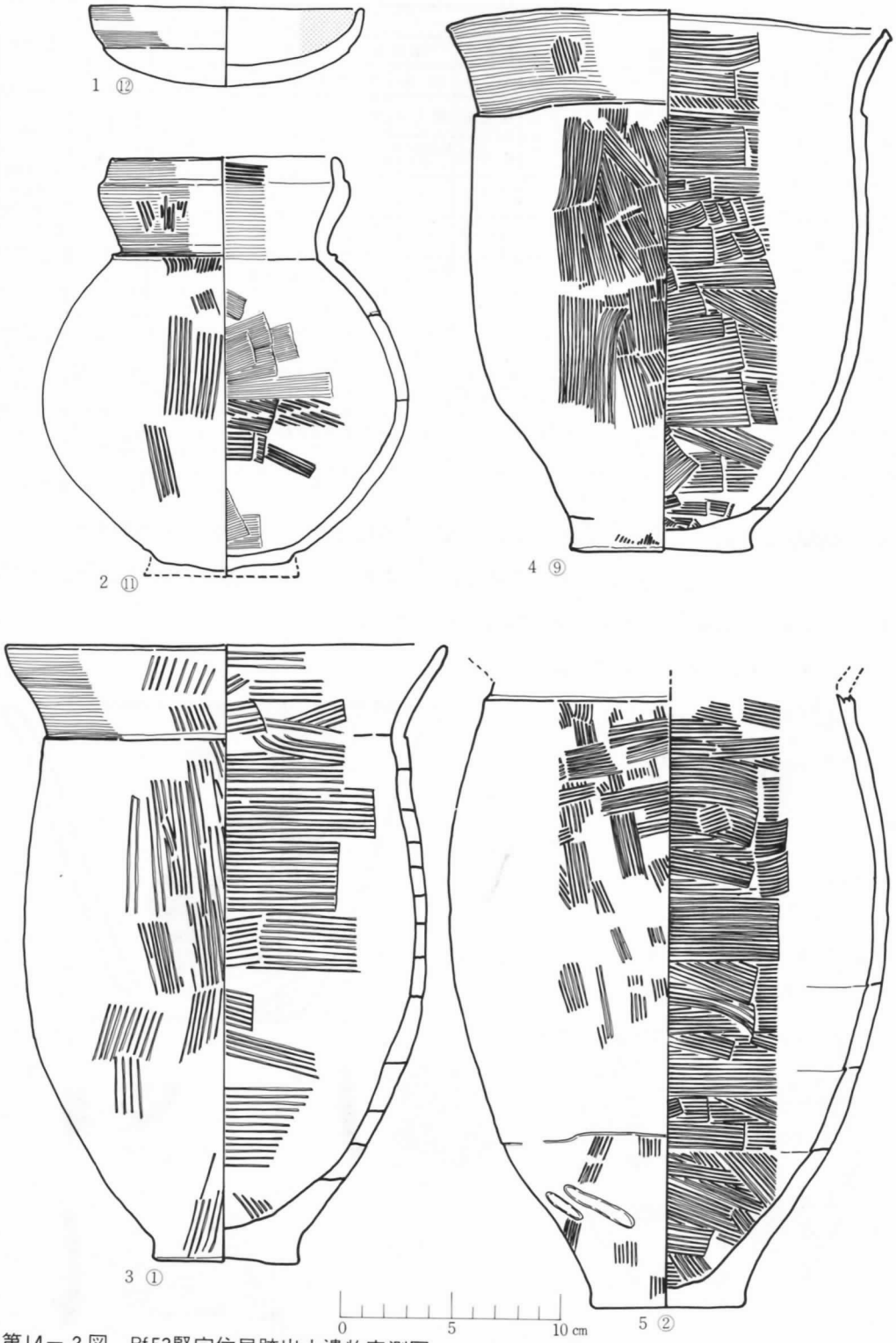
床面上のその他の施設としては、ピット・掘り込み類がみられないことは既に述べたが、その他のものとしては礫がある。うち２個はカマドに比較的近い位置にあり、そこに何らかの意味がありそうである。西半部にみられる７個の集積部分も、人為的な配置と見做せないこともなく、何か意味がありそうであるが、周囲に特記すべき現象は認められない。南壁直下の大小２個は、あるいは建物の構造に何らかの関連を有するものかもしれない。

年代推定の資料としては、カマド本体中・床面上に検出された土師器群他がある。

（遺　　物）

Ｉ　土師器（第14－２・３図・１～８）第９表

分類	平面図上の土器番号	実測図番号	調				整				器高	口径	底径	備考
			口縁部		体部上半		体部下半		底部					
			内面	外面	内面	外面	内面	外面	内面	外面				
甕	①	3	刷毛目	刷毛目のち横ナデ	刷毛目	刷毛目	刷毛目	刷毛目	刷毛目	刷毛目ヘラミガキ	28.1	20.1	6.7	
				横ナデ		刷毛目								
					刷毛目のちヘラミガキ	刷毛目								
									刷毛目	ヘラケズリ木葉痕				
	②	5	欠失	欠失	刷毛目	刷毛目	刷毛目	刷毛目のちヘラナデ	刷毛目	木葉痕	28+α		7.0	



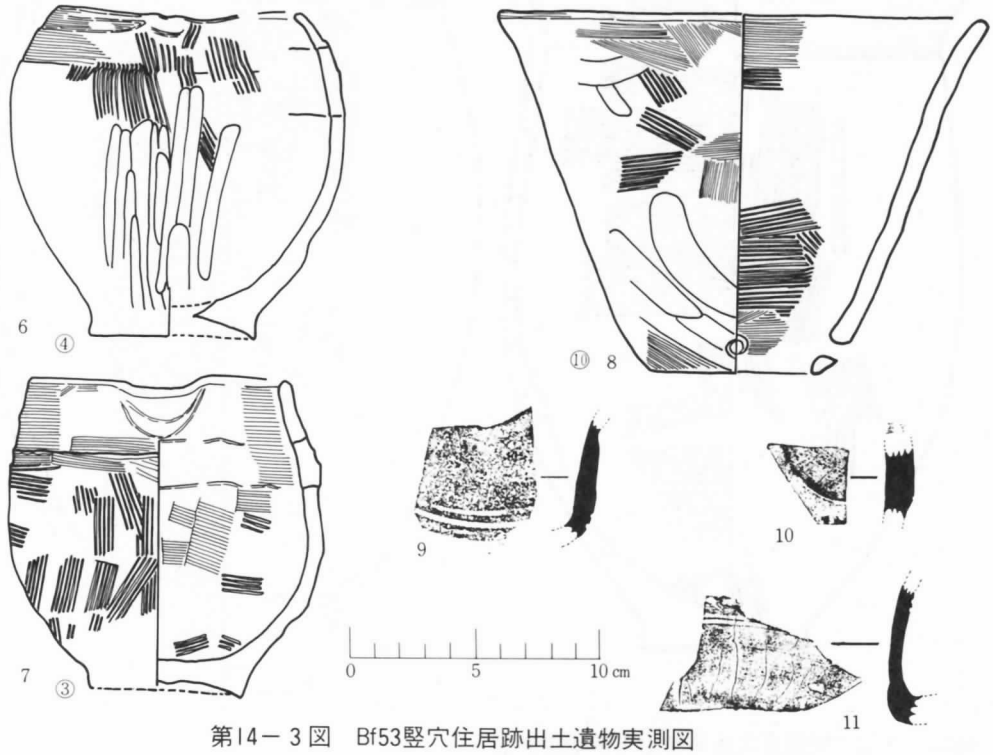
第14－2図　Bf53竪穴住居跡出土遺物実測図

分類	平面図上の土器番号	実測図番号	調整								器高	口径	底径	備考
			口縁部		体部上半		体部下半		底部					
			内面	外面	内面	外面	内面	外面	内面	外面				
甕	⑨	4	刷毛目のち横ナデ(?)	刷毛目のち横ナデ	刷毛目	刷毛目	刷毛目	刷毛目	刷毛目	木葉痕	24.7	20.2	8.4	
壺	⑪	2	刷毛目のち横ナデ	刷毛目のち横ナデ	ヘラナデ(刷毛目のち?)	刷毛目	刷毛目のちヘラナデ	刷毛目	ヘラナデ	剝落	19.0	10	6.7	
														須恵器
坏	⑫	1	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	不明(ヘラミガキ?)	ヘラミガキ	ヘラミガキ	3.6	12.5		内黒
甑							刷毛目のちヘラミガキ							
							刷毛目	刷毛目						
				横ナデ(?)	横ナデ	刷毛目	刷毛目							
	⑩	8	横ナデ	横ナデ	刷毛目	刷毛目ヘラケズリ	刷毛目	刷毛目のちヘラケズリ			14.2	19.6	6.8	
片口	③	7	横ナデ	刷毛目のち横ナデ	刷毛目のちヘラナデ	刷毛目	刷毛目のちヘラナデ	刷毛目	ナデツケ	欠失	12.7	長13 短10.6	6.1	
	④	6	刷毛目のち横ナデ	刷毛目のち横ナデ	横ナデ(刷毛目のち)	刷毛目	横ナデ(刷毛目のち)	刷毛目のちヘラミガキ	剝落	剝落	12.5〜13	9.7	6〜7	

II　**須恵器**（同9・10・11）；何れも破片であり、器種も不明であるが、一応掲げた。

9・10は、あるいは壺類似の器種になるとも考えられる。9には篦による削り調整、10には緑色の釉類似の被膜がみられる。壺の肩部であろうか。

11は、長頸の何らかの器種の頸部らしい。



第14－3図　Bf53竪穴住居跡出土遺物実測図

新期Bg62竪穴住居跡（第15図・第10表）

調査地の中央やや東南部寄りに検出した。

東壁と南壁を共通する形で旧期Bg62住居跡と重複している。これはやや問題はあるが、旧期Bg62の拡張と見做すよりは、完全な新築と見做した方がよいのであろう（後述するように旧期Bg62の部分の凹みをほぼ完全に埋めてしまっていること・そこから遺物の出土が見られないこと・旧のカマドがこわされていること等から、上のように推定した）。全体的な遺存状態は非常に良好である。

平面上は、西壁の中央付近が樹根のため一部乱れているが、全体的には形の整った、しかも隅の角ばった長方形をなし、その規模は東西6.4m×南北7.3m、床面積46.72m²程である。今泉遺跡中では最大級の規模である。住居中軸線の方向（北壁と南壁のそれぞれ中点を結ぶ線）は、磁北から14°17′西に振れている。

遺構内に堆積した土層は大略二層からなる。

第1層　暗褐色シルト質土層。それをベースとして、全般的に微細砂も混じり、また黄橙色シルト質土塊も混入する。硬質で粘性はあまり無く、乾燥するとクラックが入る。ただし西端部の一部には樹根の影響によると思われる有機質土層もみられ、当然のことながら軟質で粘性に富む。

第2層　暗褐色シルト質土層。第1層にみられた黄橙色シルト質土塊はそれほど顕著には認められない。硬質で粘性はあまり無い。

第3層　黄褐色シルト質土層。基盤の黄橙色シルト質土を、一段低い凹みとして残った、旧期Bg62住居跡の床面上に敷きつめ、床面のレベルをそろえたもの。その意味では貼り床的な性格もあろう。やはり軟質で粘性がみられる。

床面の状況は傾斜もみられずほぼ平坦である。西壁の中央部以外は壁もしっかりしており、ほぼ垂直に立ち上がり、壁高は35cm程度である。床面上には大小8個のピット類があり、また床面中央からやや南に偏して礫の分布がみられる。

床面上のピット類のうち、やや大きめで、ほぼ対角線にのる位置関係にある4個が、少なくとも主柱穴であろう。うち西方の2個には、一応掘り方と柱あたりの部分を指摘できる。それらによると、掘り方の形状は楕円形ないし長方形に近く、長径約55cm・短径45cm・深さ35cm程度、柱あたりはほぼ円形で径約15～20cm・深さ40cmである。西南隅の柱あたりのように、掘り方の北半に寄った部分に位置する例もある。また東北隅の柱穴は、やや傾斜して穿たれている。

カマドは北壁に取りつけられる。他の多くの例とは異なり、北壁の中央からやや東寄り（カマドの中心が北壁の中点から東方へ35cmずれており、カマド左袖の上端の線が大略北壁の中央にあたる）に構築されている。袖部の構築法・形態・焚口部の「門の字」様の礫の状況、燃焼

部底の凹み等、カマド本体の特徴は他の多くの例に共通する。焚口部間口60cm・高さ30cm、袖部奥行80cmである。カマドの遺存状態は最良の部類に入り、さらにまたその内部・周辺の遺物の残存状況も非常に良好で当時の生活相復元の為の良好な資料となる。短いながらも煙道も備えられる。北壁から北に40cm程度。燃焼部底が北壁と接する部分が20cm程高くなり、煙道部底はそのレベルのまま北へ延びる。この形式は後述のBh71・Ca18等にもみられるものである。明確にそれと見做しうる煙出しは土中には検出できなかった。また燃焼部底には礫・支脚その他の施設は認められなかった。

床面上のその他の施設としては、カマド西隣に径50cm程度の掘り込みがあり・その縁に甕型土器が位置していた。これは貯蔵穴と見做されてよいものであろう。周溝類似のものは北壁東半・西南隅・南壁中央部等に認められたが、幅も狭くかつ浅く・あまり顕著ではない。なお西壁直下の周溝に連続する形で、不整形の掘り込みがあり・その中に小型の壺その他の土師器類がみられるが、あるいはこれも貯蔵穴様の機能を推定してもよいのかもしれない。さらにカマド焚口の南に浅い円形の凹みがみられるが、これはカマドの使用時に関連する何らかの痕跡である可能性がある。最後に床面上に散見できる礫群は、その周辺に土器類を多く検出できたがその他の特異な状況を看取できなかったので、一応性格不明としておく。出入口等を推測させるものは認められなかった。

年代推定の資料としては、今泉遺跡内で一・二を争うほど良好な状態で床面上、カマド中出土の大量の土師器類と若干の須恵器片その他があげられる。

（遺　　物）

Ⅰ　土 師 器（第15－２・３・図２～20）

Ⅱ　須 恵 器

壺型（同１）；破片ではあるが床面出土。体下半底部と思われる部分のみであるが、やや丸味をもつ底部の壺型ないしそれ類似の器形となるようである。体部中央にあたると思われる部分に沈線が繞る。内面には凹凸がありロクロ成形痕を留めるが、外面はほぼ全面に篦削り調整が加えられている。底部外面のほぼ中央部が「ヘソ状」に凹む。

Ⅲ　鉄　　器

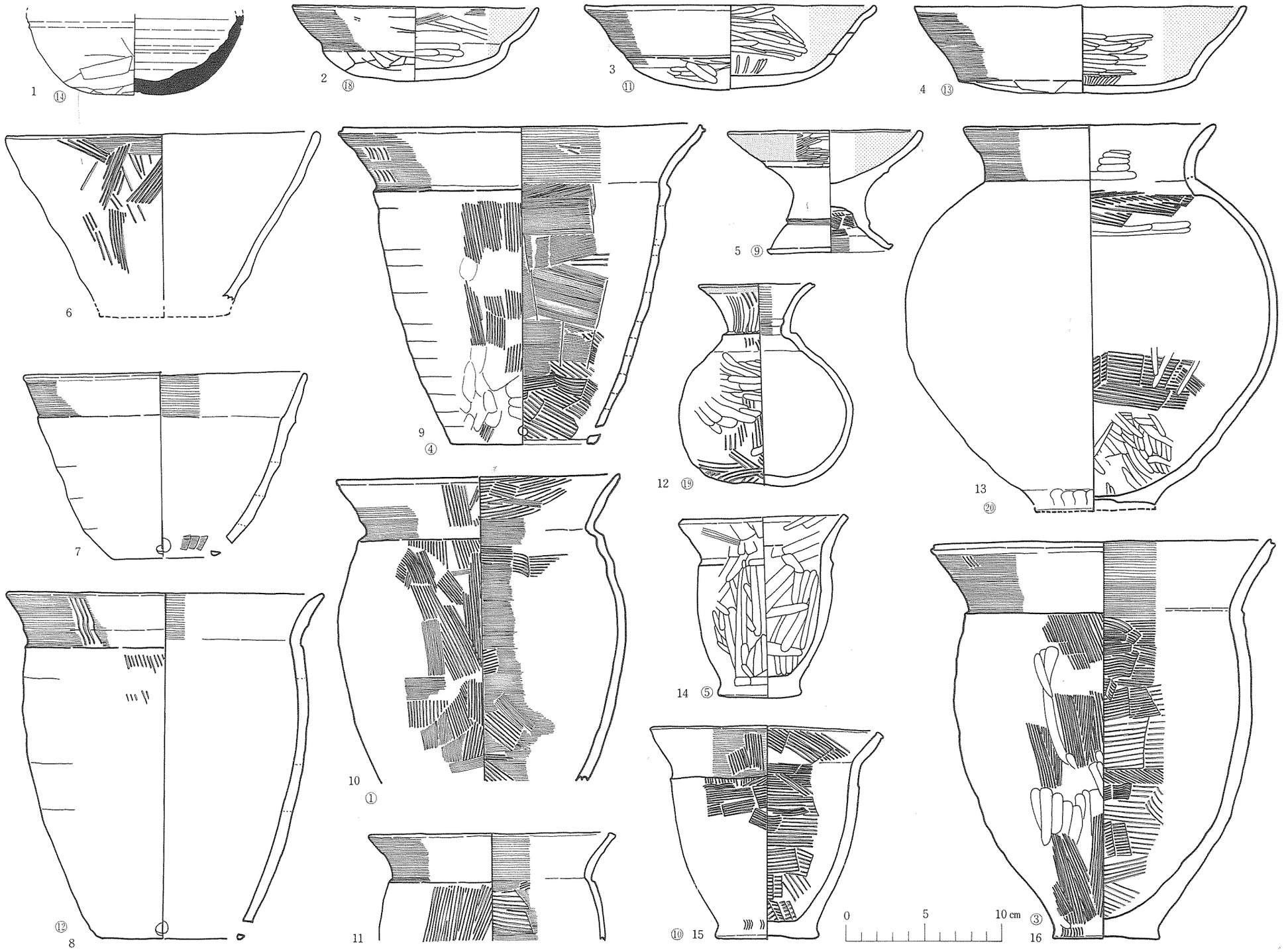
刀子形製品（同21）；比較的保存状態の良好な小型品。刃部と思われる部分が偏平で、しかも木質部も残存していることから、刀子と推定した。なお木質部の端部には輪状の金具がはめ込まれている。

針状製品（同22）；釘ほどには太くなく、断面形が円形を呈すものをこう呼んだ。断片である。

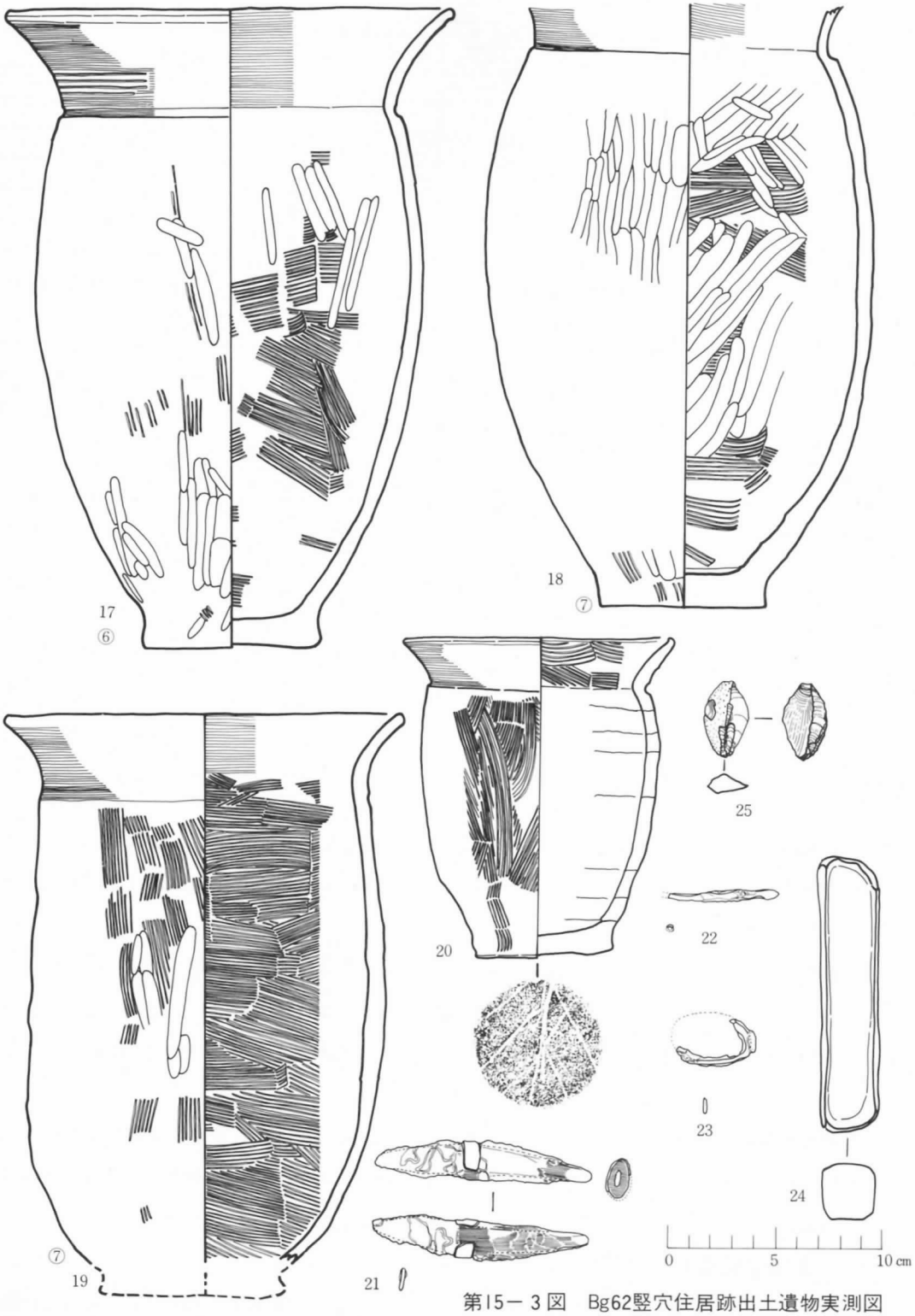
4．2に同じ
5．黄色砂質シルトの純粋層。軟質。カマド天井部か
6．焼土
7．黄色と褐色シルト質土の混土。軟質。炭化物粒子混入
8．褐色シルト質土。軟質
9．褐色シルト質土。軟質で炭化物粒混入
10．焼土、硬く純粋

第15－1図　Bg62竪穴住居跡実測図（上・旧期住居跡　　右・新期住居跡）

1．暗褐色シルト質土に微細砂と黄橙色シルトが塊状に入る。かたい
2．暗褐色シルト質土　微細砂混入。かたく粘性なし
3．褐色シルトを層状にしきつめたもの。軟かく、粘性あり。Bg62（旧）住の部分の凹みにしきつめたもの



第15－2図　Bg62竪穴住居跡出土遺物実測図



第15－3図　Bg62竪穴住居跡出土遺物実測図

第10表

分類	土器番号	平面図の上	実測番号	調整 口縁部 内面	口縁部 外面	体部上半 内面	体部上半 外面	体部下半 内面	体部下半 外面	底部 内面	底部 外面	器高	口径	底径	備考
甕	⑤		14	横ナデor ヘラミガキ	横ナデor ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラナデ	11.7	11.0	5.3	
			20	刷毛目	横ナデ	ヘラナデ(?)	刷毛目	ヘラナデ	刷毛目or ヘラナデ(?)	ヘラナデ	木葉痕	15.1	12.7	6.7	
	⑥		17	横ナデ(?)	刷毛目のち 横ナデ	刷毛目 ヘラミガキ	刷毛目のち ヘラミガキ	刷毛目 ヘラケズリ	刷毛目のち ヘラミガキ	刷毛目	ミガキ	29.9	20.6	8.3	
	⑦		19	刷毛目のち 横ナデ	横ナデ	刷毛目	刷毛目	刷毛目	刷毛目 ヘラケズリ	欠失	欠失	27+α	18.4	11	
	③		16	横ナデ	刷毛目のち ヨコナデ	刷毛目	刷毛目のち 部分に ヘラナデ	刷毛目	刷毛目、 ヘラナデor ヘラケズリ	刷毛目	木葉痕	25.6	22.1	6.8	
	⑩		15	刷毛目	刷毛目のち 横ナデ	刷毛目	刷毛目	刷毛目	刷毛目のち ヘラナデ又 はヘラミガキ	刷毛目	ヘラミガキ	13.8	15.0	6.8	
										刷毛目					
										刷毛目	刷毛目のち ヘラケズリ				
	⑦		18	横ナデ ヘラミガキ	横ナデ	刷毛目のち ヘラミガキ	刷毛目 ヘラミガキ(?)	刷毛目のち ヘラミガキ	刷毛目、 ヘラケズリ ヘラミガキ(?)		ヘラミガキ(?)	28.8	15.6	7.6	
				横ナデ	横ナデ		刷毛目 ヘラケズリ								
				刷毛目	刷毛目のち 横ナデ	刷毛目	刷毛目	刷毛目	刷毛目のち ナデorミガキ(?)	欠失	欠失				
				横ナデ	横ナデ	横ナデ 刷毛目	刷毛目のち ヘラミガキ ないしケズリ								
			11	横ナデ	横ナデ	刷毛目のち ヘラナデ	刷毛目	欠失	欠失	欠失	欠失		16.0		
	①		10	刷毛目のち 横ナデ	刷毛目のち 横ナデ	刷毛目のち ヘラナデ	刷毛目部分的 にヘラナデ	刷毛目のち ヘラナデ	刷毛目部分的 ヘラナデに	欠失	欠失	25(推)	18.3	(?)	
壺	⑲		12	横ナデ	刷毛目のち ヘラミガキ	ヘラミガキ ヘラナデ	刷毛目のち ヘラミガキ	ヘラミガキ	刷毛目	ヘラミガキ ヘラナデ	刷毛目	13.1	7.5	5.5	
	⑳		13	横ナデor ヘラミガキ	刷毛目のち 横ナデ	刷毛目のち ヘラミガキ	刷毛目(?)のち ヘラミガキ	刷毛目のち ヘラミガキ	刷毛目のち ヘラミガキ	ヘラミガキ	剝落	24.8	16.4	7.7	
坏	⑪		3	ヘラミガキ	横ナデ	ヘラミガキ	横ナデ	ヘラミガキ	ヘラケズリor ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラケズリのち ヘラミガキ	5.4	18.6		内黒 丸底坏or皿
	⑱		2	ヘラミガキ	横ナデ	ヘラミガキ	横ナデ	ヘラミガキ	ヘラケズリ	ヘラミガキ	ヘラケズリ	4.7	15.9		内黒
				ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ						17		
	⑬		4	ヘラミガキ	横ナデ	ヘラミガキ	横ナデ	ヘラミガキ	ヘラケズリ	ヘラミガキ	ヘラケズリ	5.6	21.4	15.2	内黒
高坏	⑨		5	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	刷毛目のち 横ナデ	ヘラミガキ 横ナデ	7.8	12.6	8	内黒 彩色(外面)
甑	④		9	刷毛目のち 横ナデ	刷毛目のち 横ナデ	刷毛目のち ヘラナデ	刷毛目	刷毛目のち ヘラナデ	刷毛目			20.3	23.6	9.2	
			7	横ナデ	横ナデ	ヘラナデ	ヘラナデ	ヘラナデ	ヘラナデ			12.0	18.3	6.4	2孔
	⑫		8	横ナデ	刷毛目のち 横ナデ	ヘラナデ	刷毛目	ヘラナデ	刷毛目			22.4	20.6	8.8	2孔

鐶状製品（同23）；用途不明であるが、断面形が偏平な長方形をなし、おそらくはリング状の全体形をなすと思われるものをこう呼んだ。21の柄の端部にみられるようなものであろうか。

Ⅳ 石　器

砥石（同24）；床面出土の太鼓の撥状の石であり、表面が平滑に研磨されているように思われるので、一応砥石として掲げた。しかし通例の砥石とは石材が異なり、研磨による擦りへり方もまた異なるので、あるいは自然礫かもしれず、その場合にはむしろカマド関連のものと解した方がよいのかもしれない。

黒輝石破片（同25）；覆土出土品であるが参考のために掲げた。おそらく剝片であろうが一部に表皮を残す。特別な細部加工は認められないが、断面の一部に使用痕らしき細かい破砕部がみられ、それが使用痕であるとすれば掻器的な機能を推定すべきであろうか。

旧期Bg62竪穴住居跡（第15－1図）

既述のとおり東壁と南壁を新期Bg62住居跡と共有する形で重複して検出されたもの。新住居

跡の床面清掃後にその輪郭が現われた。

平面形は大体長方形をなし、その規模東西4.6m(推定)×南北5.1m、床面積23.46m²(推定)程となろう。西壁がやや乱れている。住居中軸線の方向（北壁と南壁のそれぞれの中点を結ぶ線)は磁北より約13°西に振れている。新・旧の振れの差は約1°であり、殆ど同じと見做してよい。

遺構内に堆積した旧住居跡本来の覆土は残存しておらず、新住居跡に帰属せしめるべき既述の第2層がみられるだけである。

床面には殆ど傾斜も無く、ほぼ平坦である。壁高は、新住居跡の検出面までを測ると約50cmとなる。床面上には大小22のピット、掘り込み、溝類がある。

それらのうち、少なくとも主柱穴と見做してよいものは、ほぼ対角線上にのる形で配置され円形ないし長方形をなす4個であろう。平均深さ40cmである。東半の2個には掘り方と柱あたり様の部分を区別でき柱あたり径は約15cm程である。

カマドは痕跡程度にしか残っていないが、北壁に取りつけられたらしい。新住居跡例と同様に中心からやや東にずれた位置である。その他の構造等は一切不明だが、表面が焼けた楕円形の凹みがある点（カマド燃床部底か）；凹みの中央に円礫がある点(「門の字」の焚口部礫の抜き取り痕か)・凹みの西北端部にやや火力をうけた黄色粘土質シルトがある点（袖部か）等々から、他の多くの例に類似する構造であったと推定できる。推定される焚口間口70cm・カマド本体奥行90cmである。煙道部・煙出し部についても不明であるが、少なくとも土中に溝状に構築されるような形式の煙道部は認められない。

床面上のその他の施設としては、カマド左隣に不整な長方形の掘り込みがあり、位置的にみて貯蔵穴と見做しうる可能性がある。西南隅にも類似のものがある。周溝は痕跡的にではあるが、東壁以外の各壁直下に残存している。西壁の長楕円形の小ピット列は、周溝の痕跡と見做すべきであろう。

年代決定の資料となる遺物は全く出土せず、既述の第2層の存在とも考えあわせると、新住居を構築する際に除去された可能性が強い。したがって年代は遺構の特徴等から推定する他は無いが、いずれにしても新・旧間には、時間的にあまり大きな隔りは無いものと思われる。

Bh09竪穴住居跡（第16図・第11表）

遺跡敷地中央やや西寄りに、既述のBf09の南に接して検出した。他の遺構との重複関係も遺構内での増改築の事実もともに認められず単一の遺構である。焼失により廃絶された家屋と考えられ、その結果として逆に各種の遺存状況が非常に良好なものとなっている。

遺構の平面形は、四隅にやや丸味をもつ正方形をなし、その規模は東西4.3m×南北4.3m、床面積18.49m²となる。住居中軸線の方向(南北壁のそれぞれ中点を結ぶ線)は、磁北から約14°15′

西に振れている。

遺構内に堆積した土層は大別して二層になる。

第1層　黒褐色シルト質土層。やや硬質で、粘性もそれほど強いとはいえない。黄橙色シルト質土塊・有機質土塊・炭化物塊等を混入し、覆土の大半をなす。

第2層　暗褐色有機質土層。軟質で粘性も強い。黄橙色シルト質土塊が斑状に混じる。後述のような床面上に一度つくられた掘り込み部分の凹みの覆土である。

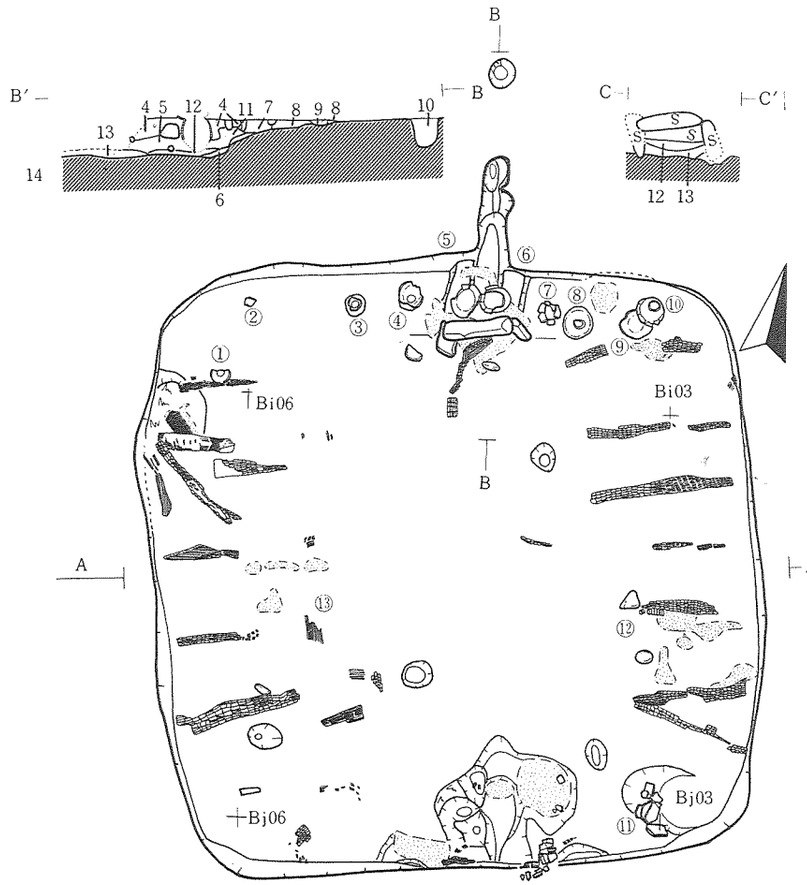
若干の焼土の分布が見られる生活時の床面と思われる面の状況はほぼ平坦であり、その上に炭化材・遺物等がのる。住居の構築法上他例には見られない特徴をもつ。それは住居の床面をつくる過程で、住居床面の中央が島状に高く残るように各壁に沿って巾80～100cm・深さ10～15cm程の掘り込みをつくる点である。この掘り込みを一旦つくっておいて、直ちにそれを前記の第2層でもって埋め戻して中央部の床面のレベルと同一にしている。したがって実際に生活を営んだであろう床面は平坦になることは既に述べた。この作業の目的は不明といわざるを得ないが、しかし、後述する4本の主柱穴と思われるもののすべてやカマドが、この掘り込みの中におさまることからすると、この掘り込みは主柱穴やカマド等の施設を築くさいの一種の「掘り方」的な意味を、さらに周溝類似の用途をもっているのではないかとも推定できる。壁高はこの掘り込み底からは35～40cm、生活時の床面からは25～30cmとなる。床面上には大小13個のピット掘り込み類がある。

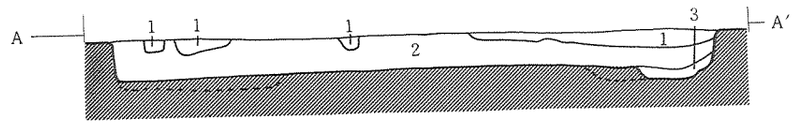
それらのうちで少なくとも主柱穴と見做し得るものは、ほぼ対角線上にのるように配置され前記掘り込み内に収まる円形の4個であろう。平均径27cm・平均深さ24cmである。尚主柱穴中には遺存した柱脚等は認められず、黒褐色の有機質土のみが存在した。

カマドは北壁に取りつけられているが、中心からやや東方へずれている。カマド本体の構築法・焚口部の「門の字」状の礫の使用（本例では完全な形で遺存している）等、他の例に共通する特徴をもつ。焚口部の間口70cm・高さ35cm、本体奥行60cmの規模である。本例には煙道部も煙出し部も備わっている。燃焼部底が北壁と連結する部分はやや高くなり、それを底面とする煙道部が北方へ80cm程延び、徐々に浅くなる感じで自然に終結する。そこからさらに北へ45cmの所に径20cm・深さ20cmの円形ピットがある。覆土に炭化物粒が認められた点や、煙道部との位置関係からしても煙出し部としてもよいのではないかと思われる。本例ではカマドのみならずその周辺の遺物の保存状態が非常に良好であったのが特に目立つ。

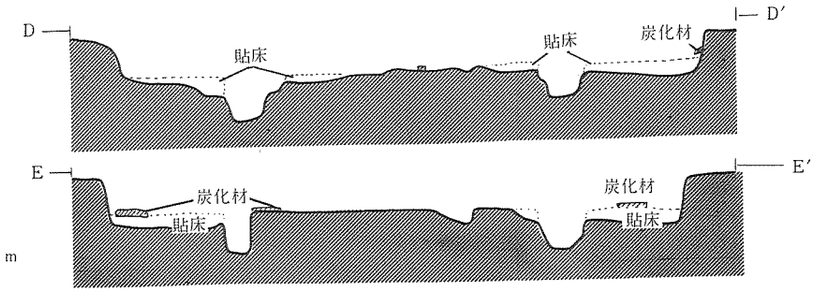
床面上には貯蔵穴その他の施設は認められない。ここで生活時の床面上に多く認められ、本例が焼失家屋ではないかと推定せしめた炭化材について記す。これらは結果的に既述の一旦掘り込んでおいて埋め戻した、ある意味では貼り床的なものの表面に位置している。それらの配置は、東西壁の側に、それぞれが東西方向に併行するものである。東側に7箇所・西側にも7

4．暗褐色有機質土。やや硬質でもろい。黄橙色シルト質が小斑状に混入
5．黒褐色有機質土。4に似るがより軟質
6．黒色土。軟質で粘性強し
7．黒褐色有機質土。軟質で粘性強し、炭化物粒・焼土粒混入
8．黒褐色有機質土。1に似る
9．灰褐色シルト質土。硬くもろい、酸化鉄含有
10．黒色有機質土。やや硬く、粘性あり、炭化物粒混入
11．黒色シルト質土。軟質で粘性強し。炭化物粒霜降り状に混入
12．焼土
13．11に似るも焼土粒子量減少

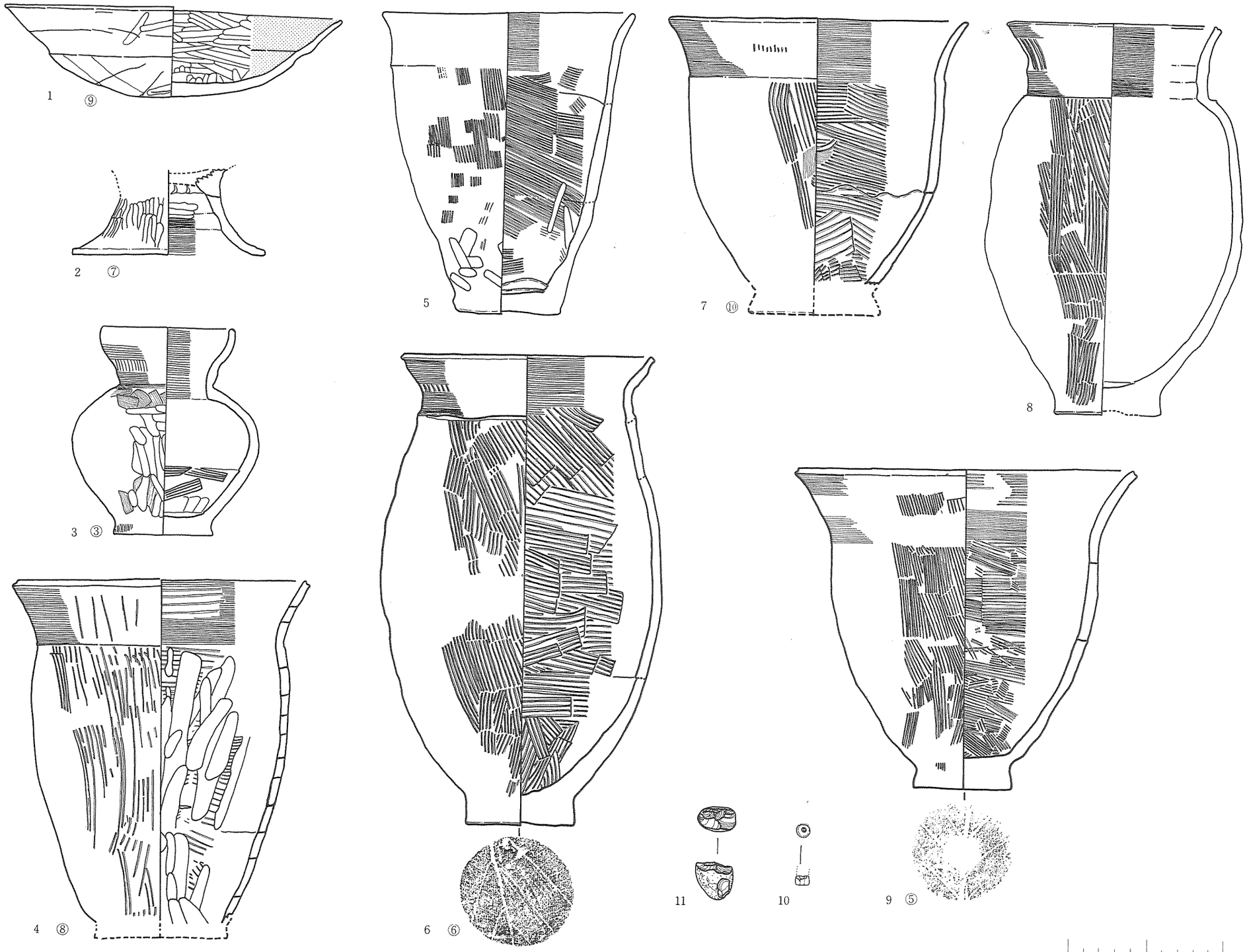




1．黒褐色シルト質土　硬質、全体に白色微粒子が混入し、少々砂っぽい、黄橙色シルト質土塊有機質土塊、炭化物粒子等混入
2．黒褐色シルト質土　1より軟質、白色微粒子少ない。粘性やや増す
3．暗褐色有機質土　軟質、粘性強い、黄橙色シルト質土塊が小斑状に入る。貼床



第16－1図　Bh09竪穴住居跡実測図



第16－2図　Bh09竪穴住居跡出土遺物実測図

箇所あったと考えられる（東南隅付近のものは調査時の不手際から削平してしまった）。中央部には遺存が見られない点が特異に感ぜられる。これらはいずれも端部が床面に直立ないし埋め込まれているものは存在せず床面上に横たわるもののみである。したがって少なくとも柱ないし壁材関連のものではないといってよいと思われる。となれば残る可能性は屋根材となるであろう。屋根材とくに「垂木」様のものと見做し得ると思われる。さらにこれらの配置が、放射状をなすいわば求心的なものではなく、南北壁に併行するものである点をとれば、その上屋は所謂「切妻」的なものになるかとも推定される。ただし、東南隅・カマド焚口部前等に、あるいは放射状になるかとも思われる材があるのが気になるが。なお入念に調査したが、壁部には板材の配置などは認められなかった。

年代推定の資料としては、カマド中やカマド周辺の北壁直下、一列にならんで豊富に発見された各種の土師類がある。

（遺　　物）

I　土 師 器（第16－２図・１～９）　　**第11表**

分類	平面図上の土器番号	実測図番号	調整								器高	口径	底径	備考
			口縁部		体部上半		体部下半		底部					
			内面	外面	内面	外面	内面	外面	内面	外面				
甕		5	横ナデ	横ナデ	刷毛目	刷毛目	刷毛目	ヘラケズリor ヘラナデ	ナデツケor カキトリ	ヘラケズリ	19.5	16.4	6.8	
	⑥	6	横ナデ	刷毛目のち横ナデ	刷毛目	刷毛目	刷毛目	刷毛目、ヘラケズリ or ヘラナデ	刷毛目	木葉痕	30.3	16.5	7.0	
	⑧	4	横ナデ	刷毛目のち横ナデ	刷毛目のちヘラミガキないしヘラナデ	刷毛目	刷毛目のちヘラミガキ or ナデ	刷毛目	欠失	欠失	22.1	(?) 18～19	8.3	
	⑩	7	横ナデ	刷毛目のち横ナデ	刷毛目	刷毛目	刷毛目	刷毛目	欠失	欠失	17.1	19～20	9.5(?)	
	⑤	9	刷毛目のちヨコナデ	刷毛目のち横ナデ	刷毛目	刷毛目	刷毛目	刷毛目のちヘラナデ or ミガキ	刷毛目	木葉痕	20.6	21.4	6.3	
		8	横ナデ	刷毛目のち横ナデ	刷毛目	刷毛目	刷毛目	刷毛目	刷毛目	木葉痕	25.2	13.9	6.9	
			刷毛目	刷毛目のち横ナデ	刷毛目	刷毛目								
					刷毛目	刷毛目				木葉痕				
壺	③	3	横ナデ	刷毛目のち横ナデ	刷毛目のちヘラナデ(?)	ヘラミガキ	刷毛目	刷毛目のちヘラミガキ	刷毛目ナデツケ	ヘラミガキナデツケ	13.3	8.3	6.4	
坏	⑨	1	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	5.8	21.7		内黒
			ヘラミガキ	ヘラミガキ横ナデ(?)					ヘラミガキ	ヘラケズリヘラミガキ				
			ヘラミガキ	ヘラミガキ					ヘラミガキ	ヘラミガキ				
					ヘラミガキ	ヘラミガキ								
					ヘラミガキ	ヘラミガキ								
				横ナデ										
高坏	⑦	2	欠失	欠失	欠失	欠失	欠失	欠失	ヘラミガキ（刷毛目？）	ヘラミガキ	4.6		12.5	脚径 7.4
甑			横ナデ	横ナデ	刷毛目のちヘラナデないしミガキ	刷毛目	刷毛目のちヘラナデないしミガキ	刷毛目のちヘラケズリ			13.1	15.5	7.4	

II　装飾品（同10）；破片ではあるが球形はなさず管状をなすものと推定できる。土製。遺存の状況が不良なので詳細は不明であるが、焼かれており、彩色などは認められない。床面出土。

III　石　　器

黒耀石片（同11）；他の例と同様に覆土からの出土であるが、参考までに掲げる。黒耀石原石の円礫を半割し、その断面を刃部同様に剝離している。そこに使用痕らしい細かい破砕部があり、もしも使用したとすれば掻器ないし彫器的な機能を推定してよいのであろうか。

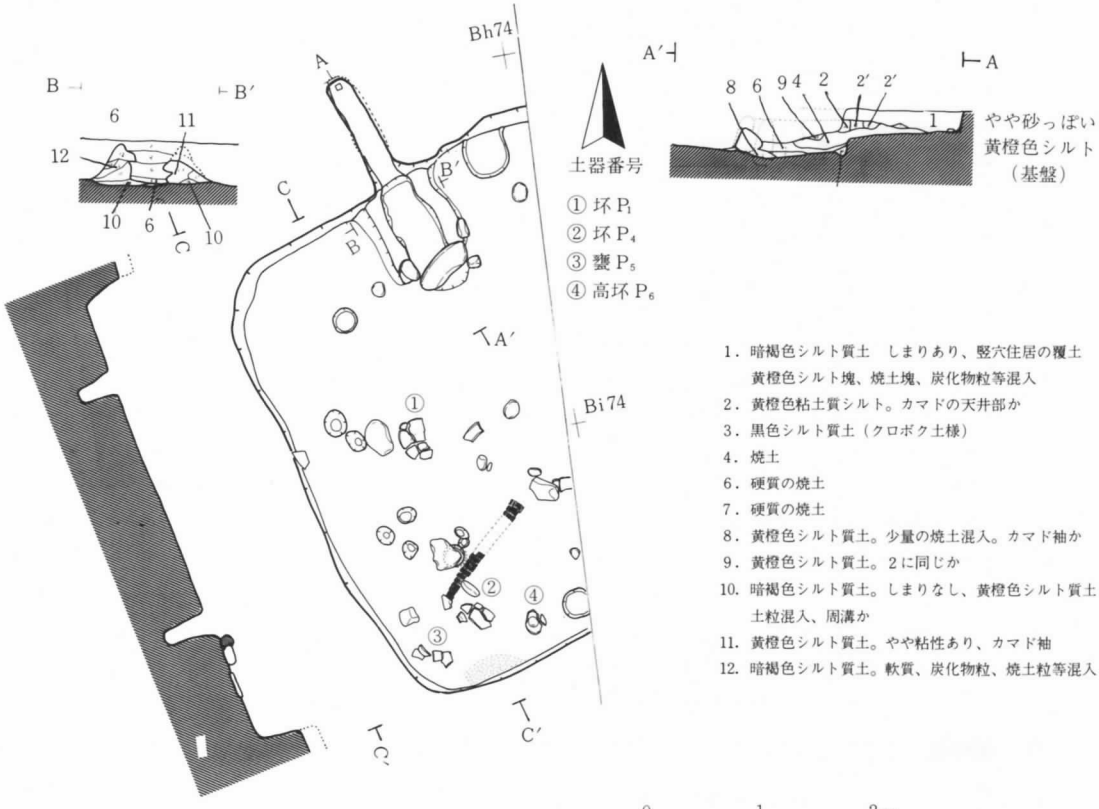
Bh71竪穴住居跡（第17図・第12表）

遺跡敷地東縁中央やや南寄りで既述のBg62の東隣りに検出。その東半は道路敷地外にわたったため、その部分は未調査である。

他の遺構との重複関係と増改築の事実は、少なくとも調査分の範囲内には認められない。

遺構の平面形は未調査分があるために未詳としかいいようがないが、後述のカマドが北壁のほぼ中央に位置すると仮定すると、大略長方形となり、その規模東西3.5m(推定)×南北3.9m、床面積13.65m²(推定)程にもなるのであろうか。住居中軸線の方向(これもしいて推定して、カマド中心部と推定される南壁の中点を結ぶ線、ちなみにそれは煙道の東西二等分線の延長にほぼ一致する)は、磁北から約29°西に振れる。

遺構内に堆積した土層はほぼ一層である。実測図にはよく表われていないが、暗褐色シルト



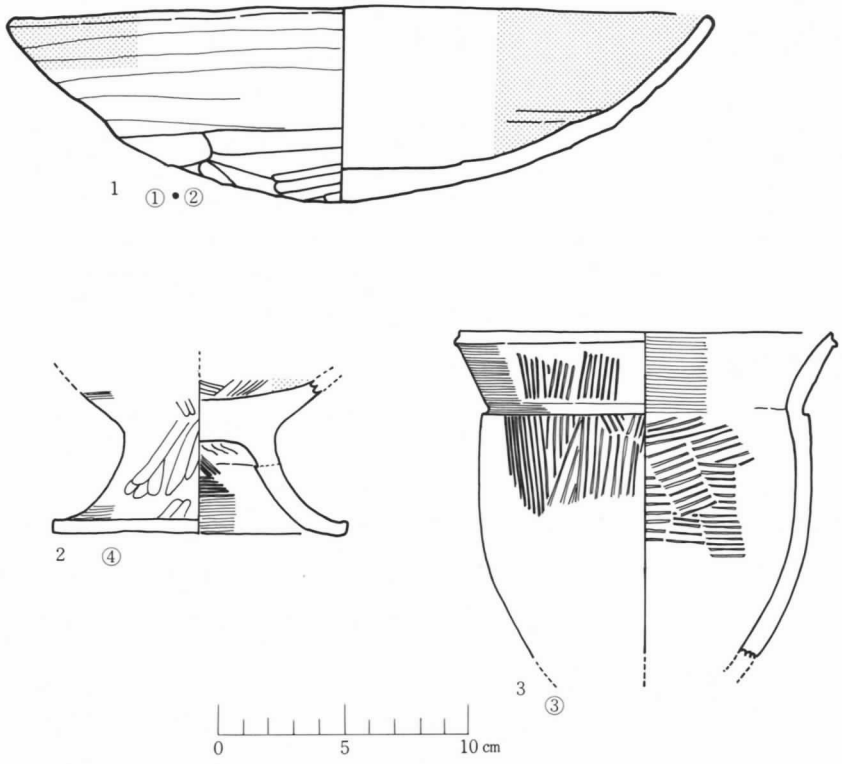
第17 —1図　Bh71竪穴住居跡実測図

質土層。しまりがあって粘性はあまり無く乾燥すると大きくクラックが入る。黄橙色シルト質土塊・焼土粒子・炭化物粒子等が混入する。

床面には傾斜や激しい凹凸はみられずほぼ平坦である。壁の遺存状況もよく、ほぼ垂直に立ち上がり、壁高は約50cm程である。ただし掲げた実測図では30cm程になっているが、これは遺構検出に苦労した結果、かなり掘り下げ過ぎたために生じたものである。床面上には9個のピット・掘り込み類と、数個の礫、焼土の集積部等がみられる。

それらのうち、少なくとも主柱穴と見做しうるものは、ほぼ対角線上にのる位置にあり、円形をなす4個であろう。平均径20cm・平均深さ30～35cmである。掘り方と柱あたりの区別はつけられなかった。尚西南隅の1個の縁に礫が位置していたが、これはあるいは柱関連の機能をもつものかもしれない。

カマドは北壁につくられている。末調査部分があるために不明であるが、他の例からしてほぼ北壁の中央に近い部分に取りつけられたのであろう。カマド本体の構築法・燃焼部底の形状・焚口部の構築法などに他例に共通する特色がある。焚口部の「門の字」状の礫の遺存状態は非常に良好である。本例には煙道部と煙出し部もみられる。燃焼部底が北壁と接続する部分が



第17－2図　Bh71竪穴住居跡出土遺物実測図

一段高くなり、それが煙道部底となり・そのままほぼ水平に北へ90cm延び、そこで垂直に立ち上がり終結する。未端部近くの底面上に土師器片が1個みられ、ここが煙出し部とされた可能性が強い。なお燃焼部底と北壁が接続する部分の北壁直下に細い溝状のものがあり、それはおそらく周溝の一部と考えられる。とするならば、本例においては住居の壁とその直下の周溝をほぼつくりあげてからカマドを構築したということになる。

床面上にみられるその他の施設としては、まず東北隅に円形の掘り込みがある。これはカマドとの位置関係からして貯蔵穴にうってつけのものであるが、5cmと非常に浅く、その点に多少躊躇させるものがある。次に礫の分布についてはそれ自体の配置に何らかの意図も読みとれず、またその周辺にも何らの異常も看取できないので、性格不明といわざるを得ない。ただし、それらの中にあるいは柱関連のものがあるかもしれないことについては既に述べたとおりである。最後に西南隅の壁直下に焼土の集積と、その近くに1本分の炭化材が見られるが、これらについても積極的な意味は読みとれなかった。少なくとも焼失家屋ではないのであろう。

年代推定の資料としては、床面出土の数点の土師器がある。

(遺　　物)

Ⅰ　土師器（第17－2図・1・2）　**第12表**

分類	平面図上の土器番号	実測図番号	調整								器高	口径	底径	備考
			口縁部		体部上半		体部下半		底部					
			内面	外面	内面	外面	内面	外面	内面	外面				
甕			刷毛目	刷毛目のち横ナデ							32.8	17.5	7.0	
	③	3	刷毛目のち横ナデ(?)	刷毛目のち横ナデ	刷毛目	刷毛目	欠失	欠失	欠失	欠失	16.6	10.3	6.4	
坏	①②	1	ヘラミガキ	ヘラミガキ?	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラケズリ ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラケズリのち ヘラミガキ	6.8～7	10.3		
高坏	④	2	欠失	欠失	欠失	欠失	ヘラミガキ	ヘラミガキ	横ナデ(?)、刷毛目 ヘラミガキ、ナデツケ	ヘラミガキ 横ナデ	4.7	14.0		

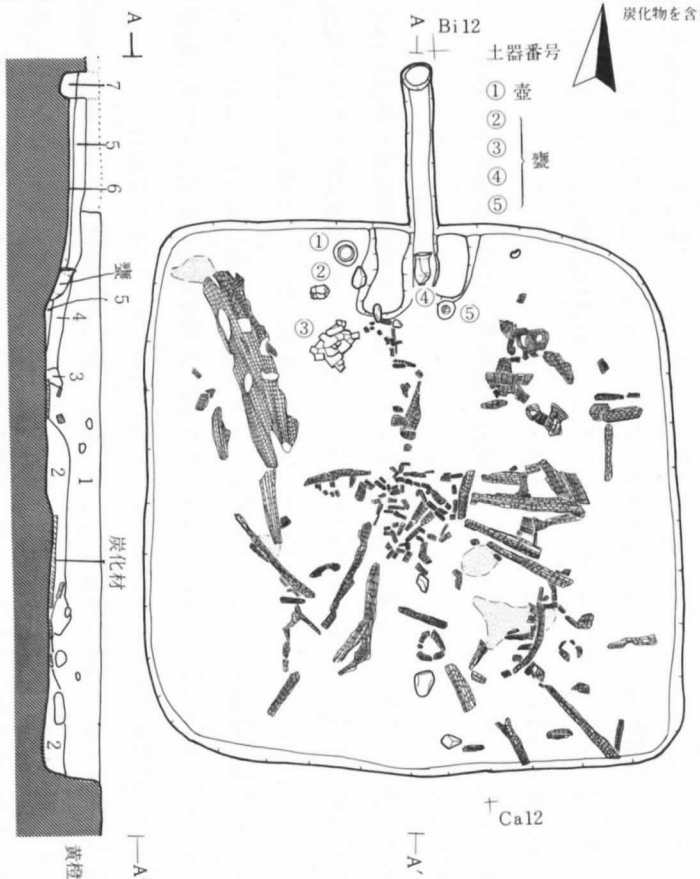
Bi15竪穴住居跡（第18図・第13表）

遺跡敷地中央部やや西寄りの地点で、既述の燃失家屋Bh09の左隣に検出した。後述のように本例も焼失家屋である。

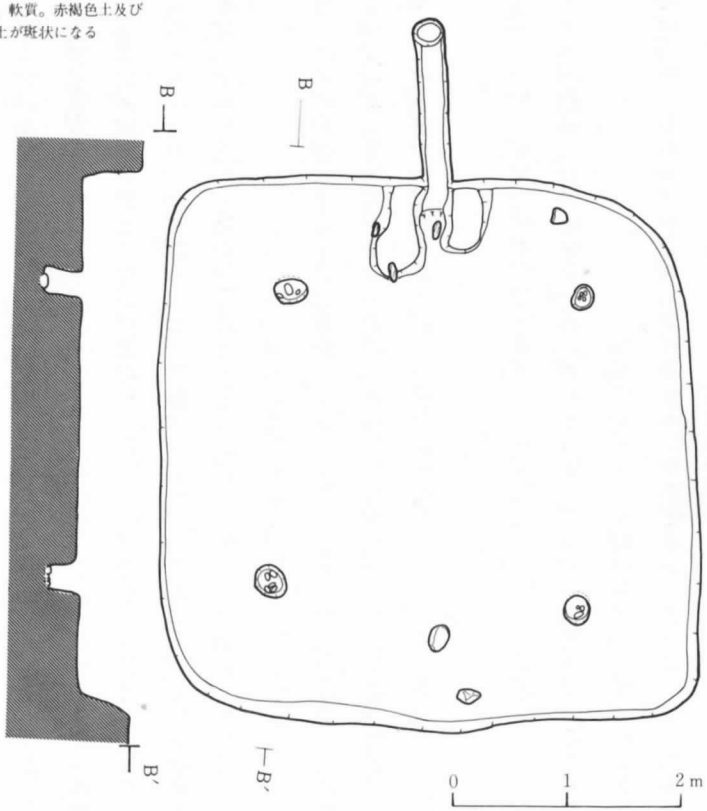
他の遺構との重複関係も、遺構内での増改築の事実もともに認められず、単一の遺構である。床面上に大量の炭化材が遺存しているので、本住居は火災により廃絶を、その後も同一場所での復興・新築はなかったと見做しうる。そのために遺構・遺物の保存状態が一面ではかえって良好なものになっているといえる。

遺構の平面形は、四隅にやや丸味を帯びた長方形をなし、その規模は、東西4.2m×南北4.5m、床面積18.90m²程になる。住居の中軸線(北壁の中央にあるカマドの中心と南壁の中点を結ぶ線)は磁北から約6°5′西に振れている。

1．黒褐色シルト質土。硬く、しまりあり。黄橙色シルト質土塊が小斑状に混入
2．茶褐色シルト質土。1より軟質 黄橙色シルト質土塊の混入は1よりも密 炭化材等あり
3．暗褐色シルト質土。軟質、焼土塊、炭化物混入
4．茶褐色シルト質土。軟質、炭化物・灰 多量に混入。
5．暗褐色シルト質土。硬質、焼土
5′．黒褐色シルト質土。5に似るが黄橙色シルト質土が斑状に入る
6．茶褐色シルト質土。4より粘性強い。炭化物を含む黒色土、焼土塊が混入
7．黒褐色シルト質土。軟質。赤褐色土及び炭化物を含む黒色土が斑状になる



第18－1図　Bi15竪穴住居跡実測図



Bi15竪穴住居跡、炭化材遺物除去後の平面図

遺構内に堆積した土層は大別して二層からなる。

第1層　黒褐色シルト質土層。やや硬質でしまりがあり、乾燥するとクラックが入る。黄橙色シルト質土塊が小斑状に混入する覆土の大半を占める。

第2層　茶褐色乃至暗赤褐色シルト質土層。第1層に比しやや軟質で、黄橙色シルト質土塊の混入も密になる。炭化物・土器片等が混入する。床面・炭化材等に密着してその上層に堆積している。

床面の状況は傾斜も殆どみられず、ほぼ平坦である。炭化材・遺物等は床面上に密着して遺存している。床面は全体的にはあまり焼けておらず、部分的な焼土の集積が見られる程度である。壁の残存状況も良好で、ほぼ垂直に立ち上がり、壁高は40～45cm程度であろう。床面上には4個のピットと3個の礫の分布が見られるのみである。

4個のピットはほぼ円形をなし、その平均径20cm・平均の深さ25～30cmであり、対角線上に正確にのる位置関係にある。したがってこれら4個は主柱穴と見做してよいものと思われる。尚掘り方と柱あたりの区別はつけられなかった。また柱穴中には柱脚の残欠等は検出されず、黒褐色の有機質土のみが認められた。既述のBh09とともにこの点に多少の疑問が残る。それは柱脚が遺存しないことの解釈である。即ち自然に腐敗してしまったので遺存していないのか、あるいは火災後に人為的に抜き取られたために遺存しないのか、という問題である。調査時の観察によると主柱穴の周囲には特別な異常は認められなかったし、とくにBh09における整然とした炭化材の遺存配置などからすると前者の解釈がより妥当なものだとは思えるのであるが。最後にすべての柱穴底面に数個の礫がみられたが、これはBi24例におけると同様に、柱脚を支える一種の礎盤的な役割をになうものとも考えられる。

カマドは北壁の中央に構築される。その構造は他の多くの例に共通する点が多い。焚口部の礫は左袖部のものしか残存していないがやはりこれも「門の字」状をなしていたのであろう。焚口間口60cm・高さ30cm、本体部奥行90cm程にもなろう。本例は煙道部・煙出し部も備えている。今泉遺跡としては、比較的長めのそれらを有する。カマド燃焼部底が北壁と接続する部分が傾斜をもって一段高くなり、そのレベルが煙道部底面となる。そのままほぼ水平に北へ110cm程延び、末端部に径20cm・深さ30cmの円形ピットを穿ち、煙出し部としたもののようである。後述のCb24に共通する構造である。カマド燃焼部には土師器甕が横倒しの状態で位置し、同じく燃焼部底には礫がうめ込まれ、支脚として用いられたもののようである。

床面上にはその他の遺構は検出できなかったが、大量の炭化材と若干の焼土集積部分が遺存していた。炭化材の量の多大と焼土の存在から、本例を焼失家屋の可能性があると判断し、既にそのような説明を加えてきた。これらの炭化材はすべて床面上に単にのるだけの状態にあり、床面上・壁直下に直立していたことをうかがわせる証左は、何も存在しなかった。また壁に沿

って垂直に立った状態にあったことをうかがわせる資料も存在しなかった。したがってこれらは柱材や壁関連の材ではなく屋根関連の材と見做すべきと思われる。その遺存配置をみると、既述のBh09例に比し非常に乱雑で、火災後の人為的な攪乱をすら推定せしめるものがある。もしもそれが無かったと仮定した場合には、これらの配置の特徴は、住居の中心から放射状になっているとすることができよう。とすると、その屋根の構造はBh09において推定した「切妻」的なものとは大きく異なることになろう。調査結果から得た資料では以上の二様の解釈が可能になることだけを掲げておく。

遺構の年代推定の手掛りとなしうるものは、カマド中・カマド周辺出土の土師器類がある。

（遺　　物）

Ⅰ　土 師 器（第18－２・３図・１～７）第13表

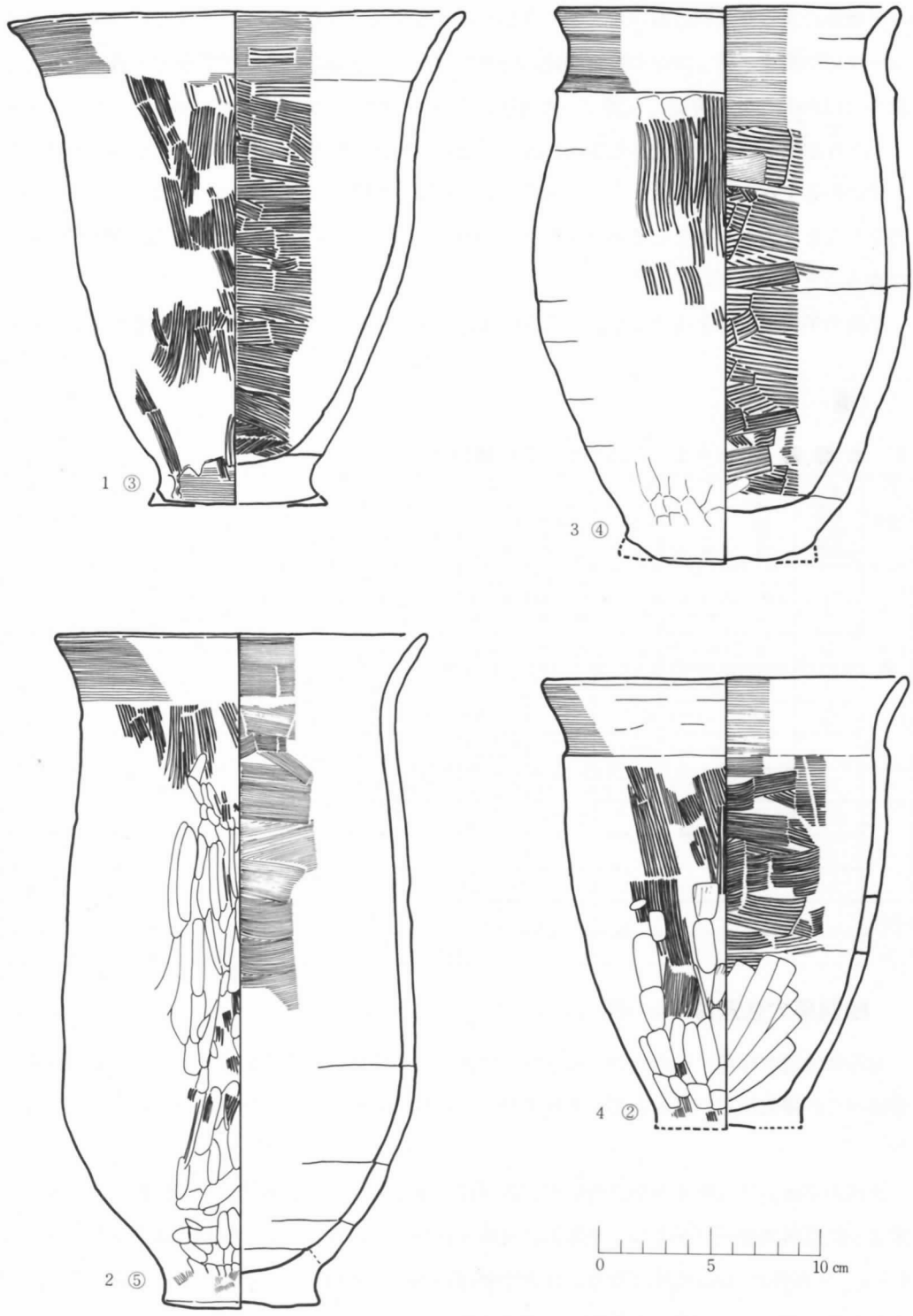
分類	平面図上の土器番号	実測図番号	調整								器高	口径	底径	備考
			口縁部		体部上半		体部下半		底部					
			内面	外面	内面	外面	内面	外面	内面	外面				
甕					刷毛目(?)	ヘラケズリ								
	②	4	横ナデ	横ナデ	刷毛目	刷毛目	刷毛目のちナデツケ	ヘラケズリor ヘラミガキ		刷毛目	20.3	16.2	6.6	
	③	1	横ナデ	横ナデ	刷毛目	刷毛目	刷毛目	刷毛目	刷毛目	ミガキ	22.2	20.6	7.6	
	④	3	横ナデ	横ナデ	刷毛目	刷毛目 (のちヘラナデ?)	刷毛目	刷毛目 (のちヘラナデ?)	ナデツケ	ミガキ or ナデ	25.1	15.6	8.6	
	⑤	2	ヘラナデ	横ナデ	ヘラナデ	ヘラミガキ	ヘラナデ	刷毛目のちヘラケズリor ヘラミガキ	ヘラナデとナデツケ	ミガキ	30.5	17.5	7.2	
		6	横ナデ	横ナデ(?)	刷毛目のちヘラミガキ	刷毛目ヘラケズリ					13	15~16	7(?)	
壺	①	5	横ナデ	刷毛目のち横ナデ	刷毛目のちヘラミガキ	刷毛目	刷毛目のちヘラミガキ	ヘラミガキ	欠失	欠失		14.0		
坏					水挽痕									須恵器
			ミガキ	横ナデ					ミガキ	ヘラミガキ(?)				
		7				ヘラケズリ刷毛目					6.2	8	6.4	小型鉢又は碗
高坏						ナデかミガキ(?)		ミガキ						
甑							刷毛目	ヘラケズリ						

Bi24竪穴住居跡（第19図・第14表）

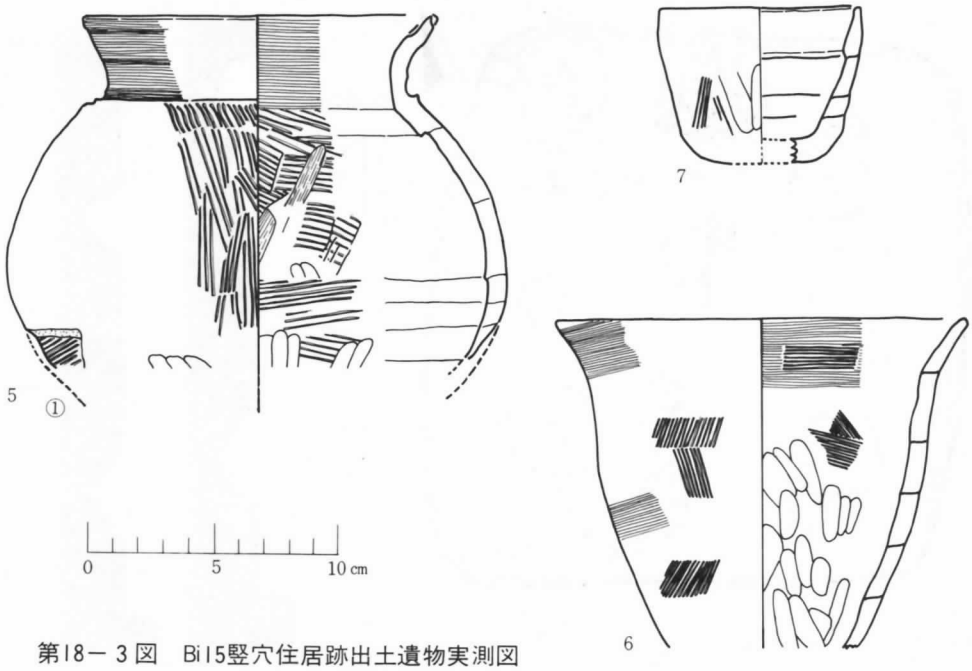
遺跡敷地西北縁部に検出した。段丘崖にほど近い平坦面である。他の遺構との重複関係も、遺構内での増改築もいずれも認められず単一の遺構である。遺構の保存状態は非常に良好である。

遺構の平面形は大略正方形に近いが、四隅に丸味をもち、また各壁の中央部が外方に張り出すように弧状のカーブをもつ。全体的に丸味が印象づけられる。その規模は東西4.3ｍ×南北4.3ｍ、床面積18.49㎡程度となる。住居中軸線の方向（北壁中央のカマドの中心部と南壁の中点とを結ぶ線）は、磁北から約20°西に振れている。

遺構内に堆積した土層は非常に単純であり大別して二層となる。



第18－2図　Bi15竪穴住居跡出土遺物実測図



第18－3図　Bi15竪穴住居跡出土遺物実測図

第1層　暗褐色シルト質土層・黒色味が強い。大型の黄橙色シルト質土塊が混入。覆土の大半を占める。

第2層　黄橙色シルト質土と褐色シルト質土の混土。床面に接して、部分的にみられるのみ。生活の何らかの痕跡であろうが、貼床ではない。

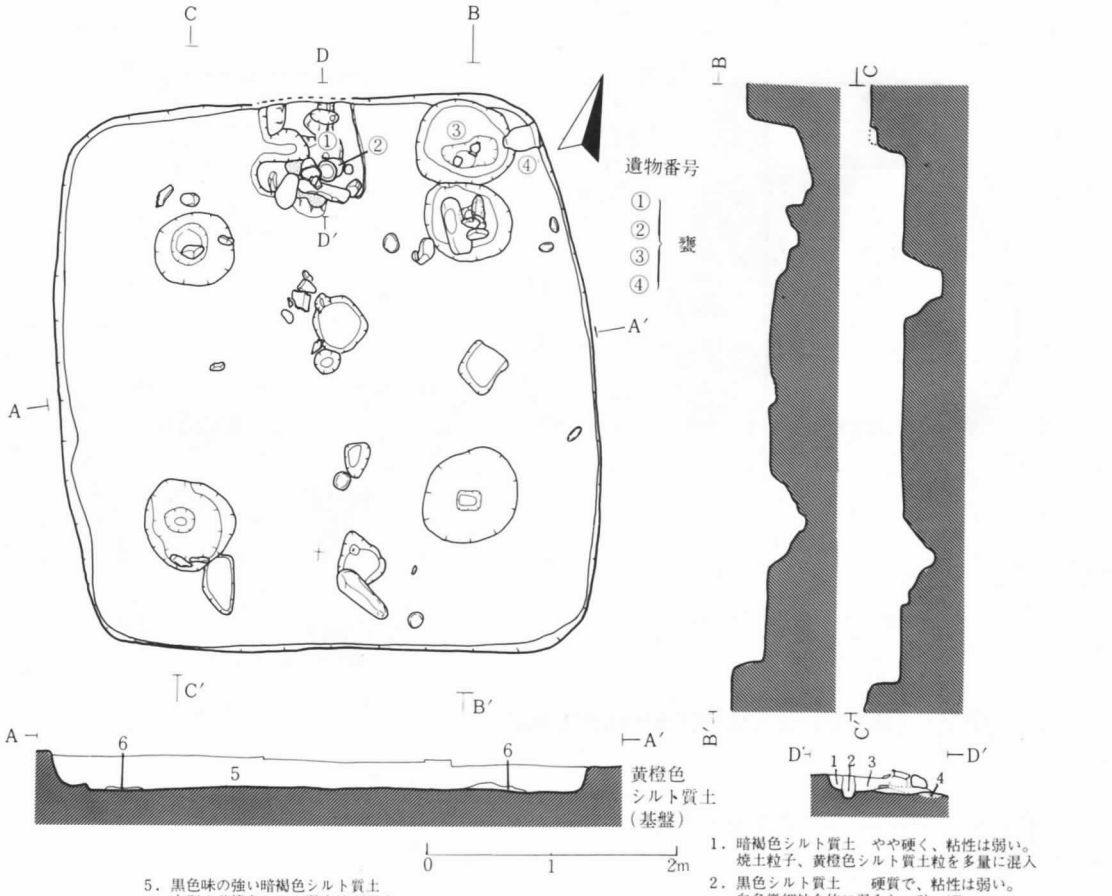
床面には傾斜もみられず、全体的にほぼ平坦である。壁の遺存状態も良好で、ほぼ垂直に立ち上がり、壁高は30cm前後である。床面上には大小10個のピット掘り込み類がある。

それらの中で、少なくとも主柱穴と見做しうるのは、正確に対角線上に位置する大形の4個であろう。これらは今泉遺跡中で最良の資料といえ、掘り方と柱あたり、さらにおそらくは柱穴に伴うと見做しうる礫の三者が、明白なセットをなしていることを看取できる。

掘り方はほぼ円形をなし、その径約60cm～70cm、柱あたりと思われるものは楕円形ないし長方形をなし、長径20cm・短径15cm・深さ30cm程度を測る。

東北隅の掘り方覆土に礫がみられるが、これらはおそらく柱を周囲から圧して固定するためのものと考えられる。また西北隅のものの柱あたり部の床面にも礫が見られるが、これには柱端部を支える礎板的な役割を想定しうると思われる。

主柱穴は以上であろうが、他に床面中央部にほぼ南北に一列にならぶピット列がみられる。これらはすべてが深いわけではないが、その配置からみて住居の構造に関連する何らかの意味をもつものかもしれない。



第19－1図　Bi24竪穴住居跡実測図

カマドは北壁に正確に中央に構築される。左袖部が破損するなど多少遺存状況が悪い部分もあるが、構造その他は他例に殆んど同一である。焚口部間口70cm・高さ27cm、本体部奥行80cm程度である。本例には土中にそれと認められるような煙道部・煙出し部は検出できなかった。

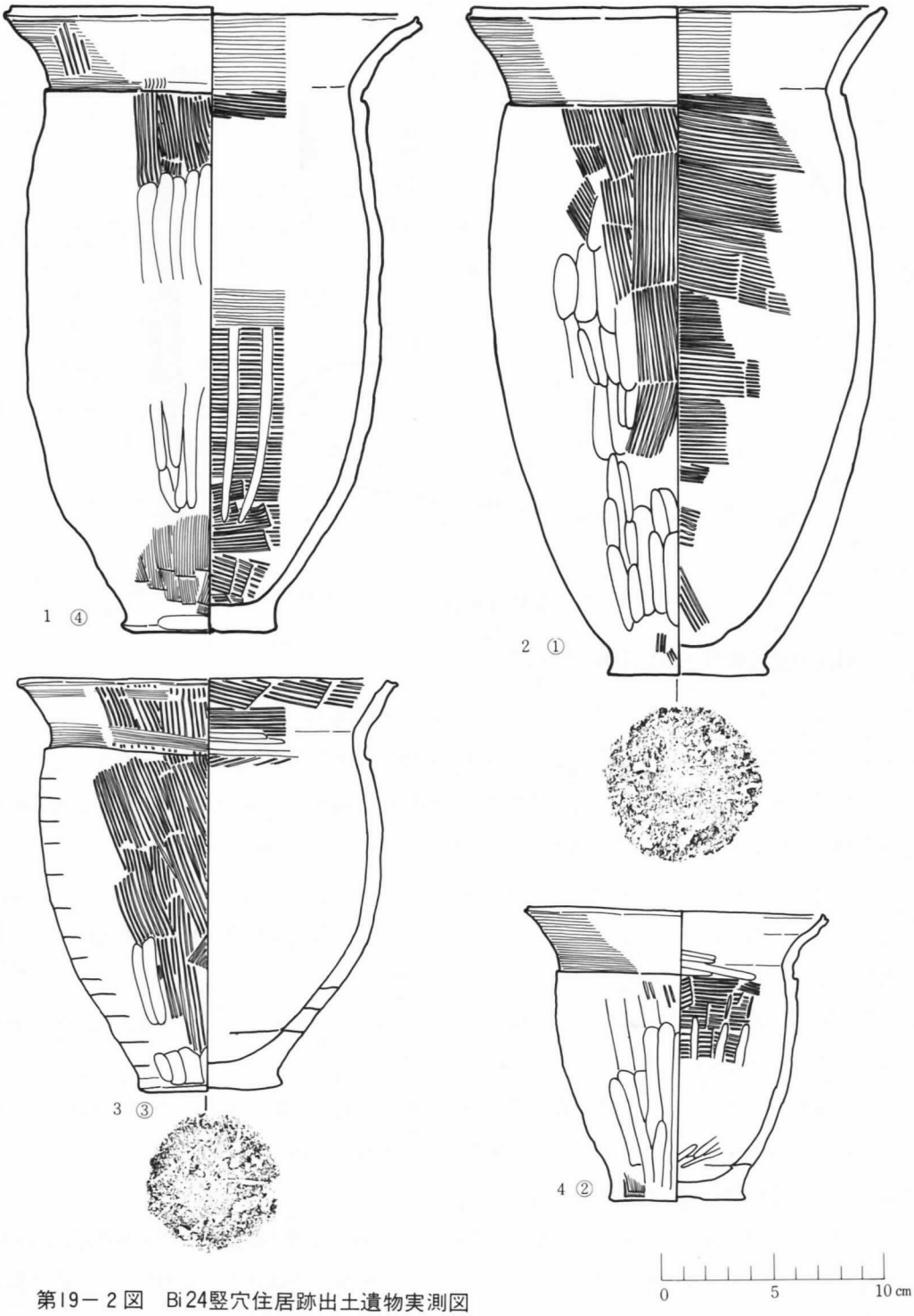
床面上のその他の施設としては、カマド右隣の西北隅に径75cm・深さ30cmの掘り込みが穿たれ、その上縁と内部に大小の土師器の甕が位置していた。これは貯蔵穴と見做してよいものであろう、これ以外の施設は認められない。

年代推定の資料としては、カマド中と貯蔵穴中から出土した土師器類があげられる。

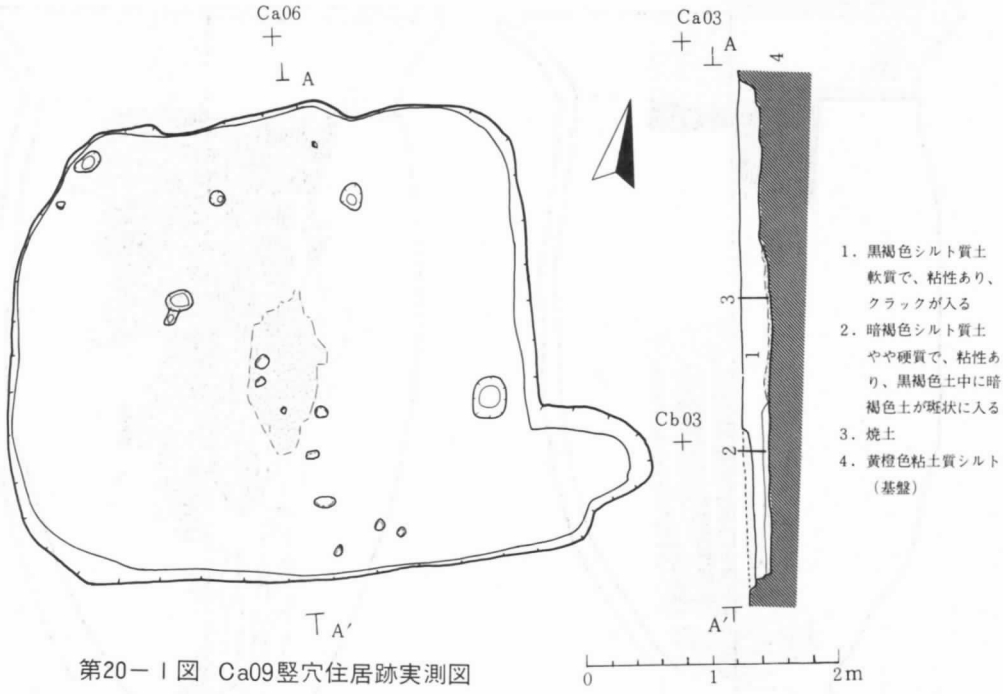
（遺　物）

Ⅰ　土師器（第19－2図・1～4）　第14表

分類	土器の番号	平面図上	実測図番号	調 口縁部 内面	調 口縁部 外面	調 体部上半 内面	調 体部上半 外面	整 体部下半 内面	整 体部下半 外面	整 底部 内面	整 底部 外面	器高	口径	底径	備考
甕	①		2	横ナデ	横ナデ	刷毛目	刷毛目	刷毛目	刷毛目のち ヘラミガキ	刷毛目	木葉痕				
	②		4	ヘラミガキ	刷毛目のち 横ナデ	刷毛目のち ヘラミガキ	ヘラミガキ	刷毛目のち ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	木葉痕				
	④		1	横ナデ	刷毛目のち 横ナデ	刷毛目のち ヘラミガキ	刷毛目のち ヘラミガキ	刷毛目のち ヘラミガキ	刷毛目のち ヘラミガキ	刷毛目	木葉痕				
	③		3	刷毛目	刷毛目、横ナデ ヘラミガキ	刷毛目のち 横ナデ	刷毛目	刷毛目のち ヘラナデ	刷毛目のち ヘラミガキ	ヘラナデ	木葉痕(?)				



第19－2図　Bi24竪穴住居跡出土遺物実測図



第20－Ⅰ図　Ca09竪穴住居跡実測図

Ca09竪穴住居跡様遺構（第20図）

遺跡敷地中央部南端近くで、前述のBh09の南方に検出した。

東南隅で後世の掘り込みと重複しているが遺構内での増改築の事実は認められない。

前記の後世の掘り込みの張り出し部を除いた遺構の平面形は、大略長方形に近く、その規模は東西4.1m(推定)×南北3.7m(推定)、床面積15.17m²(推定)程となろう。

遺構内に堆積した土層は大別して二層からなる。

第１層　黒褐色シルト質土層。この種のものとしては珍らしく軟質で粘性もある。やはり乾燥すると大きくクラックが入る。覆土の大半を占める。

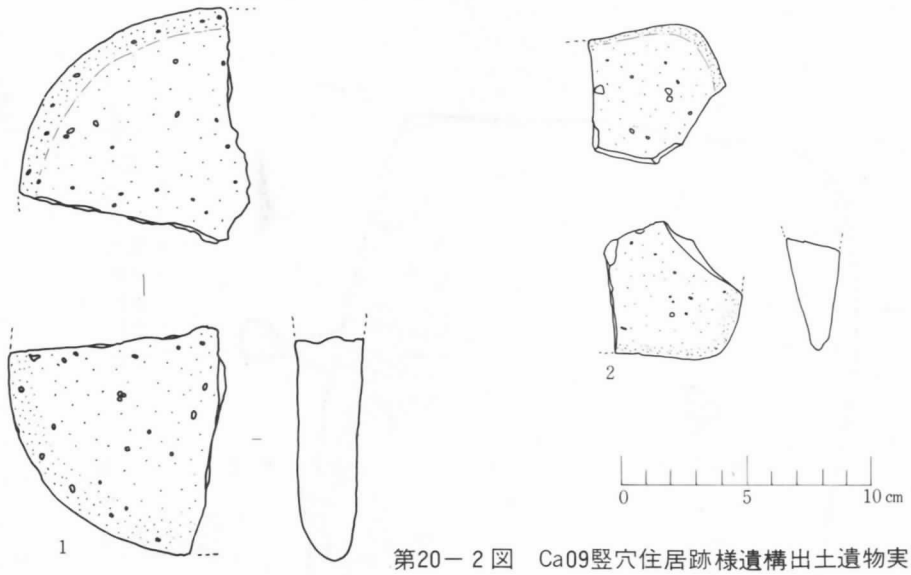
第２層　暗褐色シルト質土層。やや硬質となるが、粘性もややある。黒褐色土塊が小斑状に混入する。遺構北半の中央部にのみ部分的に分布する。

床面は傾斜もなくほぼ平坦である。壁の遺存状態は不良で、傾斜をもって立ち上がり、壁高は一応18～20cm程である。床面上には６個のピットと数個の礫、焼土が見られる。

それらのうち明らかに柱穴と見做しうるものは存在しない。

カマドと見做しうるものもやはり存在しないが、床面中央部に楕円形の焼土集積部分があり、あるいはこれが炉的な機能を果したのかもしれない。床面上の礫は性格不明であり、その他の施設は存在しない。

年代推定の資料となしうるものは床面上からは全く検出されなかった。わずかに覆土中から



第20－2図　Ca09竪穴住居跡様遺構出土遺物実測図

縄文式土器（晩期）の細片と、ロクロ成形と思われる土師器の細片を得たのみである。

以上のように、本遺構は積極的に竪穴住居跡と主張することは、少しく躊躇せざるを得ず、標記のような遺構名を冠した次第である。しいて年代を推定すれば、覆土中出土の遺物とAi62の如きカマドをもたない遺構の年代とを勘案して少なくとも奈良時代までは遡らず、平安時代以降に属する可能性があるとのみいっておく。

（遺　　物）

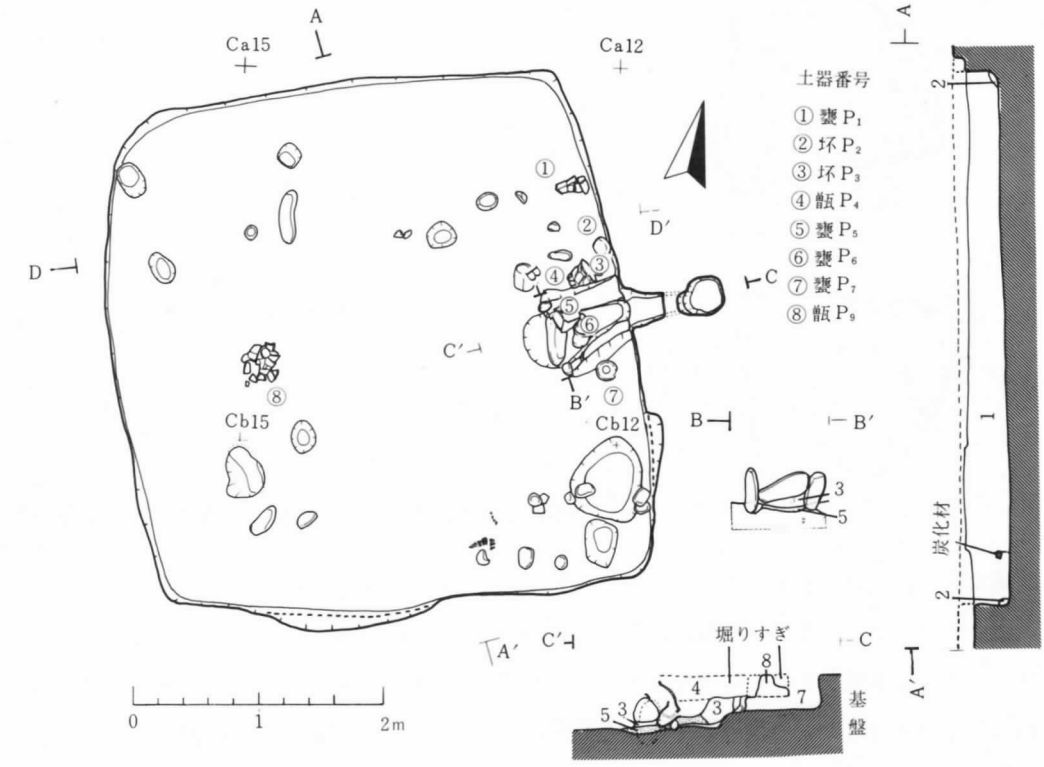
打割された偏平礫（第20－2図1・2）；覆土出土であるが参考までに掲げた。他の例と同様に偏平な円礫の周縁と片面を研磨し、それぞれをうすくまたは平らにしたものを、半割ないし四分割したもの。したがって片面はフラット、片面はカーブすることとなる。用途、年代ともに不明である。

Ca18竪穴住居跡（第21図・第15表）

遺跡敷地西南端近くで、既述の焼失家屋Bi15の南壁にほぼ壁を接して検出した。

既述のとおりBi15とは非常に近接はしているが重複はしておらず、また遺構内での増改築の事実も認められず、単一の遺構である。ただしその割には、カマド以外の遺構各部の遺存状態は良好とはいえない。

遺構の平面形は、南壁の中央付近を調査時にやや掘りすぎてしまった点、さらに各壁が心もちカーブする点を除けば、大略正方形に近い。その規模は東西4.1m×南北4.15m、床面積17.015㎡程になる。住居中軸線の方向（東壁のほぼ中央に取りつけられたカマドの中心と、西壁の中点とを結ぶ線）は、磁北から69°15′東へ振れている。これら今泉遺跡内で検出した竪穴住



1．暗褐色シルト質土。硬質でしまりあり、やや粘性あり
焼土粒・炭化物粒、黄橙色シルト質土塊混入
2．黄橙色シルト。壁のくずれか
3．黒色シルト質土。しまりあり、焼土粒・炭化物粒を混入
4．褐色シルト質土。しまりなく軟質
5．焼土
6．黒色シルト質土。しまりなし。黄橙色シルト粒が混入
7．6に似るが焼土塊も混入
8．黄橙色シルト質土（基盤）

第21－1図　Ca18竪穴住居跡実測図

居跡の中で、本例のみがカマドを東壁に有することに起因する。

遺構内に堆積した土層は非常に単純で、大略二層からなる。

第1層　暗褐色シルト質土層。硬質でしまりがあるが、粘性もややある。乾燥するとクラックが大きく入る。各遺構にもっとも普遍的にみられる土層である。焼土粒・炭化物粒・黄橙色シルト質土塊等が混入する。

第2層　黄橙色シルト質土層。やや汚れており、しまりもあまりない、部分的に壁際にみられるのみなので、壁の崩土であろう。

床面には傾斜は殆んどみられず平坦に近い。壁の残存状況は良好で、ほぼ垂直に立ち上がり、壁高は約24cmを測る。床面上には大小10個のピット・掘り込み類、数個の礫等がみられる。

10個のピット、掘り込み類のうち、明確に主柱穴と見做しうるものは残念ながらない。しか

し、西北隅・東南隅のそれぞれに多少その可能性があり、さらにひいき目にみれば、東南隅の長方形に近いものと、西南隅のやや大きめであるが不整形のものにもその可能性があろうか。いずれにせよ。本遺構では、他の多くの例におけるようなきちんとした配置をなすようなピットは存在しない。前記4個の平均径25cm・平均の深さ20cm程度にもなるであろうか。掘り方・柱あたりの区別はできなかった。

カマドが例外的に東壁中央に構築されたことについては既に述べた。構築位置は全く異なるが、しかしその他の構築法等の特徴は、共通性が強い。とくに焚口部の「門の字」状の礫の遺存状態は非常に良好で、最良の部類に属する。焚口部間口76cm・高さ20cm、本体部奥行70cm程となる。本例には煙道部も煙出し部も備わっている。燃焼部底が北壁と連結する部分が10cm程高くなり、そこからが煙道部の底面となる。煙道部はそのまま北へ50cm延び、その先は径20cmの煙出し部となる。煙道部と煙出し部はトンネル状に連結している。これは今泉遺跡においては、それと明確に認められた唯一の例である。煙出し部の底面には、特別な施設は認められない。

床面上のその他の施設としては、まず東南隅の径50cm・深さ20cmの掘り込みがあげられる。これはカマドの右隣という位置関係からしても、貯蔵穴と見做されてよいものであろう。この他に床面上に礫が数個認められたが、これらにはその用途を推定させるに足る積極的証拠を見出し得なかった。

年代推定の資料としては、カマド中・カマド両側に検出した土師器群があげられる。

（遺　　物）

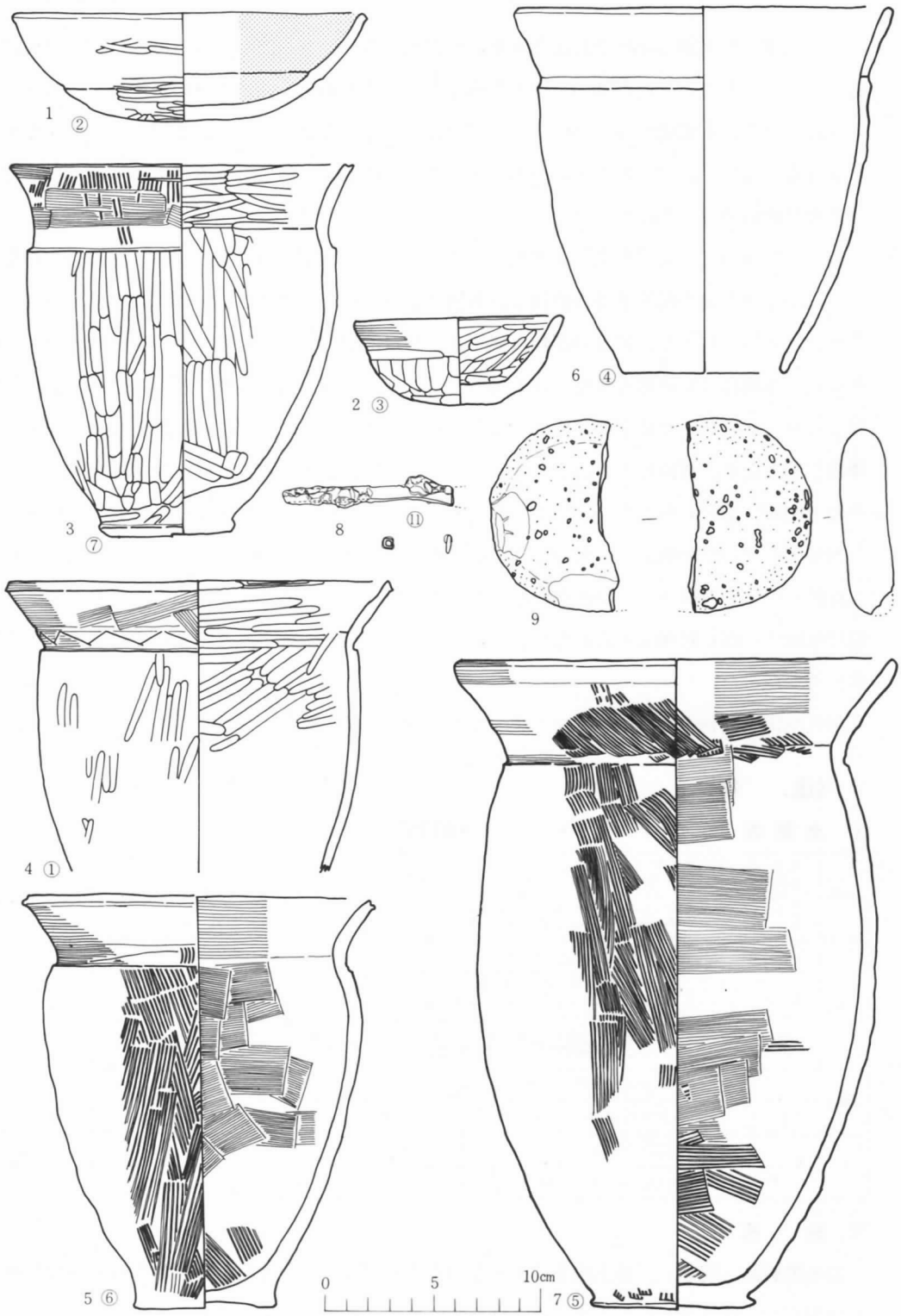
I　土 師 器（第21－2図・1～7）　　第15表

分類	平面図上の土器番号	実測図番号	調整								器高	口径	底径	備考
			口縁部		体部上半		体部下半		底部					
			内面	外面	内面	外面	内面	外面	内面	外面				
甕	①	4	ヘラミガキ	刷毛目のち横ナデのち刺羽	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	欠失	欠失		18.0		
	⑤	7	横ナデ(?)	刷毛目のち横ナデ	刷毛目のちヘラナデ	刷毛目	刷毛目	刷毛目		ヘラケズリ木葉痕	30.1	20.5	7.7	
	⑥	5	刷毛目のち横ナデ	刷毛目のち横ナデ	ヘラナデ	刷毛目	刷毛目	刷毛目	刷毛目	木葉痕	19.4	16.4	6.7	
	⑦	3	ヘラミガキ	刷毛目のちヘラ横ナデ	ヘラミガキ	刷毛目のちヘラミガキ	刷毛目のちヘラナデ	刷毛目のちヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ木葉痕	12.3	16.0	6.3	
坏	②	1	ヘラミガキ	ヘラミガキ(?)	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	5.1	16.5		(内黒)
	③	2	ヘラミガキ	横ナデ	ヘラミガキ	ヘラナデ(orヘラケズリ)	ヘラミガキ	ヘラナデ(orヘラケズリ)	ヘラミガキナデツケ	ヘラケズリ(?)	4.1	9.8	4.1	(〃 ?)
甑	④	6	ヘラミガキorヘラナデ(?)	横ナデ(?)	ヘラミガキヘラナデ	ヘラケズリ(?)	ヘラミガキヘラナデ	ヘラナデ(?)			17.0	17.6	7.6	
			横ナデ(?)	横ナデ	横ナデ(?)	刷毛目ヘラケズリ								

II　鉄　　器

刀子形製品（同8）；覆土出土であるがおそらく刀子であろう。刃部と思われる部分の断面形は偏平で、柄にさし込むと思われる部分のそれは方形でかつ中空である。

III　打割された偏平礫（同9）；これも覆土出土である。特徴は既述のCa09のそれに同じである。



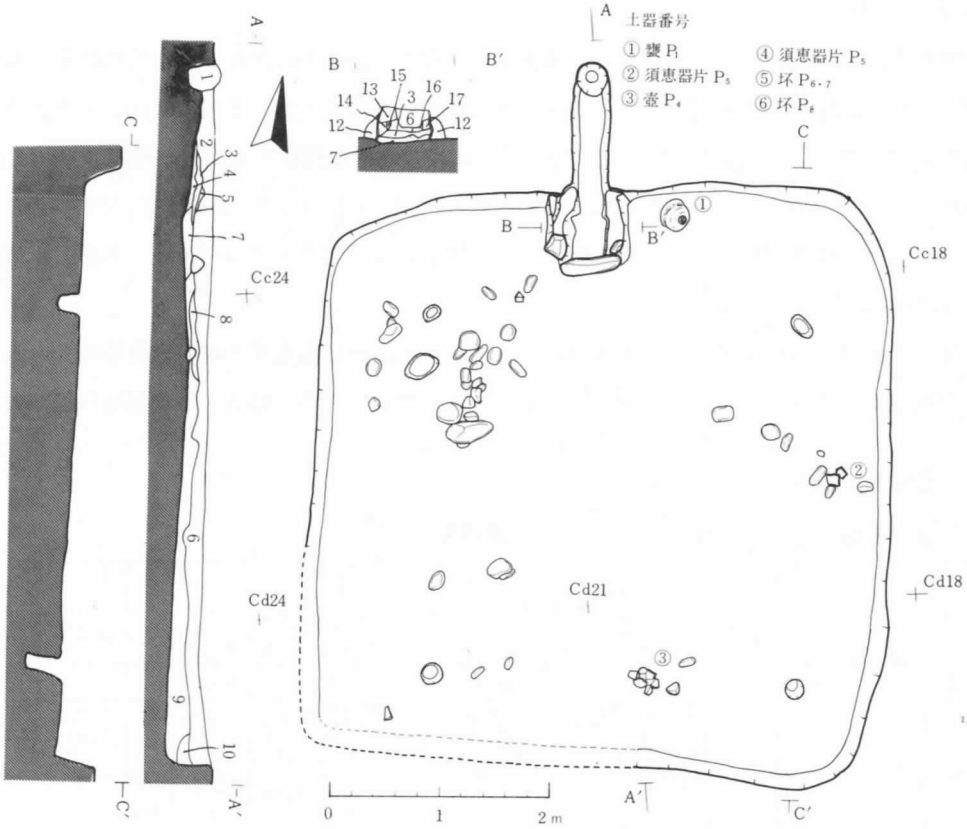
第21－2図　Ca18竪穴住居跡出土遺物実測図

Cb24竪穴住居跡（第22図・第16表）

遺跡敷地西南端に検出した。

他の遺構との重複関係も、遺構内での増改築の事実もともに認められず、単一の遺構である。ただし、南壁と西壁の大部分が農業用水路のために破壊され、不明となってしまっている。その他の遺構・遺物の遺存状態もあまり良好とはいえず、全体的に保存不良といわざるを得ない。

遺構の平面形は大略やや長方形がかった正方形をなし、その規模は東西5.2m（推定）×南北5.5m（推定）、床面積28.60m²（推定）程になろう。住居中軸線の方向（北壁中央に取りつけられたカマドの中心と、推定される南壁の中点を結ぶ線）は、磁北から約90°西に振れる。



第22－Ⅰ図　Cb24竪穴住居跡実測図

1．茶褐色シルト質土。やや硬質、粘性あり。焼土粒混入。一部に黄橙色シルト塊混入
2．茶褐色シルト質土。やや硬質、粘性あり。焼土、炭化物粒混入、1より暗い
3．焼土
4．暗褐色シルト質土。かたいがやや粘性あり。炭化物混入
5．黄褐色シルト質土。軟質で粘性あり
6．暗褐色シルト質土。やや硬いが、粘性もあり。黄橙色シルト塊混入
7．赤褐色シルト質土。軟質で粘性あり。焼土塊・炭化物粒混入
8．黒褐色シルト質土。軟質、粘性あり
9．黒褐色シルト質土。12より粗く硬いが粘性もややあり
10．黒色粘土質土。軟く粘性あり
11．黄橙色粘土質シルト（基盤）
12．暗黄色粘土質シルト。カマド袖
13．褐色シルト質土。かたく、粘性無し。焼土粒混入
14．褐色シルト質土。13より黒味強し、かたく粘性無し。焼土粒混入
15．赤褐色シルト質土。硬いが、やや粘性あり
16．赤褐色シルト質土。15より黒っぽい。軟質で、粘性あり
17．褐色シルト質土。14に似る

遺構内に堆積した土層は大別して二層からなる。

第１層　暗褐色シルト質土層。やや硬質ではあるが粘性もややある。乾燥するとクラックが大きく入る。黄橙色シルト質土塊が混入。

第２層　黒褐色シルト質土層。しまりがあるが粘性もかなり出てくる。農業用水路等の影響かと思われる。

床面は中央部がやや高く、南方が低くなり多少の傾斜面をもつ。壁は残存部では垂直に近く立ち上がり、壁高は約40cmとなる。床面上に５個のピットと散在する礫群がみられる。

５個のピットのうち、大略対角線上にのる位置関係を保つ４個が、あるいは主柱穴と見做されてよいものかもしれない。それらの平均径20cm・平均の深さ32cm・掘り方と柱あたりの区別はなしえなかった。

カマドは北壁の中央に構築される。構築法その他は多くの例に共通する。焚口部も礫も残存する。焚口部間口60cm・高さ30cm、本体部奥行80～85cm程である。本例にはBi15のようなやや長めの煙道部と煙出し部が備わっている。燃焼部底が北壁と接続する部分が傾斜をもって高くなり、そこからが煙道部底となり、それが徐々に浅くなりながら北へ１m延び、その端部に径20cm・深さ30cm程の円形ピットが穿たれ、そこが煙出し部となるもようである。煙出し部底面は煙道部底よりも深くなる。

床面上にはその他の特別な施設は認められない。床面上に散在する礫も性格不明である。

年代推定の資料としては、カマド周辺から出土した若干量の土師器と須恵器破片類がある。

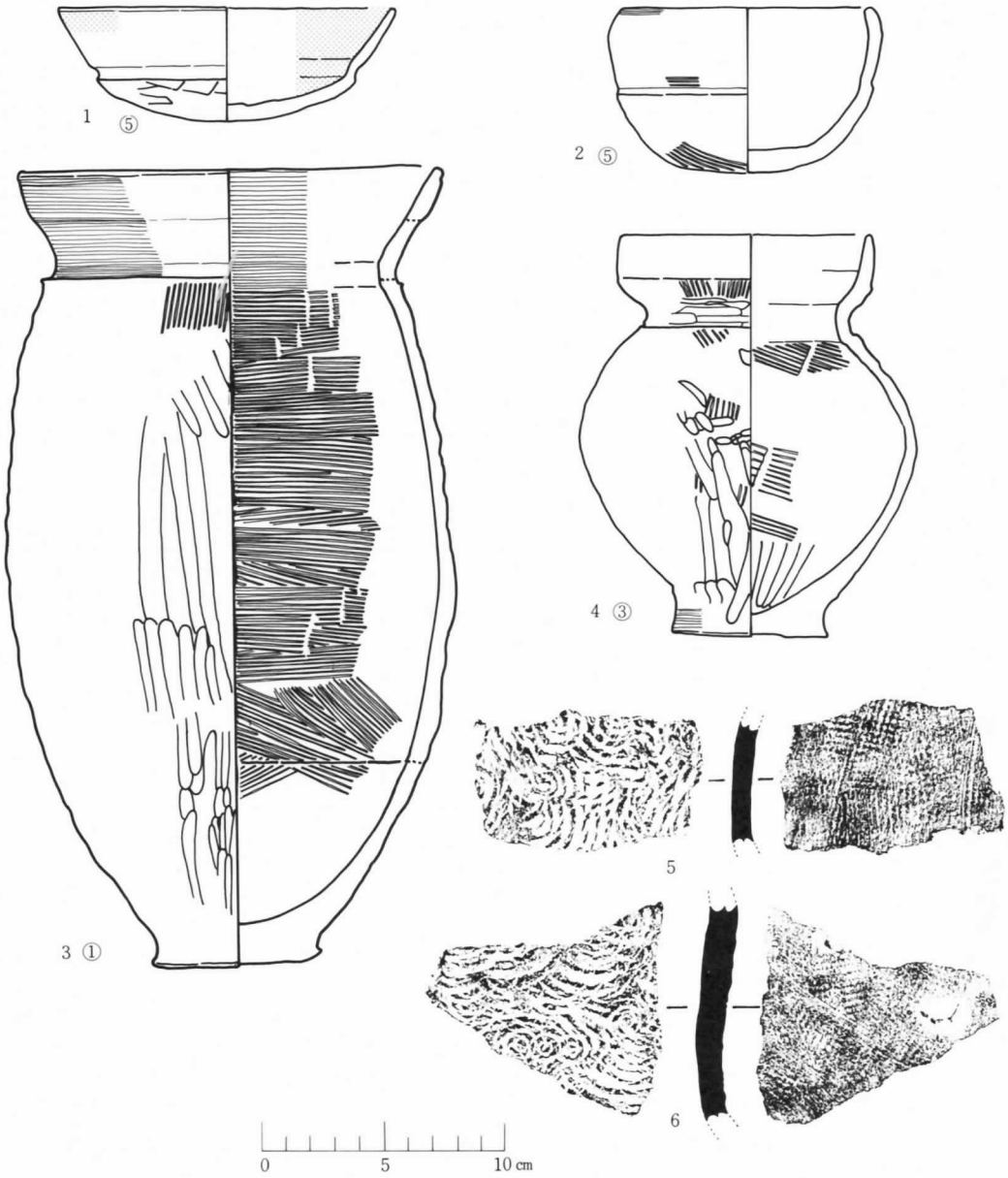
（遺　　物）

Ⅰ　土師器（第22－２図・１～４）　　第16表

分類	平面図上の土器番号	実測図番号	調				整				器高	口径	底径	備考
			口縁部		体部上半		体部下半		底部					
			内面	外面	内面	外面	内面	外面	内面	外面				
甕	①	3	横ナデ	横ナデ	刷毛目	ヘラミガキ又はヘラナデ	ヘラミガキ	ヘラミガキ又はヘラナデ	ヘラミガキ	木葉痕				
壺	③	4	ヘラミガキ	刷毛目のちヘラミガキ	刷毛目のちヘラミガキ	刷毛目のちヘラミガキ	刷毛目のちヘラミガキ	刷毛目のちヘラミガキ	ヘラミガキないしナデツケ	木葉痕				
坏	⑤	2	ヘラミガキ(?)	刷毛目のち一部横ナデ	ヘラミガキ	刷毛目のち横ナデかミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ(?)	ヘラミガキ(?)	刷毛目				
	⑤	1	ヘラミガキ	横ナデかヘラミガキ	ヘラミガキ		ヘラミガキ	ヘラケズリ	ヘラミガキ(?)	ヘラケズリ				

Ⅱ　須恵器

甕（同５）；破片ではあるが床面出土。おそらく甕型であろう。外面に不鮮明ながら叩き目内面に所謂「青海波」文類似のものがみられる。外面には一部に施紬ともみえる灰緑色の部分がある。



第22－2図　Cb24竪穴住居跡出土遺物実測図

第17表　遺　構　一　覧

遺構名	辺(壁)長 m 東西	辺(壁)長 m 南北	床面積 m²	平面形		壁高 m	遺構中軸線	左の磁北からの振れ	主柱穴個数	左の配置	炉・カマドの設定位置		煙道	煙出しと煙道のつくりの区別	貯蔵穴有無とその形状		左の設定位置	その他
Ai 65 新	4.5	4.5	20.25	正方形	隅丸	0.24	北壁と南壁の中点を結ぶ線	N 6°W	?	?	?	?	?	?	無	／	無	
〃 旧	?	?	?	?	?	0.24	?	〃	?	?	?	?	?	?	?	?	?	
Ai 62	4.0	4.0	16.00	正	丸	0.10	北壁と南壁の中点を結ぶ線	N11°W	4 ?	壁内 正方形	(炉)?	床面中央	無?	無?	有	円形	南壁中央	ロクロ成形
Bb 06	5.0	5.0	25.00	正	丸	0.20	〃	N50°W	1 ?	〃 〃	?	?	?	?	有	長円	西壁中央	
Bc 71 新	3.5	3.5	12.25	正	角	0.14	〃 ?	N25°W	?	?	?	?	?	?	?	?	?	
〃 旧	3.4	3.4	11.56	正	丸	0.14	〃 ?	N 5°W	?	?	北壁	中央	?	?	?	?	?	
Bc 53	5.0	5.0	25.00	正	角	0.20	〃	N48°W	1 ?	壁内	?	?	無?	有?	有	不整形	東北隅?	
Bd 12 新	4.0	5.0	20.00	長方形	丸	0.30	〃 ?	N33°W	4 ?	壁内 正方形	?	?	無?	無?	?	?	?	ロクロ成形
〃 旧	?	?	?	?	?	?	〃	?	?	?	北壁?	?	?	?	?	?	?	
Bd 59	6.5	6.2	40.30	長	角	0.40	北壁と南壁の中点を結ぶ線	N42°W	4	壁内 正方形	北壁	中央	無	有?	有	円形	カマド左隣(西)	
Bd 03	4.7	4.7	22.09	正	丸	0.35	〃	N22°W	4	〃 〃	?	〃	有	有	有	長円	西北隅	
Bf 15	4.7	3.7	17.39	長	角	0.21	〃	N13°W	4	〃 〃	?	〃	有	無	?	?	?	
Bf 09	4.1	3.9	15.99	長	丸	0.30	〃	N12°W	4	〃 〃	?	中央からやや西偏	無	無	有	円形	西北隅	
Bf 53	4.8	4.9	23.52	正	角	0.30	〃	N30°W	4	〃 〃	北壁	中央	有	有	?	?	?	
Bg 62 新	6.4	7.3	46.72	長	角	0.35	〃	N14°W	4	〃 〃	?	中央からやや東偏	有?	無	有	円形	カマド左隣(西)	
〃 旧	4.6	5.1	23.46	長	角	0.50	〃	N13°W	4	〃 〃	?	〃	?	?	有?	長円	?	
Bh 09	4.3	4.3	18.49	正	丸	0.30	〃	N14°W	4	〃 〃	?	〃	有	有	?	?	?	焼失家屋
Bh 71	3.5	3.9	13.65	長	丸	0.50	〃	N30°W	4 ?	〃 〃	北壁	中央?	有	無	有?	円形?	カマド右隣(東)	
Bi 24	4.3	4.3	18.49	正	丸	0.30	〃	N20°W	4	〃 〃	北壁	中央	無	無	有	円形	〃	
Bi 15	4.2	4.5	18.90	長	丸	0.40	〃	N60°W	4	〃 〃	?	〃	有	有	?	?	?	焼失家屋
Ca 09	4.1	3.7	15.17	長	丸	0.20	?	?	?	?	(炉)?	床面中央	?	?	?	?	?	ロクロ成形?
Ca 18	4.1	4.1	16.81	正	角	0.24	東壁と西壁の中点を結ぶ線	N69°E	4 ?	壁内 正方形	東壁	中央	有	有	有	円形	カマド右隣(南)	
Cb 24	5.2	5.5	28.60	長	丸	0.40	北壁と南壁の中点を結ぶ線	N 9°W	4	〃 〃	北壁	中央	有	有	?	?	?	

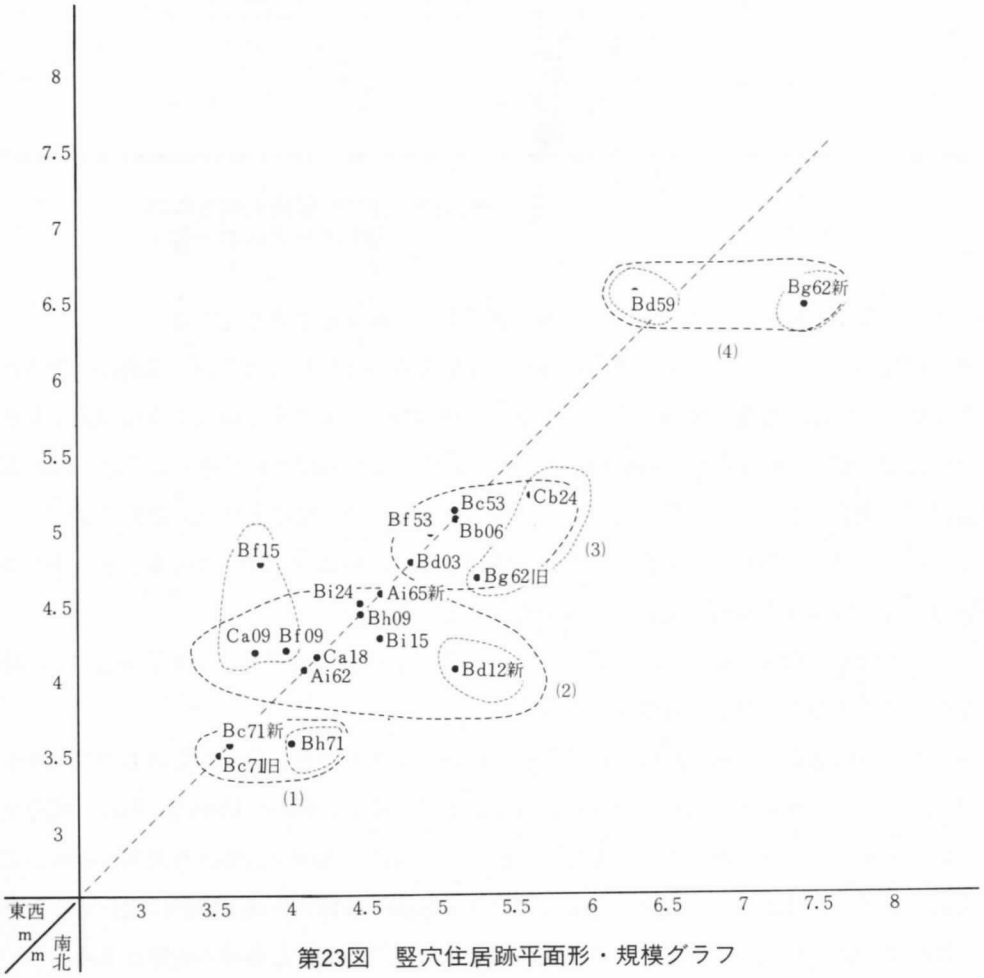
III　考察とまとめ

遺　構　要　約

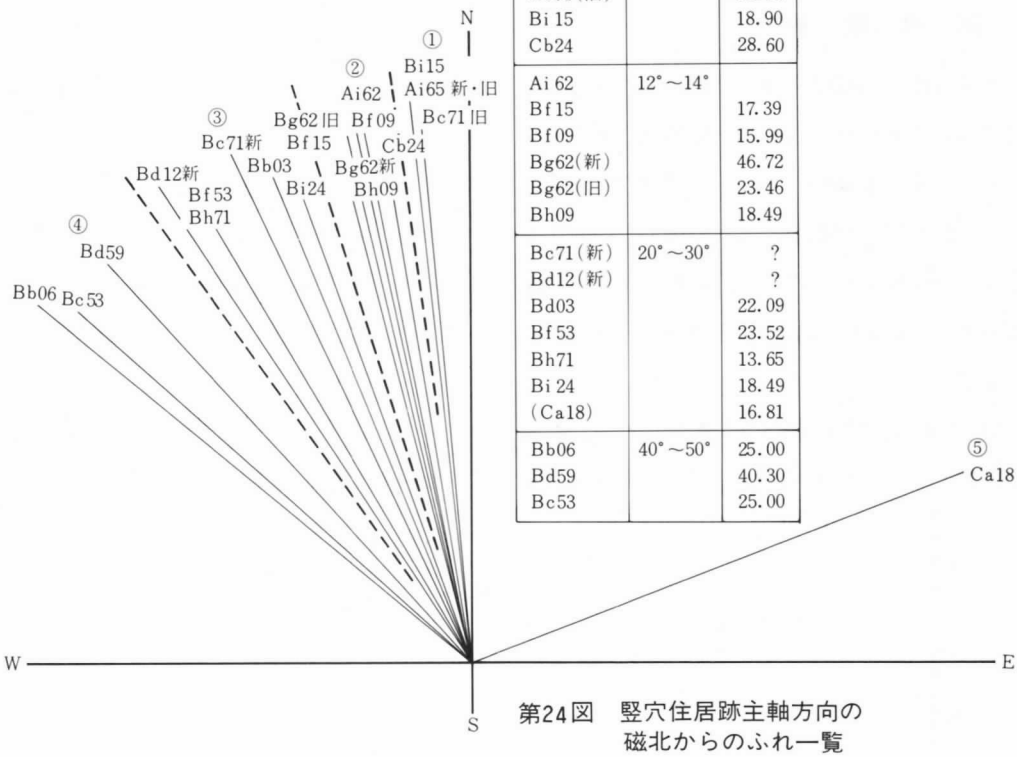
本遺跡出土の遺構（竪穴住居跡）をまとめると第17表のようになる。これをもとに若干の項目についてまとめておく。平安時代以外のものを中心として述べる。

(1)　規模と平面形＝これらをグラフにすると第23図のようになる。即ち平面形態は、(イ)南北に長い長方形、(ロ)東西に長い長方形、(ハ)正方形にそれぞれ近いものの３種があるが、前二者は変異の中に収まるものと考えられ、基本形は最後者である。規模は、①3.5m前後、②４～4.5m前後、③4.6～5.2m前④６m以上の４種があり、最後者は最も少数であり、他の三者が主体をなす。

(2)　住居主軸方向の磁北からの振れ＝これをグラフにしたものが第24図である。これによると、①その振れが10°未満のもの５、②12°～14°未満のもの６、③20°～30°のもの７、④40°～50°



第23図　竪穴住居跡平面形・規模グラフ



遺構名	振れ	床面積
Ai 65(新)	10°未満	20.25
Ai 65(旧)		?
Bc71(旧)		11.56
Bi 15		18.90
Cb24		28.60
Ai 62	12°～14°	
Bf 15		17.39
Bf 09		15.99
Bg62(新)		46.72
Bg62(旧)		23.46
Bh09		18.49
Bc71(新)	20°～30°	?
Bd12(新)		?
Bd03		22.09
Bf 53		23.52
Bh71		13.65
Bi 24		18.49
(Ca18)		16.81
Bb06	40°～50°	25.00
Bd59		40.30
Bc53		25.00

第24図　竪穴住居跡主軸方向の磁北からのふれ一覧

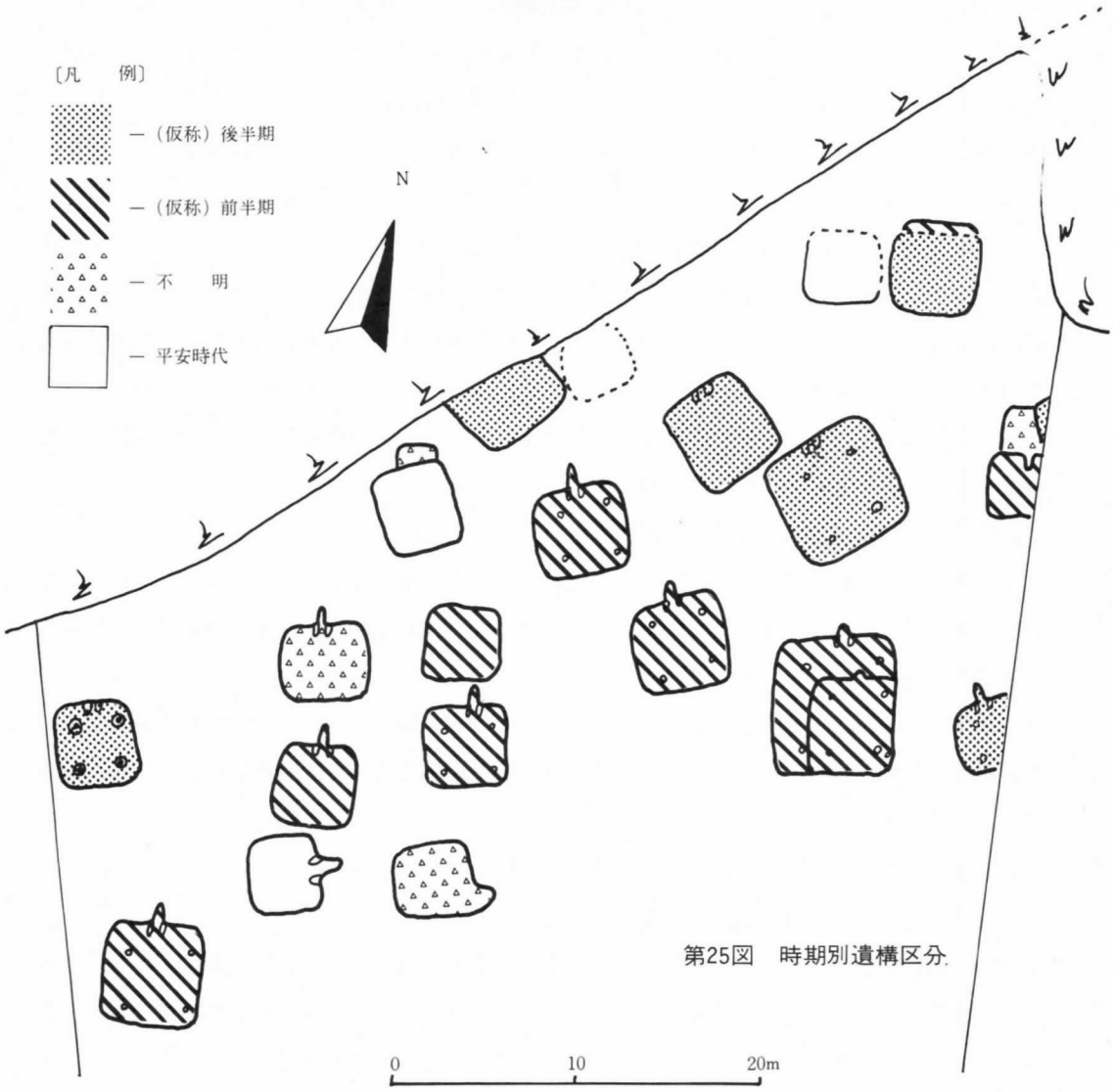
のもの3の形で存在する。これらは前二者対後二者と整理することもできよう。

(3)　柱穴に於ける柱あたりと掘り方の有無＝良好な資料は少数であるが、明瞭に両者を区別できる例（Bi24住）も存在することからすると、その類例はより多く存在する可能性がある。また柱穴際に礫（人頭大以上）を配す例もある（Bi24）。更に別に触れてあるように、掘り方中に分割した板状礫をもたたき込む例もあり、柱穴構築法については更に注意されてよい。

(4)　竪穴自体の〝掘り方〟の存在＝これも確認したのはBh09住のみであるが、そのような問題意識を持って調査すれば、更に類例は増えたことであろう。

(5)　上屋構造＝Bh09住の炭化材の遺存状況からして、骨格をなす材（垂木的なもの）が助骨状をなすものが存在したことは確実である。

(6)　煙道の構築方法＝現時点に於いて明白な痕跡を示すものと、そうでないものの二種がある。カマド本体の構築法に強い斉一性を看取できるのに比し、極めて対照的である。煙道構築法が確立・安定しない時期であるとも考えられる。ちなみにカマド自体は水沢市面塚遺跡に於いて既に6世紀代に出現し、煙道を有するカマドは同膳性に於いて本土器群に先行すると思われる段階に於いて出現している。カマド他の構築法にはこの他にも各種の変遷がある。



第25図　時期別遺構区分

(7)　遺構の時期区分＝膳性遺跡に於ける知見を援用すると、遺構の時間差は〝竪穴住居主軸方向の磁北からの振れ〟に最も良く反映されるらしい。それは、より古期のもの程磁北に一致するが、ほぼ近いものが多く、新期のもの程西に振れる。というものである。もちろんそれはあくまでも〝傾向性〟であり、例外も少数存在するのは当然である。それと、別に触れた遺物の検討結果からすると、以下の二大別が可能である。(第25図)

(a)　仮称前半期　Ai65(旧)・Bc71・Bd03・Bf09・Bf53・Bg62・Bh09・Bi15・Cb24の各住居跡。

(b)　仮称後半期　Ai65(新)・Bb06・Bc53・Bd59・Bi24・Bh71・Ca18の各住居跡。

(a)が9棟、(b)が7棟となる。これを(1)で述べた規模の点からみると、両期ともに1棟の④と、それ以外の①～③との組み合わせからなることとなる。集落全域の発掘調査を行なっていない現段階であり強弁は避けねばならないが、該期の集落の構成要素（竪穴住居の規模）に上記二者がある可能性のみは指摘しておく。規模の差が何を反映しているかは検討課題として残る。

尚、仮称両期とも現段丘崖から南へ幅30mの帯状の地帯に住居が営なまれる。

(8) 遺構の種類＝調査域内には竪穴住居跡のみを検出し、その他のものはない。これは集落内の場の使い分け（居住域と墓域など）が存在した可能性のあることの反映とともに、時代性の反映をも想定すべきである。水沢地方に於いては平安時代から集落の構成要素が複雑化（大溝・井戸・掘立柱建物などが加わる）する。

(9) 遺構の配置＝既述の仮称二期相互の重複はみられない点が特徴的である。慎重に避けた占地ともとれる現象である。その背景は不明である。

仮称二期内の遺構分布に顕著な特徴は看取できない。

(10) 本遺跡は奈良時代以前（7世紀～8世紀初）に集落が営なまれ、その後かなりの時間をおいた平安時代に再度利用されている。より古い段階についていうと、後掲の編年試案のⅥ群期単期の集落といえる。

水沢市周辺の集落遺跡の存続期間・状況にはいくつかの類型がある（第18表）。調査範囲その他の種々の制約は承知の上で、あえて類型化を試みる。平安時代以前に利用が開始された集落で、

(a) 単期もしくは一定の中断期間をおき再度集落が営なまれるもの。

(b) 複数期間にわたり継続的に営なまれるもの。

前者の類例は水沢市玉貫・今泉・膳性・高山・西大畑・面塚・金ヶ崎町上餅田であり、後者のそれは東大畑・石田などである。この現象の背景のメカニズムは現状では不明であるが、農業生産力の発展状況などが一つのモメントとして利用していた可能性もあろうし、〝母村・分村〟的な側面も考慮する必要があろう。立地論的には、(a)に掲げた諸遺跡（古墳時代～奈良時代まで）が共通した立地を示している点に留意すべきであろう。更には、古墳時代集落の立地は、弥生時代のそれに共通する事実もある。何れにしても今後の重要な検討課題である。

尚、仮称Ⅶ群期（あるいは痕跡的なあり方を示るものも含めるとⅦ－b群期の末）から造営が開始される集落の数が極めて多い。この背景には律令政府の直接的支配権の進出という政治的要素が作用したことは想像に難くないが、そのような変化のきざしが既にⅦ－b群期に発する点にも留意したい。それは既に触れた如くに、占地の変化の開始期が、胆沢扇状地に於いてはⅦ群期、和賀川流域に於いてはⅦ－b群期になる、という点にも現われている。

第18表　集落造営・存続状況

	胆沢扇状地																				胆沢川北岸					和賀川両岸								北上川河東								
	玉貫	膳性	今泉	面塚	高山	西大畑	東大畑	竜堂	権現堂	石田	跡呂井	南矢中	袖谷地	真城ヶ丘	小山崎	林前	先胆沢城	胆沢城	見分森	上餅田	西根	鳥ノ海	森山団地	高谷野原	長沼	猫谷地	鳩岡崎	藤沢	本宿羽場	尻引	相去	鬼柳西裏	宮地	小石II	兎II	落合III	落合	瀬谷子	蔦ノ木	鴻ノ巣
I 群期					○	?																																			
II																								?		○															
III				○		○																																			
IV		○																																							
V		○																		?					?																
VI		○	○	○		○			○	○										○	○	○				○															
VII a	○						○			○																															
VII b							○			○	?						○									○	○	○		○			○	○	○	○					
VIII		○						?		○		○		○	○	○		○	○	○			○			○	○	○	○	○			○	○	○	○	○	○		○	
IX		○	○			○							○													○					○		○	○	○	○		○	○		
X																					○	○									○	○						○	○		
XI																					○																	○			
(中世)	○																				○																				
備考						掘立建物 IXに				掘立建物 VIIIに						掘立建物 井戸							掘立建物						大溝			井戸								

出土遺物とその考察

〔1〕 土器について

（1） 各器種の分類と特徴

1．縄文式土器　表土や遺構覆土中より、大洞A′式類似の土器片少量を得た。何れも遺構と本来的な共伴関係を示すものではない。本遺跡周辺に同期の遺跡が存在した可能性を示すものではあろう。その点から、縄文時代晩期末葉の遺跡と古代の遺跡が同一の占地をすることもあった一資料となり、立地論的観点からする主題への一資料には成し得よう。

2．土 師 器　土師器は各遺構より豊富に出土しており、本遺跡出土遺物の主体をなす。器種には甕・甑・壺・坏・高坏・片口型・鉢型の７種類がある。何れの器種も通常使用されている概念を基準として分類したが、甕の一部には従来「壺」といわれることもあった体部球形のものも含ませ、坏にはかなり大型で浅いもの、深いもの（皿や椀といわれるものか）も一括させてある。

以下に各器種毎の分類を行なうが、各遺構出土のものを一括して扱い、その後に遺構毎の組成を検討し、最後に編年的位置を検討したい。それらの際に使用する器面調整の技法の用語は、宮城県岩切鴻ノ巣遺跡の調査報告のそれを使用する。[註1]

（註１）　岩切鴻ノ巣遺跡　宮城県文化財調査報告書35集　東北新幹線関係遺跡調査報告書Ⅰ

甕　甕は53点出土している。それらは、成形に於けるロクロの使用・不使用、口縁・肩部の器形上の特徴から次の３類に大別できる。

Ａ類　ロクロ不使用。口縁は外反し、肩部に顕著な段乃至稜を有するもの。

Ｂ類　ロクロ不使用。口縁は外反し、肩部に段乃至稜を持たないもの。

Ｃ類　ロクロ使用。口縁が強く屈曲するもの。

以上の３類は、その他の特徴（最大径部位・体部形状・器体の大小・器面調整の技法上の特徴等）からさらに細分でき、大略第19表のようになる。但しＣ類については、出土例も少なくかなり均一な特徴を示すので、これ以上の細分は行なわない。

甕Ａ類　成形にロクロを使用しない。口縁は外反し、肩部に強い段を形成する。器体の大きさ（器高）には以下の６種がある。

ａ．15cm以下

ｂ．16～20cm

ｃ．21～24cm

ｄ．25cm周辺

	ロクロ・肩部	器形	大きさ㎝	調整	実測図
A	ロクロ不使用 肩部有段	I 口縁外反 長胴形 最大径 ‖ 口縁	a 15以下	イ 刷毛目 ＋ ヘラ削り ・ ヘラミガキ	A－I－a－イ
			b 16～20		A－I－c－ロ
			c 21～24		A－I
			d 25	ロ 刷毛目	A－I－e－イ
			e 26～30		A－I－f－ロ
			f 30以上		
		II 口縁外反 長胴形 最大径 ‖ 体部中央	d	イ	A－II－d－ロ
			e		
			f	ロ	A－III－d－イ
		III 口縁外反 球胴形	d	イ	
			e		
			f	ロ	
B	ロクロ不使用 肩部無段	口縁外反 長胴形 最大径 ‖ 口縁	a	イ	B－c－イ
			b		B－f－イ
			c		
			d	ロ	B－e－ロ
			e		
			f		
C	ロクロ使用	口縁屈曲			C
					C

第19表　甕分類基準

e．26～30cm

f．30cm以上

体部形状には、最大径の部位をも加味すると3種ある。

Ⅰ．長胴形で、最大径が口縁のもの。

Ⅱ．長胴形で、最大径が体部中央のもの。

Ⅲ．球形をなし、最大径体部のもの。

器面調整の技法には2種ある。

イ．刷毛目調整の後に、内外両面乃至その何れかに箆削り・箆ミガキ・箆ナデ等を加えるもの。（口縁は横ナデ）

ロ．口縁は内外両面とも横ナデ調整、体部には刷毛目調整（外面縦・斜位、内面横位が原則）のみが施されるもの。

甕B類　これもロクロ不使用。肩部に段あるいは稜を持たず、口縁と肩部（体部上端）の区別は器面調整技法により（口縁部は横ナデ調整）なされる。器形は口縁外反の長胴形で、最大径部位は口縁に一致。器体の大きさには前記のd・eの2種があり、器面調整の技法には前記のイ・ロがある。

尚、A・B類ともに底部はかなり突出した印象を与え、体部との区別は非常に明確に成し得る。また、底部外面に木葉痕のあるものが多い。

甕C類　成形にロクロ使用。恐らく長胴形をなし、口縁部は強く屈曲する。体部上半にはロクロ成形痕が、下半には縦方向の箆削り調整痕が顕著にみられる。底部は欠失しているが、恐らくはあまり突出した感を与えない、A・B両類に比しやや大きめの平底となるであろう。

甑　9点出土している。その器形を窺い得るものはすべて無底式のものであるが、多孔式のものの破片も極く少数出土している。口縁・肩部の器形上の特徴から以下の2類に分類できる。

A類　口縁外反し、肩部に顕著な段乃至稜を形成するもの。

B類　口縁外反し、肩部に段・稜を持たないもの。

以上は、器高により2類に分類される。

Ⅰ．比較的小型（15～17cm）

Ⅱ．比較的大型（20cm以上）

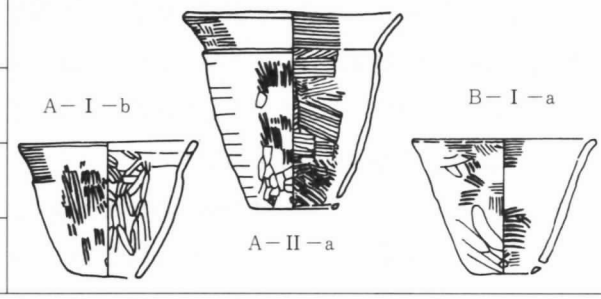
更に、体部下端の細孔の有無により2種類に分かれ、これらをまとめると第20表のようになる。

これらの器面調整の技法は、口縁には内外面とも横ナデ調整が施され、体部には刷毛目調整の後内面に主に箆ナデ調整を加えて仕上げられる。

壺　7点出土している。口縁（口頸）部の器形上の特徴から2種に大別できる。

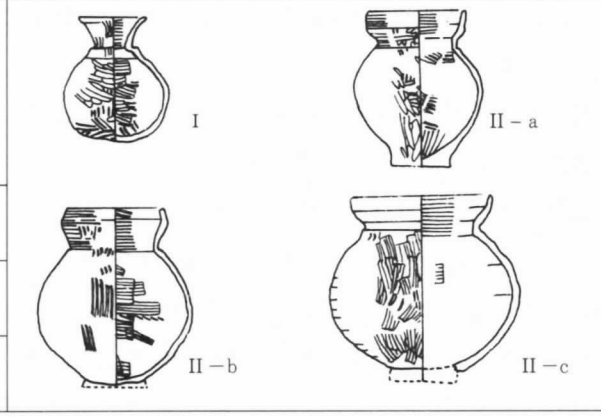
Ⅰ類　口縁（口頸）部が外反し、肩部に軽い段を持ち、球形の体部を有するもの。細頸壺的

	器形	大きさ(cm)	細孔	実測図
A	口縁外反 肩部有段	I 15 ～ 17	a 有	
		II 20 以上	b 無	
B	口縁外反 肩部無段	I	a	
		II	b	



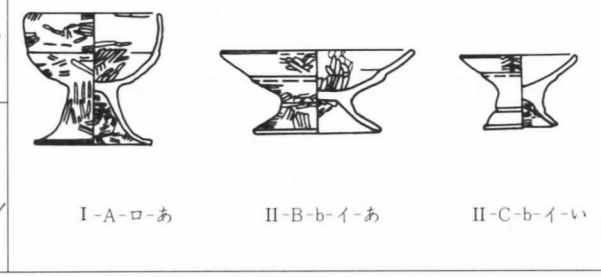
第20表 甑 分 類 基 準

	頸部の特徴	頸部立ち上がり	体部形	実測図
I	細頸壺的	長い	球形	
II	広口壺的	a 長い	球形 小型	
		b 短い	球形 小型	
		c 短い	球形 大型	



第21表 壺 分 類 基 準

	大きさ	口縁形状	脚部	坏高/脚高	実測図
I	比較的大型 口径 16 cm	a 直口 ～ 内湾気味	イ 有段	あ 1.3/1	
II	比較的大型 口径 20 cm	b 外傾	ロ 無段	い 0.95/1	
III	口径 13 cm 前後				



第22表 高 坏 分 類 基 準

印象を与える。器面調整の技法には、器外面は刷毛目調整後篦ミガキを加え、内面では口縁（口頸）部横ナデ調整、体部篦ナデ調整などがある。

II類　口縁下半（口頸というべきか）が直立気味に立ち上がり、その上方が一旦外傾した後再び直立気味になるもの。広口壺的な印象が強い。器体はほぼ球形をなすが、やや歪で、横長の楕円形的なものが多い。

この類は口縁（口頸）部の細部の形状・器体の大小により、更に次の3種類に分類できる。これらをまとめると第21表のようになる。

a．前記の最後に立ち上がる部分が比較的長く、器体が小型のもの。

b．同じ部分が短く、器体が小型のもの。

c．器高20cm以上の大型品。

器面調整の技法は、体部外面では刷毛目調整後主に篦ミガキが加えられ、口縁（口頸）部には横ナデ調整が加えられる。内面もほぼ同様であり、刷毛目調整痕をそのまま残すものは少ない。

坏　19点出土している。坏は大別して2類になる。

A類　成形にロクロを使用しないもの。

B類　成形にロクロを使用するもの。

以上は、体部の器形上の特徴等から更に細分できる（第23表）。尚、A類については、その底部は例外的な一例を除いてすべて所謂「丸底風」であり、器内面には篦ミガキ・黒色処理が施されている。また器外面の体部と底部の境界にはすべて段があり、その部位は器体のほぼ中央かそれよりやや下位に限定されるのが通例で、下方に偏するものは一例だけである。更に、器外面の段に対応する内面に軽いくびれがみられるのも通例である。従ってこれらは特徴としてはいちいち言及しない。

A類のI　体部が直口乃至内湾気味に立ち上がるもの。直上する度合が強いものと弱いものとがあるが一括した。

器面調整の技法には3種の組み合わせがある。

a．体部横ナデ調整、底部篦削り調整

b．体部横ナデ調整、底部篦ミガキ調整。

c．体・底部とも篦ミガキ調整。

A類のII　体部外反するもの。器外面の段の部位は前述の通り器中央からやや下位の所にあるが、一例のみが下端に近い部分にある。

器面調整の技法には、次の組み合わせがある。

a．体部横ナデ調整。底部篦削り調整。

	ロクロ	体部特徴	調整・特徴	実測図
A	ロクロ不使用	I 直口 〜 内湾気味	a 体部ヨコナデ 底部ヘラ削り	A－I－c
			b 体部ヨコナデ 底部ヘラミガキ	
			c 体部 底部 ヘラミガキ	
		II 外反気味	a 体部ヨコナデ 底部ヘラ削り	A－II－a
			b 体部 底部 ヘラミガキ	
		III 外傾気味	a 体部ヨコナデ 底部ヘラ削り	A－III－a
			b 体部ヘラミガキ 底部ヘラ削り	A－III－b
			c 体部 底部 ヘラミガキ	A－III－c
B	ロクロ使用	I 外反気味	a 内面黒色処理 回転糸切	
		II 内湾気味	b 黒色処理無し 回転糸切	B－II－a　B－I－b

第23表 坏分類基準

b．体・底部ともに篦ミガキ調整。

A類のIII　体部に湾曲がなく、直線的に外傾するもの。器外面の段の部位は器中央からやや下位である。口径は、小は10cmから大は27cmまでと非常に変化に富む。

器面調整の技法には、以下の4類の組み合わせがある。

a．体部横ナデ調整、底部篦削り調整。

b．体部篦ミガキ調整、底部篦削り調整。

c．体・底部ともに篦ミガキ調整。

d．（覆土出土でしかも例外的な一例であるが）外傾する体部と平底風の底部を持ち、器中央からやや下位に段を有し、その段から底部に至るまでの部分に沈線によって斜格子目状の施文を行なっているものである。つまりこの土器にあっては、口縁部・体部・底部の3部位を指摘できることになる。器面調整技法には、口縁・底部ともに篦ミガキが施される。尚、他の坏に比し、胎土が精良で焼成も良好で硬いという特徴もある。

B類　4点出土。成形にロクロ使用。器形上の特徴は体部外反であるが、その度合の強いものと弱いものがある。

技法との関連では、前者は回転糸切無調整、後者には回転糸切後の何らかの調整と内面黒色処理が指摘できる。

高坏　脚部のみのものも含めて11点出土。これらは器体の大小、坏部体部の器形上の特徴他から3類に大別できる。（P97第22表）

尚、脚のみのものを除いたすべての例に於いて、坏部内面には篦ミガキと黒色処理が施され、坏部外面中央には段が形成されるが、これもいちいち言及することは避ける。

I類　比較的大型（口径16cm前後、器高14cm前後）で、ほぼ直上するかあるいはやや内湾気味に直上する体部を有する。坏部外面の段に対応する部位にくびれを形成する。脚部上半は強くは開かず、裾部に至って急激に外方に開き、ほぼ平坦に近くなる。

器面調整技法は、坏部外面上半には横ナデ調整後篦ミガキが、下半では刷毛目調整乃至篦ナデ様の調整を施した後に篦ミガキが行なわれる。脚部は、縦方向の篦ミガキや、篦ミガキと同時に多少粘土を掻き取ったかのような調整が行なわれたらしく、縦方向の併行する細長い凹みがみられる。裾部には横ナデ調整がみられる。尚、一例のみだが、坏部外面全体と脚裾部外面に赤色の塗彩を施したものがある。

II類　I類と同様に口径20cmを越える比較的大型のもので、体部が外傾し大きく直線的に開く。I類と同様に、器外面の段に対応する器内面のくびれを有する。脚部の形状はI類とは異なり、脚上部に段を有し、I類よりも低い脚高を示し（4cm）、脚部中央から裾広がりに開く。

器面調整としては、坏部口縁部篦ミガキ調整、坏部体部横ナデ調整後篦ミガキ調整、脚部上部（段まで）は篦ミガキ調整、段以下も篦ミガキ調整、裾部は横ナデ調整後篦ミガキ調整等がみられる。

Ⅲ類　口径13cm前後と比較的小型のもの。坏体部はⅡ類よりも更に直線的に外傾し開く。脚部上半は円筒状を呈し、中央よりやや下位に段を持ち、段以下が裾状に開く。尚脚上半の円筒状の部分は大半に粘土が充填されており、Ⅰ・Ⅱ類の脚部が中空をなすのに対し著しい相違を示している。また、脚の段部は同時に裾部との接合部位でもある。

器面調整の技法としては、坏部器外面が口縁・体部ともに篦ミガキ調整が施されるが、段部に沿って横ナデ調整の痕跡が残っているので、篦ミガキ調整の前に横ナデ調整が施された可能性がある。

脚部上半は篦削り調整の後に篦ミガキ調整が施され、段以下の裾部には横ナデ調整が施される。脚部内面は、裾部には外面と同様横ナデ調整が施され、それより上方の天井部ともいうべき部分には、刷毛目調整の後に篦ミガキ調整や篦による強いナデツケの調整が加えられる。

片口型　片口型の土師器は３点出土している。２棟の竪穴住居跡からの出土しかみておらず、あるいはあまり普遍的な存在を示すものではないかもしれない。器形上の特徴から２類に大別できる。

Ⅰ類　球形に近い比較的高い器高を示し(13cm前後)、やや内湾気味に直上する口縁を有する鉢型土器の口縁の一部を外方に圧して片口（注口）部分を作り出したもの。口縁部と体部は、その境界の段乃至稜によって区別し得る。底部形状は、甕のそれと同様にやや突出した感じの平底であろうが、二例ともに剝落しており、詳細はわからない。但しその剝落の状況は、両者ともにやや上方に向かってドーム状になっており（揚げ底風)、製作時の何らかの特別な技法を示すものかもしれない。

器面調整の技法としては、器外面に於いては口縁部横ナデ調整後一部篦ナデ調整、体部に縦方向の刷毛目調整後一部篦ナデ調整を実施しているものと、刷毛目調整後縦方向の篦ミガキ調整を加えるもの等がある。器内面では、口縁部は外面同様横ナデ調整、体～底部には横方向の刷毛目調整後横方向の篦ナデ調整が加えられる。

Ⅱ類　器高３cm、口径８cm前後の浅い坏様の土器の口縁の一部をⅠと同様に圧して片口（注口）部分を作り出したもの。

器面調整の技法は、器外面では風化のため体部のそれの判定は不可能であるが、底面には篦ミガキ調整が加えられている。器内面では、横方向の刷毛目調整が器壁に沿って一段施される。

鉢　型　１点のみの出土。適当な名称を知らないので、一応鉢型と呼称しておく。(揚げた実測図は破片からの図上復元であるので、体部の外傾の度合は必ずしも正確ではないであろう。

もっと開いて器高が低くなるとしたならば、甑型の一部のものに類似してくるであろうが、一応鉢型としておく。）底部は欠失して不明であるが、あまり大きくはならないと思われる。

器面調整の技法としては、器外面では全面に縦・斜方向の刷毛目調整が施され、その後に口唇直下のみに幅の狭い横ナデ調整が加えられている。器内面は、全面に横位の刷毛目調整が実施される。

3. 須恵器　須恵器は、竪穴住居跡から若干量が出土しているにすぎないので、本遺跡の遺物の主体を構成するとは言い難い。しかし、少量ではあるがその出土状況は、ロクロ不使用段階での土師器の中に於けるやや特異な存在として出土したり、あるいはロクロ使用が定着した段階のセットの1つとして出土したりしているので、その持つ意義は大きい。

出土した器種は㈹甕と瓶、器種不明のものの3種である。

㈹甕　口縁部の破片1個体分である。図上復元による推定口径は40cm前後、器厚は約1cmである。外反する口縁の端部が肥厚し、そこが二段の段状に作り出されるが、その稜線はあまり鋭角的ではなく丸味を有している。ロクロ成形時の条線の他には特に目立った調整痕は残していない。

瓶　Bb06竪穴住居跡の床面より出土したもの。1点のみ。比較的小型ではあるが、胎土の質・焼成ともに非常に良好で、緻密で硬い。色調は濃い灰色。口頸部は欠失しているが、恐らくはあまり高く（長く）はならないであろう。丸底。

肩部にはロクロ成形痕たる細条線を留めるのみ。肩部直下から体部中央までに文様帯が区画される。文様帯の上・下限は、その両側を沈線状に凹めることによって強調されている隆線状のものによって区切られる。従って、上・下限ともに隆線状のものの両側には、工具でナデた痕跡が顕著に残存している。文様帯内部には、櫛描波状文が施文されている。また上限の隆線はそのまま注口周縁の隆帯へと連続する。体部下半から底部にかけては箆削り調整が入念に施され、丸底に仕上げられる。

器種不明のもの　底部小破片であるので器種は判然としないが、恐らく、壺乃至それに類したものになると思われる。Bg62竪穴住居跡の床面よりの出土。体部中央に沈線が繞らされ、その下にロクロ成形痕がみられ、体部下半には箆削りの痕跡が顕著にみられる。底面中央はへそ状に凹んでいる。沈線に接続する部分が屈曲しているので、恐らくその部分が肩部となるのであろう。

（註2）　甑の胎土には、色調が黄色で焼成が良好にもかかわらず比較的もろいという共通性があり、またその表面の剝離の状況にも共通性がみられることから、あるいは甑用の特別な素地粘土の選択・使用が行なわれた可能性がある。

（註3）　本類のII－Cとしたものと、甕のA－IIIとしたものの器形が極似するが、両者の区別は、甕A－III

類の口縁形態が所謂「外反」であるのに対し、壺II－C類のそれが前述したものであるところからつけた。II類は肩部に段を形成するが、丸底風のものはない。

（註４） 壺には器表面が膜状の剥離を示すものがあり、あるいは壺型土器の成形には、縄文式土器のそれにもみられるような一種の化粧粘土(Slip)の使用乃至、特別な素地粘土の選択・使用が行なわれたのかもしれない。

（註５） これらの調整は、調整を示すものとして言及されることの多い「回転篦削り」「手持ち篦削り」等のものとはかなり違っているように思われる。軽いナデといった感が強い。

尚、本類土器を土師器の何れに所属せしめるべきかについては、種々問題があるが、ここでは器面・須恵器の色調が所謂「くすべ色」をしておらず肌色がかった褐色をしていること、器内面に黒色処理・篦ミガキ等が施されていることをもって、一応土師器として取り扱った。

（２） 遺構に於ける各類土器の共伴関係

以上(1)に於いては今泉遺跡出土の土器を器種毎に分類し、その特徴を説明したが、次にこれらの土器群が各遺構内でいかなる共伴関係を示すかを検討し、分類された土器がいかなる組み合わせ・まとまりを持つかをみて行きたい。

今泉遺跡に於ける遺構は、その殆んどすべてを竪穴住居跡が占めることは既に述べたところである。従って本遺跡出土の土器群は、殆んどすべて竪穴住居跡出土のものということになる。しかもその出土状況には、覆土からよりも床面上から出土したものが圧倒的に多いという特徴がある。更に、床面上出土のものの多くが復元可能土器乃至完全土器であるという現象も顕著である。つまり、それらはその本来的な位置に近い状態で発見されたと解し得る可能性が大きい。極端な例では、甕がカマド中に据えられたまま検出されたり、甕の中へ甑が嵌め込まれたまま検出されたりしている。寧ろ甕にあっては、カマド中に据えられるか、あるいはカマド際に置かれた状態で検出されるのが普通であったといえよう。その他の器種についても、大略カマド周辺に集中して検出されることが多かった。但し、高坏や小型壺にあっては、カマドと反対側の壁（今泉遺跡にあっては大部分南壁）の中央部に発見される例があったことを挙げておく。これは要するに、今泉遺跡の竪穴住居跡出土の土器群相互は本来的な共伴関係を有すると見做してよい根拠に成し得るのである。(註6)

第24表は、今泉遺跡の各竪穴住居跡出土土器の各器種毎の個体数と各遺構内に於けるそれぞれの組成比率の一覧である。分類規準は(1)で述べたものである。尚、当然のことながら、組成比率については出土個体の絶対数がある程度以上なければその意味はないのであり、その点からはBd59とBg62の両竪穴住居跡の例が最も良好な資料といえ、Bh09・Ca18・Bf53・Bi15の各竪穴住居跡の例はそれに次ぐものといえよう。

以上の観点から第24表の結集を累積グラフ化したものが第26図である。前述の理由からBg62・Bd59・Bh09・Bf53の各住居跡の結果のみを掲げたし、また成形にロクロを使用している土器を主に出土する例の代表として、少量の出土ではあるがBd12竪穴住居跡の結果をも掲げた。

以下にBg62・Bd59両住居跡の結果をやや詳しく検討する。Bg62住居跡の器種毎組成比率は、甕50%・甑15%・壺５%・坏15%・高坏５%・片口型５%・鉢型なし・須恵器（一個体と見做して）５%である。高坏の比率がやや低い感があるが、その他についてはまずは妥当な線を示しているのではないかと思われる。

次にBd59住居跡のそれを示すと、甕50.3%・甑11.2%・壺なし・坏5.6%・高坏27.8%・片口型5.6%・鉢型と須恵器なしである。壺と坏がかなり少ない点と甕の中型のものが不足している点が異常に思われるが、その他は妥当な比率を示しているのではないかと思われる。

それにもかかわらず、この両者の組成比率（即ちグラフの線）にはかなりの類似性を感じさせるものがある。そこで次にはその相異点を中心に、やや詳しく両者を比較して行きたい。

甕に於いては、Bg62住居跡（以下住居跡は省略し略号のみで表記する）では、すべて肩部有段で無段のものは皆無、しかも器体の大きさがa～fまで万遍なく揃うのに対し、Bd59では僅かながらも肩部無段のものが入ってくることなどが挙げられる。

甑に於いては、器形・大小・器面調整の技法ともに非常によく類似するが、Bg62出土のすべてが体下端部の細孔を有するのに対し、Bd59ではそれらが皆無の点に相異がある。

壺は両者とも非常に貧弱であり、Bg62に小型丸底風のものが一例あるにすぎない。あるいは壺が貧弱であるという事実に何らかの意味があるのかもしれない。

甕以上の大きな相異は、坏に於いてみられる。Bg62例ではA－Ⅰ－a類、A－Ⅱ－a類がみられるのに対し、Bd59に於いてはA－Ⅲ－c類がみられるのみである。換言すると、前者に於いては体部がやや内湾気味になるかあるいは外反する器形を有し、体部横ナデ・底部篦削りの調整が行なわれるのに対し、後者に於いては外傾する体部を持ち、体・底部ともに篦ミガキが施されることになる。

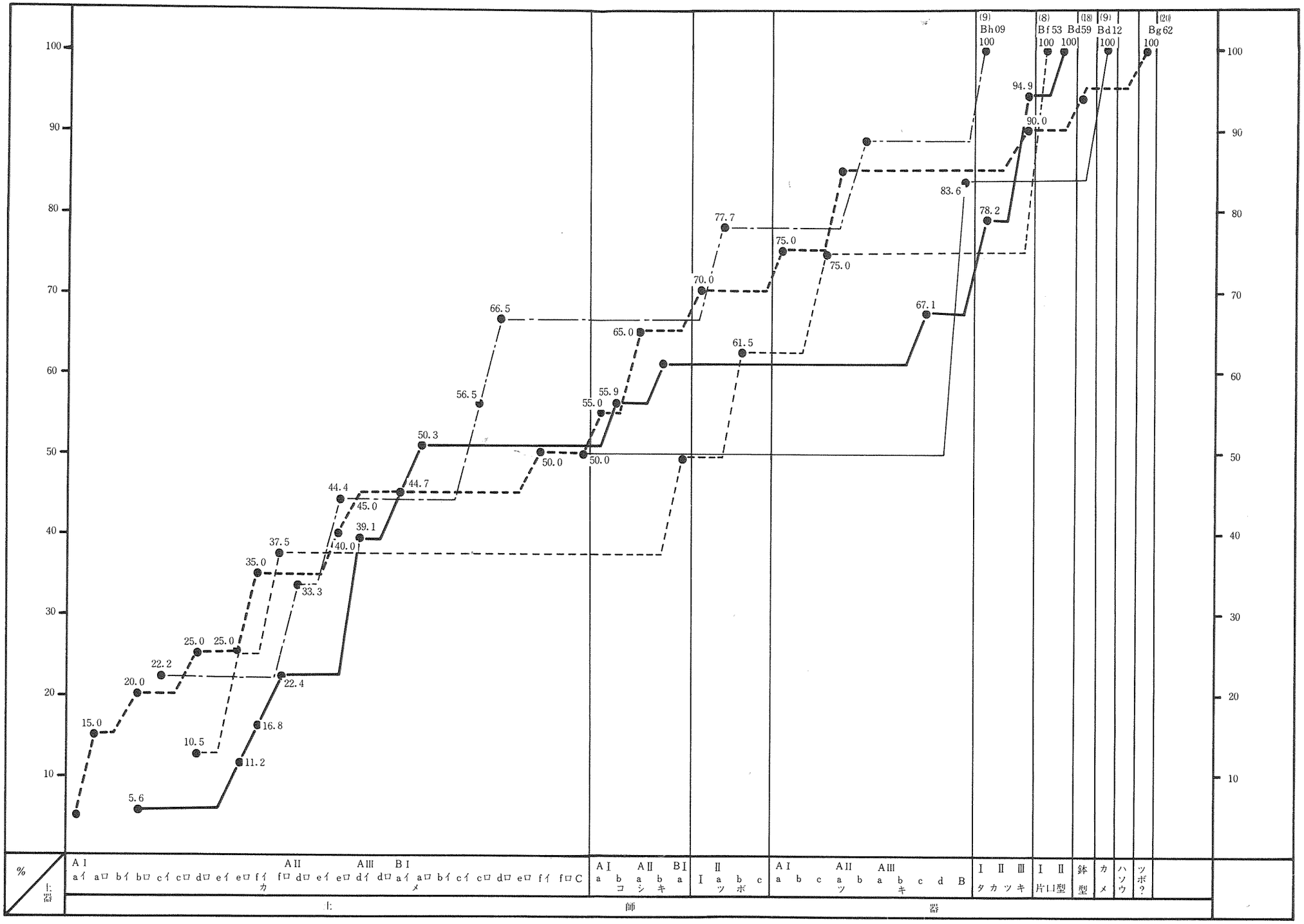
高坏については、Bg62ではⅢ類のみがみられ、Bd59ではⅠ・Ⅲ類が共伴する。しかし、これはもともと高坏は絶対数の少ない器種とも考えられるので、前者にⅠ類が欠落していることが直ちに本来的意味を持つかどうかは即断できないであろう。

片口型と鉢型については、両者ともに普遍性を欠く傾向があるので、前者がBd59に、後者がBg62に出土した事実のみを挙げておく。

以上が両者の近似点・相異点のあらましである。これらからすると、両者は非常に近似した関係（生産活動的な側面）にあるが、坏・甕等にみられる微妙な相異点から、やや時間的な相異を内包するとしてよいのではないかと思われる。このことは、遺構配置の面からも頷けよう。つまり、この両竪穴住居跡は今泉遺跡に於いては最大級に属するものの２つであるが、空間的にはほぼ南北に隣接している。従って、このような大規模な住居が２個同時に存在することは、その他の竪穴住居跡との関係をも考慮するとかなり考えにくいと言えよう。

第24表　各遺構の器種別個体数と組成率　No. I

	土師器																																																		須恵器				計
	カメ																										コシキ					ツボ				ツキ										タカツキ			片口型		鉢型	カメ	𤭯	ツボ(?)		
	AI aイ	aロ	bイ	bロ	cイ	cロ	dロ	eイ	eロ	fイ	fロ	AII dロ	eイ	eロ	AIII dイ	dロ	BI aイ	aロ	bイ	cイ	cロ	dロ	eロ	fイ	fロ	c	AII a	b	AI a	b	AI a	I	Aa	b	c	AI a	b	c	AII a	b	AIII a	b	c	d	B	I	II	III	I	II						
Bh 09					2 22.2							1 11.1 33.3		1 11.1 44.4							1 11.1 55.5	1 11.1 66.6											1 11.1 77.7							1 11.1 88.8						1 11.1 100										9
Ca 18			1 14.3		1 14.3 28.6	1 14.3 42.9																						1 14.3 71.5										1 14.3 85.8			1 14.3 100															7
Bb 06																																			1 33.3							1 33.3 66.6											1 33.3 100			3
Bf 53							1		1		1																				1 12.5 50.0			1 12.5 62.5				1 12.5 75.0																		8
Bf 09																																	1 25.0						1 25.0 50.0							1 50.0 100										4
Cb 24													1 20.0																				1 20.0 40.0			1 20.0 60.0					1 20.0 80.0											1 20.0 100				5
Bc 71				1 33.3																								1 33.3 66.6														1 33.3 100														3
Bc 53																																			1 50.0 100																					2
Bi 24	1 25.0					1 25.0 50.0		1 25.0 75.0		1 25.0 100																																														4
Bd 03	1 20.0																			1 20.0 40.0							20.0 80.0							20.0 100																						5
Bi 15					1 16.7							1 16.7 33.4			1 16.7 50.1				1 16.7 16.8				1 16.7 83.5	1 16.7 100																																6
Ai 65				1 25.0																															1 25.0 50.0						1 25.0 75.0						1 25.0 100									4
Bd 59				1					1 5.6 11.2	1 5.6 16.8	1 5.6 22.4				3 16.7 39.1		1 5.6 44.7	1 5.6 50.3										1 6.6 55.9		1 5.6 61.5						1 5.0 75.0			1 10.0 85.0				1 5.6 67.1			2 11.1 78.2		1 5.0 90.0		1 5.6 100	1 5.0 95.0			1 5.0 100		18
Bg 62	1 5.0	2 10.0 15.0		1 5.0			1 5.0 25.0			2 10.0 35.0				1 5.0 40.0	1 5.0 45.0									1 5.0 50.0			1 5.0 55.0		2 10.0 65.0			1 5.0 70.0				1 5.0 75.0			1 10.0 85.0		1 25.0 75.0		1 33.3 66.6				1 33.3 100	1 5.0 90.0			1 5.0 95.0			1 5.0 100		20
Bh 71				1 33.3																																							1 5.6 67.1			2 11.1 78.2	1 33.3 100	3 16.7 94.9		1 5.6 100						3
Bd 12																										3 50.0																	1 33.3 66.6		2 33.3 83.3		1 33.3 100					1 16.6 100				6
Ai 62																										2 50.0																			2 33.3 83.3							1 16.6 100				4
計	3	2	1	5	4	2	2	1	2	4	3	2	1	2	5	0	1	1	1	1	1	1	1	3	1	5	2	3	2	1	1	1	3	2	3	2	0	2	3	1	3	2	2	0	2 50.0 4	5	2	4	2	1	1	2	1	1		111



第26図　各遺構の器種別個体数と組成率No.2

次に土師器と須恵器の共伴関係についてみると、Bb06・Bg62・Cb24・Bd12・Ai62に於いてそれらがみられる。但し、前三者と後二者では、その共伴関係の意味は根本的に異なる。それは前三者に於いては須恵器甕・壺（？・破片）・甕（破片）等が例外的な存在としてロクロ不使用の土師器に共伴するのに対して、後二者では須恵器の器種・量が増加し、しかも土師器にもロクロが使用されているのである。よって、前三者と後三者とは、その歴史的段階を明らかに異にすると見做し得るのである。

（註６）　如上の器種による遺構内での分布の相異が何を示すのかは、充分に検討されてよい課題であろう。そのような意味で、各遺構平面図中に土器の出土位置をも示しておいた。また、本遺跡に於ける土器の出土状況がそのプライマリーなものを示すことが多そうであるという現象の持つ意味は何か、という問題についても充分に検討されるべき事項であろう。

（註７）　但し、この点については後者の例の中に体下端部を一部欠失しているものがあるので、絶対的な相異と見做せない可能性もあるにはある。

（註８）　但し、壺的な機能（一般に貯蔵といわれる）を果たす他の容器（例えば須恵器甕・壺等）を欠く事実を考えると、あるいは甕Ａ－Ⅲ類としたものにその機能を求められるかもしれない。（甕Ａ－Ⅲ類を壺としなかった理由は既に述べた）。

（３）　土器の器面調整技法の検討

以上の分類は器形上の特徴に、よりウェイトを置いたものであった。以下には土器の部位毎に器面調整技法を観察し、前述の組成の分析結果との関連性を検討してみる。この場合、少なくともBd12㈱とAi62の両者とそれ以外の竪穴住居跡との間には技術上決定的な違いがあることは既述の通りであるので、以下の観察はロクロ不使用の遺物（特に土師器）を主体的に出土する遺構にのみ限定して行なう。 従って須恵器が出土するが、Bb06・Bg62・Cb24も当然その対象となる。

第25表がその一覧であるが、先と同様器種毎に検討する。

甕　肩部の有無の状況は、遺構によってまちまちである。有段のみ、有段・無段混在の例がある。

最大径部位は口縁に一致するものが基本であるが、体部中央にあるもの・球形の体部をなすものと共伴する例が多い。つまり、Ⅰ・Ⅱ・Ⅲはセットをなすと考えられるのではないだろうか。

器体の大小は①～⑥まで揃うのが基本形と考えられる。

器面調整技法は、口縁は内外ともに刷毛目調整の後横ナデ調整が行なわれる。例外としては、口縁下半から段に至るまでの部分に鋸歯状の沈線文を施したものが一例ある。従って、口縁の技法の項目は設けなかった。体部調整技法では、刷毛目調整のみのもの・刷毛目プラス箆ミガ

	口頸部	肩部	底部	大小(口径)	技法 口頸	技法 肩部	技法 体部	技法 底部
壺	① 外反 ② 直口～内湾	① 有段 ② 無・段	① 平底 ② 丸底風	① 10cm前後 ② 15cm以上	① ナデ ② ミガキ ③ ケズリ ④ 刷毛目	① ナデ ② ミガキ ③ ケズリ ④ 刷毛目	① ナデ ② ミガキ ③ ケズリ ④ 刷毛目	① ナデ ② ミガキ ③ ケズリ ④ 刷毛目 ⑤ 木葉痕

	坏部 口縁	坏部 口・体部境界	坏部 内面くびれ	脚部 中央部	脚部 脚高／坏高	備考
高坏	① 外傾 ② 直口	① 有段 ② 無段	① 有 ② 無	① 有段 ② 無段	① 1.5 ② 1.3 ③ 1.4	内面黒色処理はすべてにみられる。破片は無視。

	口縁	肩部	最大径部位	大小(器高)cm	技法	細孔	
甕・甑	① 外反 ② 直口	① 有段 ② 無段	① 口縁 ② 体部 ③ 体部(球形)	① 15 以下 ② 16 ～ 20 ③ 21 ～ 24 ④ 25 ⑤ 26 ～ 30 ⑥ 30 以下	㋑ 刷毛目＋ミガキ・ケズリ ㋺ 刷毛目主体	① 有 ② 無	細孔の有無は甑についてのみ。

	口縁	口・体底部境界	境界の部位	内面くびれ	大小(口径)cm	技法 体部	技法 底部	技法 内面黒色処理	備考
坏	①外傾 ②外反 ③直口～内	① 有段 ② 無段	①中央 ②中央よりやや下位 ③下位	① 有 ② 無	①10 前後 ②14 ～ 16 ③18 ～ 20 ④20 ～ 22 ⑤24 前後 ⑥27 以上	①ナデ ②ミガキ ③ケズリ	①ナデ ②ミガキ ③ケズリ ④刷毛目	※ ① 有 ② 無	※稀に黒色処理のないものが存在するので設定した。

第25－Ⅰ表　器面調整技法一覧表分類基準

キ・篦削り・篦ナデ調整のものが併存するのが常態らしい。

その他、特に顔料使用の事例などは皆無である。

甑　肩部有段のものと無段のものがあり、器体の比較的大きなものと小さなものがセットをなすようである。器形・器面調整技法等共通点が多い。そのうちで顕著な相異は、一部疑問があるが、体下端部の細孔の有無であろう。

壺　出土量が少ないので限界がみえるが、遺構により器体の大小に相異があると考えることができよう。

器面調整の技法は、基本的には口縁（口頸）部横ナデ、肩部以下は刷毛目後篦ミガキの各調整である。

坏　比較的相異点が多い。体部形態は①のみ、②のみ、①＋②、①＋③の組み合わせ、③のみがある。②と③の組み合わせがないのが注目される。

体・底部境界の段の部位は、器体中央よりやや下位になるのが原則であり、例外は下か中央方に偏した一例のみ。器体の大小は、一遺構内ではあまりばらつきがみられず、比較的類似した大きさのものになるといってよい。

器面調整の技法は、体部と底部のそれを組み合わせて考える。技法の組み合わせとしては、

① 体部横ナデ、底部篦削り

② 体部横ナデ、底部篦ミガキ

③ 体部横ナデ　底部刷毛目

第25－2表　器面調整技法一覧表

土師器　カメ

遺構	口縁①	口縁②	肩部①	肩部②	最大径部位①	最大径部位②	最大径部位③	大きさ①	大きさ②	大きさ③	大きさ④	大きさ⑤	大きさ⑥	技法①	技法②	その他①	その他②
Bh 09	○		○			○					○			○			○
	○		○			○						○		○			○
	○		○		○					○					○		○
	○		○		○					○				○			○
	○				○					○					○		○
	○				○						○			○			○
Ca 18	○		○		○					○				○			○
	○		○		○				○						○		○
	○		○		○					○					○	○	
	○		○		○								○	○			○
Bb 06																	
Bf 53	○		○		○						○			○			○
	○		○		○							○		○			○
	○		○		○								○	○			○
Bf 09																	
Cb 24	○		○		○	○									○		○
Bc 71	○		○		○				○					○			○
Bc 53	○			○		○							○	○			○
Bi 24	○		○		○			○							○		○
	○		○		○					○				○			○
	○		○		○							○			○		○
	○		○		○								○		○		○
Bd 03	○		○		○			○							○		○
	○			○	○					○					○		○
	○			○									○		○		○
														○			
															○		
Bi 15	○		○			○					○				○		○
	○		○		○					○					○		○
	○			○	○				○						○		○
	○			○		○							○		○		○
	○			○	○							○		○			○
	○		○				○				○				○		○
Ai 65	○		○		○				○					○			○
															○		○
															○		○
															○		○
Bd 59	○			○	○			○						○			○
	○			○	○			○							○		○
	○		○		○				○					○	○		○
	○		○		○								○	○	○		○
	○		○		○							○		○			○
	○		○		○								○		○		○
	○		○				○				○				○		○
	○		○				○				○				○		○
	○		○				○						○		○		○
Bg 62	○		○		○								○		○		○
	○		○		○								○		○		○
	○		○		○				○		○				○		○
	○		○		○				○					○			○
	○		○		○			○						○			○
	○		○		○			○						○			○
	○		○		○			○							○		○
	○		○			○						○		○			○
	○			○		○							○	○			○
	○		○				○				○				○		○
Bh 71	○	○	○		○				○					○			○

土師器　コシキ

遺構	口縁①	口縁②	肩部①	肩部②	最大径部位①	最大径部位②	最大径部位③	大きさ①	大きさ②	大きさ③	技法①	技法②	細孔①	細孔②
Bh 09														
Ca 18	○		○		○			○				○		○
Bb 06														
Bf 53	○			○	○			○		○	○	○	○	○
Bf 09														
Cb 24														
Bc 71	○		○		○			○				○		○
Bc 53														
Bi 24														
Bd 03	○		○		○			○				○	○	
Bi 15														
Ai 65														
Bd 59	○		○		○			○			○			○
	○			○	○				○			○		
Bg 62	○		○		○				○			○	○	
	○		○		○				○		○		○	
	○		○	○	○			○				○	○	
Bh 71														

土師器　ツボ

遺構	口頸①	口頸②	肩部①	肩部②	底部①	底部②	大小①	大小②	口頸技法①	口頸技法②	口頸技法③	口頸技法④	肩部技法①	肩部技法②	肩部技法③	肩部技法④	体部技法①	体部技法②	体部技法③	体部技法④	底部技法①	底部技法②	底部技法③	底部技法④	底部技法⑤
Bh 09		○		○	○		○		○					○				○				○			
Ca 18																									
Bb 06			○																	○					○
Bf 53	○		○		○		○		○							○				○					
Bf 09					○		○													○					
Cb 24		○	○		○		○			○				○				○				○			
Bc 71																									
Bc 53		○	○		○			○	○																
Bi 24																									
Bd 03		○	○		○		○		○					○				○							○
Bi 15																									
Ai 65						○												○				○			
Bd 59																									
Bg 62	○		○			○	○			○				○				○						○	
Bh 71																									

土師器　ツキ

遺構	体部①	体部②	体部③	境界①	境界②	境界③	その部位①	その部位②	その部位③	くびれ①	くびれ②	大小径①	大小径②	大小径③	大小径④	大小径⑤	大小径⑥	体部技法①	体部技法②	体部技法③	底部技法①	底部技法②	底部技法③	底部技法④	黒色処理①	黒色処理②	その他①	その他②
Bh 09		○		○			○			○						○			○			○			○			○
Ca 18			○	○			○	○			○	○						○					○			○		○
	○			○				○		○			○						○			○			○			○
Bb 06			○	○				○		○							○		○				○		○			○
Bf 53	○			○			○				○	○							○			○			○			○
Bf 09		○		○				○		○				○				○					○		○			○
Cb 24	○			○			○			○		○						○						○		○		○
			○	○				○		○			○					○					○		○			○
Bc 71			○	○				○		○				○					○				○		○			○
Bc 53																												
Bi 24																												
Bd 03																												
Bi 15																												
Ai 65			○	○				○		○				○				○					○		○			○
			×	×				×		×				×					×			×			×			×
			×	×				×			×			×					×			×			×		×	
Bd 59			○	○				○		○					○				○			○			○			○
Bg 62		○		○				○		○				○				○				○			○			○
		○		○					○	○					○			○					○		○			○
	○			○				○		○			○					○					○		○			○
Bh 71			○	○				○		○							○		○			○			○			○

土師器　タカツキ・片口・鉢／須恵器

遺構	タカツキ 口縁①	口縁②	境界①	境界②	くびれ①	くびれ②	脚の段①	脚の段②	脚／坏①	脚／坏②	脚／坏③	片口	鉢	須恵器 ツボ	須恵器 𤭯	須恵器	備考
Bh 09								○		○							
Ca 18																	
Bb 06															○		
Bf 53												○					
												○					
Bf 09		○	○		○			○		○							
Cb 24																	
Bc 71																	
Bc 53																	
Bi 24																	
Bd 03																	
Bi 15																	覆土より内黒・ナデ／ケズリ・ナデ(?)／刷毛目の坏出土。
Ai 65	○		○		○		○				○						×は覆土出土例
Bd 59	○		○			○	○			○							
	○		○			○	○			○							
	○		○			○	○			○							
		○	○		○			○		○							
								○		○							
													○				
Bg 62	○		○			○	○			○			○	○			須恵器の器種は推定。
													○				
Bh 71								○			○						

④　体部筅ミガキ、底部筅ミガキ

⑤　体部筅ミガキ、底部筅削り

の5種がある。これらの遺構内に於ける組み合わせには、

ⓐ　①のみ

ⓑ　①+②（①>②）

ⓒ　③+①（③=①）

ⓓ　④のみ

ⓔ　④+①（④=①）

ⓕ　⑤のみ

の6種類がある。これらから、各遺構をⓐ・ⓑを主にするものと、ⓓ・ⓔ・ⓕ的なものにまとめることができそうである。

その他の技法、特に器内面の筅ミガキ・黒色処理は施されるのが原則であるし、くびれについても同様である。

文様は特に施されないのが原則であるが、斜格子目状の沈線文が施される一例が存在することには既に触れた。

高坏　器面調整の点からあらためて触れるべきことは特にないので、組み合わせについてのみ再述しておく。

①　Ⅰ・Ⅲ類共伴

②　Ⅲ類のみ

③　Ⅱ類のみ

であるが、①の例が存在することは重要であろう。

片口型と鉢型のものについては、他の土師器とセットをなす一器種であることを指摘するに留める。

須恵器

聰　Bb06の床面から、壺Ⅱ－C・坏A－Ⅲ－C類に共伴した。

壺(?)　Bg62の床面出土。破片のため正確な器種は不明。

甕(?)　Cb24の床面出土。破片のため正確な器種は不明だが、内面に所謂「青海波」文があり、甕か坏A－Ⅰ－a・A－Ⅲ－a類に共伴。

以上が技法の特徴の概略である。これらからみた限り、今泉遺跡の各竪穴住居出土の遺物は、それぞれの器種に於いてよく似た内容を示しているといえよう。特に、意図的に採用してきた「異技法の共伴関係の重視」という観点を組み入れると、それらの間の相異はますます小さくみえてくる。従って既に指摘した通り、各竪穴住居は非常に近似した時間の枠内におさまると

の解釈も可能になる。とはいっても、これだけの数が同時に存在することは不可能なのであって、以下には坏を手掛りとしてこれらを編年的に考察していきたい。その他の器種についてはその結果を敷衍していきたい。

（4） 土器の編年的考察

本遺跡出土土器は大略以上のようなものである。これらはすべて遺構内からの出土であり、それぞれがセットの主体乃至セットの一部をなすと見做されてよいものであることは既に触れた。次に、これらの土器群なかんずく土師器がいかなる編年的位置を占めるかについて、従来の型式標準やその他類似遺跡に於ける土師器のあり方を参考にしながら考察していきたい。

東北地方古代の土器のうち、まず土師器の編年研究については、その南部に於いては氏家和典氏の業績が、(注9) その北部については桜井清彦・草間俊一両氏の業績が古くより知られ、(注10)(注11) その大綱がたてられたといってよい。

その後前記氏家氏の一連の研究、(注12) 及び小笠原好彦・阿部義平、桑原滋郎氏などの研究によって、(注13) あるいはまた東北各県に於ける古代城柵・官衙址研究の進展によりて、その詳細化といっそうの肉づけが行なわれてきたといえる。

一方、須恵器の特に坏については、岡田茂弘・桑原滋郎両氏の研究によりかなり詳細な編年体系がたてられ、(注14) また須恵器と土師器を組み合わせとして一体視する視点の確立などによって(注15)(注16) 今後いっそうの進展が期待される。

これらを踏まえて今泉遺跡出土土器を整理したものが第26表である。これをもとにして今泉遺跡出土の土器を編年的に説明し、併わせて問題点をも指摘したい。尚、視覚的に示した方がわかりやすいので、第25表を配列換えしたものを第26表とした。

1．土師器の編年上の位置について

既に触れてきた通り、本遺跡出土のロクロ不使用土師器群を主体とする土器群は非常に強い類似性を持ち、存続期間の幅があまり広くないものと見做し得る。これらのまとまりを有する土器群は、従来の型式観・編年観を採用すると、栗囲式に最も類似するものである。従って本群土器の編年上の位置を以上の時期と考えておく。絶対年代も従来の見解の通り7世紀代を中心とする時期を想定しておく。

但し、若干詳細に遺物を検討し、更に東隣の膳性遺跡に於ける遺構変遷上の知見を採用すると、本遺跡の遺構・遺物は二分することも可能のようである。遺構変遷上の知見については別に触れたので、遺物についてそれを述べる。二大別を遺構で示す。

前半期……Ai 65(旧)・Bc71・Bd03・Bf09・Bf53・Bg62・Bh09・Bi15・Cb24　　計9棟

後半期……Ai65(新)・Bb06・Bc53・Bd59・Bi24・Bh71・Ca18　　計7棟

第26表　遺構毎出土遺物一覧

種類	土師器																																																																																																	須恵器			備考
器種	カメ																	コシキ														ツボ																									ツキ																												タカツキ											片口	鉢	ツボ	𤭯		
部位	口縁		肩部		最大径部位			大きさ						技法		その他		口縁		肩部		最大径部位			大きさ			技法		細孔		口頸		肩部		底部		大小		口頸技法				肩部技法				体部技法				底部技法					体部			境界			その他部位			くびれ		大小径						体部技法			底部技法				黒色処理		その他		口縁		境界		くびれ		脚の段		脚／杯								
内容／遺構	①	②	①	②	①	②	③	①	②	③	④	⑤	⑥	①	②	①	②	①	②	①	②	①	②	③	①	②	③	①	②	①	②	①	②	①	②	①	②	①	②	①	②	③	④	①	②	③	④	①	②	③	④	①	②	③	④	⑤	①	②	③	①	②	③	①	②	③	①	②	①	②	③	④	⑤	⑥	①	②	③	①	②	③	④	①	②	①	②	①	②	①	②	①	②	①	②	①	②	③						
Bf 09																																				○		○													○							○		○				○		○				○				○					○		○			○		○	○		○			○		○							
Bg 03	○		○		○								○		○		○	○		○		○				○			○	○		○		○			○	○			○				○				○						○			○		○				○		○				○				○				○			○			○	○		○			○	○			○			○	○			須恵器の器種は推定
	○		○		○								○		○		○	○		○		○				○		○		○																												○		○					○	○					○			○					○		○			○													○				
	○		○		○										○		○	○		○		○			○				○	○																											○			○				○		○			○					○					○		○			○																	
	○		○		○				○					○			○																																																																				
	○		○		○			○						○			○																																																																				
	○		○		○			○						○			○																																																																				
	○		○		○			○							○		○																																																																				
	○		○	○		○						○		○			○																																																																				
	○			○		○							○	○			○																																																																				
	○		○				○				○				○		○																																																																				
Bd 03	○		○		○			○							○		○	○		○		○			○				○	○		○	○	○		○		○		○					○				○				○			○																																													
	○			○	○					○					○		○																																																																				
	○			○		○							○		○		○																																																																				
														○																																																																															
															○																																																																														
Cb 24	○		○			○						○		○	○		○																○	○		○		○			○				○				○				○				○			○			○			○		○						○						○		○		○																	
																																																											○	○				○		○			○					○					○		○			○																	
Bi 15	○		○			○					○			○	○		○																																																																				覆土より内黒・ナデ・ケズリ・ナデ(?)刷毛目の坏出土。
	○		○		○										○		○																																																																				
	○			○	○				○						○		○																																																																				
	○			○		○							○		○		○																																																																				
	○			○	○							○		○			○																																																																				
	○		○				○				○				○		○																																																																				
Ai 65	○		○		○				○					○			○																				○												○				○						○	○				○		○				○				○					○		○			○	○		○		○		○				○						×は覆土出土例。
															○		○																																										×	×				×		×				×					×			×			×			×																	
															○		○																																										×	×				×			×			×					×			×			×		×																		
															○		○																																																																				
Bc 71	○		○		○				○					○			○	○		○		○			○				○		○																												○	○				○		○				○					○				○		○			○																	
Bf 53	○		○		○						○			○			○	○			○	○			○				○	○			○	○		○		○		○							○				○						○			○			○				○	○							○			○			○			○												○					
	○		○		○							○		○			○																																																															○					
	○		○		○								○	○			○																																																																				
Bh 09	○		○			○					○			○			○																○	○	○	○		○		○					○				○				○					○		○			○			○					○				○			○			○			○								○		○							
	○		○			○						○		○			○																																																																				
	○		○		○					○					○		○																																																																				
	○		○		○					○				○			○																																																																				
	○			○	○					○					○		○																																																																				
	○			○	○						○			○			○																																																																				
Bi 24	○		○		○			○							○		○																																																																				
	○		○		○					○				○			○																																																																				
	○		○		○							○			○		○																																																																				
	○		○		○								○		○		○																																																																				
Bc 53	○			○		○							○	○			○																○	○		○			○	○					○					○																																																			
Bb 06																																				○															○					○			○	○				○		○							○		○				○		○			○															○		
Bd 59	○			○	○			○						○			○	○																																									○	○				○		○					○				○			○			○			○	○		○			○	○			○							
	○			○	○			○							○		○	○																																																																			○		○			○	○			○							
	○		○		○				○					○	○		○																																																																						○		○			○	○			○							
	○		○		○								○	○			○																																																																					○	○		○			○		○							
	○		○		○							○		○			○																																																																																			○		○							
	○		○		○								○		○		○																																																																				
	○		○				○				○				○		○																																																																				
	○		○				○				○				○		○																																																																				
	○		○				○						○		○		○																																																																				
Ca 18	○		○		○					○				○			○	○		○		○			○				○		○																												○	○			○				○	○						○					○			○		○																	
	○		○		○				○						○		○																																								○			○				○		○			○						○			○			○			○																	
	○		○		○					○					○	○																																																																					
	○		○		○								○	○			○																																																																				
Bh 71	○		○		○				○					○			○																																										○	○				○		○							○		○			○			○			○								○			○						

（仮称）前半期

（同）後半期

両者の相異は、甕型に於いて最も顕著である。即ち、前者には肩部無段で胴部最大径が胴部中央から下半にくるものを含み、後者は肩部有段が大半を占め、胴部最大径は肩部に一致し底部も明確に突出する。従来の型式観の住社式により近いものをも含むものが前者ということになる。

坏に於いてはその数が少ないが、体部上半のナデ調整が前者により多く存在するともみれる。しかし、ミガキ技法も存在することは既に何度も触れてきた通りである。

以上二大別は可能であるが、この両者を異型式とすべきか否かは現状では不明である。該期の土器群は今後細分可能とのみ述べるに留めておく。膳性遺跡にその種の良好な資料がある。

（註９）　氏家和典　東北土師器の型式分類とその編年　歴史14輯
（註10）　桜井清彦他　東北地方北部の土師器と竪穴に関する諸問題　舘址所収　1958年
（註11）　草間俊一　盛岡市史先史期　盛岡市史第一分冊所収　1958年
（註12）　氏家和典　陸奥国分寺跡出土の丸底杯をめぐって　－奈良・平安期の土師器の諸問題－
（註13）　小笠原好彦・阿部義平　宮城県新田遺跡の土師器　考古学雑誌54－２　日本考古学会　昭和43年
（註14）　宮城県文化財調査報告書35集　東北新幹線関係遺跡調査報告書Ⅰ
同24集　東北自動車道関係遺跡発掘調査概報　－刈田郡蔵王町地区－
（註15）　岡田茂弘・桑原滋郎　多賀城周辺における古代杯形土器の変遷　研究紀要Ⅰ．多賀城碑特集
宮城県多賀城跡調査研究所　1974年３月
（註16）　工藤雅樹・桑原滋郎　東北地方における古代土器生産の展開　考古学雑誌第57巻第３号
昭和47年２月

２．須恵器(聰)の編年上の位置について

この資料は口頸部以上を欠失するので若干の疑義は残るが、東北地方に於ける須恵器在地生産開始期にほぼ近い編年上の位置を占めると思われる。類似した器形を持つ資料は、仙台市大蓮寺窯跡・福島市稲荷塚古墳・福島県下入ノ内遺跡１号住居跡等にみられる。これらの絶対年代は５世紀後半～６世紀前半代と想定されている。尚、本県に於ける同期の可能性ある資料としては、金ヶ崎町高野原出土の高坏がある。

前記の下入ノ内遺跡は５世紀中葉末と想定され、かつ共伴土師器は南小泉式である。それに対して本遺跡の共伴土師器は明らかに栗囲式類似のものであり、須恵器と土師器の年代間に大きなギャップがある。この現象の背景の究明は、〝伝世〟の可能性をも含めて今後慎重に行なわれなければならないが、奈良時代以前に於ける集落出土の〝特異な遺物〟のあり方の類例を蓄積すること、それらと古墳副葬品とを比較することなどがまず行なわれるべき必要な手続きであろう。

（註17）　本資料については林謙作・渡辺泰伸・中村浩・伊藤博幸・宮城県文化財保護課・同多賀城跡調査研究所・東北歴史資料館・仙台市教育委員会の諸氏・諸機関から多大の御教示を受けた。感謝する。

（註18）　渡辺泰伸　東北古墳時代須恵器の様相と編年－須恵器編年試論－　考古学雑誌第65巻第4号　昭和55年3月　下入ノ内遺跡　福島県文化財調査報告書第82集　伊達西部地区遺跡発掘調査報告　福島県教育委員会　昭和55年

〔2〕 鉄器・装飾品について

本遺跡出土の鉄器・装飾品類は第27・28表の通りである。以下には、これらに関連した若干の問題を指摘しておく。

(1) 出土頻度が他遺跡に比し高いと思われる。特定の遺構への集中出度の現象はみられず、ほぼ半数程度の遺構から出土している。(但し装飾品はBd03竪穴住居跡から若干多く出土しているかのようであるが、絶対数が少ないのでその判定は差し控える。) それは一応想定した新・古の両段階に於いて言える。同様のことは東隣の膳性遺跡に於いてもみられるとのことである。

一方、北隣の上餅田遺跡・猫谷地遺跡の同期の住居跡からは極めて稀な出土しかみられない。従って、本遺跡の〝豊富〟な鉄器出土例はやや特異に属するものと思われる。

(2) 末期古墳副葬品に共通する要素も併わせ持つものが存在する。本県内の末期古墳の副葬品をみると、玉類（勾玉・切子玉・臼玉・小玉・丸玉・管玉・緒占玉・土玉)、装身具その他(腕輪・耳環・鋳帯金具)、金属器(直刀・蕨手刀・鏃・鞘尻金具・刀子・斧・鉇・釣針・釵・刺突具・鍬鋤先・鎌・轡・鐙・鐶・鋲状・釘・その他不明)、鏡鑑類、銭貨類、紡錘車、土師器、須恵器（甕？・提瓶・その他）などが挙げられる。副葬品の豊富な器種に比し、集落内出土の貧弱さは当時の政治的・社会的状況の正確な反映であろうが、ここではそれには触れない。貧弱さの中に、副葬品に共通するものが存在する点に留意したい。それは東隣の膳性遺跡に於いては、圭頭太刀の一部や水晶製と思われる切子玉なども出土しており、その傾向はいっそう顕著である。また本遺跡に於ける聰、膳性に於ける高坏・短頸壺・高台付坏などのやや特異な器種からなる須恵器などのあり方も同様である。

以上のことから、本遺跡を含む地域の該期の集落に他地域とはやや異なる性格を想定することができよう。既に述べたBb06竪穴住居跡の年代の異なる須恵器の共伴現象も、この延長上で理解すべきかとも思われる。今後の資料の蓄積が、更に必要であろう。

（註１） 鉄器の定着自体は、既に塩釜式期（高山遺跡）に完了していたと思われる。本遺跡の時期に於ける鉄器の〝流通性〟の具体相については、今後解明すべき問題であるが、前記の副葬品と集落出土例の比較もその一助にはなろう。恐らく、製品の形での〝流通〟ではあったろう。

（註２） 奈良時代以前の集落跡出土に於ける鉄器の種別の中には、明白な斧・鍬先などは殆んどみられない。それらが顕著になるのは平安時代以降である。

第27表 鉄 器 一 覧 表

番号	遺構名	名称	長さmm	幅mm	厚さmm	出土層位	完・破	実測図	備考
1	Bc 53	刀子	65	15	6	覆土	破片	○	新
2	〃	刀子	55	15	3	覆土	破片	○	
3	〃	不明	42	30	20	床面	破片		
4	Cb 24	刀子	53	9	2	覆土	破片		古
5	Bf 09	鎌	170	30	4	床面	完全	○	古
6	〃	刀子	115	12	4	床面	破片	○	
7	〃	刀子	95	12	5	覆土	破片		
8	Bd 12	刀子	90	13	5	床面	破片	○	新
9	〃	刀子	61	8	4	床面	破片	○	
10	〃	鐶	13	7	2	床面	破片	○	
11	〃	釘状	147	6	6	床面	破片	○	
12	Ca 18	刀子	78	9	2	覆土	破片	○	新
13	Bf 53	不明	26	10	3	覆土	破片		古
14	〃	不明	40	30	1	覆土	破片		
15	Bd 03	刀子	48	12	3	覆土	破片		古
16	〃	不明	35	28	6	覆土	破片		
17	〃	刀子	115	10	3	床面	破片	○	
18	Bb 06	不明	35	25	10	床面	破片		新
19	Bd 59	釘	40		6	覆土	破片		新
20	〃	針	45		径25	床面	破片	○	
21	Bg 62	刀子	100	15	15	覆土	完全	○	古
22	〃	鐶	35	7	2	覆土	破片	○	
23	〃	針	52		径 3	覆土	完全	○	
24	〃	板状	35	26	5	覆土	破片		
25	Ai 65	釣針	42	4	2	覆土	破片	○	新
26	〃	刀子	59	12	15	覆土	破片	○	

第28表 装 飾 品 一 覧 表

番号	遺構名	名称	長さmm	径mm	重さg	材質	出土層位	実測図
1	Bd 03	管玉状	31	7	2.6	土製	床面	○
2	Bd 03	トンボ玉状	12	15	3	土製	覆土	○
3	Bd 03	花弁形	厚さ 4	15	1	石製	覆土	○ ※
4	Bh 09	トンボ玉状	6	8	0.5	土製	床面	○
5	Bb 06	管玉状	19	9	2.0	土製	床面	○

※石質……淡緑色細粒凝灰岩

〔3〕 石器類について

出土した石器類は第29表にまとめた。縄文時代石器の混入と思われるものは除外した。奈良時代以前のものは、砥石類のみである。Bb06竪穴住居跡のものは錘に類似するが、同様に砥石であろう。

〔4〕 土製品類について

紡錘車1とカマド支脚1である。紡錘車は奈良時代以前に通有の形状を有する。本県に於ける該期の出土例は極めて多く、かつ、県南・県北に於ける差異も殆んどない。該期に於ける繊維関係の労働のあり方を反映するものといえ、興味深い。

〔5〕 黒耀石について

覆土層中より18点を得た。その背景は不明であるが、埋土中に限定される点はその廃棄の時期を縄文時代以外に求めさせるものであり、若干興味深い点である。表を残す母岩に近いものと、フレイク・チップに近いものがある。

第29表 石 器 一 覧 表

番号	遺構名	名称	長さ mm	幅 mm	厚さ mm	重さ g	出土層位	実測図
1	Bc 53	砥石	65	60	29		床面	○a
2	Ca 18	磨製石斧	31	30	18		覆土	
3	Bb 06	石錘	55	23	径25	51.5	覆土	○b
4	〃	鏃	33	11	4		覆土	c
5	Bg 62	砥石	130	25	25		床面	○d
6	Bd 59	フレイク	62	40	18		覆土	○
7	〃	縦形石匙	61	16	5		覆土	

（質） a……流紋岩質凝灰岩　b……流紋岩質細粒凝灰岩　c……珪質泥岩
d……細粒石質凝灰岩（珪化している）

第30表 土 製 品 一 覧 表

番号	遺構名	名称	長さ mm	幅 mm	厚さ mm	重さ g	出土層位	実測図
1	Bd 03	紡錘車	上径32	下径46	18	46	床面	○
2	Bd 59	カマド支脚	114		径46	173	床面	○

本遺跡の周辺に於ける原産地には、国鉄折居駅西方の段丘崖がある。

古墳時代～奈良時代の遺跡に於ける黒耀石出土には、江別式などの所謂北方的要素を強く有する土器群の共伴現象が多く認められるが、本遺跡に於いてはその例にあたる土器類は未検出である。逆に、水沢市石田遺跡出土の江別式土器には黒耀石製石器は共伴しない。

（註１）　高橋文夫氏の教示により実査・確認・採集している。その他には以下の箇所が挙げられる。

第 31 表　黒 耀 石 一 覧 表

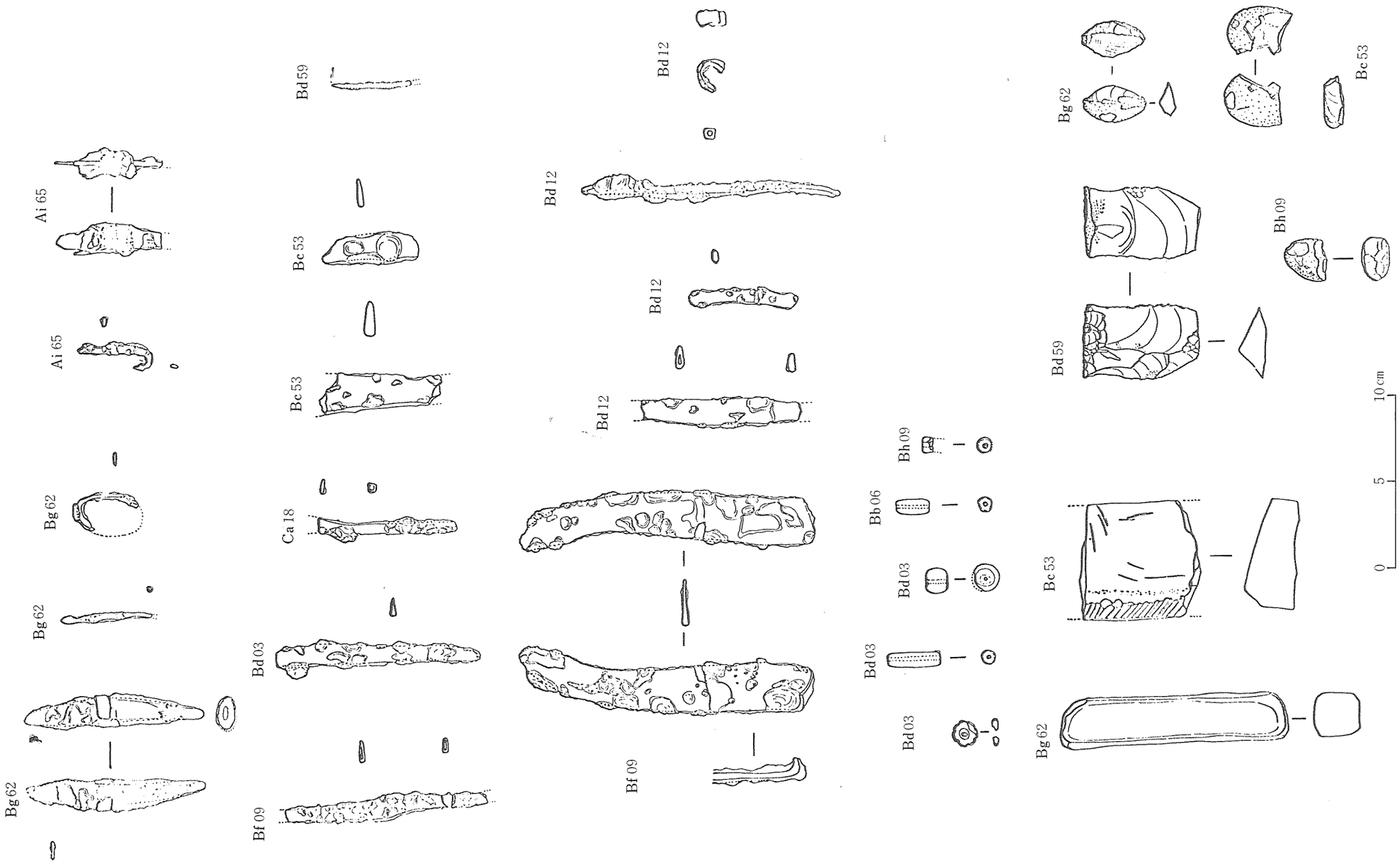
① 表皮を残すもの ……18
うち大型で母岩に近いもの…… 5
② フレイクとチップ ……13
} すべて覆土出土

番号	遺構名	①	②	計	番号	遺構名	①	②	計
1	Cb 24	3	2	5	6	Bb 06	1	0	1
2	Bd 03	4	0	4	7	Bh 09	1	0	1
3	Bg 62	5	3	8	8	Bi 15	1	0	1
4	Bc 53	2	3	5	9	Ca 18	3	0	3
5	Bd 59	2	0	2	10	Bi 24	0	1	1

Ca 09						Ca 18					
番号	重さg	たてcm	よこcm	厚さcm	備考	番号	重さg	たてcm	よこcm	厚さcm	備考
1	130	7	4.5	3		20	330	7.5	6.5	3.6	
2	300	8.5	7	2.8		21	105	6	4.4	2.0	
3	230	8	8	3		22	110	5.5	5	2.0	
4	75	7	4.5	2		23	175	7.2	5.2	2.0	
5	190	7.5	6	3		24	130	7.5	4.6	1.9	
6	300	9	8	3		25	125	7	4.5	2.1	
7	220	8.5	6	2.7		26	140	6	4.6	2.8	
8	240	8.5	7	2		27	25	4.7	3.3	1.2	
9	315	13.5	5	3.5	完全。凹み石？	28	160	8.7	5	2.3	
10	130	6.5	4.5	2.7		29	25	5	5	1.2	
11	215	11	5	2.2		30	100	6.7	5	2	
12	220	7.5	5.5	3.2		31	95	6.5	4.5	2.2	
13	30	5	3.4	1.5		32	70	8	4.2	1.6	
14	250	9.5	8	2.2		33	180	7.5	7	2.7	
15	90	8.5	4.5	1.5	完全						
16	80	6.5	4.7	1.7							
17	100	9.5	2.7	2.7							
18	75	5.7	4.3	2.2							
19	75	5.5	5	2.3							

第 32 表

破 砕 礫 一 覧 表



第27図　鉄器・装飾品・石器・黒輝石実測図

（註２）　花泉町飯倉地区の滝沢層の露頭・国鉄東北線「清水原」駅付近の五反田地内の段丘礫層中。…熊谷常正氏の教示による。また同氏は東北地方の黒曜石出土遺跡の集成を行なっている。

（註３）　和賀郡湯田町川尻の旧土畑鉱山付近。…八重樫良宏氏の教示による。

（註４）　雫石町橋場の小赤沢地内の段丘礫層中。…高橋与右衛門氏の教示による。　さらに佐藤二郎氏の教示によれば、岩手郡雫石町周辺の橋場層（新第三紀中新統最上部）は石英安山岩質凝灰岩と一部熔結凝灰岩などがあるが、その北部においてはその間に黒曜岩・松脂岩等の破片を混在するとのことである。したがって前記の小赤沢地内以外にも産出地が存在する可能性は大である。

〔6〕 破砕礫について

適当な名称を知らないので仮にこう呼ぶ。恐らくは楕円形に近い形状を有する板状礫を、二分割～四分割したものである。竪穴住居跡２箇所の覆土中から出土している。性格等は不明である。

類例は東隣の膳性遺跡にあり、竪穴住居跡の柱穴の掘り方中に集中して検出されている。柱材の押え役的な機能が想定されているらしい。相互の接合資料もあり、この想定は肯定されるべきものであろう。但し、同様の措置が取られる例は殆んどみられず、一種特異な構築法ではあろう。ちなみに膳性遺跡に於ける例（Ｄ－８住居跡）は、遺跡内に於ける最大規模のものである。これが単に建物の大小にのみ関係する措置か否かも、今後検討されねばならない。

（註）　㈶岩手県埋蔵文化財センター調査の「膳性遺跡Ｄ－８住居跡」。同センター鈴木恵治氏の教示を受けた。深謝する。

結　語

(1)　本遺跡は、奈良時代初期まで（７世紀～８世紀初まで）と、平安時代の集落跡であり、前者の遺構が主体をなす。

(2)　両期ともに竪穴住居跡のみからなる。

(3)　前者の同時存在竪穴住居数は10棟以内と思われる。

(4)　前者の共伴土器群は、従来の栗囲式（そのやや古い部分と思われるものを含む）に最もよく類似する。

(5)　集落は比較的短期間でいったん営なまれなくなり、若干の時間の経過ののちに再度占地される。

(6)　東隣の膳性・玉貫の両遺跡と一体化して評価さるべきものと思われる。

(参　　考)

集落構成の要素と予察

集落規模の完全な復元は困難である。ここでは集落を構成する諸遺構類を概観し、その変化の一端を見るに留める。具体的な図版については巻末参考資料を参照されたい。

(1)　第Ⅰ～Ⅴ群期　確認された限りでは竪穴住居跡のみからなる。相互にやや距離をおいた2～4棟からなる。正方形プランと長方形の二種がある。

(2)　第Ⅵ群期　7～12・13棟前後の竪穴住居跡のみからなる。正方形プランで大中小の三種の組み合わせになる。前代より規模が拡大したと言える。(註1)

(3)　第Ⅶ群期　前代にほぼ共通するが、20棟前後と規模がさらに拡大する例も出てくる。集落内に〝支群〟的なグループを持つ例もある。住居跡に加え〝大溝〟も出現する（尻引）。これらは単なる排水路とは考えられない。

(4)　第Ⅷ群期　遺構の種類が増加する。冲積面上の自然堤防上（宮地）や、低位段丘上の微高地上（林前）に立地する集落に〝井戸〟が伴う。宮地においては井戸をはさんでその南北に住居を営む形式をとり続けており、集落内の井戸使用の実態・その所有形態に関しての示唆に富む。井戸枠の構造にも変遷がある。

立地にかかわらず〝掘立柱建物〟が加わる（膳性・西大畑・石田・林前・森山工業団地・北に偏するが紫波町上平沢新田）。(註2)そのあり方に二種ある。

(A)　竪穴住居跡と隣接し併存するもの。

(B)　竪穴住居跡と異なる地点に存在する（林前・B_1）、それとは併存しないもの（西大畑・B_2）。前代と同様の〝大溝〟を有する（石田・宮地）。

(5)　第Ⅸ群期以降については、大規模調査例は窯業関連のもののみであり、一般集落の様相は必ずしも明らかではない。あえて言えば、遺跡数は増加するが、遺跡個々は小規模化する傾向にあると言えよう。

要　　約

(1)　古墳時代～奈良時代の集落は基本的には住居跡のみからなる。奈良時代半ば～末にかけて大溝が伴い始める。

(2)　平安時代初～前半にかけては、住居跡・大溝・井戸・掘立柱建物などで構成される。

集落の構成要素については他に語るべき項目も多い（例えば墓域）が、省略する。(註3)

（註1）　1棟前後の若干大規模なものを中心とし、その周囲に中小規模のものが配される形をとるものが多

い。これが末期古墳の配置に共通するという意見には従うべきであろう。

林・伊藤他、角塚古墳調査報告　胆沢町教育委員会　1976年

（註２）　それは〝筒状〟のものから、板材を組んだ〝井桁状〟へと変化している。

（註３）　第Ⅰ～Ⅴ群期における両者の関係は未詳である。第Ⅵ・Ⅶ群期については、水糸で区切られた各地域毎に集落が存在し、それに近接して墓域も造営される形をとる。墓域は一定期間以上それとして意識され続ける。第Ⅷ群期以降については不明である。〝方形あるいは円形周溝状遺構〟と呼称されているものが墳墓の周溝である可能性は高いと思われるが、詳細は未詳である。なお９世紀とされる見分森古墳は方形である。

なお相去遺跡群において〝長方形の土坑〟とされたものが墓坑であるならば、10～11世紀前半に別種の葬制も行なわれていたことになる。

相去遺跡—古代集落の発掘—（現地説明会資料）岩手県教育委員会・北上市教育委員会　1973年

集落に関する予察

１．古代において、集落様相に数期の変化期がある。それは①古墳時代前期、②古墳時代末期～奈良時代初期、③奈良時代半ば以降末期、④平安時代前半期の大別四期である。変化は各分野にわたるが、時期により性格に多少の相違がある。例えば④には須恵器の窯など〝政治的〟色彩の強いものが顕著に伴う。①にも高い〝政治性〟が当然想定されるが、資料不足であり末詳としておく。②・③にも外的要因の作用は当然存在するが、それは④的なものは無く、その意味で〝自主的・主体的〟な動向下に基本的にはあったと言えよう。

以上の諸変化期は従来常識的に想定されてきたそれとほぼ合致しよう。いうまでもなく④と胆沢城（そして志和城他）の設置は無関係ではないであろう。④の多方面にわたる〝政治的〟色彩の濃い変化は、律令政府進出の反映と見做されるべきである。

２．集落の形態に類型があり、それは時代差をある程度反映する。類型は以下の如くである。

〔Ａ〕　明白な計画性を持たない〝自然村落〟というべきもの。少なくとも奈良時代の集落の大半が該当し、基本的には竪穴住居跡からなる。大型のものに中小が組み合わせになり、末期古墳の配置に通ずる。一定期間で造営が中断される傾向がある。在地・土着集団の集落と思われる。各種の発展傾向、他地域との交流が見られる。奈良時代末期には、次代に顕著になる諸変化の部分的兆しが数分野に現われ始める。

〔Ｂ〕　遺構の配置・集落の造営状況に一定の計画性を窺わせる〝計画村落〟ともいうべきもの。平安時代初期～前半代の集落の大半が該当する。〝計画性〟は竪穴住居跡・掘立柱建物・井戸・大溝・窯等の遺構種別の増加、それら相互の配置、立地面を含めた造営状況、その地域的限定性等々の諸側面に現われている。さらに数類型がある。

Ⅰ．前代との連続性を示す（少数）もの。

（Ⅰa）竪穴住居跡・掘立柱建物・その他が組み合わせになるもの。

（Ⅰb）若干規模の大きな掘立柱建物のみからなるもの。

Ⅱ．前代との連続性を殆んど示さないもので、Ⅰより多数。

（Ⅱa）竪穴住居跡・掘立柱建物・井戸等が組み合わさり、（Ⅰa）に共通するあり方を示すもの。出土鉄器に農具的なものが目立つ。

（Ⅱb）遺構・遺物両面にやや特異と見做し得る要素を持つもの。それらは①須恵器窯（見分森）、②鉄滓・フイゴ羽口等を多く出土する（力石他の江刺地方の諸遺跡）、③多量の鉄製武具の出土（同前）、④木簡（落合Ⅱ）、⑤石帯（力石Ⅱ）、⑥硯（同前）、⑦墨（上平沢新田）などである。これらは従来〝識字層の存在〟を示す、とりわけ一定の〝政治性〟を示すとされてきたものの多くを含む。それを採って、この類型には〝政治性〟を想定しておく。その地理的位置が所謂城柵・官衙遺跡、建部される諸郡の位置と密接に関連すると思われる等の特徴も指摘できる。これを制度史上の概念といかに対応させ得るかは、今後の検討を要しよう。

以上のA・B類型の性格について、短絡的ではあるが推定を試みる。即ち、奈良時代までのA類型には、在地の支配原理の貫徹する〝自然村落〟的性格、B類型に律令制的支配原理に立つ〝政治村落（律令村落）〟的性格を想定できる。B類型の中には、Aが律令制的に再編されたもの（Ⅰa）他地域よりの〝移民〟集団により新規造営されたもの（Ⅱa）、種々の次元と、〝軍事的〟なものを含む〝官衙〟的なもの（Ⅰb・Ⅱb）が存在する可能性が強い。〝移民〟云々については、遺構・遺物の特徴の把握とその系統の検討から、ある程度明らかにしえよう。

B類型村落の明確な存在は、全般的には衰退期に向かいつつあった律令制が、辺境において模範的・理念型的に行なわれた可能性をも示唆するものである。

3．掘立柱建物の性格に複数があり得る。

岩手県南～県中央にかけて、平安時代に属すると思われる掘立柱建物を伴う集落跡は5例ある。可能性の高い森山工業団地も加えると6例になる。その何れもがⅧ群期に関連することは既に述べた。[註1] したがって岩手県地方の古代集落内の掘立柱建物の初期は大略確定したと言える。[註2]

その主屋規模は3間×2間、4間×2間、5間×2間などの諸類型からなる。大部分は中抜きの形式をとるが、膳性例のみが総柱である。

集落内のあり方には、A・B_1・B_2の三種あることは既に触れた。そのうちAたる石田の6棟、B_2の西大畑の4棟が複数（ただしすべてが同時存在ではない）存在、他は1棟の単独存在である。これらを踏まえ、その性格想定を試みる。

(1) Aのうち単独存在には、少なくとも〝倉庫〟的なものが含まれよう。複数存在のものの

一部にもそれがあろう。しかし後者のうちの石田・西大畑のあり方は、掘立柱建物自体に〝居住施設〟的なものも含まれる可能性をも示唆する。石田の西面廂のある〝主屋〟を中心とし、その周囲に〝倉庫〟的なものを配す遺構配置と、それと軌を一にする溝類の配置は、さらに進んで、特定集団の所有する一括建物群の存在を示唆するものとも考えられる。しかもそれに竪穴住居跡をも伴う可能性がある。

西大畑例は、遺構周辺に遺物散布が集中する傾向が顕著に見られる。

何れにせよ現状での時期の細かい特定は出来ないが、少なくとも平安時代前半期に掘立柱建物の中に〝居住施設〟的なものが存在した可能性は大である。ただし西大畑例は梁行5間のものを含むなど、他例より明らかに大規模なもののみで構成される。しかもB_2類型でもあることからすると、西大畑例に通常集落以外の、何らかの意味での〝官衙〟的なものを想定すべきかとも思う。

(2) AとB_1のあり方の異同を竪穴住居跡との対応関係からみることも出来る。即ち、相互に直近の位置関係にあるものに対応関係を想定出来るAと、〝いくつかの小単位である竪穴小群の共有関係にある〟とも見做し得るB_1である。[註3]

掘立柱建物と竪穴住居の対応関係の復元については、個々の遺構の位置の特定、厳密な同時存在遺構の確定などの基礎的操作が必要である。

4．遺跡内の遺構集合（支群）について

遺跡内に〝支群〟ともいうべきものが存在することは既に触れた。それは時代・遺跡の性格の異同にかかわらず、何らかの形で存在したらしい。それらの具体的認定は今後の一大課題である。

その中の特に顕著な現象〝規模の異なる竪穴住居跡の組み合わせとしての存在〟は、種々の問題を提起する。例えば、

(1) AがB－Ⅰ－aに〝再編〟されるにあたり、前代の共同体組織がある程度利用された可能性。

(2) B－Ⅱ－bの〝政治性〟の強いと思われる集落にもそれが見られることは、一種〝人為的〟な集落造営の際にも、移住前のあり方を踏襲・擬制した可能性。[註4]

等の諸点である。これらの観点も、遺構の機能の観点に加えて設けられるべきであろう。何れにせよ〝支群〟的なものの認定・設定は各種共同体の具体相の復元に必要不可欠の前提であり、今後も継続追求されるべきである。　　（文責）相原康二　（昭和54年末稿了）

（註1）　膳性・西大畑・石田・林前・上平沢新田

（註２）　他に調査者により第Ⅵ群期に属する可能性ありとする１棟が西大畑にある。梁間・桁行が３間×１間の規模で、掘り方は円形、柱あたりは細く、他例とは明白に異なる。

（註３）　林前遺跡ＳＢ63建物跡

林前遺跡－区画整理に伴う範囲確認調査－　岩手県水沢市文化財報告書第３集　岩手県水沢市教育委員会　1979年

（註４）　吉田努氏によると、太田方八丁遺跡外郭築地内の住居跡群にもその傾向があるとのことである。また真城ヶ丘団地も同様である。

伊藤博幸　奈良・平安時代の村落構造とその特質　考古学研究会岩手支部３月例会報告レジュメ　1979年

^{14}Ｃ測定結果

ここで住居跡の年代に関わる^{14}Ｃ測定結果について触れておく。

焼失家屋と推察されるBh09竪穴住居跡内出土の炭化材が測定試料である。材質はケヤキの一部とされ、床面からの出土によるものである。当然、家屋構造に関わる材と思われる。

日本アイソトープ協会による測定結果は、1460±60yB.P.（1420±60yB.P.）と計算されている。換算年代は年代誤差を２倍にして換算すると370～610年代となり、奈良時代以前の時期に相当するものである。

Bh09竪穴住居跡に於ける出土遺物の編年上の位置については、先にも記した通り７世紀代を中心とする時期に想定している。当遺構は、特に二大別したうちの前半期ということで、換算年代の下限にも求められるのであろうか。出土遺物のみに関していえば、須恵器聰や黒耀石のあり方からみれば古い要素のあることも事実であるが、遺跡そのものの年代観と直接的に関わりを持つとするのはまた別問題であろう。従って、ここでは既述の事実と予察の一端を記すに留める。

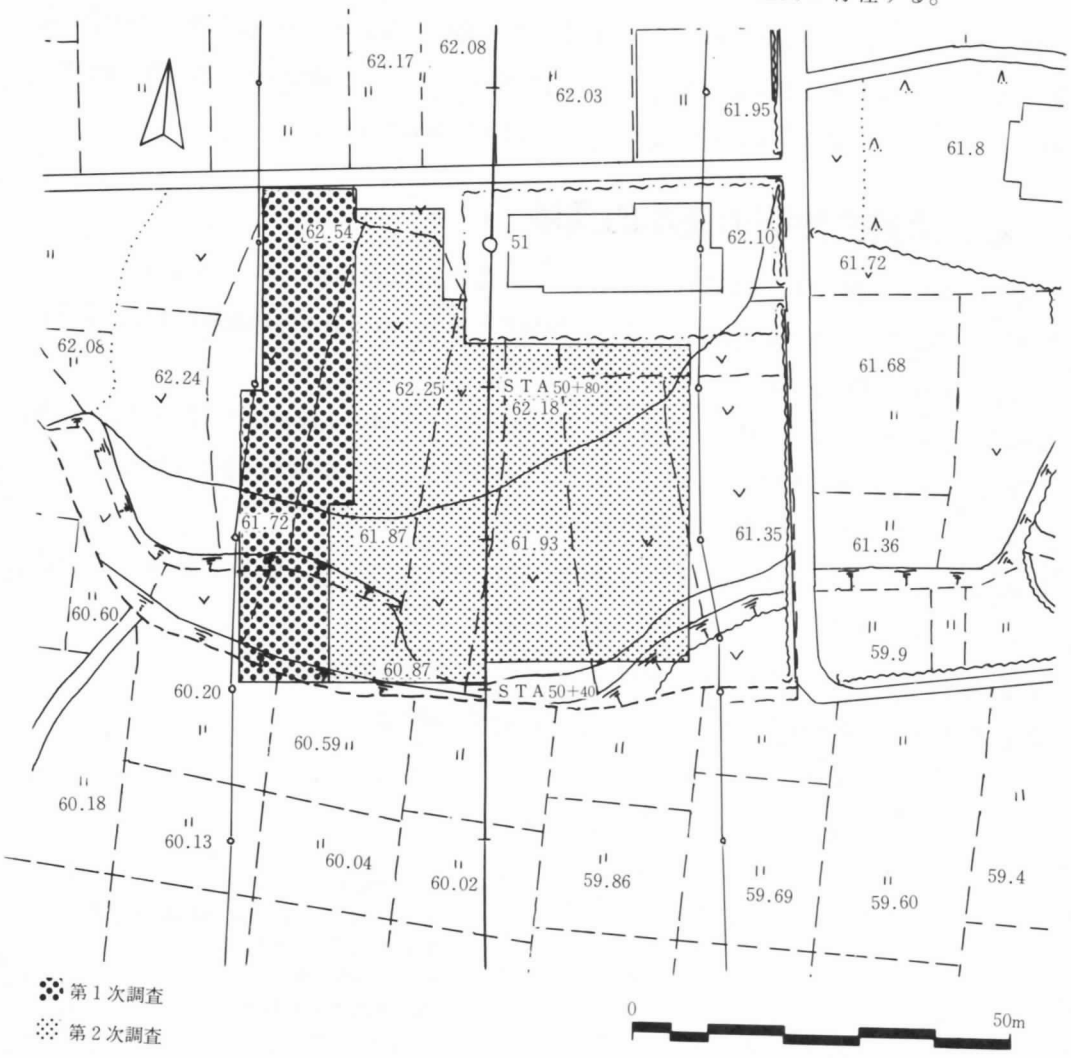
（註）　年代は^{14}Cの半減期5730年（カッコ内はLibbyの値5568年）にもとづいて計算され、西暦1950年より遡る年数（year B.P.）として示されています。付記された年代誤差は、放射線計数の統計誤差と、計算管のガス封入圧力および温度の読取の誤差から計算されたもので、^{14}C年代がこの範囲に含まれる確率は約70％です。この範囲を２倍に拡げますと確率は約95％となります。なお^{14}C年代は必ずしも真の年代と等しくない事に御注意下さい。

西大畑遺跡

1．遺跡所在地　水沢市佐倉河字西大畑
2．調査期間　第1次昭和49年10月30日～12月7日
　　第2次昭和50年7月28日～9月30日
3．調査面積　約2970㎡
4．発掘面積　約2970㎡
5．遺跡記号　NOH74・NOH75

Ⅰ　遺跡の位置と立地（第１図）

当遺跡は水沢市佐倉河字西大畑にあり、水沢駅の北西約３kmに位置する。遺跡は胆沢扇状地の北西部にて、低位の水沢段丘上に立地する。水沢段丘は東流する小河川に開析され、その中に東西方向に広がる低湿地の沖積地をかかえ、段丘と沖積地は崖面をもって画される。北側崖面を境とする北の段丘縁部と南の沖積地は比高差約１ｍである。北の段丘が南にゆるく傾斜して沖積地をのぞむ段丘縁部に遺跡は立地する。南側沖積地には水田が広がり、北側も削平されて水田地帯となっており、その間にはさまれた微高地の畑地で標高約62mの場所にある。尚、沖積地を中に挟んだ北及び南の東西に延びる段丘縁部には多数の遺跡が存在する。



第１図　遺跡地形図

Ⅱ　調査の経過（第３図）

調査は２次にわたって行なわれた。第１次は昭和49年10月30日から12月７日までで西側約720㎡、第２次は昭和50年７月28日から９月30日までで残りの東側約2250㎡の全面発掘を行なった。報告は第１次・第２次における調査の成果を一括して扱う。

当遺跡は段丘縁部にあって東西に広がるものであるが、道路敷となる遺跡の範囲は東西約60m、南北約65mにわたる。調査は路線中心杭STA 50＋40と50＋80を結ぶ線を基準とし、３m間隔でこれに平行及び直交する線を設けて３mグリッドを組んだ。STA 50＋80地点をCa50グリッドとし、東西南北に夫々延長してグリッド名を付した。

段丘縁部はやや微高地的な地形を示し、地表面から地山上面まで約15cm程の耕作土一層で遺物を含む。耕作土である表土除去後、種々の遺構が検出される。南端崖面からは多量の遺物が出土したが、新しい溝が１条東西に走るだけで、遺構は検出されなかった。

Ⅲ　遺跡立地面の基本的層序（第２図）

層序の調査は発掘区東端のBi74地点から東２mの間で、深さ1.5mについて行なった。

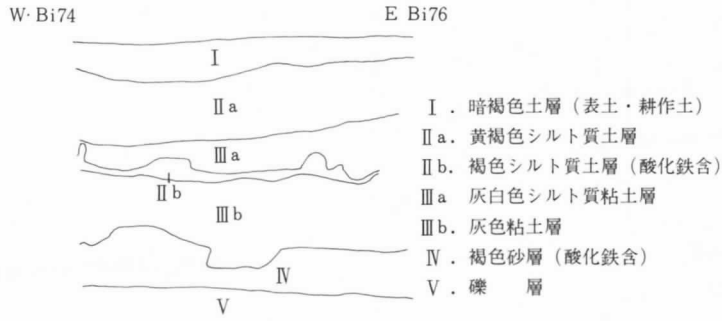
第Ⅰ層：調査区東半は暗褐色土層で、西半は黒褐色土層である。表土の畑地耕作土で、遺物包含層である。層厚約15cmである。

第Ⅱa層：黄褐色シルト質土層。この層から下は地山であり、層の上面が遺構検出面である。層厚約35cm程で水平に堆積している。所によってはⅠ層との間に漸移層が薄く入る所もある。遺構はこの層の中位まで掘り込まれている。

第Ⅱb層：褐色シルト質土層、層厚５cm程の薄い層で、酸化鉄を含む。Ⅲa層とⅢb層の間に起伏をもって入り込む。

第Ⅲa層：灰白色シルト質粘土層。層厚約20cm前後で、やや褐色がかる。

第Ⅲb層：灰白色粘土層。層厚約35cm程で、比較的厚い層である。



第２図　遺跡の基本層位　　縮尺1/40

第３図　西大畑遺跡、グリッド・遺構配置図

第Ⅳ層：褐色砂層、層厚約20cm前後で酸化鉄を含む。層下面は比較的水平である。

第Ⅴ層：礫層で、水沢段丘構成層の瘤木礫層である。

Ⅳ　検出遺構と出土遺物

1．溝状土壙（第４図）

検出された溝状土壙は４基で、細長い溝状を呈するものである。この土壙の名称については種々に仮称されているが、ここではその形態から溝状土壙とする。４基の溝状土壙の分布地区は発掘区の北側微高地にあり、北西部に３基、北東部に１基である。調査範囲も限られ、発見数が少なくまばらな分布なので、分布状態や配置関係等は不明である。遺構検出面は表土下の地山・黄褐色シルト質土層上面である。

溝状土壙の上縁は細長い溝状で、壙底は更に狭小の溝状を呈する。長軸断面は両壁共に垂直な立ち上がりを示す。短軸断面は上方に向かって外開きする「U」字状や「V」字状を呈す。土壙内覆土は自然堆積で、壙底に汚れた土、中間に壁部崩落土、上部に流れ込んだ土が夫々堆積する。土壙内出土遺物は、Bi30溝状土壙覆土から石鏃１点（220）が出土しただけで他は皆無である。壙底部は平坦で、何ら施設を設けた跡は見当たらない。

Bi30溝状土壙はその一部西側が調査範囲外にかかり、全体の形状を明らかにする事ができなかった。Bi68溝状土壙は、古墳末期から奈良時代の遺構・Bi62住居跡によって西端を切られている。Be27溝状土壙はBe24A・B建物跡の柱掘り方によって南東部を切られている。

以上４基の溝状土壙の規模等は次の表の如くである。

第１表　溝　状　土　壙　一　覧

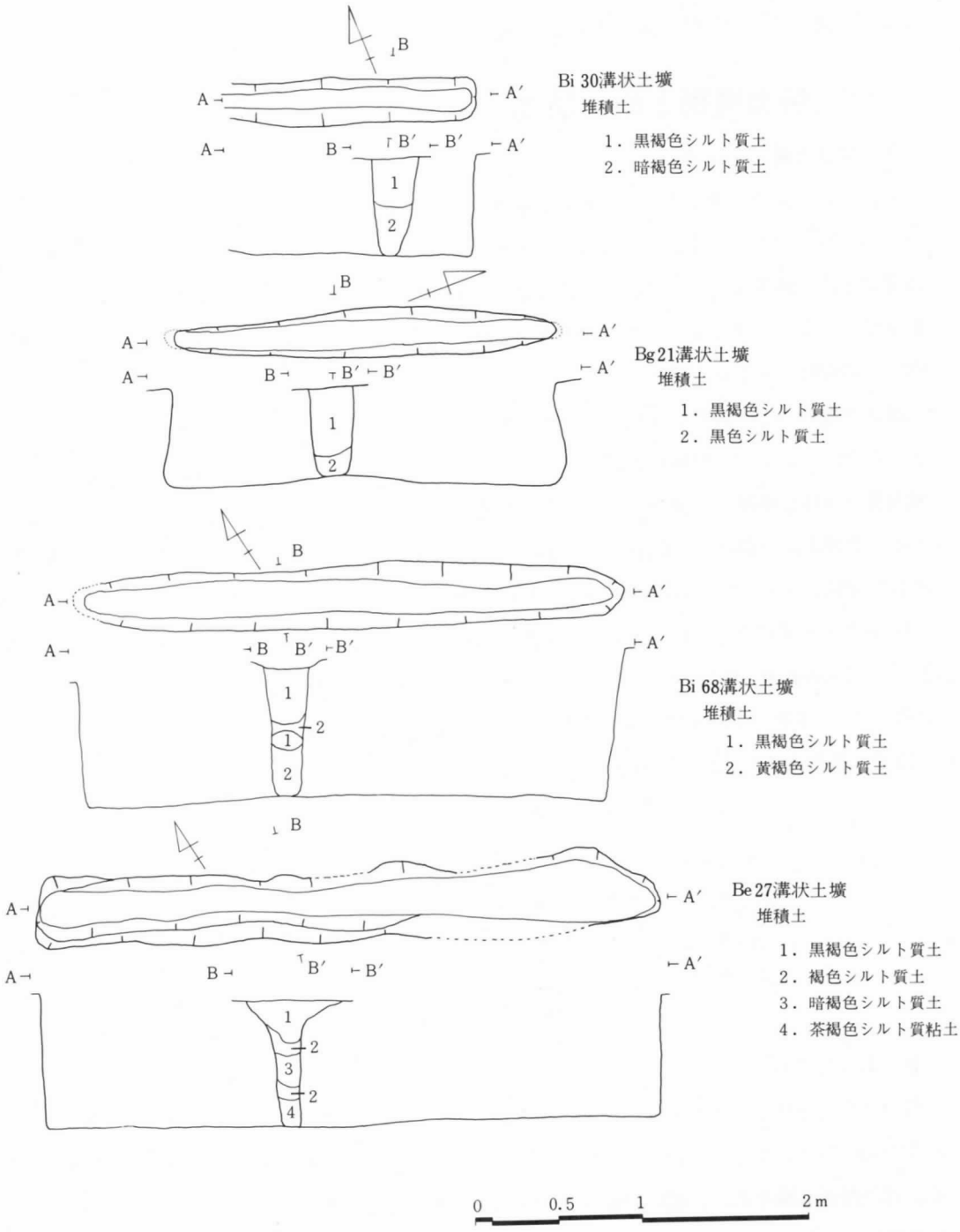
溝状土壙名	上　縁 長軸×短軸 cm	壙　底 長軸×短軸 cm	深さ cm	長軸方向	出土遺物
Bi30溝状土壙	(150)×27	(150)×11	60	N—69°—W	石鏃１
Bg21溝状土壙	230×30	240×17	55	N—20°—E	
Bi68溝状土壙	330×39	317×18	82	N—57°—W	
Be27溝状土壙	375×43	370×14	78	N—59°—W	

2．溝（第３図）

南緩傾斜の地形で、北から南へ走る溝が多数ある。上流の北方グリッド名を溝名とした。これらの溝は自然にできたものであるが、中には人為的に排水用に掘られたと思われるものもある。溝の長さは種々あり、幅は40cm前後、深さ17cm前後の断面皿状の浅いものである。覆土は自然堆積土がほとんどであるが、人為埋土と考えられるものもあり、覆土に遺物が混入する。

Bc27溝：南西方向に走る溝で、Bf30グリッドから更に南西へ延びる。

Bb27溝：南方へ走っていた溝が、Bd21グリッド内で東方Be9グリッドへ走る溝に変わっている。



第 4 図　溝状土壙平面図・断面図

Bd21溝[1]：本来はBb27溝の南方であったものが、Bd21グリッド内で切られている。この溝は南方のCc15グリッドまで延びる長いものであるが、浅いため途中部分的に切れている。Be24A・B建物、Bf21A・B建物、Bh27建物の柱掘り方により部分的に切られている。Ca21建物とも重複しているが前後関係は不明である。

Bd21溝[2]：当初はBb27溝がBd21グリッド内で二方向に分かれ、南東へ走るBd21構[2]と南へ走る溝[1]であったものである。この溝はBe15グリットまでの短かいもので途中部分的に切れる。

Cc24溝：Cc24遺構の煙道に始まり、Ch27グリッドまで南走する溝で、南端に土師器長胴甕の口縁部（第22図84）を埋め込み、その中を水が流れるようにしてあり、人工の溝と考えられる。

Bf15溝：遺跡中央を蛇行しながら南のCg6グリッドまで走る最も長い溝である。Bf21A・B建物柱掘り方により溝の一部が切られている。覆土内出土遺物も非常に多い。

Bi53溝：Bi56溝が南西へ走っていた時の一部であったものがBi53グリッド内で切られてBj3住居煙道に始まる溝との接点までは人為的に埋め込まれ、その南東は黒褐色腐植土が堆積する。Cb6グリッドでBf15溝に接続する。Bj50L形溝に切られる。

Bi56溝[1]：北東から西南へ走る溝であったが、Bi53グリッド内で南東を埋め込み、Bj3住居北側を迂回して西方へ走る溝である。Bj6グリッドでBf15溝に接続する。出土遺物は多量。(32～39)

Bj50L形溝：ほぼ東西・南北方向にL字形に走る溝。Bi53溝、Bj3住居を切る。出土遺物なし。

Bi56溝[2]：非常に短かく南北に走る溝で、Ca56グリッドで終わる。溝西端は浅くなり消える。

第2表　　溝　一　覧

溝　名	方　向	長さ m	上場幅 cm	底部幅 cm	深さ cm	堆　積　土	出　土　遺　物　（数字は破片数）
Bc27溝	北東—南西	11.0	70	30	18	黒褐色腐植土	土師器甕片少量
Bb27溝	北西—南東	19.4	65	48	17	黒褐色腐植土	
Bd21溝[1]	北—南	27.5	56	50	6	黒褐色腐植土	
Bd21溝[2]	北西—南東	5.5	60	43	8	黒褐色腐植土	
Cc24溝	北—南	15.0	45	30	23	暗褐色シルト質粘土	土師器甕口縁部
Bf15溝	北—南	40.0	35	25	15	黒褐色腐植土	石器1　縄文6　朱塗坏2　複合口縁1 脚台部1　内黒坏6　土師器甕207　須恵壺1
Bi53溝	北東—南西	14.0	45	30	23	黒褐色腐植土	石鏃1　土師器甕31
Bi56溝[1]	東—西	14.2	50	32	25	黒褐色腐植土	石錐1　手捏ね土器1　非ロクロ内黒坏24 土師器甕98
Bj50L形溝	東西—南北	9.5	28	18	7	暗褐色シルト質粘土	
Bi56溝[2]	北—南	7.3	27	17	20	暗褐色シルト質粘土	土師器甕10
Bi59溝	北—南	19.5	41	32	10	暗褐色シルト質粘土	非ロクロ内黒坏1　土師器甕22　ロクロ坏1 須恵器壺4
Cb59溝	北西—南東	15.3	38	29	30	黒褐色腐植土	土師器甕73
Cg62弧状溝	北東—南西	6.0	29	20	20	黒褐色腐植土	土師器甕31　ロクロ坏2

Bi59溝：南北に走る長めの溝で、Ce59グリッドで浅くなり消える。Cb59溝を切る。

Cb59溝：北西から南東のCe71グリッドまで走り浅くなって消える。Bi59溝に切られる。Ce65建物と重複するが、新旧関係は不明である。

Cg62弧状溝：溝底部の高さは全て同じで、溝両端部上縁の高さが低くなる為に溝が浅くなり消えたもので、円形の周溝であったと思われる。南東部は削平された可能性が強い。

3．竪穴住居跡

Cf 53住居跡（第５図）

（遺構の確認） 調査区南東部の南緩斜面のCf53グリッド周辺で表土を除去した結果、地山の黄褐色シルト質土に達し、方形の黒味がかった暗褐色シルト質粘土の落ち込みを確認した。

（重複・増改築） 認められない。

（平面形・方向） 南北6.2m、東西6.0mで多少歪んではいるが、正方形に近い平面形である。床面積は約35㎡である。方向は南一北。

（堆積土） 住居内の堆積層は薄く、一層である。黒味がかった暗褐色シルト質粘土層で、黒褐色土、焼土、炭化物等が混入し、住居内全域に分布する。

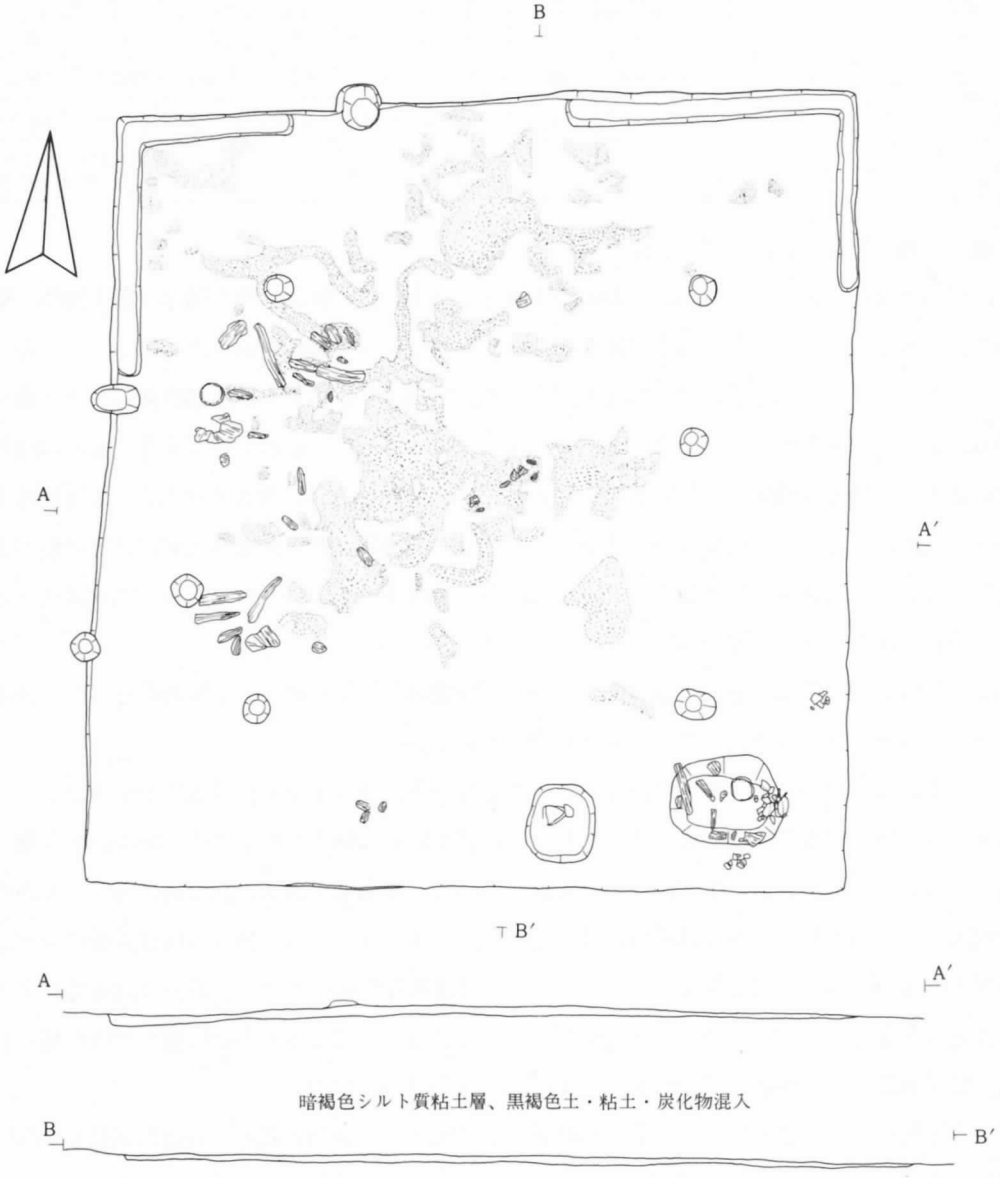
（床面） 床面は多少の凸凹はあるがほぼ平坦で、あまり固い面をなしていない。床面全域に炭化材や焼土が分布しており、焼失家屋の跡と考えられる。壁は床面から垂直気味に立ち上がる。北東及び北西の隅に周溝がめぐる。炉は検出されなかった。貯蔵穴状ピットや柱穴と考えられるピットが検出された。床面下は地山の黄褐色シルト質土で、掘り方埋土は検出されなかった。

（柱穴） 床面で確認されたピットは９個、竪穴の壁を切ってあるものが３個の合計11個のピットがある。この中で、柱痕と掘り方が識別できたものはなかった。竪穴の対角線上にのる形の方形に配置されたピットがP_3～P_6の４個であり、主柱穴と考えられる。ピットの直径は22cm位、深さは53cm位でほぼ垂直である。西壁中央付近の壁を切って２個のピットP_1・P_2があり、直径22cm、深さ28cm程で垂直であり、出入口の柱と考えられる。

（貯蔵穴） 住居の南東隅に隅丸長方形のP_{10}・P_{11}がある。大きさはP_{10}が62×54cm、深さ28cm、P_{11}は90×68cm、深さ19cmである。P_{10}の内部には土師器球胴形の甕（第15図12）、砥石（第16図17）が入っており、P_{11}には土師器坏（第15図４・５）、土師器壺（第15図８）、土師器甕（第15図10・11）、土師器甕形無底式甑（第16図16）が入っていた。ピットの堆積土は暗褐色シルト質土で、炭化材や焼土が多量に入っていた。

（その他の施設） 北東及び北西隅周辺で壁に沿って幅18cm、深さ７cm程の周溝がめぐる。

（年代決定資料） 床面及び貯蔵穴状ピットから多量の遺物が出土している。（第15・16図1～18）これ等の遺物はその上に炭化材が覆ってあったもので、一括土器として住居の年代決定上重要な資料である。



第５図　Cf53竪穴住居跡

0　0.5　1　2 m

第3表　　Cf 53 住居跡ピット一覧表

PitNo.	P_1	P_2	P_3	P_4	P_5	P_6	P_7	P_8	P_9	P_{10}	P_{11}
深さ(cm)	26	30	52	56	53	51	29	39	20	28	19
土　色	暗褐色	暗褐色	暗褐色	暗褐色	暗褐色	暗褐色	暗褐色	暗褐色	暗褐色	暗褐色	暗褐色
土　性	シルト質土	シルト質土	シルト質土	シルト質土	シルト質土	シルト質土	シルト質土	シルト質土	シルト質土	シルト質土	シルト質土
備　考						炭化物多量混入				炭化材土器貯蔵穴	炭化材土器貯蔵穴

遺　　物（第15・16図1～18、第27表）

住居に伴なって出土した遺物は土師器の丸底坏7個体、壺1個体、甕7個体、瓶1個体、砥石1点、管玉1である。土器は全て破片であり、火熱を受けて器面がボロボロになっている。

1～7：1・2は丸底小形の坏で口縁が直立する。口縁は両面横ナデ、体部外面にハケメ痕が残る。3・4は内外面朱塗りの丸底坏で、4は口縁がわずかにくびれて外反する。4の口縁外面に横ナデ、体部に横位のナデ跡が見られる。5・6は比較的深い丸底坏である。5は体部上半から口縁部にかけての内面にハケメ痕が見られる。6は両面共に横位のナデによる調整がされている。7は丸底坏の底部破片のみで、両面共に朱塗りの大形のものである。内面は篦ミガキ、外面は篦ケズリされている。

8：小形の壺で、体部下半と底部を欠いている。内面は口縁部が篦ミガキ後朱塗りされ、体部は巻き上げ痕が残る。外面は篦ミガキ後朱塗りされている。

9～16：9は小形の長胴形甕で体部底部を欠失している。体部上端から頸部でややすぼまり、短い口縁が外反する。段或いは陵はつかない。口縁部外面に横ナデ痕が残る。16は長胴形甕の底部を欠いた形の無底式の甑で口縁部を欠失している。器面は両面共に部分的に篦ミガキの跡が残る。10～15はやや大形の球胴甕の破片で、短い口縁が外反する。10は口縁部両面横ナデ、体部は内面ハケメ、外面が篦ミガキされている。11は体部内面ヘラナデ、外面は口縁部横ナデ体部篦ミガキされる。12は器面風化磨滅著しく不明である。13は体部内面に篦ナデ痕が見られる。貯蔵穴状ピットP_{10}出土が12、同じくP_{11}出土が10・11・16である。

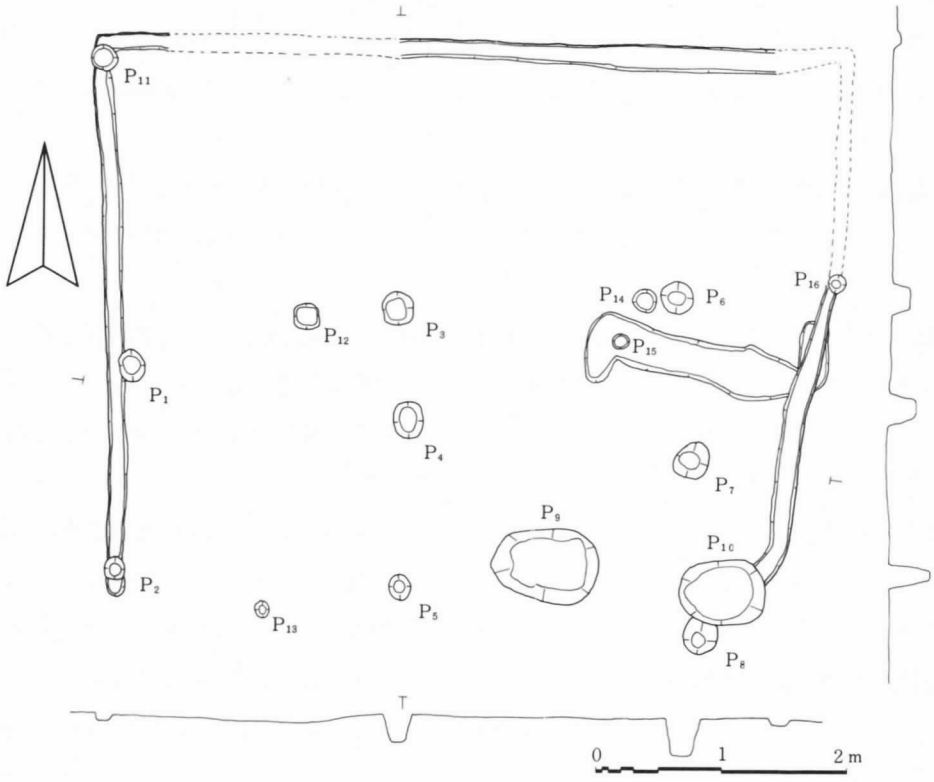
17：扁平楕円形の自然石の上下二面を砥磨面として使用した痕跡が残る。石材は細粒石質凝灰岩で、貯蔵穴状ピットP_{11}出土である。

18：蛇文岩製の小形の管玉で、長さ5mm、太さ(径)4.5mm、貫通孔径1.8mm、重量0.44gで、床面からの出土である。

Cb50住居跡（第6図）

（遺構の確認） 調査区中央の南緩斜面Cbグリッド周辺の表土除去をすると地山の黄褐色シルト質土層に達し、方形周溝状の掘り込みとピットにより確認される。

（重複・増改築） 不明



第6図　Cb50竪穴住居跡

第4表　　Cb50 竪 穴 住 居 跡 ピ ッ ト 一 覧

PitNo.	P_1	P_2	P_3	P_4	P_5	P_6	P_7	P_8
深さ(cm)	24	29	16	22	33	27	29	24
土　色	暗　褐　色	暗　褐　色	暗　褐　色	暗　褐　色	暗　褐　色	暗　褐　色	暗　褐　色	暗　褐　色
土　性	粘土質シルト	粘土質シルト	粘土質シルト	粘土質シルト	粘土質シルト	粘土質シルト	粘土質シルト	粘土質シルト
備　考								

PitNo.	P_9	P_{10}	P_{11}	P_{12}	P_{13}	P_{14}	P_{15}	P_{16}
深さ(cm)	24	28	16	48	11	12	37	12
土　色	黒　褐　色	黒　褐　色	暗　褐　色	暗　褐　色	暗　褐　色	暗　褐　色	暗　褐　色	暗　褐　色
土　性	粘土質シルト	粘土質シルト	粘土質シルト	粘土質シルト	粘土質シルト	粘土質シルト	粘土質シルト	粘土質シルト
備　考	土師器甕細片3　片			炭化物含む				

（平面形・方形） 東側と南側が削平されているため、正確な平面形は不明である。しかし北側及び西側に残存する溝とピットの配列から、1辺約6mの正方形に近い形と推定される。方向はほぼ南一北で、東西長は6m程、南北長は現存部分で4.5mある。現存する床面積は24.5㎡（推定32㎡）である。

（堆積土） 住居跡の南側は削平されて周溝が消えており、北側も周溝が残るだけで住居内外の高さが同じになっている。そのため住居内堆積土は不明であるが、周溝内は暗褐色シルト質土が堆積している。

（床面） 方形をした周溝内外の高さは同一になっており、床面は削平され、遺構検出面が床面より下がっていると思われる。炉は確認されない。方形周溝は部分的に残っている。保存のよい所で幅15cm、深さ6cm程である。他の住居跡と比較すると明らかに住居に伴う周溝と思われる。ピットは16個検出された。

（柱穴） 16個のピットの中で柱痕と掘り方の識別できるものはなかったが、配置関係に規則性を見出せるのはP_3～P_8であり、この3対6個のピットが主柱穴であったろうと推定される。西側溝を切ってP_1とP_2の2個のピットがあり、他の住居跡の例から出入口の柱穴と思われる。

（貯蔵穴） 住居の南東部に楕円形状のP_9・P_{10}がある。大きさはP_9が85×60cm、深さ25cm、P_{10}が68×52cm、深さ30cmで、土師器甕体部の破片が数片出土している。埋土は周溝と同じ暗褐色シルト質土である。

（年代決定資料） 出土した遺物は貯蔵穴状ピットP_9からの土師器甕の細片だけで、遺構年代を決める上で適当な資料は少ない。

遺　物

貯蔵穴状ピットP_{10}から頸部に段のつかない土師器球胴甕の破片が少量出土した。

Ca21住居跡（第7図）

（遺構の確認） 発掘区西側中央Ca21グリッド周辺で長方形の黒褐色土の落ち込みを発見した。遺構確認は表土下の黄褐色シルト質土層上面である。

（重複・増改築） 床面北部がCa21建物跡の柱掘り方P_2により切られており、更に南西隅床面が後世の掘り込みによって切られている。

（平面形・方向） 平面形は東西に長軸をもつ長方形で、長軸長は3.8m、短軸長は2.85mである。床面積は10.5㎡である。

（堆積土） 竪穴内堆積土は基本的に1層である。黒褐色シルト質粘土層で、黄褐色シルト小ブロックが混入し、又炭化物・焼土・土師器細片も少量混入する。住居内全域に分布する。

（床面） 比較的平坦な床面で、固くしまっている。壁高は最も保存のよい西壁で5cm程であり、南壁・東壁は共に1cm位しかない。床面東側の北寄りに焼けた部分があり、炉と思われる。確

認されたピットは13個である。竪穴掘り方埋土は見られず、床面下は地山の黄褐色シルト質土層である。

（柱穴） 床面確認のピットは13個である。この中でP_9はCa21建物の柱掘り方であり、P_{13}は後世の掘り込みである。P_6・P_{12}は非常に浅い凹み程度のものと思われる。深さや配列関係に規則性の認められるのはP_1～P_3であり、この3個が主柱穴をなすものと思われる。南東の主柱穴はP_{13}により破壊されたものであろう。西壁際のP_4・P_5の2個のピットは出入口の柱穴かもしれない。

（炉） 床面東側に45×40cmの範囲に焼土が広がる。掘り込みや石組は見られないが、土師器丸底坏が焼土中から出土しており、地床炉と考えられる。

（貯蔵穴） 床面北側に楕円形状のP_{10}がある。大きさは40×35cm、深さは22cmで土師器の球胴形甕約⅓個体が入っており、貯蔵穴状ピットと考えられる。

（その他の施設） 検出されなかった。

（年代決定資料） 出土遺物は非常に少ない。この中で炉跡と思われる焼土中出土の土師器丸底坏（第16図19）と貯蔵穴状ピットP_{10}出土の土師器球胴甕（第16図21）が住居の年代を決定する上で最も有効な資料と思われる。

第5表　　Ca21 竪穴住居跡ピット一覧

PitNo.	P_1	P_2	P_3	P_4	P_5	P_6	P_7	P_8
深さ(cm)	40-	24	58	12	27	8	23	35
土色	黒褐色	黒褐色	黒褐色	黒褐色	黒褐色	暗褐色	黒褐色	黒褐色
土性	シルト質土	シルト質土	シルト質土	シルト質土	シルト質土	シルト質土	シルト質土	シルト質土
備考				土師器甕片				ロクロ坏 土師須恵破片

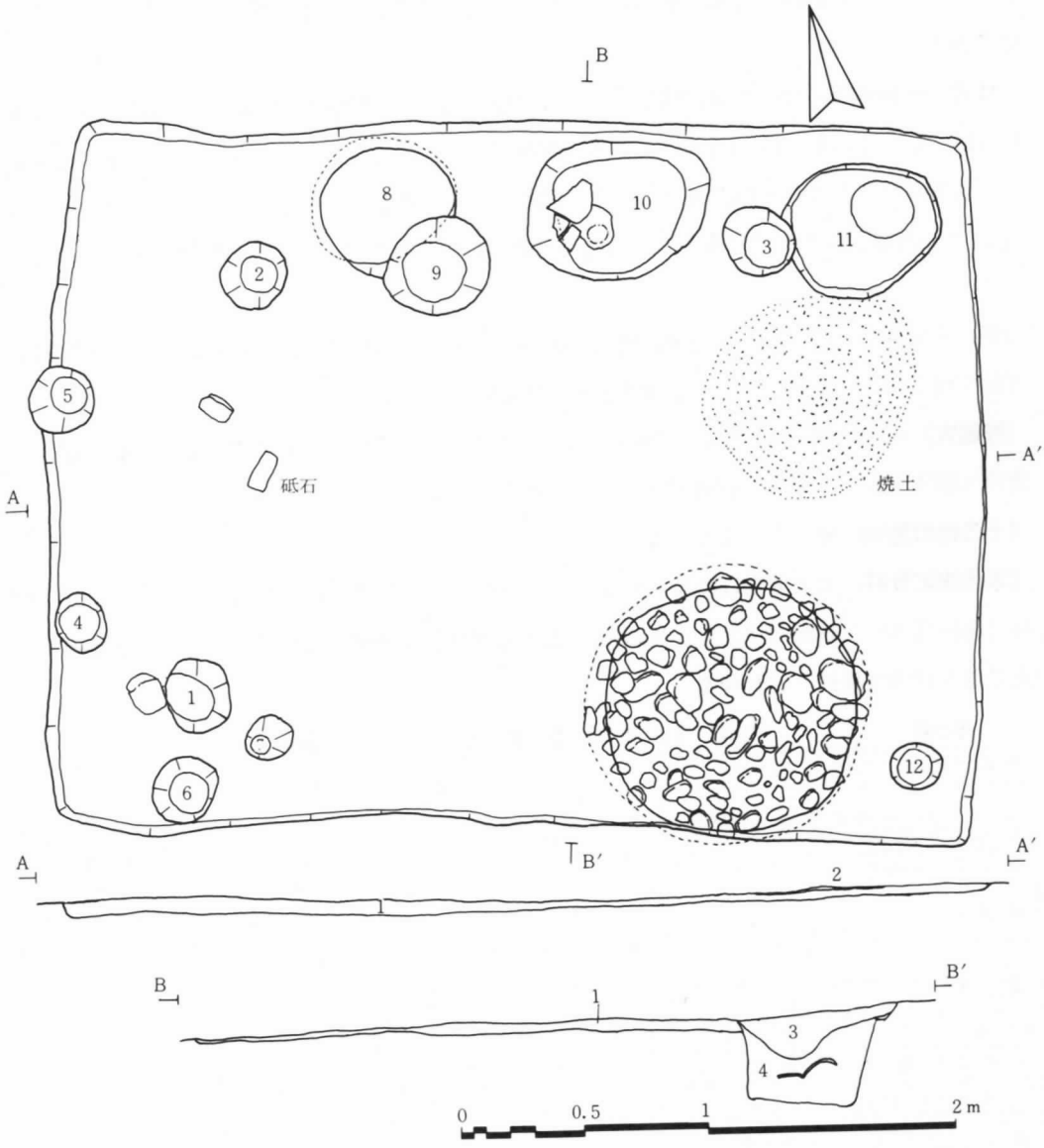
PitNo.	P_9	P_{10}	P_{11}	P_{12}	P_{13}
深さ(cm)	38	33	45	5	75
土色	黒褐色	黒褐色	黒褐色	暗褐色	攪乱土
土性	シルト質土	シルト質土	シルト質土	シルト質土	シルト質粘土
備考	Ca21建物柱掘り方	土師器球胴甕	柱掘り方		後世の掘り込み

遺　物（第16図19～21，第27表）

19：炉と考えられる焼土中とその周辺床面より破片状態で出土したものである。丸底・丸味を帯びた体部で口縁部が「く」の字状にくびれて外反する坏である。

20：床面南西部P_1西隣の床面出土の砥石で、板状の直方体の自然石上下二面を砥磨面としてる。

21：貯蔵穴状ピットP_{10}から約⅓個体分が出土したものだが、口縁部を欠いている。土師器球胴形甕で、小さな底部がいく分か突出している。同一個体であるが接合不能な頸部の細片があり段は形成されていない。



1．黒褐色土と黄色シルトの混土層（含炭化物・焼土・土師細片）
2．焼土層（含炭化物）
3．黒褐色土層（黄色シルトブロック混り、含炭化物・土師細片）
4．黒褐色土層（黄色シルトブロック少量混る。含炭化物・土師細片）

第７図　Ca21竪穴跡

Bf30住居跡（第8図）

（遺構の確認） 調査区北西部の比較的平坦なBf30グリッド周辺で、長方形をした黒褐色土の落ち込みを確認した。遺構確認面は表土下の地山黄褐色シルト質土層上面である。

（重複・増改築） この周辺には多数のピットが分布する地域であり、竪穴の壁高も非常に低い事もあって、これ等多数のピットと重複し合っているが、前後関係はほとんど不明である。

（平面形・方向） 平面形は長方形を呈し、長軸は北東—南西方向で、長さは約2.9mである。短軸長は2.45mで、床面積は約6.44㎡である。

（堆積土） 竪穴内堆積土は基本的には1層である。黒褐色腐植土層で、黄色シルト質土の小ブロックや、炭化物、土師細片が少量混入している。竪穴内全域に分布し、攪乱を受けている。

（床面） 多少の凹凸はあるが平坦な床面である。床面や壁を切って多数のピットがあり、またその他の攪乱も受けて床面の保存状態はよくない。北壁は多数のピットにより壊され、明確なものではない。壁の高さは最も保存のよい南壁で6cm程である。壁沿いの施設は検出されなかった。22個のピットが確認されたが、炉は発見されなかった。床面の下が地山の黄褐色シルト質土層である。

（柱穴） 発見されたピットは22個であるが、柱痕と掘り方の区別のつくものはない。 P_1は2個のピットの切り合いであるが、新旧の区別はできなかった。埋土の中にロクロ使用の坏破片が入っていたが、これは竪穴以後の新しいピットに伴なうものと思われる。P_1～P_4は配列関係にやや規則性が認られ、深さも22cm前後で主柱穴と思われる。P_5・P_6は東壁際に並び、深さも約33cm位で他の住居跡にも見られ、出入口の柱であったと考えられる。以上P_1～P_6の6個のピットがこの竪穴に伴なうピットと推定される。

（炉） 検出されなかった。

（貯蔵穴） 床面の北壁際にやや楕円形をしたP_{17}がある。大きさは40×35cmで、床面からの深さが22cmである。遺物は出土していないが、位置の形態等から貯蔵穴状ピットと思われる。

（その他の施設） 検出されなかった。

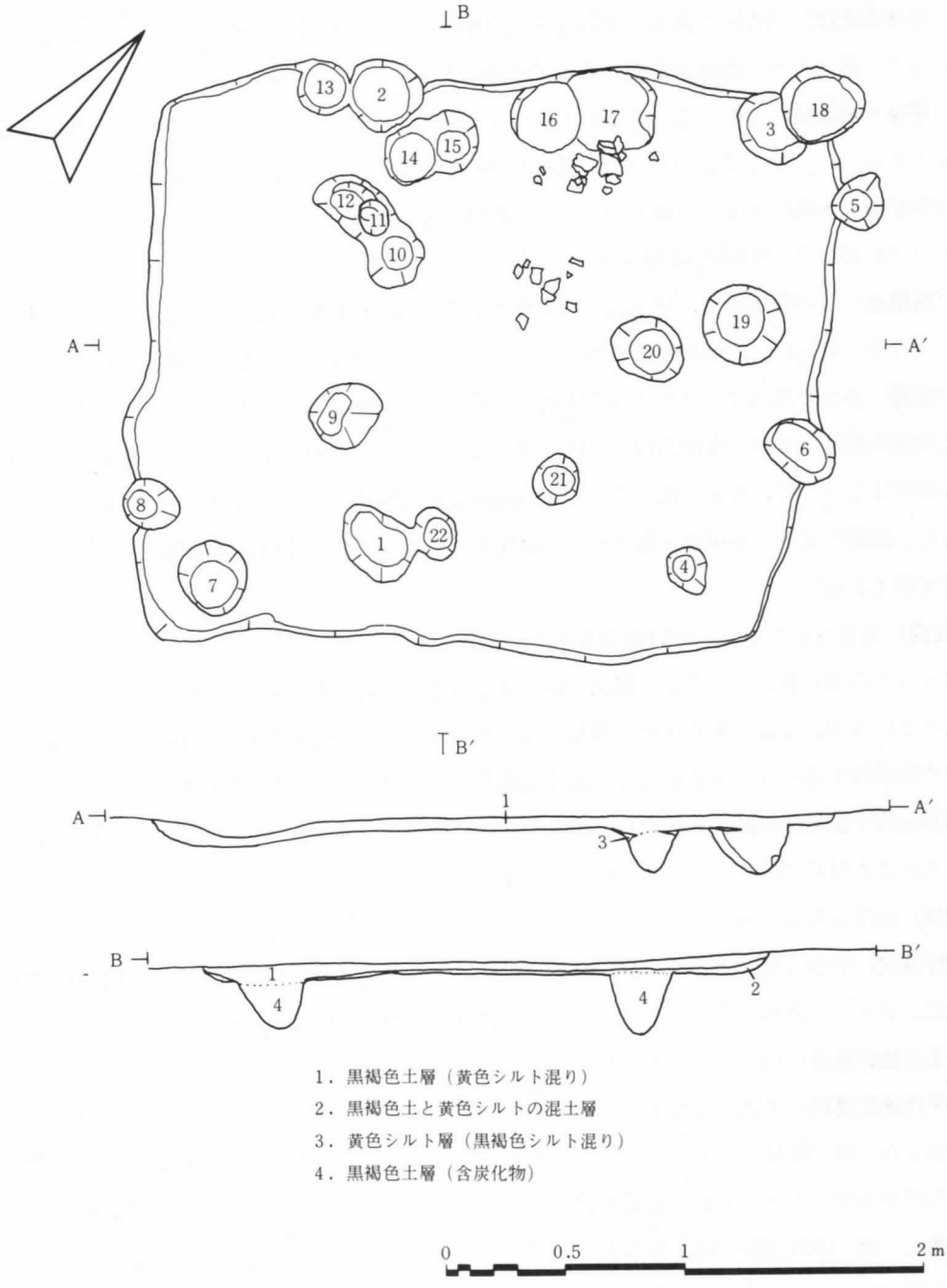
（年代決定資料） 遺物で実測図に書けたものは4点で、坏（第21図59）土師器甕（同60～62）と少ない。他に細片として非ロクロ内黒坏・高台坏等の破片も出土しているがこの竪穴に伴なうものか不明である。床面・貯蔵穴状ピット出土の遺物はなく、住居の年代決定が困難である。

遺　　物（第21図59～62，第27表）

59：竪穴内北東部堆積土中出土のロクロ成形坏である。体部下端と回転糸切痕を有する底部からなる破片がある。浅黄橙色の硬質な坏で、胎土は緻密である。

60：竪穴内北東部表土下の土師器小形甕で、頸部と体部境に段を形成する。

61：竪穴内北東部堆積土中出土の土師器甕の底部が突出している。



1．黒褐色土層（黄色シルト混り）
2．黒褐色土と黄色シルトの混土層
3．黄色シルト層（黒褐色シルト混り）
4．黒褐色土層（含炭化物）

第 8 図　Bf30竪穴跡

62：竪穴内北東部表土下出土の土師器甕の体部下半から底部の破片である。底部は突出し、下面に木葉痕が見られる。

その他：堆積土やピット中から出土した土器細片は非ロクロ内黒坏片、ロクロ内黒坏片、ロクロ坏片、土師器甕片、須恵器壺片、高台坏片等種々である。

第6表　　Bf30 住居跡ピット一覧

PitNo.	P_1	P_2	P_3	P_4	P_5	P_6	P_7	P_8	P_9	P_{10}	P_{11}
深さ(cm)	22	22	24	21	33	34	22	18	11	21	21
備　考	接合土師器甕ロクロ坏					土師器甕片					

PitNo.	P_{12}	P_{13}	P_{14}	P_{15}	P_{16}	P_{17}	P_{18}	P_{19}	P_{20}	P_{21}	P_{22}
深さ(cm)	16	21	25	22	34	22	65	17	23	31	34
備　考					土師器甕ロクロ坏	貯蔵穴	土師器甕ロクロ坏	土師器甕ロクロ坏高台坏			土師器甕

Bj3住居跡（第9図）

（遺構の確認） 調査区中央やや北よりのBj3グリッド周辺の表土を除去し、地山の黄褐色シルト質土層に達したところ方形をした黒褐色土の落ち込みを確認した。

（重複・増改築） 北東より南西へ走る溝を切って住居を構築しており、その住居を新しい溝が切っている。

（平面形・方向） 平面形は隅丸方形で、方向（カマドの方向を基準）は南北である。大きさは5.0×4.6mで、床面積は21.8㎡である。

（堆積土） 住居内の堆積土は基本的には3層である。

第1層：黄褐色シルト質粘土層で、黒褐色土が混じる。カマド関係を除き竪穴全域に分布する初期的な堆積層である。

第2層：黒褐色土層で、褐色シルトブロックが渇じる。煙道北部から煙出し部の上部堆積層である。

第3層：混土層で、黒褐色土、褐色土、焼土、炭化物等の混じり合った層で、煙道から煙出しまで続く。煙道部天井の崩落土その他の混合層と考えられる。

（床面） 東壁北半の床面及び壁が溝により切られている。他は平坦である。あまり固い面をなしていない。壁は床面から急角度で立ち上がる。保存のよい西壁、北壁では14～15cmの壁高である。北壁中央にはカマドが、その東側に貯蔵穴状ピットがある。この地区は緩傾斜で南へ下る地形をしており、北東から南西方向へ走る溝の北東部を埋め込んで床面としている。南西部の溝は煙道南半から南流する溝と接続し、埋土は黒褐色腐植土である。住居内排水用の溝と考えられる。その他の床面は地山の黄褐色シルト質土層である。13個のピットがある。

（柱穴） 床面で確認できたピットは9個である。この中でP_1～P_4の4個のピットは竪穴の各辺

に平行な方形に配置されており、主柱穴と考えられる。この柱穴ピットは直径16～20cmで、深さは34～45cmでほぼ垂直である。柱痕だけで、掘り方はなく、打ち込み式の柱穴と考えられる。

（カマド） カマドは北壁中央を掘り込んでつくられている。カマドの袖の一部が残存している。この袖は竪穴構築の際に予め掘り残して袖にしたもので地山の黄褐色シルト質土からなる。右袖は長さ22cm、幅25cm、高さ12cm、左袖は長さ35cm、幅14cm、高さ15cmである。煙道南半より燃焼部を通って南流する溝があり、溝の上を２個体の土師器甕の破片で覆って夫々床面としている。燃焼部は楕円形で浅い皿状を呈し、側壁が焼けて赤変し、甑がつぶれた形で残っていた。煙道は水平に北へ１ｍ程延び、深く掘り下げられた煙出しへと続く。

（貯蔵穴） カマドの東側に楕円形の皿状をしたピットがある。大きさは100×60cmで、深さ27cmである。内部には土師器甕破片が少量あり、暗褐色土が詰まっていた。

（年代決定資料） 煙道から燃焼部にかけて溝の上を覆っていた土師器甕２個体(23・24)、燃焼部出土の長胴甕形無底式甑１個体(25)、床面出土の内黒丸底坏(22)がある。

遺　　物（第17図22～25，第27表）

22：非ロクロ内黒丸底坏で、南西部床面出土である。底部内面は放射状に篦ミガキ後黒色処理されている。底部外面は風化により不明。

23～24：土師器の非ロクロ長胴形甕で、体部中央がやや膨らみ、頚部に段をもち、口縁部が外反する。煙道と燃焼部の溝を覆っていたもので、火熱を受けて赤変している。

25：長胴甕形の無底式の甑で、頚部に段を有する。燃焼部出土。

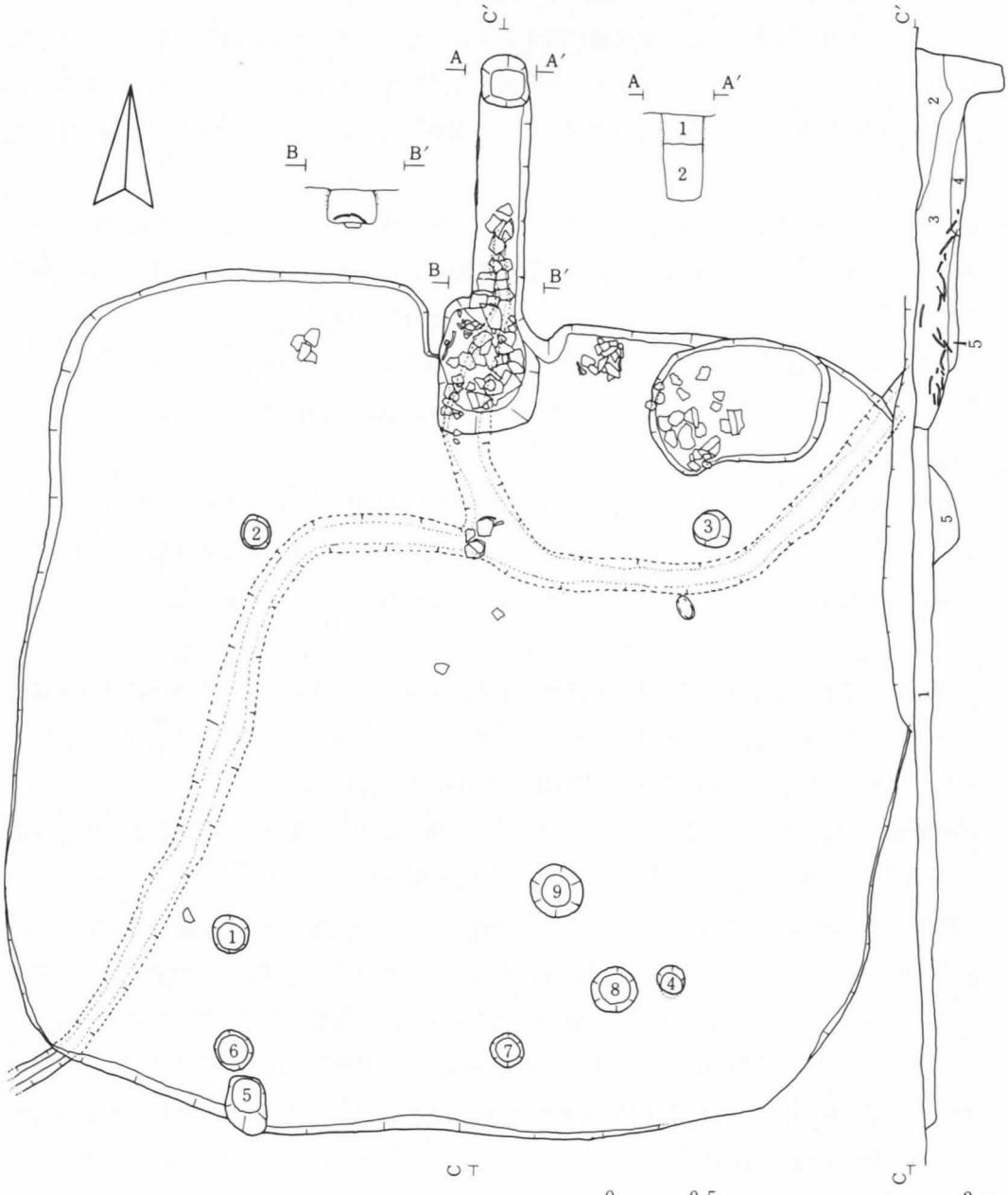
第７表　　Bj３住居跡ピット一覧

PitNo.	P_1	P_2	P_3	P_4	P_5	P_6	P_7	P_8	P_9
深さ(cm)	38	34	43	45	10	19	12	10	13
土　色	黒褐色	黒褐色	黒褐色	黒褐色	暗褐色	黒褐色	黒褐色	黒褐色	黒褐色
土　性	シルト質土	シルト質土	シルト質土	シルト質土	シルト質土	シルト質土	シルト質土	シルト質土	シルト質土
備　考					炭化物焼土	土師器甕片			

Ｂｊ56溝１（Bj３住居跡北側溝，第３図）

北東から南西方向へ走る溝の上にBj３住居を構築し、住居北東部溝で人為的に埋めて北側を西方で迂回させて掘り込んだ溝と考えられる。溝の幅は約50cm、深さ25cmである。この溝に廃棄されたものと推定される多量の完形に近い土師器が出土した。(第18図32～39)

32～35：ロクロを使用していない坏である。32は平底風の丸底内黒坏で、体部から口縁部へと内彎気味にたち上がる。内面篦ミガキ後黒色化し、外面底部は篦ケズリ後篦ミガキがされている。33・34は平底坏で、体部から口縁部にかけて直線的に外傾する。両面共に入念な篦ミガキ後黒色化されている。35は丸底の底部から内彎する体部・口縁部へと続くもので、小形の皿状



1．黄褐色シルト質粘土層（黒褐色土が混じる）
2．黒褐色土層（褐色シルトブロック混じる）
3．混土層（焼土・黒褐色土・褐色土・炭化物）
4．暗褐色土層（褐色シルト小ブロック混じる）
5．黒褐色土層

第9図　Bj03住居跡

である。内面篦ミガキ、外面底部は篦ケズリ後篦ミガキされる。

36～37：体部が球形で、体部と頚部境に段を有する土師器の甕がある。36は非常に小形で、口縁部横ナデ、体部内面ハケメ、外面はハケメ後部分的に篦ミガキされる。37は大形のもので、口縁部、底部共に欠失している。器面風化著しく調整不明である。体部内面に粘土接合痕が見られる。

38：土師器長胴形の甕である。底部は突出し、体部が上方に向かって開き、頚部境で段をなし外反する口縁部へと続く。内面、外面共に風化磨滅が著しい。口縁部横ナデ、体部は外面ナデ内面篦ミガキ痕が部分的に残る。両面共に巻き上げ接合痕が見られる。

39：土師器無底式の甑で、長胴形甕の底部を欠いた形を呈する。口縁部欠失。内面横位のハケメ、外面縦位のハケメ痕が部分的に残るが、器面の風化磨滅が著しい。

Cc24住居跡（第10図）

（遺構の確認） 調査区西側中央付近にて、Ca21住居跡の南西隣のCc24グリッド周辺にて方形をした黒褐色土の落ち込みを確認した。遺構検出面は表土下の黄褐色シルト質土層上面である。

（重複・増改築） 住居の西側を南流する溝によって切られている。又床面が数個のピットにより切られている。

（平面形・方向） 住居跡の西側及び南側がかなり削平されている。このため全体の形は明確でないが、残存している部分から隅丸方形と推定される。方向（カマドの方向を基準）はほぼ南北で、大きさは3.50×2.80mである。床面積は9.18㎡位と推定される。

（堆積層） 住居内堆積土は非常に薄く１層である。黒色に近い暗褐色シルト質粘土で広く分布する。住居廃絶後に掘られたピット類の埋土は黒色腐植土である。

（床面） 床面の南西部分は削平されてほとんど残っていない。保存のよい北側は多少の凹凸はあるが平坦でしまっている。壁は床面から急角度でたち上がる。比較的保存状態のよい北壁や東壁では12～13cmの壁高であるが、南壁・西壁共にほとんど残存しない。北壁の西寄りにカマドが構築されたものと思われ、その東側に貯蔵穴状ピットが検出された。床面はシルトと黒色腐植土の混土層が0.5cm位の厚さで部分的に残存しており、その下は地山の黄褐色シルト質土層である。掘り方埋土はない。

（柱穴） 住居内には13個のピットがある。この内P_3・P_5・P_{11}は非常に浅く単なる凹み程度のものと考えられる。P_6・P_7・P_{10}・P_{12}・P_{13}は竪穴堆積土上から確認されたもので、住居廃絶後のピットと考えられる。P_8は貯蔵穴状ピットであり、P_{11}はカマドに付属するものである。P_1とP_4は配置の上で柱穴と考えられるが、これらと組み合うピットがないので柱穴に関しては不明な点が多い。

（カマド） カマドと考えられるのは北壁西寄り部分であるが、燃焼部の痕跡は全くなく、P_8に

焼土が入っていた。壁外北方向に煙道部の底が長さ130cm、幅27cmで残っており、その先端に煙出しのピットP_{11}がある。P_{11}の深さは7cm程で底部が火熱を受けて3cm程の厚さで焼けており、その下は煙出し部の掘り方埋土がある。

(貯蔵穴) 北壁中央寄りに円形のP_8がある。大きさは直径85cm位で深さ35cmである。内部には焼土と土師器甕の細片1点が入っていた。

(年代決定資料) 遺物は床面やピット内からかなり出土している。住居廃絶後のピットも多数あり、混入等も考えられる。P_{10}(第19図40)、P_9(同43)、P_{11}(同45)出土の遺物が住居の使用された年代を考える上で有効な資料と考えられる。

遺　　物 (第19図40～49, 第27表)

40・41：40は新しいピットP_{10}の埋土出土で、非ロクロ内黒平底の坏。内外両面共に篦ミガキされている破片がある。41は床面出土の底部回転糸切の坏細片で、胎土は緻密であるが、赤橙色の軟質な焼成で、混入と考えられる。

42：床面出土土師器の球胴形甕の体部下半から底部にかけての破片である。体部が大きく膨らみ、底部がわずかに突出している。

43～49：土師器で頸部に段を有する長胴形の甕である。43・44は小形のもので、P_9・P_{10}の出土で、43底部には木葉痕が残る。45は煙出しのP_{11}、46はP_9出土で胴張りのする大形のもので、口縁部は大きく外反する。47～49は床面出土の底部破片である。

第8表　　Cc24 住居跡ピット一覧

PitNo.	P_1	P_2	P_3	P_4	P_5	P_6	P_7	P_8	P_9	P_{10}	P_{11}	P_{12}	P_{13}
深さ (cm)	25	27	7	14	5	25	15	25	8	44	7	1	7
土色	黒褐色	黒褐色	黒褐色	黒褐色	黒褐色	黒褐色	黒褐色	暗褐色	暗褐色	黒褐色	黒褐色	黒褐色	黒褐色
土性	シルト質土	シルト質土	シルト質土	シルト質土	シルト質土	シルト質土	シルト質土	シルト質土	シルト質土	シルト質土	シルト質土	シルト質土	シルト質土
備考								貯蔵穴 土師器甕	焼土 土師器甕	内黒坏	土師器甕		

Cc24遺構 (第10図)

(遺構の確認) Cc24住居跡の西側に隣接して、同じCc24グリッドに黒褐色土の落ち込みを確認した。確認面は表土下の黄褐色シルト質土層上面である。

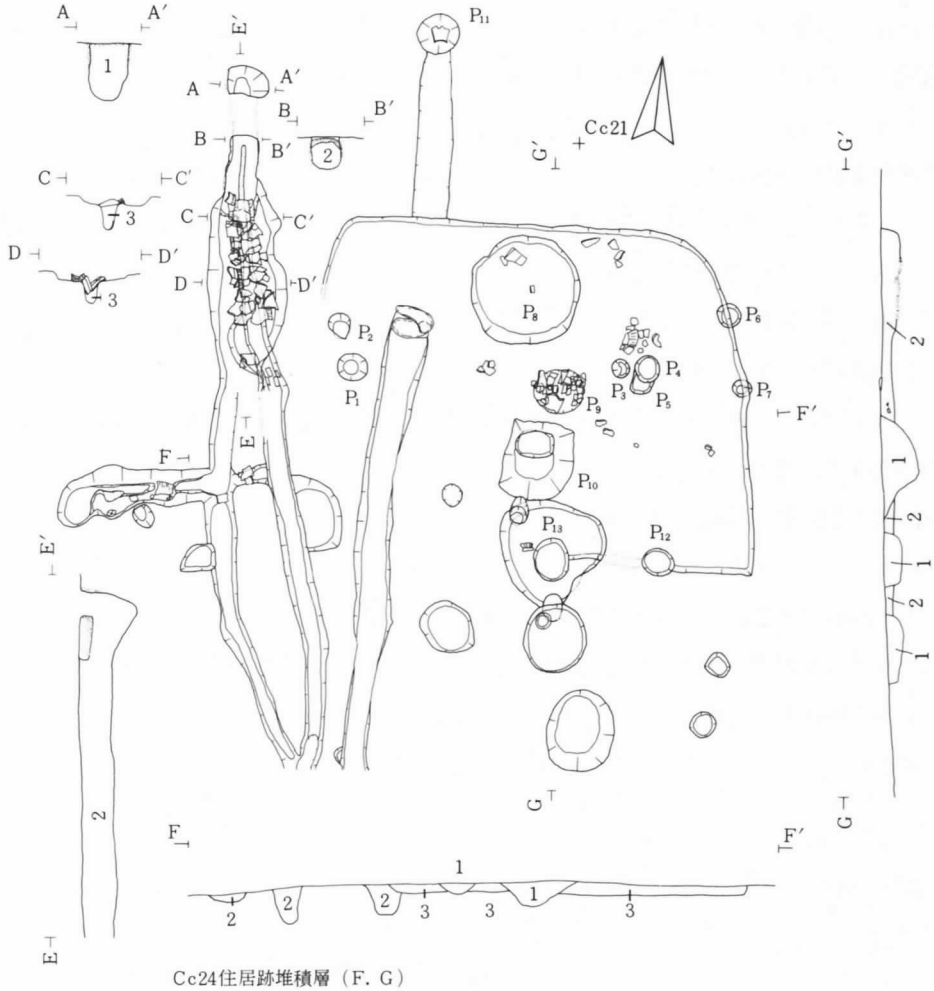
(重複・増改築) 不明である。

(平面形・方向) 南北方向の煙道と煙出しを残して他は失なわれている。竪穴住居のカマドに伴なう煙道と煙出しと考えられるが、その他は全て不明である。

(堆積土) 不明

(床面) 不明

(柱穴) 不明



Cc24住居跡堆積層（F. G）

1．ピット埋土　黒褐色シルト質土
2．溝埋土　暗褐色シルト質土
3．住居跡堆積層　暗褐色シルト質土

Cc24遺構堆積層（A～E）

1．煙出し　黒褐色シルト質土
2．煙道　暗褐色シルト質土
3．溝　褐色粘土質シルト　焼土混り

第10図　Cc24遺構Cc24住居跡

（カマド） 南北に水平に延びる煙道と北端の煙出しだけが残る。煙道の南半は掘り込みによるものと思われ、底に溝を掘り、その上を土師器甕の破片で覆って煙道の底部としている。溝には焼土が堆積している。煙道の北半は地山の黄褐色シルト質土層をくり抜いて煙出しに続く。煙出しは一段下がって深いピットとなり、焼土が堆積している。煙道・煙出し共に火熱を受けた痕跡が観察される。尚この煙道底部の溝はゆるく傾斜して南へ延びていく。煙道・住居内の排水を意図しての構築と考えられ、Bj 3住居跡とよく似ている。

（貯蔵穴） 不明

（年代決定資料） 遺物がまとまって出土したのは煙道部からである。（第19・20・21図50～58）このうち51の回転糸切坏細片は混入と考えられる。その他は人為的に溝の上部覆いに使用された土師器で、住居の使用された年代を考える上で最も有効な資料と考えられる。

遺　　物（第19・20・21図50～58，第27表）

50・51：50は煙道出土の非ロクロ内黒丸底坏の底部だけの破片である。器面は全て篦ミガキされている。51は煙道南寄りの出土糸切り底坏底部¼の破片で、胎土は緻密で橙色の軟質な焼成である。これは細片１片だけの出土で混入と考えられる。

52～58：体部頚部境有段の土師器長胴甕で、煙道溝の覆いに使用されたものである。52は煙道中央付近、53は煙道の北部出土で、底部より口縁部に向かって開いていく深鉢様の小形の甕である。54は煙道北部、55は中央付近、56～58は南部付近出土で胴部中央が膨らみ、頚部がややすぼまって段を形成する長楕円形状の大形の甕である。これらの甕は縦割りにした破片を溝の上に横位に据置かれていたものである。

Ｂｉ62住居跡（第11図）

（遺構の確認） 調査区北東部Bi65グリッド周辺で表土を除去、黄褐色シルト質土の地山に達したところ三角形をした黒褐色土の落ち込みを確認した。

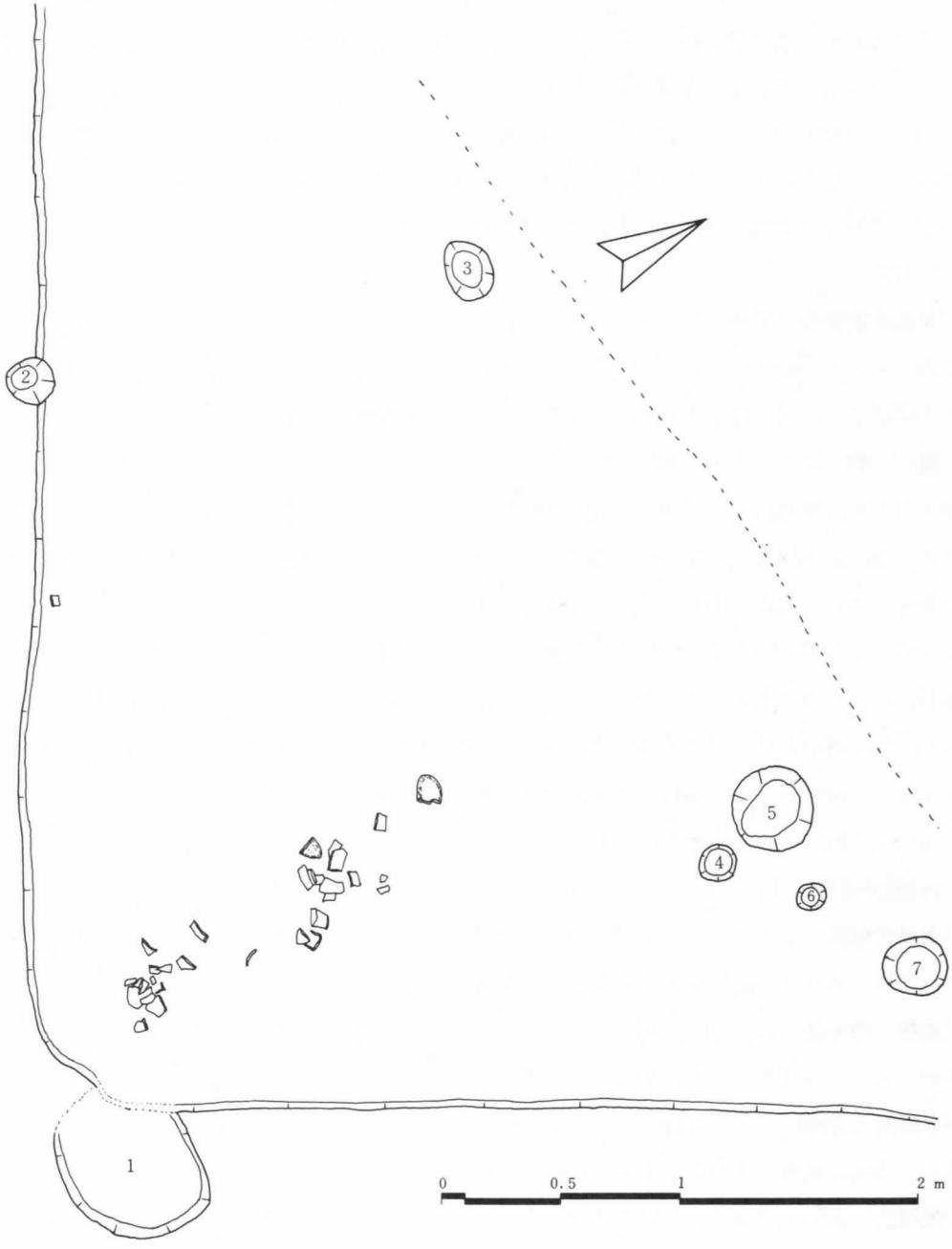
（重複・増改築） Bi68溝状土壙の北端を切って構築されている。現在の民家により北部が破壊されており、残存部もかなり攪乱を受けている。

（平面形・方向） 北部が破壊されて、南部が直角三角形状に4.5×3.8mの長さで残り、方形である。方向は北東一南西を示すものと推定される。

（堆積土） 堆積土は薄く、一層だけである。暗褐色シルト質粘土層で、竪穴残在部の全域に分布している。

（床面） 床面は平坦な面であるが、あまり固くない。床面から壁へは急角度で立ち上がり、壁高は10cm前後である。大小７個のピットが検出された。貯蔵穴状ピットや炉ないしカマドは確認できなかった。床面と住居掘り方埋土の関係も不明である。

（柱穴） ピットは竪穴内外合わせて７個検出された。床面全面が検出されていないので、配列



第11図　Bi62住居跡

関係は検討する事が不可能で、柱穴に関しては明らかにする事ができなかった。

（その他の施設） 確認されなかった。

（年代決定資料） 床面南西部より土師器坏類が出土しているが、種々なものが混在しているように見受けられる。（第17図26～29）土師器甕（第17・18図30～31）等も出土している。

遺　　物（第17・18図26～31）

26～29：床面出土の土師器丸底坏４個体である。26は彩色されない坏で、丸底から内彎する体部へ続き、口縁部が「く」の字状に外反する。器面は両面共に磨滅著しい。27は丸底坏の底部破片で、内面にはハケメ痕が、外面はケズリやハケメ後に篦ミガキして、朱塗りをする。28は内黒丸底の坏底部破片で、体部から口縁部にかけて大きく外反し、丸味をもった底部との境に段を形成する。外面は体部篦ミガキ、底部篦ケズリ、内面は丹念な篦ミガキ後黒色処理している。29は内黒丸底坏の底部破片で、外面篦ケズリ、内面篦ミガキ後黒色処理している。

30：床面出土土師器長胴甕破片である。体部下半から底部は欠く。胴部中央がやや膨らみ、頸部との境に段を有し、口縁部が大きく外反する。大形である。口縁部は両面横ナデ後内面を篦ミガキする。体部上半は両面ハケメ調整される。

31：体部が大きく球形に膨らみ、頸部ですぼまり段を形成する大形の土師器甕である。両面共に入念な篦ミガキがなされる。

第９表　　Bi 62 住居跡ピット一覧

PitNo	P_1	P_2	P_3	P_4	P_5	P_6	P_7
深さ(cm)	20.5	30	10	5	14	5	20.5
土　色	暗褐色	暗褐色	暗褐色	暗褐色	暗褐色	暗褐色	暗褐色
土　性	シルト質土	シルト質土	シルト質土	シルト質土	シルト質土	シルト質土	シルト質土
備　考	土師器片 炭化物	土師器片					土師器片 炭化物

４．掘立柱建物跡（第12・13図，第10表～第14表）

発見された掘立柱建物跡は７棟である。４棟はほぼ同位置に重複し、建物の振れも同じであるが、規模においては２棟ずつが夫々近似するものと思われる。他の３棟は建物規模、振れ共に異なる。6棟は梁行と桁行が直角であるが、他の１棟は歪んで平行四辺形に近い。

Be24Ａ・Ｂ建物跡（第11表）

調査区北西部にある東西棟２間×４間の掘立柱建物であり、新旧２時期のものがほぼ同位置同規模に重複している。更にこの位置に規模は異なるがBf21Ａ・Ｂ建物跡が重複している。

Be24A建物跡は最も古い建物跡である。掘方の平面形は一辺約74cmの方形で、現存する深さは46cm程である。壁はほぼ垂直に近く掘り方の埋土は黒褐色土に黄褐色シルトブロックが混じったもので、埋土中から土器片が出土している。次に建てられたBe24B建物の掘り方によって

かなり破壊されており、柱位置のわかるものがなく、柱間寸法は不明である。しかしBe24B建物の全ての掘り方がBe24Aの掘り方に含まれた状態で重複している事から、Be24B建物の規模に近似するものと推測される。

Be24B建物跡はBe24A建物跡を切る。又南側柱列東から3個の掘り方はBf21A・B建物によって切られる。東西棟2間×4間の建物で、東妻柱列の方向北で磁北より西へ4°5′振れている。柱間寸法は梁行で6.3m＝3.15m×2、桁行は10m＝2.5m×4であり、0.30m強を1尺とする10.4尺等間(梁行)、8.2尺等間(桁行)の建物と推定される。堀り方はBe24Aのそれよりやや小さく、1辺57cm程の方形で、深さは約57cmとBe24Aよりやや深くなっている。掘り方底部の高さは殆んど不揃いである。柱あたりは直径25cm程である。掘り方埋土はBe24Aとほぼ似ているが、黄褐色シルトブロックが小さくなり汚れている。掘り方埋土内からは非常に多量の土器片が出土しており、特に土師器甕、ロクロ坏、ロクロ内黒坏が多い。

Bf21A・B建物跡（第12表）

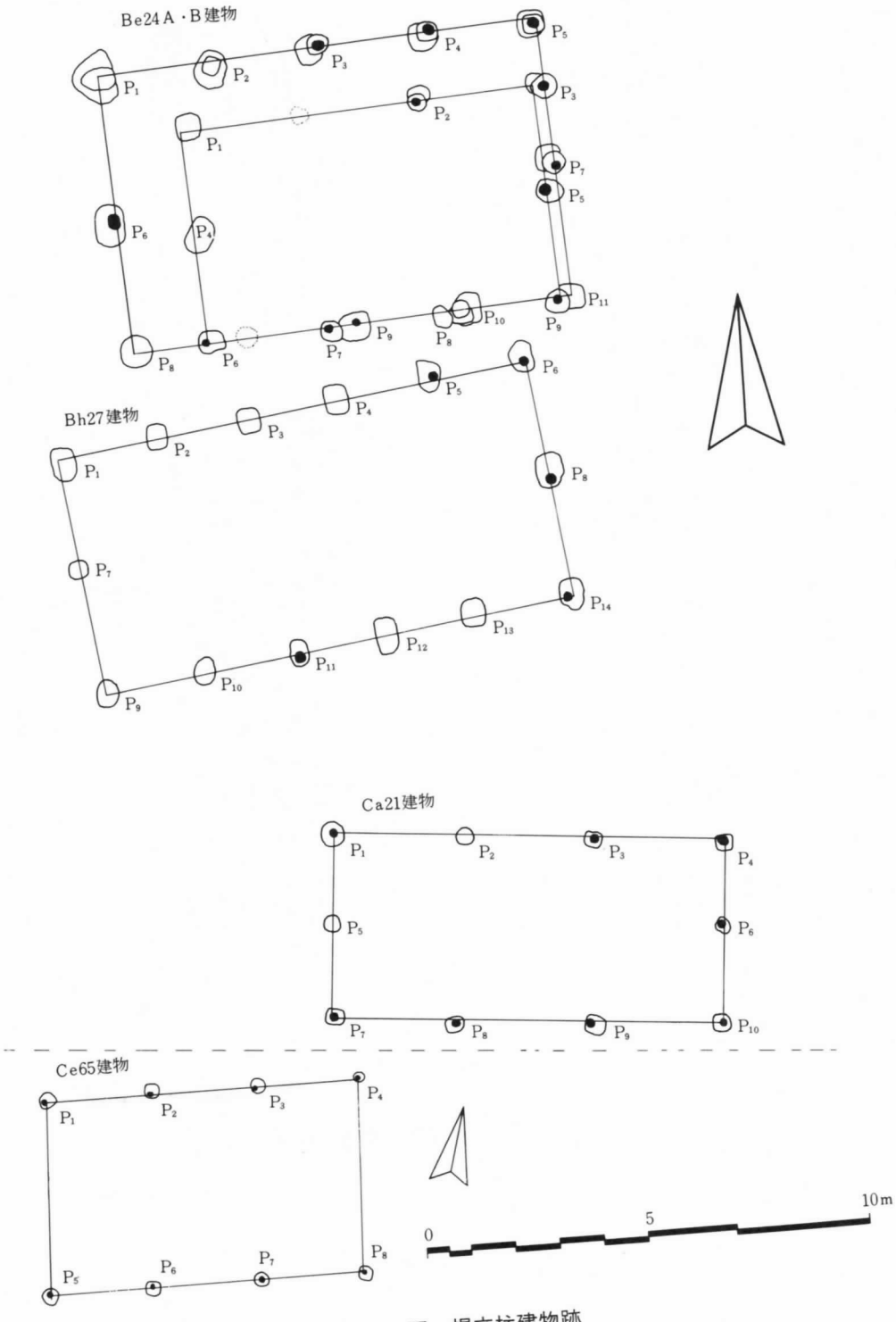
Bf21A・B建物はBe24A・B建物を切り、その中に入るやや規模の小さい掘立柱建物跡である。建物方向の振れはBe24Bと全く同じで、南側柱列の柱筋はBe24A・Bとすっかり重なる。東西棟2間×3間で、新旧2時期のものがほぼ同位置に重複している。

Bf21A建物跡はその古い建物跡である。柱の掘り方はBf21B建物の掘り方により殆んど壊されており、平面形は直径約48cm位の歪んだ円形状である。現存する深さは22cm程である。埋土は黒褐色土の中に黄褐色シルトの小ブロックが混入し、土器片も出土している。柱位置のわかるものがなく、柱間寸法も不明であるが、Bf21Bの全ての掘り方がBf21Aのそれに含まれた状態で重複している事から、Bf21Bの規模に近似するものと思われる。

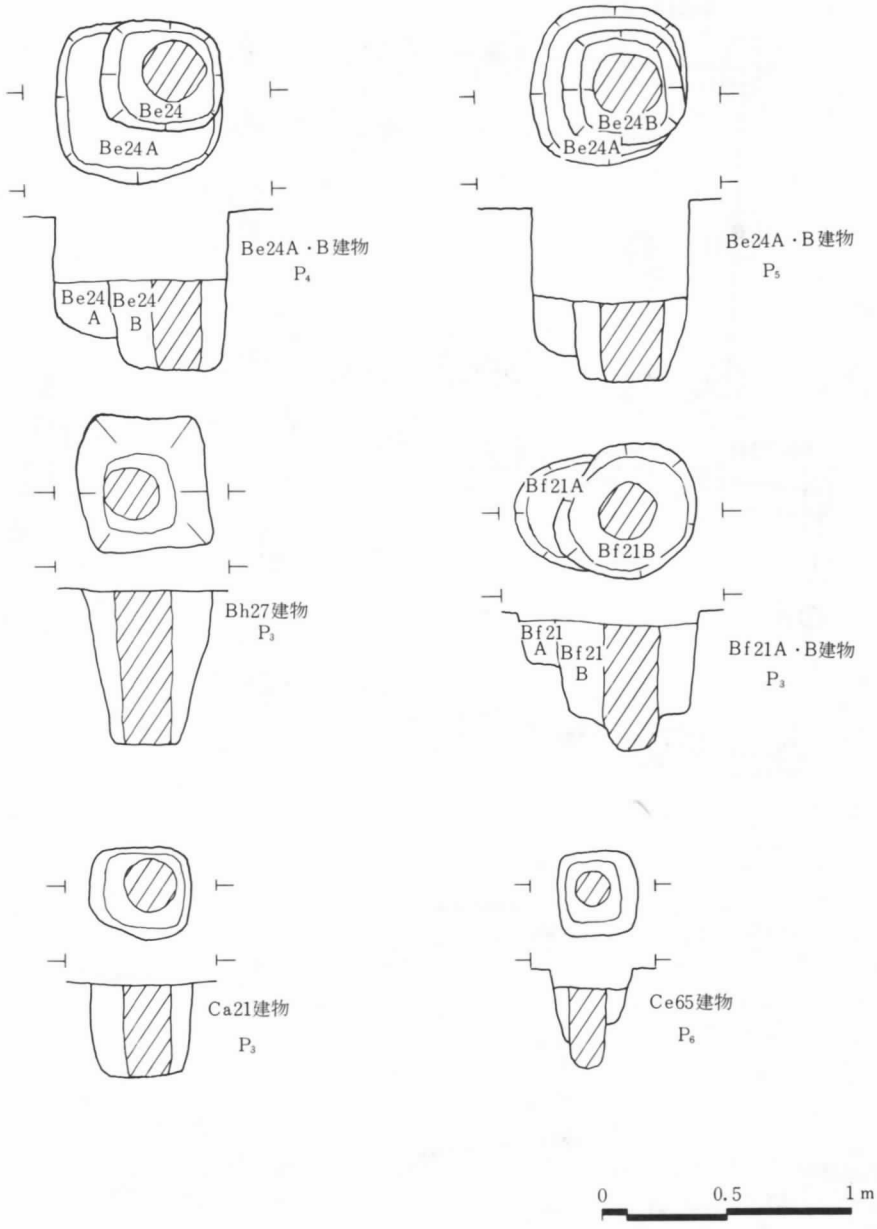
Bf21B建物はこの4棟の中では最も新しいもので、東西棟2間×3間の建物である。柱間寸法は梁行で4.8m＝2.4m×2、桁行では7.99m＝2.66m×3であり、0.30m強を1尺とする7.9尺等間(梁行)、8.8尺等間(桁行)の建物と推定される。掘り方は一辺57cm程の方法のものと直径52cm程の円形のものがあり、深さは48cmとBf21Aより深く、埋土は黒褐色土に黄褐色シルトブロックの混淆したものを用いている。柱穴は直径21.5cm程の円形である。掘り方埋土は土師器甕片、ロクロ内黒坏、ロクロ坏片が多量に入っていた。

Bh27建物跡（第13表）

Be24建物、Bf21建物の南約1.4mにある東西棟2間×5間の掘立柱建物跡で、東妻方向で磁北に対し、北で約7°5′西へ振れている。柱間寸法は梁行で5.4m＝2.7m×2、桁行で10.8m＝2.16m×5であり、0.30m強を1尺とする8.9尺等間(梁行)、7.1尺等間(桁行)であったろうと推定される。掘り方は一辺約61cmの方形で、深さは47cmである。掘り方底面高は大体同じである。柱穴は直径22cm程の円形である。掘り方埋土は黒褐色土に黄褐色シルトの小ブロックが混


Be24A・B建物
P1
P2
P3
P4
P5
P6
P7
P8
P9
P10
P11
Bh27建物
P1
P2
P3
P4
P5
P6
P7
P8
P9
P10
P11
P12
P13
P14
Ca21建物
P1
P2
P3
P4
P5
P6
P7
P8
P9
P10
Ce65建物
P1
P2
P3
P4
P5
P6
P7
P8
0
5
10m

第12図　掘立柱建物跡



第13図　掘立柱建物跡、掘方・柱穴

淆したものを用いている。埋土内出土遺物は土師器甕、ロクロ内黒坏、ロクロ坏、高台坏等の破片で、西妻及び北側柱列に特に多量に混入していた。

Ca21建物跡（第14表）

Bh27建物跡の南4.3m程にある東西棟2 間×3 間の掘立柱建物で、東妻方向で磁北に対し、北で約5°5′東へ振れている。Ca21竪穴住居跡を切って建てられている。柱間寸法は梁行で4.15m＝2.075m × 2 、桁行で8.85m＝2.95m × 3 であり、0.30m強を1尺とする6.8尺等間(梁行)、9.7尺等間(桁行)であったものと推定される。柱掘り方は一辺40cm程の方形のものと直径43cm程の内形のものがあり、深さは31cm程現存する。掘り方底面高は大体同じである。柱穴は直径21cm程の円形である。掘り方埋土は黒褐色土に黄褐色シルトブロックが混淆したものである。掘り方埋土内出土遺物は非常に少なく、土師器甕、須恵器坏の破片で、北側柱列より出土している。

Ce65建物跡（第10表）

調査区東端のやや南寄りにある東西棟1間×3間の掘立柱建物跡で、東妻方向で磁北に対し、北で約13°5′西へ偏している。この建物は梁行と桁行が直角でなくやや歪み、平行四辺形の形状である。柱間寸法は梁行は1間で4.4m(14.5尺)、桁行7m＝2.33m × 3であり、0.30cm強を1尺とする7.6尺等間(桁行)の建物と推定される。柱掘り方は一辺33cm程の方形のものと直径35cm程の円形のものがあり、深さは40cm位現存する。掘り方底面高は種々である。柱穴は直径14cm位の円形で非常に小さい。掘り方埋土には暗褐色土に黄褐色シルトブロックの混淆したものが入っており、出土遺物は皆無である。建物跡の柱掘り方に囲まれた内側から土師器長胴甕4個体分（頚部有段、底部木葉痕、器面ハケメ・篦ミガキ）と球胴甕1個体分（器面ハケメ）が出土した。

第10表　　Ce65 掘立柱建物跡柱掘り方一覧

PitNo.	上端標高 (m)	下場標高 (m)	深さ (cm)	柱掘り方平面形	一辺・直径 (cm)	掘り方埋土	柱あたり径 (cm)	掘り方埋土混入物 (数字は破片数)
P_1	61.76	61.28	48	方形	40	暗褐色土・黄褐色土の混淆土	14	
P_2	61.71	61.21	50	方形	34	暗褐色土・黄褐色土の混淆土	14	
P_3	61.65	61.14	51	円形	35	暗褐色土・黄褐色土の混淆土	13	
P_4	61.55	61.09	46	方形	21	暗褐色土・黄褐色土の混淆土	13	
P_5	61.56	61.22	34	円形	37	暗褐色土・黄褐色土の混淆土	14	炭化物少量
P_6	61.49	61.06	43	方形	33	暗褐色土・黄褐色土の混淆土	14	炭化物少量
P_7	61.41	61.08	33	円形	34	暗褐色土・黄褐色土の混淆土	14	
P_8	61.30	61.09	21	方形	34	暗褐色土・黄褐色土の混淆土	14	

第11表　Be24A.B掘立柱建物跡柱掘り方一覧

（A—旧、B—新、空白は不明）

Pit No.	上端標高（m）	下端標高（m）	深さ（cm）	平面形	辺・径（cm）	埋土	柱当り径(cm)	埋土混入土器（数字は破片数）
P1 A	62.21	61.62	59	方形	105	黒褐色土黄褐色土混淆		土師器甕3、ロクロ内黒坏2、須恵器坏1
P1 B	62.21	61.48	73	方形	65	〃		土師器甕3、ロクロ内黒坏2、須恵器坏1
P2 A	62.24	61.56	68	方形	84	〃		
P2 B	62.24	61.51	73	方形	43	〃		土師器甕12、ロクロ内黒坏1、土師質坏4
P3 A	62.17	61.81	36	方形	70	〃		土師器甕2 ロクロ内黒坏1 非ロクロ 内黒坏 1 土師器甕 1 ロクロ使用 内黒坏 3 須恵系赤焼坏 2 須恵器坏 1 須恵器甕 1
A3 B	62.17	61.56	61	方形	49	〃	31	土師器甕2
P4 A	62.10	61.60	50	方形	67	〃		土師器甕1 非ロクロ 土師器坏 1 土師器甕 4 ロクロ使用 内黒坏 1
P4 B	62.10	61.48	62	方形	44	〃	25	
P5 A	62.10	61.50	60	方形	64	〃		土師器甕 7 須恵器坏 1
P5 B	62.10	61.40	70	方形	45	〃	25	
P6 A								縄文片 1 非ロクロ 内黒坏 1 土師器甕 8 ロクロ 内黒坏 3 須恵系赤焼坏 4 須恵器坏 1
P6 B	62.20	61.66	54	方形	92	〃	33	
P7 A	62.14	61.89	25	方形	62	〃		小形手捏ね 1 土師器甕 6 須恵器坏 4 非ロクロ 縄文片 3 小形手捏ね 1 内黒坏 2 土師器甕 46 ロクロ使用 内黒坏 8 須恵器坏 1
P7 B	62.14	61.66	48	方形	47	〃	20	非ロクロ 内黒坏 2 土師器甕6 ロクロ使用 土師質坏 1 須恵器坏 2
P8 A								
P8 B	62.20	61.61	59	方形	70	〃		非ロクロ 土師器坏 2 土師器甕 58 ロクロ使用 内黒坏 55 須恵器坏 6 須恵系赤焼坏 55 須恵器甕 4
P9 A								
P9 B	62.25	61.78	47	方形	70	〃	20	非ロクロ 土師器甕 22 ロクロ使用 内黒坏 9
P10A	62.20	61.92	28	方形	71	〃		非ロクロ 土師器甕 2 Bf21建物Pit8と混合 非ロクロ 内黒坏 2 土師器坏 2 土師器甕 18 ロクロ使用 内黒坏 12 土師質坏 9 土師質高台坏 1 須恵器甕 2
P10B	62.20	61.74	46	方形	46	〃		非ロクロ 土師器甕 3 ロクロ使用 須恵系赤焼坏 1
P11A								Bf21建物P9と混合 非ロクロ 朱塗坏 1 内黒坏 1 土師器甕 41 ロクロ使用 内黒坏 40 土師質坏 11
P11B	62.24	61.91	33	方形	58	〃		非ロクロ 内黒坏 2 土師器甕 5 ロクロ使用 須恵器坏 1

第12表　Bf21 A.B掘立柱建物跡柱掘り方一覧

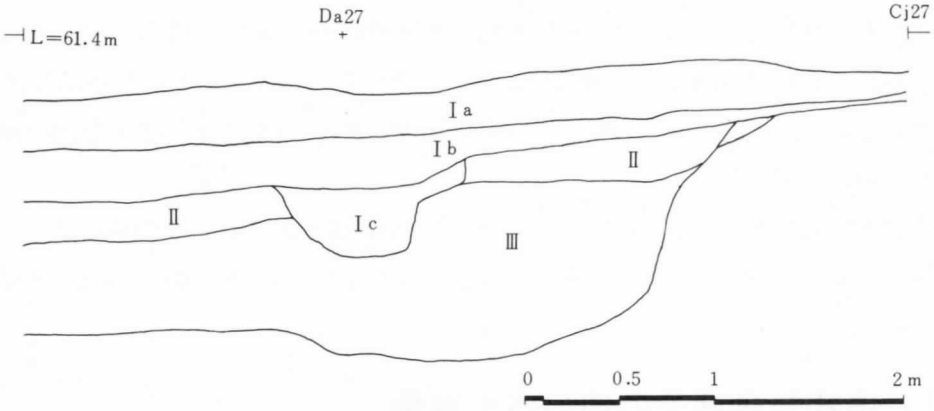
（A—旧、B—新、空白は不明）

Pit No.	上端標高（m）	下端標高（m）	深さ（cm）	平面形	辺・径（cm）	埋土	柱当り径(cm)	埋土混入土器（数字は破片数）
P1 A								
P1 B	62.22	61.60	62	方形	62	黒褐色土黄褐色土混淆		非ロクロ 土師器甕 2 ロクロ使用 内黒坏 3 須恵系赤焼坏 3
P2 A	62.25	62.00	25	円形	48	〃		非ロクロ 内黒坏 1 土師器甕 3 ロクロ使用 内黒坏 1 須恵系赤焼坏 1 土師質坏 1
P2 B	62.25	61.83	42	円形	42	〃	22	
P3 A	62.24	62.04	20	円形				ロクロ使用 内黒坏 1 土師器坏 1 非ロクロ 土師器坏 1 土師器甕 7 ロクロ使用 内黒坏 4 須恵器坏 1 土師質坏 7
P3 B	62.24	61.82	42	円形	50	〃	21	ロクロ使用 土師器坏 1
P4 A	62.22			円形				非ロクロ 土師器坏 1 内黒坏 1 土師器甕 8 ロクロ使用 土師質坏 12 須恵系赤焼坏 10
P4 B	62.22	61.78	44	方形	58	〃		
P5 A								
P5 B	62.17	61.81	36	円形	64	〃	22	非ロクロ 内黒坏 1 土師器甕 9 ロクロ使用 須恵系赤焼坏 4
P6 A								
P6 B	62.20	61.47	73	方形	60	〃	18	非ロクロ 土師器甕 13 ロクロ使用 内黒坏 14 須恵器坏 3 土師質坏 9
P7 A								
P7 B	62.26	61.79	47	方形	48	〃	21	非ロクロ 朱塗坏 1 内黒坏 1 土師器甕 6 ロクロ使用 内黒坏 10 土師質坏 8
P8 A								Be24建物跡P10と混合
P8 B	62.24	61.81	43	円形	50	〃	27	
P9 A								Be24建物跡P11と混合
P9 B	62.25	61.80	45	円形	55	〃	20	非ロクロ 土師器甕 9 ロクロ使用 内黒坏 3 須恵系赤焼坏 1

表	Pit No.	上端標高 (m)	下端標高 (m)	深さ (cm)	平面形	辺・径 (cm)	埋土	柱当り径(cm)	埋土混入土器（数字は破片数）
第13表 Bh27掘立柱建物跡柱掘り方一覧表（空白は不明）	P_1	62.19	61.79	40	方形	75	黒褐色土黄褐色土混淆		非ロクロ 土師器甕 3 ロクロ使用 土師器坏 3 内黒坏 2
	P_2	62.13	61.79	34	方形	56	〃		非ロクロ 土師器甕 16 ロクロ使用 須恵器坏 8
	P_3	62.19	61.55	64	方形	55	〃	22	非ロクロ 朱塗坏 1 土師器甕 23 ロクロ使用 内黒坏 2
	P_4	62.22	61.61	61	方形	65	〃		非ロクロ 内黒坏 1 土師器甕 18 朱塗坏 1
	P_5	62.23	61.75	48	方形	62	〃	23	非ロクロ 土師器甕 10 ロクロ使用 土師質坏 10 須恵器坏 1 高台坏 1
	P_6	62.24	61.73	51	方形	58	〃	22	非ロクロ 土師器坏 1 内黒坏 1 土師器甕 2
	P_7	62.19	61.70	49	円形	47	〃		非ロクロ 撚糸文 1 内黒坏 4 土師器甕 18 ロクロ使用 内黒坏 3 土師質坏 63 高台坏 4
	P_8	62.15	61.72	43	方形	60	〃	26	非ロクロ 土師器甕 8
	P_9	62.18	61.84	34	方形	58	〃	16	非ロクロ 土師器甕 9 ロクロ使用 内黒坏 4 土師質坏 2 須恵器坏 1
	P_{10}	62.21	61.81	40	方形	60	〃		
	P_{11}	62.25	61.62	63	方形	60	〃	25	フレイク 1 土師器甕 7 縄文 2
	P_{12}	62.20	61.75	45	方形	83	〃		
	P_{13}	62.24	61.77	47	方形	62	〃		非ロクロ 内黒坏 1 朱塗坏 1 土師器甕 23 ロクロ使用 土師質坏 3
	P_{14}	62.24	61.79	45	方形	60	〃	22	非ロクロ 土師器甕 5 ロクロ使用 須恵器坏 1
第14表 Ca21掘立柱建物跡柱掘り方一覧表（空白は不明）	P_1	62.26	61.80	46	円形	52	黒褐色土黄褐色土混淆	19	
	P_2	62.15	61.77	38	円形	44	〃		非ロクロ 朱塗坏 1 土師器甕 2
	P_3	62.23	61.88	35	方形	41	〃	22	
	P_4	62.02	61.72	30	方形	40	〃	27	非ロクロ 土師器甕 ロクロ使用 須恵器坏 1
	P_5	62.24	61.94	30	円形	36	〃		
	P_6	61.98	61.80	18	方形	32	〃	20	
	P_7	62.22	61.78	44	方形	43	〃	23	
	P_8	62.10	61.90	20	円形	42	〃	21	
	P_9	62.13	61.89	24	方形	42	〃	23	
	P_{10}	61.93	61.59	34	方形	42	〃	20	

第15表　南西部遺物包含地出土遺物一覧表　（数字は破片数）

各層	剥片石器	縄文・弥生	非ロクロ非内黒坏	非ロクロ内黒坏	土製紡錘車	非ロクロ土師器甕	須恵器・壺・長頸瓶	ロクロ高台坏	ロクロ内黒坏 BⅠ類	ロクロ坏 BⅡ類	計
Ⅰa		1		1		60	19	1		17	99 9％
Ⅰ				1		63	6			2	72 7％
Ⅰb						30	23	1	7	14	75 7％
ⅡU		4		5	1	150	38	21	30	125	374 33％
Ⅱ	1	2		5		268	20	6	40	122	464 41％
ⅡL	1		3	2		21	7		1	3	38 3％
計	2 0.2％	7 1％	3 0.3％	14 1％	1 0.1％	592 54％	113 10％	29 3％	78 7％	283 25％	1122 100％



第14図

層位	土色	土性	備考
Ⅰa（耕作土）	灰褐色	砂質土	粘性なし
Ⅰb	灰褐色	砂質土	よくしまり固い
Ⅰc（溝）	灰褐色	粘土質土	よくしまる
Ⅱ	暗褐色	粘土質土	
Ⅲ（地山）	褐色	粘土質土	

第14図　南西部遺物包含地層位図　（南北断面図）

5．南西部遺物包含地（第14図・第15表）

南西部遺物包含地はCj33Da33～Cj27Da27グリッドの約50㎡の範囲で、更に西方へ延びる。この地区は北の崖面を境にして北方の遺構構築面がある段丘縁部より1m程下がった沖積地の平坦地で、その南が更に崖となり一段下がる。新しい溝が東西に走るほかは遺構は皆無で、遺物だけが分布する。遺物包含層は第Ⅰ層から第Ⅱ層までで、第Ⅲ層は地山である。第Ⅰ層はⅠa・Ⅰbの2つの層に細分される。Ⅰa層は灰褐色砂質土の表土で、耕作を受けており、遺跡全体に分布している層である。Ⅰb層はⅠa層と似ており、固くしまっているが基本的にはⅠa層と同一層である。Ⅰc層は灰褐色粘土質土で新しい溝の堆積土である。Ⅱ層は暗褐色粘土質土である。Ⅰb層・Ⅱ層はこの地区にのみ、南にゆるく傾斜して堆積している。

各層よりの出土遺物は第16表の如くで、縄文時代の遺物から平安時代のものまで総破片数にして1,122片である。第16表各層欄のⅠ層はⅠa層とⅠb層の中位を意味する。ⅡUはⅡ層の上位、ⅡLはⅡ層の下位を、Ⅱはその中間を意味する。

Ⅰa層出土は縄文からロクロ使用の坏まで99片で、全体の9％とごく少量である。この中では土師器の甕類の破片が60片で大半を占め、次に須恵器壺・長頸瓶19片、ロクロ坏17片である。Ⅰ層出土は非ロクロ内黒坏からロクロ坏まで72片で、全体の約7％と少量であり、土師器甕が63片を占める。Ⅰb層出土は土師器甕30片からロクロ坏まで75片で7％と非常に少ない。Ⅰa・Ⅰ・Ⅰb層と合わせると246片出土で全体の約22％である。

Ⅱ層上位のⅡU層出土は374片（33％）と多量で、土師器甕150片、ロクロ坏125片、等である。中位のⅡ層出土は464片（41％）で、土師器甕が268片と約6割を占める。Ⅱ層下位のⅡL層出土は38片（3％）と最も少なくなり、この中でも土師器甕が21片を占める。尚ⅡU・Ⅱ・ⅡL層全体では876片で80％である。

遺物包含地出土遺物1,122片の中で、最も多いのは土師器甕592片（54％）で半数以上を占め、次がロクロ坏283片（25％）である。その他多量に出土しているものはロクロ使用による土器類である。

Ⅴ　遺物包含地その他の出土遺物

1．縄文・弥生土器片（第27図228～233，第16表）

調査区出土の縄文・弥生土器片は47片である。出土地は南西部遺物包含地7片、Bf15溝6片、Cc24住居内1片、Bf30住居内2片、北西部ピット群26片、表土5片である。遺構に直接伴なうものはなく、器面・断面共に風化磨滅した体部細片である。この中から比較的磨滅の少ない6片の拓影図をとり上げる。218は縄文の節が大きく、胎土に植物繊維が多量に含まれ、早期末から前期初頭頃のものと思われる。その他は地文に縄文が1点、撚糸文が3点である。228は口

縁部破片で、篦ミガキ後二条の平行沈線による連孤文を上段に、下段には半単位ずらして相対する形の連孤文を、頚部に二条の平行沈線がめぐり、佐倉河常盤遺跡出土[①]のものに類似する。

① 伊藤信雄「岩手県佐倉河村発見の弥生式遺跡」(古代学第3巻第2号 昭29)

第16表　　縄文・弥生土器片観察表（第27図228～233）

図版	出土地	部位	外面	内面	胎土	焼成	色調	備考
228	Bfg30Ⅰ	口縁部	二条平行沈線連孤文	ミガキ	緻密砂粒少量混入	やや硬質	にぶい褐色	弥生
229	Cj27Da27ⅡU	体部	撚糸文(R)縦走	不明	粗砂粒混入	やや軟質	灰色	
230	Bhi24Ⅰ	体部	撚糸文(R)縦走	ミガキ	砂粒少量混入	やや硬質	にぶい橙色	
231	Bfl5溝	体部下半	撚糸文(R)斜走	不明	砂粒少量混入	やや硬質	にぶい橙色	
232	不明	体部	単節縄文LR	不明	緻密砂粒少量混入	やや硬質	褐灰色	
233	Cc24住床	体部	単節縄文LR	不明	繊維含砂粒混入	やや硬質	橙色	縄文

2．剝片石器（第27図217～227，第17～19表）

当遺跡出土の石器は剝片石器で11点である。調査区西半に稀薄に分布しているもので、溝状土壙埋土中より石鏃1点、溝より4点、その他6点等である。Bj3住居跡北西部の溝よりは3点の出土である。石器の種類は、石鏃4点、石錐1点、不定形石器6点等である。217～219は二等辺三角形状の無茎石鏃で、220は柳葉形のものである。222～227は形態的特徴を捉えにくく、一括して不定形石器とした。222は先端に刃部としたもので石篦状石器に類似する。223・224は円形で多辺に刃部を有するもの、225・226は中軸で直交する縁辺に刃部を有するもの、227は下半を欠失した剝片石器である。223～227は削器や掻器に相当するものと思われる。

第17表　　石鏃観察表（第27図217～220）

図版	出土地	基部えぐり度	尖頭部ふくらみ度 R	尖頭部ふくらみ度 L	尖頭部ふくらみ度 平坪	尖頭部先端角	大きさ（長さ×幅）(mm)	長幅指数	重量(g)	石材
217	Bj27Ca27Ⅱ	－12	7	14	10.5	44°	18×13	138	0.8	鉄石英
218	Cj27Da27ⅡL	12	2	2	2	33°	32×19	168	1.5	硬質凝灰質泥岩
219	Cb3溝	7	6	5	5.5	20°	48×20	240	3.9	硬質凝灰質泥岩
220	Bi30溝状土壙		3	3	3	23°	48×10	480	2.0	硬質頁岩

第18表　　不定形石器観察表（第27図222～227）

図版	出土地	打面調整	a面調整	b面調整	長さ(mm)	幅(mm)	重量(g)	石材	備考
222	Cc24溝	打面除去	全体調整	一辺調整	58	34	28.5	硬質凝灰質泥岩	
223	Bj6溝	打面残	全体調整	無調整	23	23	4.4	黒耀石	
224	Cj33Da33Ⅱ	打面残	一辺調整	一辺調整	36	29	5.9	泥質凝灰岩	
225	表採	打面除去	一辺調整	一辺調整	26	35	9.2	黒耀石	
226	Bj27Ca27Ⅰ	打面残	一辺調整	無調整	36	41	9.1	硬質凝灰質泥岩	周縁部分的破損
227	Bh6Ⅰ	打面残	一辺調整	一辺調整	(35)	(35)	(10.9)	硬質頁岩	下半欠損

第19表　　石 錐 観 察 表

図版	出土地	錐部断面形	錐部角度	錐部長(mm)	長さ(mm)	幅 (mm)	重量(g)	石 材	備 考
221	Bi3溝	菱 形	80°	6	35	26	12.3	黒 耀 石	

3．土師器内黒双耳坏（第21図72・73）

内黒双耳坏の耳部に坏体部の一部が付着した破片が2点出土している。遺物包含地のCj33グリッドⅡ層(72)とDa30グリッドⅡ層下位(73)からの出土で、隣接グリッドの同じ層からの出土である事から同一個体のものかもしれない。72の耳部は長さ2.3cm、幅2.5cm、厚さ0.9cm、73の耳部は長さ2.4cm、幅2.4cm、厚さ0.7cm、共に胎土は精良で砂粒少量混入し、やや硬質の焼成であり、色調は72が淡赤橙色、73が淡黄橙色である。坏体部内面は篦ミガキ後に黒色処理されているが、外面は不明である。耳部はハケメの痕跡が部分的に見られるが、磨滅により他は不明である。坏部と耳部の接合痕も観察される。

4．土製紡錘車（第26図213）

南西部遺物包含地Cj30Da30グリッドⅡ層上位より1個出土している。器面がかなり破損磨滅しているが、ていねいに篦ミガキされた痕跡が部分的に残っている。形は円錐台形で、上径3.1cm、下径5cm、厚さ1.8cm、貫通孔は直径0.6cm程である。胎土は少量の砂粒が混じるが緻密でやや硬質な焼成であり、淡橙色をしている。

5．直　　刀（第26図215・216）

刀は2点の出土である。215は刀身部分の破片で、Bg27グリッド表土下よりの出土である。現存長は5.4cm、刃より棟までの長さ2.7cm、棟の厚さ3.5mmである。棟は角棟で、鎬が観察されないので平造りの直刀であったものと推定される。216は刀身と茎からなるもので、Bf30グリッドの表土下よりの出土である。刀身は鋒寄り部分が欠損し、現存長8.9cm、刃先より棟までの長さ2.2cm、棟の厚さ4mmである。215と同じく角棟で、鎬のない平造りの直刀である。茎は普通形で9cmあり、木質部が部分的に残っており、目釘穴（径5.5mm）も観察される。棟と茎の境に段のある棟区が観察できるが、刃区は錆のため不明である。

6．古　　銭（第26図214）

古銭は永楽銭（銅銭）1枚がBブロック表土から出土した。表裏共に緑青が付着し、「通」字部分が欠損している。大きさは直径2.5cm、厚さ1.5mm、縁の幅1.5mm、郭幅0.5mm、穿は1辺5.5mである。表面に他の古銭の破片が少量付着していた。

7．坏とその分類

坏は成形、器形、調整、色調、硬度等の相違を特徴としてとらえ分類する。坏A類は成形・調整等にロクロを使用せず、底部は平底や丸底のものである。器面調整は仕上げに篦ミガキを行ない、その他に朱塗りや黒色処理されるものもある。軟質な焼成で浅黄橙色のものが多い。

坏B類はロクロ成形の坏で、BⅠ類はロクロ成形内面篦ミガキ後黒色処理の行なわれるものである。坏A類BⅠ類は硬度・色調共に土師器の焼成である。坏BⅡ類はロクロ成形非内黒の坏であり、硬度・色調等において種々であるので土師器・須恵器という表現を用いない。

A_1：丸底で、丸味をもった体部が口縁部まで立ち上がるものや、口縁部がくびれてやや外反する坏。調整にはハケメやナデが施され、篦ミガキ仕上げのものや朱塗りのものもある。

A_2：丸底で、口縁が大きく開き、口縁部と体部境には稜線(段)がある。内面は篦ミガキ後黒色化される。外面は体部横ナデ後篦ミガキし、底部は篦ケズリされる。

A_3：丸底から体部口縁部まで丸味をもって立ち上がり、体部に沈線のめぐるものもある。内面篦ミガキ後黒色処理され、外面も篦ミガキで仕上げている。

A_4：平底で、体部から口縁部までが直線的に外傾する。器面は両面共篦ミガキされ、内面又は両面黒色化される。

A_5：小形の手捏ね土器であるが、ここに一括して入れた。底部は丸底風で、器形は鉢形である。口縁部に横ナデの痕跡が部分的に見られ、他は指頭でおさえながら器面を整えている。

BⅠa：ロクロ成形、内面篦ミガキ後黒色処理の坏で、底部下面が手持ち篦ケズリされる。

BⅠb：ロクロ成形、内面篦ミガキ後黒色処理し、底部回転糸切り無調整の坏。

BⅡa：ロクロ成形、非内黒の坏で、色調は灰色や灰白色を呈し、硬質な焼成である。底面は篦切と糸切りのものがある。

BⅡb：BⅡaの中で、軟質なものであり、篦切りと糸切りのものがある。

BⅡc：ロクロ成形、非内黒の坏で、にぶい橙色や淡橙色の硬質なものである。底面は手持ち篦ケズリ、篦切り、糸切り等のものがある。

BⅡd：BⅡcの中で軟質な焼成のもので、全て糸切りである。

BⅡe：ロクロ成形、非内黒の坏で、焼成は浅黄橙色の軟質なもの。全て糸切りである。

遺物包含地その他出土A類坏（第21図63～71）

非ロクロの坏で住居跡外出土の9点である。65は内黒高坏であるが1点だけなのでここに入れた。この高坏は溝埋土中出土で、体部に軽い段を有し、脚部の裾を欠いている。63は小形手捏ねの土器であり、64は両面朱塗りの丸底坏で接合により完形に近いものである。66～71は内黒丸底坏で、体部に段や沈線状の稜を有するもの。器面調整は種々であるが、大半は両面篦ミガキ仕上げである。65の高坏を除く他の8点は調査区西寄りからの出土で、遺物包含地から3点出土する。64を除くと全て破片であり、反転復元実測したものである。

遺物包含地その他出土BⅠ類坏（第23図110～119）

ロクロ使用、内面黒色処理の坏で、実測図に書けたものは10点である。いずれも破損品で、住居跡出土のものは皆無である。口縁部から底部まで実測できたもの3点、他の7点は口縁部

或いは底部欠損のものである。出土地区別に見ると7点が遺物包含地出土で、器面・断面共に磨滅、黒色の脱色等があり、廃棄後幾度も動かされたものと思われる。3点は北西部ピット群中のピット内出土である。これ等の坏の器高は4.6～4.8cm、口径は12～13.5cm、底径は4.8～6.9cmの範囲内にある。底部下面は手持ち篦ケズリ4点、糸切り3点であり、他は不明。

遺物包含地その他出土BⅡ類坏（第24・25図120～196）

ロクロ成形、非内黒坏類で破片が大半を占め、77点の実測図を作製。住居跡に伴なっての出土は皆無である。南西の遺物包含地より62点（81%）が集中して出土し、各層よりの出土はⅠa層3点、Ⅰb層4点、Ⅱ層上位35点、Ⅱ層中位12点、Ⅱ層下位8点である。Ⅱ層全体出土は55点である。北西地域のピット群中より14点(19%)が出土、この内訳は表土3点、ピット埋土中11点である。これ等の坏は全てロクロ右廻しによる成形であり、底部切り離し技法は回転糸切り66点(86%)回転篦切り8点(10%)で、手持ち篦削りにより不明2点(3%)磨滅により不明1点(1%)である。

第20表　　BⅡ類坏図版説明集計表

類	出土点数	底部下面	底径(cm)
BⅡa	12点(118～129) 15%	回転篦切り　1点 回転糸切り　11点	6.0～6.8
BⅡb	12点(130～141) 15%	回転篦切り　3点 回転糸切り　9点	4.8～7.4 (5.9～6.8に集中)
BⅡc	17点(142～158) 23%	手持ち篦削り　1点 回転篦切り　5点 回転糸切り　11点	4.4～7.2
BⅡd	13点(159～171) 17%	回転糸切り　12点 不明　1点	4.6～7.0 (4.6～6.0に集中)
BⅡe	23点(172～194) 30%	回転糸切り　23点	4.0～6.4 (4.0～5.0に集中)

第21表　　遺物包含地坏B類各層出土状況（実測図に書けたもの）

各層	坏BⅠ (ロクロ成形内黒) $\frac{7}{10}$(70%)	坏BⅡa (ロクロ成形非内黒) $\frac{9}{12}$(75%)	坏BⅡb (ロクロ成形非内黒) $\frac{12}{12}$(100%)	坏BⅡc (ロクロ成形非内黒) $\frac{12}{17}$(71%)	坏BⅡd (ロクロ成形非内黒) $\frac{7}{13}$(54%)	坏BⅡe (ロクロ成形非内黒) $\frac{22}{23}$(96%)
Ⅰa		回転糸切り　2				回転糸切り　1
Ⅰ						
Ⅰb	手持ち篦削り　1 不明　1		回転糸切り　1		回転糸切り　1	回転糸切り　2
ⅡU	手持ち篦削り　1 回転糸切り　1 不明　1	回転糸切り　2	回転篦切り　2 回転糸切り　5	回転篦切り　1 回転糸切り　4	回転糸切り　4	回転糸切り　17
Ⅱ	回転糸切り　2	回転篦切り　1 回転糸切り　3	回転糸切り　1	手持ち篦削り　2 回転篦削り　1	回転糸切り　2	回転糸切り　2
ⅡL		回転糸切り　1	回転篦切り　1 回転糸切り　2	回転篦削り　2 回転糸切り　2		

第22表　遺物包含地・その他出土坏A類、坏BⅠ類図版説明

（　）は現存部分計測値、空白は欠損部

出土地	実測図番号	写真番号	分類記号	調整								器高 cm	口径 cm	底径 cm	付記
				口縁部		体部上半		体部下半		底部					
				内面	外面	内面	外面	内面	外面	上面	下面				
表採	63	49	A_5	横ナデ	横ナデ	ナデ	不明	不明	不明	不明	指頭オサエ	3.4	9.0	丸底	小形手捏ね
Cc 9 地山凹み	64	50	A_1	横ナデ	横ナデ後ミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ナデ後ヘラミガキ	ハケメ後ヘラミガキ	ナデ後ヘラミガキ	6.1	15.8	丸底	両面朱塗
Ci62 溝	65	51	A_2	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	指頭オサエ	7.0	11.5	(4.6)	内黒高坏
Cj33Da33II	66		A_2	ナデ後ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	不明			(4.3)	15.0	丸底	内黒
Bcd27I	67		A_2			ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ハケメ後ヘラミガキ	(4.7)		丸底	内黒
Cde24I	68	52	A_2							ヘラミガキ	ケズリ・ハケメヘラミガキ	(2.1)		丸底	両面黒色化
Cj33Da33II	69	53	A_2	ヘラミガキ	ハケメ	ヘラミガキ	不明	ハケメ後ヘラミガキ	横ナデ	ヘラミガキ	不明	2.9	12.0	9.4	内黒
Cj33Da33II	70	54	A_3	ヘラミガキ	横ナデ後ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	剝落不明			(4.3)	15.0	(丸底)	内黒
Cfg30I	71		A_3	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	不明	ヘラミガキ	不明			(2.9)	9.4	(丸底)	内黒
Cj27Da27Ib	110	93	BIa					ヘラミガキ	ロクロ痕	ヘラミガキ	手持ちヘラケズリ	(1.8)		4.8	内黒
Be18P_1	111	94	BIa	ヘラミガキ	ロクロ痕	ヘラミガキ	ロクロ痕	ヘラミガキ	ロクロ痕	ヘラミガキ	手持ちヘラケズリ	4.8	13.0	5.8	内黒・Be24建物柱掘り方
Be21P_6	112	95	BIa					ヘラミガキ	ロクロ痕	ヘラミガキ	手持ちヘラケズリ	(2.1)		5.0	内黒
Cj30Da30II U	113	96	BIa					ヘラミガキ	ロクロ痕手持ちヘラケズリ	ヘラミガキ	手持ちヘラケズリ	(2.1)		5.8	内黒
Cj27Cj30II	114	97	BIb					ヘラミガキ	ロクロ痕	ヘラミガキ	回転糸切り	(1.2)		5.0	内黒
Cj30Da30II U	115	98	BIb					ヘラミガキ	ロクロ痕	ヘラミガキ	回転糸切り	(3.0)		6.9	内黒
Cj33Da33II	116	99	BIb					ヘラミガキ	ロクロ痕	ヘラミガキ	回転糸切り	(1.8)		6.6	内黒
Bg15P_2	117	100	BI	ヘラミガキ	ロクロ痕	ヘラミガキ	ロクロ痕	ヘラミガキ	ロクロ痕			(3.5)	12.0		内黒Bf21建物柱掘り方
Da33IIU	118	101	BI	不明	ロクロ痕	不明	ロクロ痕	不明	ロクロ痕	不明	不明	4.6	13.5	5.2	内黒
Cj27Da27Ib	119	102	BI					ヘラミガキ	ロクロ痕	ヘラミガキ	不明	(2.7)		6.8	内黒

第23表 1　遺物包含地・その他出土坏BII類図版説明 1

（　）は現在部分計測値、空白は欠損部

出土地	実測図番号	写真番号	分類記号	調整 口縁部体部 内面	調整 口縁部体部 外面	調整 底部 上面	調整 底部 下面	器高 cm	口径 cm	底径 cm	胎土	硬度	色調
Cj27Da27II	120	103	BIIa	ロクロ痕	ロクロ痕	ロクロ痕	回転ヘラ切り	(2.5)		6.3	砂粒少量混入	硬質	灰白色
Cb12P1	121	104	BIIa	ロクロ痕	ロクロ痕	ロクロ痕	回転糸切り	(0.8)		6.0	砂粒少量混入	硬質	灰白
Cj30Da30II	122		BIIa	ロクロ痕	ロクロ痕	ロクロ痕	回転糸切り	(1.2)		6.0	砂粒少量混入	硬質	灰白色
Cj30Da30IIU	123		BIIa	ロクロ痕	ロクロ痕	ロクロ痕	回転糸切り	(1.4)		6.2	砂粒少量混入	硬質	灰白色
Da30IIL	124	105	BIIa	ロクロ痕	ロクロ痕	ロクロ痕	回転糸切り	4.3	12.1	6.2	砂粒少量混入	硬質	灰白色
Cj30Da30II	125		BIIa	ロクロ痕	ロクロ痕	ロクロ痕	回転糸切り	(2.3)		6.4	緻密	硬質	灰色
Cj30Da30Ia	126		BIIa	ロクロ痕	ロクロ痕	ロクロ痕	回転糸切り	(1.6)		6.5	砂粒少量混入	硬質	灰色
Cj27 Da27II	127	106	BIIa	ロクロ痕	ロクロ痕	ロクロ痕	回転糸切り	(1.8)		6.6	砂粒少量混入	硬質	灰白色
Bj15P2	128		BIIa	ロクロ痕	ロクロ痕	ロクロ痕	回転糸切り	(2.4)		6.6	砂粒少量混入	硬質	灰白色
Cj30Da30 Ib/IIU	129	107	BIIa	ロクロ痕	ロクロ痕	ロクロ痕	回転糸切り	(2.8)		6.6	石英粒多し	硬質	灰白色
Bg15P2	130		BIIa	ロクロ痕	ロクロ痕	ロクロ痕	回転糸切り	(0.9)		6.8	砂粒少量混入	硬質	灰褐色
Cj27Da27Ia	131		BIIa	ロクロ痕	ロクロ痕	ロクロ痕	回転糸切り	(1.5)		6.8	緻密	硬質	灰色
Cj30IIU	132	108	BIIb	ロクロ痕	ロクロ痕	ロクロ痕	回転ヘラ切り	3.9	13.6	6.4	砂粒少量混入	軟質	灰白色
Da30IIL	133		BIIb	ロクロ痕	ロクロ痕	ロクロ痕	回転ヘラ切り	(2.7)		6.6	緻密	軟質	明褐灰色
Cj30IIU Cj33Da33II	134	109	BIIb	ロクロ痕	ロクロ痕	ロクロ痕	回転ヘラ切り	4.1	13.5	7.4	砂粒少量混入	軟質	明褐灰色
Cj33Da33II	135	110	BIIb	ロクロ痕	ロクロ痕	ロクロ痕	回転糸切り	4.1	13.6	4.8	緻密	やや軟質	浅黄橙
Cj33IIU	136	111	BIIb	ロクロ痕	ロクロ痕	ロクロ痕	回転糸切り	(1.8)		5.2	砂粒少量混入	軟質	淡黄色
Da33IIU	137	112	BIIb	ロクロ痕	ロクロ痕	ロクロ痕	回転糸切り	(1.7)		5.9	砂粒少量混入	軟質	灰白色
Cj30IIU	138	113	BIIb	ロクロ痕	ロクロ痕	ロクロ痕	回転糸切り	3.8	12.4	6.0	砂粒少量混入	軟質	灰白色

第23表 2　遺物包含地・その他出土坏BII類図版説明 2

（　　）は現存部分計測値、空白は欠損部

出土地	実測図番号	写真番号	分類記号	調整				器高 cm	口径 cm	底径 cm	胎土	硬度	色調
				口縁部体部		底部							
				内面	外面	上面	下面						
Da33IIU	139	114	BIIb	ロクロ痕	ロクロ痕	ロクロ痕	回転糸切り	(1.4)		6.0	砂粒少量混入	軟質	浅黄橙色
Da30IIL	140	115	BIIb	ロクロ痕	ロクロ痕	ロクロ痕	回転糸切り	3.7	12.4	6.2	砂粒少量混入	軟質	灰白色
Cj30Da30IIU	141	116	BIIb	ロクロ痕	ロクロ痕	ロクロ痕	回転糸切り	(1.3)		6.4	シルト質土	やや軟質	灰白色
Cj30Da30Ib	142	117	BIIb	ロクロ痕	ロクロ痕	ロクロ痕	回転糸切り	(1.8)		6.6	砂粒少量混入	やや軟質	浅黄橙
Cj30Da30IIL	143	118	BIIb	ロクロ痕	ロクロ痕	ロクロ痕	回転糸切り	3.4	12.5	6.8	緻密	軟質	灰白色
Cj33Da33II	144	119	BIIc	ロクロ痕	ロクロ痕	ロクロ痕	手持ちヘラ削り	4.8	16.2	6.8	砂粒少量混入	硬質	淡橙
Cj30Da30 $^{Ia}_{IIU}$	145	120	BIIc	ロクロ痕	ロクロ痕	ロクロ痕	回転ヘラ切り	3.7	12.7	6.2	シルト質土	硬質	にぶい橙
Da30IIL	146	121	BIIc	ロクロ痕	ロクロ痕	ロクロ痕	回転ヘラ切り	3.9	14.0	6.6	緻密	硬質	淡橙
Cj30Da30IIL	147		BIIc	ロクロ痕	ロクロ痕	ロクロ痕	回転ヘラ切り	(1.6)		6.8	緻密	硬質	淡橙
Cj27Cj30II	148		BIIc	ロクロ痕	ロクロ痕	ロクロ痕	回転ヘラ切り	(0.8)		7.0	緻密	硬質	淡橙
Cj30Cj33II Cj33Da33II	149	122	BIIc	ロクロ痕	ロクロ痕	ロクロ痕	手持ちヘラ削り	4.7	15.0	8.2	砂粒混入	硬質	にぶい橙
Cj30Da30IIU	150	123	BIIc	ロクロ痕	ロクロ痕	ロクロ痕	回転糸切り	(3.4)		4.4	緻密	硬質	にぶい橙
Dbc33IIL Cj33Da33IIL	151	124	BIIc	ロクロ痕	ロクロ痕	ロクロ痕	回転糸切り	3.6	12.8	4.8	緻密	硬質	橙(内面朱)
Cd21P1	152	125	BIIc	ロクロ痕	ロクロ痕	ロクロ痕	回転糸切り	(3.0)		5.0	砂粒少量混入	硬質	浅黄橙
Bg21I	153	126	BIIc	ロクロ痕	ロクロ痕	ロクロ痕	回転糸切り	(1.6)		5.0	緻密	やや軟質	橙
Bde21I Bi21P2	154	127	BIIc	ロクロ痕	ロクロ痕	ロクロ痕	回転糸切り	(1.5)		5.0	砂粒少量混入	硬質	にぶい橙
Bd30P8 Bf27・30I	155	128	BIIc	ロクロ痕	ロクロ痕	ロクロ痕	回転糸切り	(1.5)		5.0	砂粒少量混入	硬質	黄橙
Cj33Da33 $^{IIU}_{II}$	156	129	BIIc	ロクロ痕	ロクロ痕	ロクロ痕	回転糸切り	4.4	12.5	5.6	砂粒混入	やや軟質	淡橙
Cj30Da30IIL	157		BIIc	ロクロ痕	ロクロ痕	ロクロ痕	回転糸切り	4.2	13.0	6.0	砂粒少量混入	硬質	にぶい橙

第23表 3　遺物包含地・その他出土坏BII類図版説明 3

（　）は現存部分計測位、空白は欠損部

出土地	実測図番号	写真番号	分類記号	調整 口縁部体部 内面	調整 口縁部体部 外面	調整 底部 上面	調整 底部 下面	器高 cm	口径 cm	底径 cm	胎土	硬度	色調
Bf15P1	158		BIIc	ロクロ痕	ロクロ痕	ロクロ痕	回転糸切り	(2.1)		6.6	緻密	硬質	にぶい橙
Cj30IIU Cj30Da30Ib	159	130	BIIc	ロクロ痕	ロクロ痕	ロクロ痕	回転糸切り	4.3	12.6	7.0	シルト質	硬質	にぶい橙
Da30IIL Da33IIU	160	131	BIIc	ロクロ痕	ロクロ痕	ロクロ痕	回転糸切り	5.6	16.0	7.2	シルト質	硬質	にぶい橙
Cj33Da33II	161		BIId	ロクロ痕	ロクロ痕	ロクロ痕	回転糸切り	(1.0)		4.6	緻密	軟質	浅黄橙
Bfg30I	162		BIId	ロクロ痕	ロクロ痕	ロクロ痕	回転糸切り	(1.8)		4.6	砂粒少量混入	やや軟質	浅黄橙
Bg27P1	163		BIId	ロクロ痕	ロクロ痕	ロクロ痕	回転糸切り	(1.8)		4.6	砂粒少量混入	やや軟質	浅黄橙
Cj30Da30IIU	164	132	BIId	ロクロ痕	ロクロ痕	ロクロ痕	回転糸切り	(2.0)		4.7	砂粒少量混入	やや軟質	浅黄橙
不明	165	133	BIId	ロクロ痕	ロクロ痕	ロクロ痕	回転糸切り	(1.0)		5.0	砂粒少量混入	軟質	浅黄橙
Cj27Cj30II	166	134	BIId	ロクロ痕	ロクロ痕	ロクロ痕	回転糸切り	(1.7)		5.2	砂粒混入	軟質	橙
Cj30Da30IIU	167		BIId	ロクロ痕	ロクロ痕	ロクロ痕	回転糸切り	(1.2)		5.4	砂粒混入	軟質	橙
Cj33Da33IIU	168	135	BIId	ロクロ痕	ロクロ痕	ロクロ痕	不明	(1.7)		5.6	シルト質	軟質	にぶい橙
Bg27P1	169	136	BIId	ロクロ痕	ロクロ痕	ロクロ痕	回転糸切り	4.7	15.0	5.6	緻密	軟質	浅黄橙
Cj27Da27Ib	170		BIId	ロクロ痕	ロクロ痕	ロクロ痕	回転糸切り	(2.0)		5.8	緻密	軟質	浅黄橙
Bde30Ia	171	137	BIId	ロクロ痕	ロクロ痕	ロクロ痕	回転糸切り	4.4	12.4	6.0	砂粒混入	軟質	浅黄橙
Cd21P1	172	138	BIId	ロクロ痕	ロクロ痕	ロクロ痕	回転糸切り	4.0	13.2	5.4	砂粒少量混入	やや軟質	橙
Da27IIU	173	139	BIId	ロクロ痕	ロクロ痕	ロクロ痕	回転糸切り	(2.1)		7.0	緻密	軟質	浅黄橙
Da33IIU	174		BIIe	ロクロ痕	ロクロ痕	ロクロ痕	回転糸切り	(1.0)		4.0	砂粒混入	軟質	浅黄橙
Cj30Da30Ib	175		BIIe	ロクロ痕	ロクロ痕	ロクロ痕	回転糸切り	(1.0)		4.0	砂粒混入	軟質	浅黄橙
Da30IIU	176		BIIe	ロクロ痕	ロクロ痕	ロクロ痕	回転糸切り	(1.0)		4.0	砂粒混入	軟質	浅黄橙

第23表 4　遺物包含地・その他出土坏BII類図版説明 4

（　　）は現好部分計測値、空白は欠損部

出土地	実測図番号	写真番号	分類記号	調整 口縁部体部 内面	調整 口縁部体部 外面	調整 底部 上面	調整 底部 下面	器高 cm	口径 cm	底径 cm	胎土	硬度	色調
Da30IIU	177		BIIe	ロクロ痕	ロクロ痕	ロクロ痕	回転糸切り	(0.9)		4.2	砂粒混入	軟質	浅黄橙
Da33IIU	178		BIIe	ロクロ痕	ロクロ痕	ロクロ痕	回転糸切り	(1.7)		4.3	砂粒混入	軟質	浅黄橙
Da30IIU	179		BIIe	ロクロ痕	ロクロ痕	ロクロ痕	回転糸切り	(1.2)		4.4	砂粒混入	軟質	浅黄橙
Cj33Da33Ia	180		BIIe	ロクロ痕	ロクロ痕	ロクロ痕	回転糸切り	(0.8)		4.4	砂粒混入	軟質	浅黄橙
Da33IIU	181		BIIe	ロクロ痕	ロクロ痕	ロクロ痕	回転糸切り	(0.8)		4.4	砂粒混入	軟質	浅黄橙
Da33IIU	182		BIIe	ロクロ痕	ロクロ痕	ロクロ痕	回転糸切り	(1.2)		4.4	砂粒混入	軟質	浅黄橙
Da33IIU	183	140	BIIe	ロクロ痕	ロクロ痕	ロクロ痕	回転糸切り	2.6	10.0	4.5	砂粒混入	軟質	浅黄橙
Da33IIU	184		BIIe	ロクロ痕	ロクロ痕	ロクロ痕	回転糸切り	(1.2)		4.6	砂粒混入	軟質	浅黄橙
Cd21P1	185		BIIe	ロクロ痕	ロクロ痕	ロクロ痕	回転糸切り	(1.0)		4.8	砂粒混入	軟質	浅黄橙
Cj33II	186		BIIe	ロクロ痕	ロクロ痕	ロクロ痕	回転糸切り	(1.3)		5.0	砂粒混入	軟質	浅黄橙
CjDa33IIU	187		BIIe	ロクロ痕	ロクロ痕	ロクロ痕	回転糸切り	(1.4)		5.3	緻密	軟質	浅黄橙
Da33IIU	188		BIIe	ロクロ痕	ロクロ痕	ロクロ痕	回転糸切り	(1.0)		5.4	砂粒混入	軟質	浅黄橙
Da30IIU	189		BIIe	ロクロ痕	ロクロ痕	ロクロ痕	回転糸切り	(1.4)		5.5	緻密	軟質	浅黄橙
Da33IIU	190	141	BIIe	ロクロ痕	ロクロ痕	ロクロ痕	回転糸切り	2.0	9.7	5.7	砂粒混入	軟質	浅黄橙
Cj30Da30IIU	191		BIIe	ロクロ痕	ロクロ痕	ロクロ痕	回転糸切り	(1.8)		6.0	砂粒混入	軟質	浅黄橙
Da33IIU	192		BIIe	ロクロ痕	ロクロ痕	ロクロ痕	回転糸切り	(2.0)		6.0	砂粒混入	軟質	浅黄橙
Cj30Da30II	193	142	BIIe	ロクロ痕	ロクロ痕	ロクロ痕	回転糸切り	(2.4)		6.2	緻密	軟質	浅黄橙
Da33IIU	194	143	BIIe	ロクロ痕	ロクロ痕	ロクロ痕	回転糸切り	(1.5)		4.8	緻密	軟質	浅黄橙
Dbc33Ib	195	144	BIIe	ロクロ痕	ロクロ痕	ロクロ痕	回転糸切り	(2.4)		5.6	シルト質	軟質	灰白色
Da27IIU	196	145	BIIe	ロクロ痕	ロクロ痕	ロクロ痕	回転糸切り	4.5	13.0	6.4	緻密	軟質	浅黄橙

8．土師器壺・甕・甑とその分類

壺の口縁部及び体部の器形によりA・Bの2類に分類する。全てロクロは使用していない。

壺A：口縁部が粘土貼付により折り返し状の段がつき、外面に稜がめぐる複合口縁のもの、口縁部は外傾し、頚部は外傾気味かやや直立する。体部以下は接合資料がなく不明であるが、頚部のすぼまり方から球形と推定される。口縁部に横ナデの痕跡が残る。

壺B：単純口縁で短かい口縁部が「く」字状に屈曲して外傾する。体部は球形であるが、体部下半を欠く。外面と口縁部内面は入念な篦ミガキの後朱塗りされている。

甕は器形上の特徴からA～Cの3類に大別される。頚部の段・大きさ・最大径の位置・器面調整等により細分される。全てロクロは使用していない。

甕A：台付甕で1点だけの出土。脚台の部分のみで他は欠失している。内面に指頭ナデ痕。

甕B：口縁部外反し、体部球胴形の甕。大小・頚部段の有無により細分する。

B_1：頚部に段のない大形の甕。口縁部横ナデ、体部篦ミガキされる。

B_2：頚部に段のある大形の甕。口縁部横ナデ、体部篦ミガキされる。

B_3：頚部に段のある小形の甕。口縁部横ナデ、体部ハケメ後横ナデされる。

甕C：口縁部外反し、体部が長胴形の甕。頚部段の有無、最大径の位置により細分する。

C_1：頚部に段がなく、頚部から口縁部にかけてゆるやかに外反する小形な甕。

C_2：頚部に段を有し、最大径が口縁部にある大形小形の甕。口縁部横ナデ、体部篦ミガキ。

C_3：頚部に段を有し、最大径が体部中央にある大形の甕。口縁部横ナデ、体部篦ミガキ。

甑は長胴形大形甕の底部を欠いた形の無底式のもので、ハケメ調整のものと篦ミガキ調整のものがある。

溝その他出土土師器壺・甕（第22図74～88）

これら15個体の土器は調査区北西部よりの出土で、全て破片であり、器面・断面の風化磨滅が著しい。出土地は溝埋土中より7個体、表土より4個体、Pit中3個体その他1個体で、溝埋土中出土が約半数を占める。壺A類は当遺跡内から3個体(74～76)だけの出土で、複合に縁をもつものであるが、74は甑かもしれない。77は台付甕の脚台部だけで上部は不明であるが、74～77の4点はBj 3住居跡の北西部溝とその付近出土であり、胎土・焼成・色調共に似ている。78は内湾気味の口縁部と体部上端からなる破片で、比較的硬質なものである。79～82は底部と外方に開く体部下端からなる破片で球胴形の甕である。81の底部下面には木葉痕が残る。83～88は長胴形の甕である。83は直立気味の口縁と胴膨みの体部上半からなる破片で、84は大きく外反する口縁と膨んでいく体部上半からなる破片で、共に頚部体部境に段を有する。85～88は長胴形甕の体部下半と底部破片で、器面はナデやハケメ後に部分的に篦ミガキされている。85と88の底部下面に木葉痕が見られる。

第24表　溝・その他出土土師器・壺・甕図版説明一覧表

（　）は現存部分の計測値、空白は欠損部

出土地	実測図番号	写真番号	分類記号	調整								器高 cm	口径 cm	頸径 cm	胴径 cm	底径 cm
				口縁部		体部上半		体部下半		底部						
				内面	外面	内面	外面	内面	外面	上面	下面					
Ca 9 I	74	57	壺 A	不明	ハケメ							(2.8)	16.0			
Ca6・Ca9溝	75	58	壺 A	横ハケメ	不明							(5.4)	16.7	10.3		
Bi 6 I	76	59	壺 A	不明	横ナデ							(4.0)	17.8			
Ca 9 溝	77	60	甕 A							脚台外面不明	脚台内面指頭ナデ	(4.6)		接合部径 4.7		脚台底 8.8
Bf12溝	78	61	甕 B_3	横ナデ	タテハケメ後横ナデ	ヘラナデ	タテハケメ					(6.4)	12.0	10.0	(14.4)	
Bi 15P_2	79	62	甕 B					不明	ケズリ	不明	ケズリ	(4.5)			(12.6)	6.6
Be30P_1	80	63	甕 B					ヘラナデ後ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラナデ後ヘラミガキ	ヘラナデ後ヘラミガキ	(8.8)			(19.3)	6.8
Bh15P_1	81	64	甕 B					不明	ヘラナデ	不明	木葉痕	(2.1)			(10.8)	8.9
Cfg24I	82	65	甕 B					ヘラミガキ	ヘラミガキ	ハケメ後ヘラミガキ	ハケメ後ヘラミガキ	(1.8)			(13.8)	9.4
Bf12溝	83	66	甕 C_3	横ナデ	横ナデ	ハケメ後ヘラナデ	不明					(12.5)	14.8	14.2	16.6	
Ch27溝	84	67	甕 C_2	横ナデ	横ナデ	横ハケメ	不明					(9.0)	18.0	14.4	(17.0)	
Cc62I	85	68	甕 C					不明	不明	不明接合痕	木葉痕	(5.3)			(12.3)	9.0
Bf 12溝	86	69	甕 C					ヨコハケメ	ハケメ後ヘラミガキ	指頭オサエ	ハケメ	(5.0)			(9.8)	7.0
Bfg30I	87	70	甕 C					ナデ	ハケメ後ヘラミガキ	ナデ	ヘラミガキ	(3.3)			(8.6)	6.0
Bj 6 溝	88	71	甕 C					ナデ	ケズリ後タテハケメ	ナデツケ	木葉痕	(4.5)			(11.6)	7.2

9．高台坏と分類（第23図89～109）

ロクロ成形で付高台であるが、焼成は軟質で灰白色や浅黄橙の色調の土師質のものである。胎土は石英粒・砂粒等若干含むが一般に緻密である。軟質なため残存状態は非常に悪く、器面断面共に磨滅しており、坏底部と高台部の残存するものが大部分で実測図に書けたものは21個体分である。北西部ピット群中のピット内から5点(24%)、南西部遺物包含地のDaグリッド付近から16点(76%)の出土である。遺物包含地出土状態はⅠa層1点、Ⅱ層上位12点、Ⅱ層中位3点で、凡そ高台坏はⅡ層の上層部出土と考えられる。高台の高さは0.7cm～2.5cmの範囲内にあるが、0.7～1.6cmの範囲のものが多い。高台底径は4.3～9.2cmの範囲にあるが、5.0～6.2cmの範囲に集中する。高台端部及び色調、硬度等を特徴として分類する。遺構伴出は皆無である。

Ⅰa：高台端部が丸味を帯び、色調は灰白色や浅黄橙色、軟質な焼成である。(89～100)

Ⅰb：高台端部はⅠaと同じであるが、色調はにぶい橙色で、焼成不良のやや軟質なもの。(101)

Ⅱa：高台端部が肥厚して面をなし、色調は浅黄橙で焼成不良の軟質である。(102・103)

Ⅱb：高台端部はⅡaと同じで、色調は橙色であるが朱塗りされ、やや硬質な焼成。(104)

Ⅲa：高台端部欠損不明のもので、灰白色や浅黄橙色で焼成不良の軟質なもの。(105～107)

Ⅲb：高台端部欠損不明のもので、橙色や浅黄橙色でやや硬質な焼成である。(108・109)

10．須恵器壺・鉢・長頸瓶（第26図197～212）

調査区出土の須恵器壺・鉢・長頸瓶は16個体分であるが、全て破片である。遺構に直接伴なう出土は皆無であり、包含層出土だけである。最も多いのは南西部遺物包含地のⅡ層の上位出土で12個体分(75%)であり、他は北西部包含層出土である。

これ等の須恵器の胎土は砂粒少量混入するが緻密である。208は灰白色で焼成不良の軟質なものであるが、他は灰色12点、にぶい橙色3点で全て硬質である。

口縁部破片から反転復元実測したもので、器種・口縁等は全て推定である。口縁端部の形状により分類する。

壺Ⅰ：口縁が外反し、口縁端部が上下に挽き出されているもの。(197～201)

壺Ⅱ：やや直立気味の頚部から外傾する口縁部へ続き、口縁端部が丸味を帯びて下方に挽き出されているもの。(202)

その他：口縁部欠損し、楕円形状の体部と底部からなり、ロクロ調整後に部分的に種々の調整がなされ、外面に緑灰色の自然釉がかかる。(203)

鉢：浅鉢状の鉢と推定されるもので、体部上半から口縁部へと外傾し、口縁部外面に粘土貼付により、一条の稜帯がめぐる。(204)

長頸瓶Ⅰ：口縁部が外反し、口縁端部が上下に挽き出されているもの。(205～209)

長頸瓶Ⅱ：口縁部が外反し、口縁端部が丸味を帯びて上方に挽き出される。(210～212)

第25表　　遺物包含地その他出土高台坏図版説明一覧

( )は現存部分の計測値　空白は欠損部

出土地	実測図番号	写真番号	分類記号	器面調整	器高(cm)	口径(cm)	高台高(cm)	高台径(cm)	胎土	硬度	色調	付記
Da33ⅡU	89	72	Ⅰa	ロクロ痕	(1.4)		0.7	4.4	精良・石英粒・砂粒少量混入	軟質	灰白色	
Da33ⅡU	90	73	Ⅰa	ロクロ痕	(2.2)		1.1	5.0	精良・石英粒・砂粒少量混入	軟質	浅黄橙	坏底部下面回転糸切痕
Da33Ⅱ	91	74	Ⅰa	ロクロ痕	(2.4)		1.8	5.0	精良・石英粒少量混入	軟質	灰白色	
Da33ⅡU	92	75	Ⅰa	ロクロ痕	(2.2)		1.5	5.2	精良・石英粒少量混入	軟質	灰白色	
Da33ⅡU	93	76	Ⅰa	ロクロ痕	(2.3)		1.6	5.3	精良・石英粒少量混入	軟質	灰白色	
Cj30Da30Ⅰa	94	77	Ⅰa	ロクロ痕	(1.7)		0.8	5.6	精良・石英粒少量混入	軟質	浅黄橙	
Da33ⅡU	95	78	Ⅰa	ロクロ痕	(2.7)		1.5	5.6	精良・石英粒少量混入	軟質	灰白色	坏底部下面回転糸切痕
Da33ⅡU	96	79	Ⅰa	ロクロ痕	(2.1)		1.5	6.2	精良・石英粒少量混入	軟質	浅黄橙	
BcdⅠ27	97	80	Ⅰa	ロクロ痕	(2.4)		1.1	7.6	良・石英粒・砂粒混入	やや軟質	灰白色	
Bc27P5	98	81	Ⅰa	ロクロ痕	(1.5)		1.0	8.0	精良・石英粒少量混入	軟質	浅黄橙	
Da33ⅡU	99	82	Ⅰa	ロクロ痕	(1.8)		1.2	8.2	精良・石英粒少量混入	軟質	浅黄橙	
Da33Ⅱ	100	83	Ⅰa	ロクロ痕	(2.2)		2.2	8.2	精良・石英粒少量混入	軟質	浅黄橙	
Da30ⅡU	101	84	Ⅰb	ロクロ痕	(3.8)		2.4	9.2	精良・石英粒少量混入	やや軟質	にぶい橙	
Da33ⅡU	102	85	Ⅱa	ロクロ痕	(2.3)		1.1	5.6	精良・石英粒・砂粒混入	硬質	浅黄橙	
Bf27P9	103	86	Ⅱa	ロクロ痕	(1.5)		1.5	7.0	精良・砂粒少量混入	軟質	浅黄橙	
Bg21P2	104	87	Ⅱb	ロクロ痕	(2.6)		1.0	7.6	精良・石英粒・砂粒少量混入	硬質	橙	坏外面・高台部両面朱塗
Da33ⅡU	105	88	Ⅲa	ロクロ痕	(1.2)		(0.6)	4.3	精良・石英粒少量混入	軟質	灰白色	
Bh27P1	106	89	Ⅲa	ロクロ痕	(2.1)		(1.0)	(5.3)	精良・石英粒・砂粒少量混入	軟質	浅黄橙	
Cj33Da33Ⅱ	107	90	Ⅲa	ロクロ痕	(2.1)		(0.6)	(6.2)	精良・石英粒少量混入	やや軟質	浅黄橙	坏底部下面回転糸切痕
Da33ⅡU	108	91	Ⅲb	ロクロ痕	(4.1)	17.5	(0.7)	(6.1)	精良・石英粒・砂粒少量混入	やや軟質	橙	
Da33ⅡU	109	92	Ⅲb	ロクロ痕	(6.0)	17.2	(0.7)	(8.0)	精良・石英粒少量混入	やや軟質	浅黄橙	

第26表　遺物包含地その他出土須恵器壺・鉢・長頸図版説明一覧

( )は現存部分の計測値　空白は欠損部

出土地	実測図番号	写真番号	器種	調整 口縁部 内面	口縁部 外面	体部上半 内面	体部上半 外面	体部下部 内面	体部下部 外面	底部 上面	底部 下面	器高(cm)	口径(cm)	頸部(cm)	胴径(cm)	底径(cm)
Cj27Da27Ⅰb Da27ⅡU	197	146	壺Ⅰ	ロクロ痕	タテハケメ後ロクロ痕	あて工具痕	平行叩き後ロクロ痕					(12.8)	22.4	18.5	(37.6)	
Cj33Da33ⅡU	198	147	壺Ⅰ	ロクロ痕	ロクロ痕							(2.8)	20.0			
Cj33ⅡU	199	148	壺Ⅰ	ロクロ痕	ロクロ痕							(2.5)	17.0			
Cj30Da30Ⅰb	200	149	壺Ⅰ	ロクロ痕	ロクロ痕							(1.5)	15.0			
Chi30Ⅰ	201	150	壺Ⅰ	ロクロ痕	ロクロ痕							(5.3)				
Cj27Da27Ⅰb	202	151	壺Ⅱ	ロクロ痕	ロクロ痕							(3.4)				
Cj30Da30Ⅰb ⅡU・ⅡL	203	152	壺			ロクロ痕後ナデ	ロクロ痕後平行叩き目	ナデ	ナデ平行叩き目	不明	ケズリ	(24.3)			24.4	12.2
Cc24住居跡床面Pit	204	153	鉢	ロクロ痕	ロクロ痕							(3.5)	20.0			
Cj33Da33ⅡU Cj33Da33Ⅰa	205	154	長頸瓶Ⅰ	ロクロ痕	ロクロ痕							(9.0)	10.6	6.0		
Ci27Ci30Ⅱ	206	155	長頸瓶Ⅰ	ロクロ痕	ロクロ痕							(1.9)	12.4			
Cj33Da33Ⅰa	207	156	長頸瓶Ⅰ	ロクロ痕	ロクロ痕							(1.5)	11.3			
Cj27Cj30Ⅱ	208	157	長頸瓶Ⅰ	ロクロ痕	ロクロ痕							(2.0)				
Cj33Da33ⅡU	209	158	長頸瓶Ⅰ	ロクロ痕	ロクロ痕							(2.5)				
Ca9溝	210	159	長頸瓶Ⅱ	ロクロ痕	ロクロ痕							(1.7)	14.0			
不明	211	160	長頸瓶Ⅱ	ロクロ痕	ロクロ痕							(2.1)				
不明	212	161	長頸瓶Ⅱ	ロクロ痕	ロクロ痕							(4.4)				

第27表1　竪穴住居跡出土遺物一覧

( )は現存部分の計測値　空白は欠損部

出土地	実測図番号	写真番号	器種	調整								器高(cm)	口径(cm)	頸径(cm)	胴径(cm)	底径(cm)	備考
				口縁部		体部上半		体部下半		底部							
				内面	外面	内面	外面	内面	外面	上面	下面						
Cf53住床	1	1	坏A_1	ナデ	不明	不明	不明					(3.6)	12.0			丸底	
Cf53住	2	2	坏A_1	ヨコナデ	ヨコナデ	不明	ハケメ					(4.0)	12.3			丸底	
Cf53住	3	3	坏A_1	不明	不明	不明	不明					(3.3)	13.0			丸底	両面朱
Cf53住P_{11}	4	4	坏A_1	不明	ヨコナデ	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ			(5.8)	14.0			丸底	両面朱
Cf53住P_{11}	5	5	坏A_1	ハケメ	不明	ハケメ	不明	不明	不明			(6.1)	14.6			丸底	両面煤
Cf53住	6	6	坏A_1	ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコナデ	不明	不明	不明			(7.0)	14.4			丸底	両面煤
Cf53住	7		坏A					ヘラミガキ	ケズリ	ヘラミガキ	ケズリ	(3.1)				丸底	両面朱
Cf53住P_{11}	8	7	壺B	ヘラミガキ	ヘラミガキ	指オサエ 巻き上げ痕	ヘラミガキ	指オサエ 巻き上げ痕	不明			(9.9)	7.0	4.7	15.0		外面朱
Cf53住	9	8	甕C_1	不明	ヨコナデ	不明	不明					(5.3)	15.0	13.8	(14.8)		
Cf53住P_{11}	10	9	甕B_1	ヨコナデ	ヨコナデ	ハケメ	ヘラミガキ	ハケメ	ヘラミガキ			(22.0)	17.6	14.0	25.6		
Cf53住P_{11}	11	10	甕B_1	不明	ハケメ後 ヨコナデ	ヘラナデ	ハケメ後 ヘラミガキ	ヘラナデ	ヘラミガキ			(2.0)		13.7	25.6		
Cf53住P_{10}床	12	11	甕B_1	不明	不明	不明	不明					(7.2)	16.2	13.2	(20.2)		
Cf53住床	13	12	甕B_1					ヘラナデ	不明	ヘラナデ	不明	(9.0)			(10.8)	7.5	
Cf53住	14		甕B_1	不明	不明							(3.8)	15.6	(12.0)			
Cf53住床	15		甕B_1					不明	不明	不明	不明	(4.2)				7.0	
Cf53住P_{11}	16	13	甑			ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ			(23.3)			24.0		無底式
Cf53住P_{10}	17	14	砥石	扁平楕円形・上下二面砥磨面・長さ13.1cm、幅7.7cm、厚さ3.9cm、重量0.51kg、石材—細粒石質凝灰岩													
Cf53住床	18		管玉	長さ5mm、太さ(径)4.9mm、貫通孔径1.8mm、重さ0.44g、石材蛇紋岩													
Ca21住床 焼土	19	15	坏A_1	ヨコハケメ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	(6.2)	14.4			丸底	
Ca21住床	20	16	砥石	板状直方体・上下二面砥磨面、長さ16.6cm、幅6.1cm、厚さ2.1cm、重量0.44kg、石材—細粒石質凝灰岩													

第27表2　竪穴住居跡出土遺物一覧

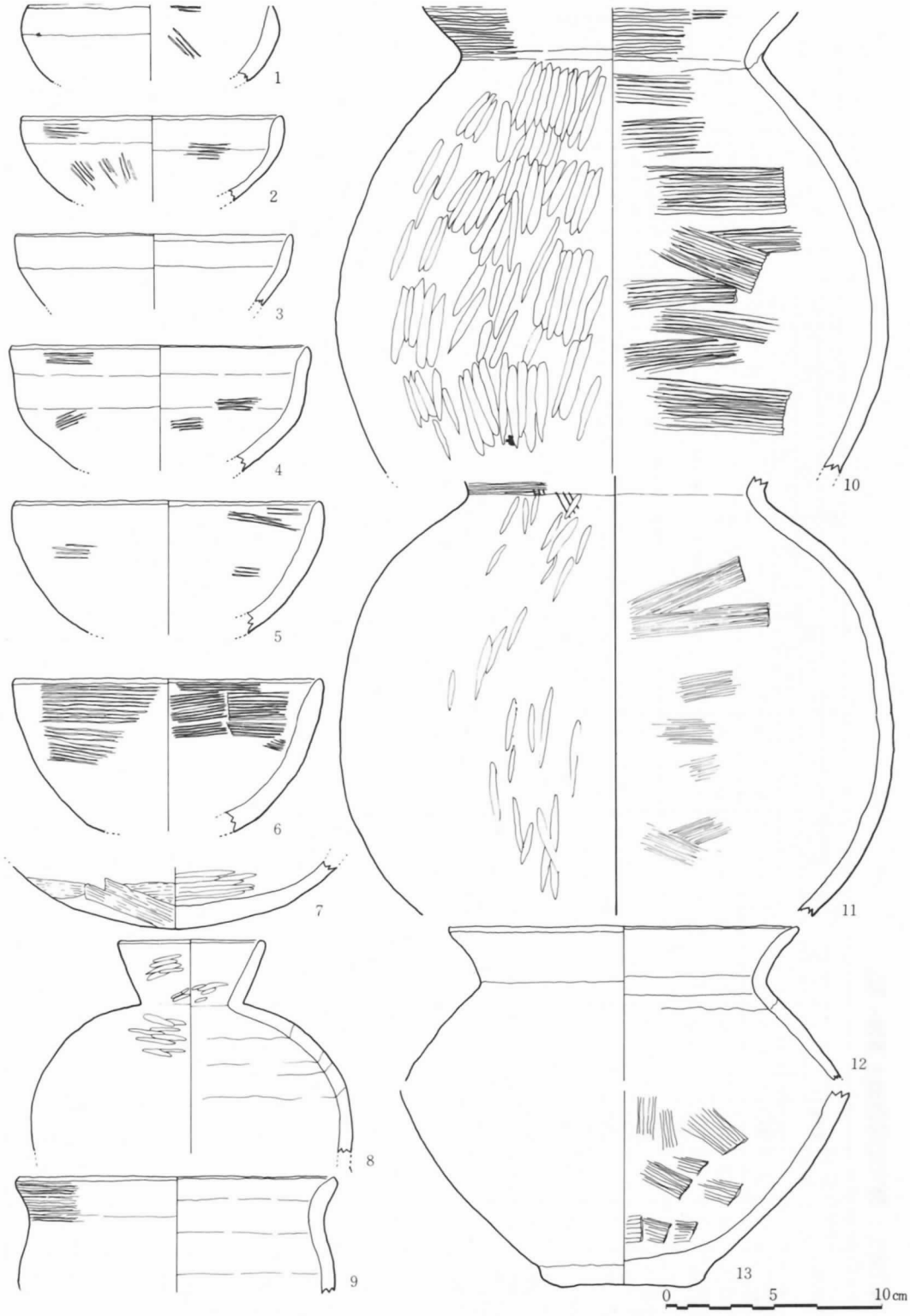
( )は現存部分の計測値　空白は欠損部

出土地	実測図番号	写真番号	器種	調整								器高(cm)	口径(cm)	頸径(cm)	胴頸(cm)	底径(cm)	備考
				口縁部		体部上半		体部下半		底部							
				内面	外面	内面	外面	内面	外面	上面	下面						
Ca21住P_{10}	21	17	甕B_1			ハケメ後ヘラミガキ	ハケメ	ヘラミガキ	ヘラナデ	ハケメ	不明	(21.8)			26.0	7.0	
Bj3住床	22		坏A							ヘラミガキ	ケズリ	(1.8)				丸底	内黒
Bj3焚き口	23	18	甕C_2	ヨコナデ	ヨコナデ	ハケメ	ヘラミガキ	不明	ヘラミガキ			(23.5)	20.0	16.2	19.0		
Bj3煙道	24	19	甕C_2	ヨコナデ	ヨコナデ	ハケメ	ヘラミガキ	ハケメ	ヘラミガキ			(25.2)	21.4	16.5	19.6		
Bj3住焚き口	25	20	甑	ヨコハケメ	タテハケメ	ハケメ後ヘラナデ	ハケメ後ヘラミガキ	ハケメ	ヘラミガキ			26.5	21.5	18.6	20.2	9.0	無底式
Bi62住	26		坏A_1	不明	不明	不明	不明					(4.3)	15.0			丸底	
Bi62住	27		坏A					不明	ケズリ後ヘラミガキ	ハケメ	ハケメ後ヘラミガキ	(2.8)				丸底	外面朱
Bi62住	28	21	坏A_2	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ケズリ	26.0	16.2			丸底	内黒
Bi62住	29		坏A							ヘラミガキ	ケズリ	(10.9)				丸底	内黒
Bi62住	30	22	甕C_2	ヨコナデ後ヘラミガキ	ヨコナデ	ハケメ	ハケメ					(10.0)	20.5	15.4	(17.8)		
Bi62住	31	23	甕B_2	不明	ヨコナデ	ハケメ後ヘラミガキ	ヘラミガキ					(15.8)		17.8	28.0		
Bj3住北溝	32	24	坏A_3	ハケメ後ヘラミガキ	ハケメ後ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ケズリ後ヘラミガキ	5.5	18.4			丸底	内黒
Bj3住北溝	33	25	坏A_4	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	不明	不明	4.5	12.6			7.0	両面黒
Bj3住北溝	34		坏A_4	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	5.0	15.0			6.0	両面黒
Bj3住北溝	35	26	坏A_3	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ケズリ後ヘラミガキ	3.3	10.2			丸底	
Bj3住北溝	36	27	甕B_3	不明	ヨコナデ	ヨコハケメ	ハケメ後ヘラミガキ	ハケメ	ハケメ後ヘラミガキ	ハケメ	ナデ	10.5	10.4	9.0	12.4	5.0	
Bj3住北溝	37	28	甕B_2			不明	ハケメ後ヘラミガキ	不明	ハケメ後ヘラミガキ			(14.8)		24.8			
Bj3住北溝	38	29	甕C_2	ヨコナデ	ヨコナデ	ヘラミガキ	ナデ	ヘラミガキ	ナデ	指頭オサエ	不明	25.0	17.0	13.8	14.3	6.6	
Bj3住北溝	39	30	甑			ハケメ	ハケメ	ハケメ	ハケメ			(19.2)			(18.0)	8.6	無底式
Cc24住P_{10}	40		坏A	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ			(4.5)	15.0				内黒
Cc24住床	41		坏B Ⅱd							ロクロ痕	回転糸切痕	(1.0)				5.6	(混入)
Cc24住床	42	31	甕B					ハケメ	ハケメ	ハケメ	不明	(5.0)			(19.2)	9.4	

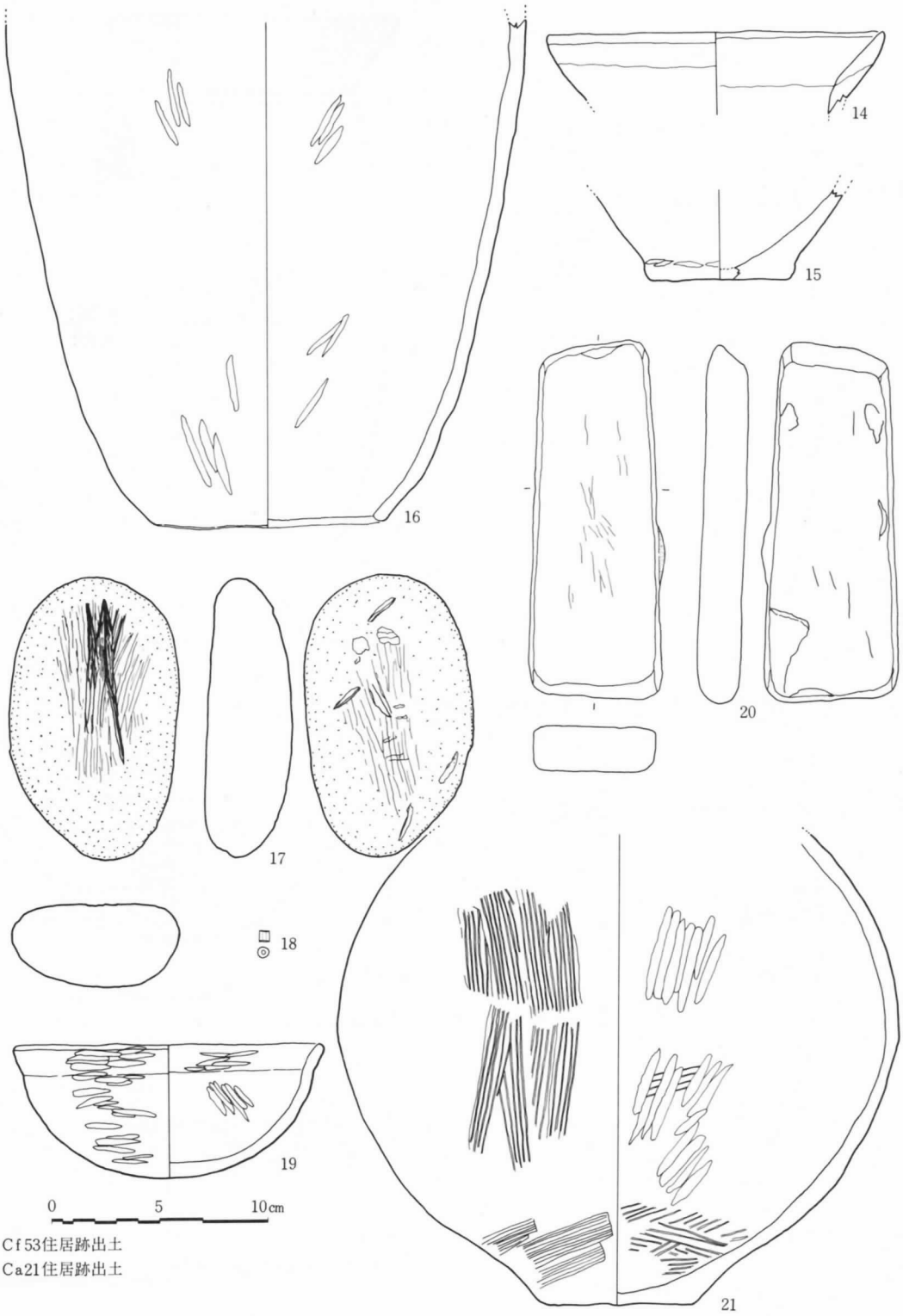
第27表3　竪穴住居跡出土遺物一覧

( )は現存部分の計測値　空白は欠損部

出土地	実測図番号	写真番号	器種	調整								器高(cm)	口径(cm)	頸径(cm)	胴径(cm)	底径(cm)	備考
				口縁部		体部上半		体部下半		底部							
				内面	外面	内面	外面	内面	外面	上面	下面						
Cc24住床 P9	43	32	甕C2	ハケメ	ヨコナデ	ハケメ	ハケメ	不明	ハケメ	不明	木葉痕	15.3	12.0	10.5	12.0	6.8	
Cc24住P10	44	33	甕C2	不明	不明	不明	不明					(5.4)	14.0	12.6	12.7		
Cc24住煙出	45	34	甕C3	ハケメ後ヨコナデ	ハケメ後ヨコナデ	ハケメ	ハケメ					(11.6)	17.6	15.5	18.0		
Cc24住P9	46	35	甕C2	ハケメ	ハケメ	ハケメ後ナデ	ハケメ					(10.2)	19.6	15.0	16.0		
Cc24住床	47	36	甕C					不明	不明	不明	不明	(3.7)			7.0		
Cc24住	48		甕C					不明	不明	不明	不明	(1.9)			7.0		
Cc24住床	49	37	甕C					ナデツケ	ハケメ後ヘラミガキ	ナデツケ	木葉痕	(2.0)			8.0		
Cc24遺構煙道	50	38	坏A							ヘラミガキ	ヘラミガキ	(1.9)				丸底	内黒
Cc24遺構カマド	51		坏BⅡd					ロクロ痕	ロクロ痕	ロクロ痕	回転糸切り	(1.7)				5.0	混入
Cc24遺構煙道	52	39	甕C2	ハケメ	ハケメ	ハケメ	ハケメ					(9.2)	15.8	14.6	14.6		
Cc24遺構煙道	53	40	甕C2	不明	ハケメ	不明	ハメ					(7.3)	18.0	14.8	15.0		
Cc24遺構煙道	54	41	甕C3	ヨコナデ後ヘラミガキ	ハケメ後ヨコナデ	ハケメ後ヘラミガキ	ハケメ後ヘラミガキ	ハケメ後ヘラミガキ	ハケメ後ヘラミガキ			(22.3)		17.2	20.0		
Cc24遺構煙道	55	42	甕C3	ヨコナデ後ヘラミガキ	ハケメ後ヨコナデ	ヨコナデ後ヘラミガキ	ハケメ後ヘラミガキ	ヨコナデ後ヘラミガキ	ヘラミガキ			(20.6)		16.2	20.4		
Cc24遺構煙道	56	43	甕C2	ハケメ後ヘラミガキ	ハケメ後ヨコナデ	ハケメ後ヘラミガキ	ハケメ	ヘラミガキ	ハケメ後ヘラミガキ			(22.3)	20.5	18.0	19.6		
Cc24遺構煙道	57	44	甕C3	ハケメ	ヨコナデ	ハケメ後ヘラミガキ	ハケメ後ヘラミガキ	ハケメ後ヘラミガキ	ハケメ後ヘラミガキ			(29.5)	19.5	14.8	24.0		
Cc24遺構煙道・カマド	58	45	甕C3	ハケメ	ハケメ後ヨコナデ	ハケメ後ヘラミガキ	ハケメ後ヘラミガキ	ハケメ後ヘラミガキ	ハケメ後ヘラミガキ			(30.8)	20.0	16.6	22.4		
Bf30住埋土	59		坏BⅡc					ロクロ痕	ロクロ痕	ロクロ痕	回転糸切り	(1.4)			4.6		
Bf30住表土下	60	46	甕C2	ハケメ	ハケメ	ハケメ後ヘラミガキ	ハケメ後ヘラミガキ					(9.5)	15.0	13.4	13.8		
Bf30住埋土	61	47	甕C							ハケメ後ヘラミガキ	不明	(1.9)				7.6	
Bf30住表土下	62	48	甕C					ハケメ後ヘラミガキ	ハケメ後ヘラミガキ	ハケメ後ヘラミガキ	木葉痕	(8.0)			(15.0)	7.3	

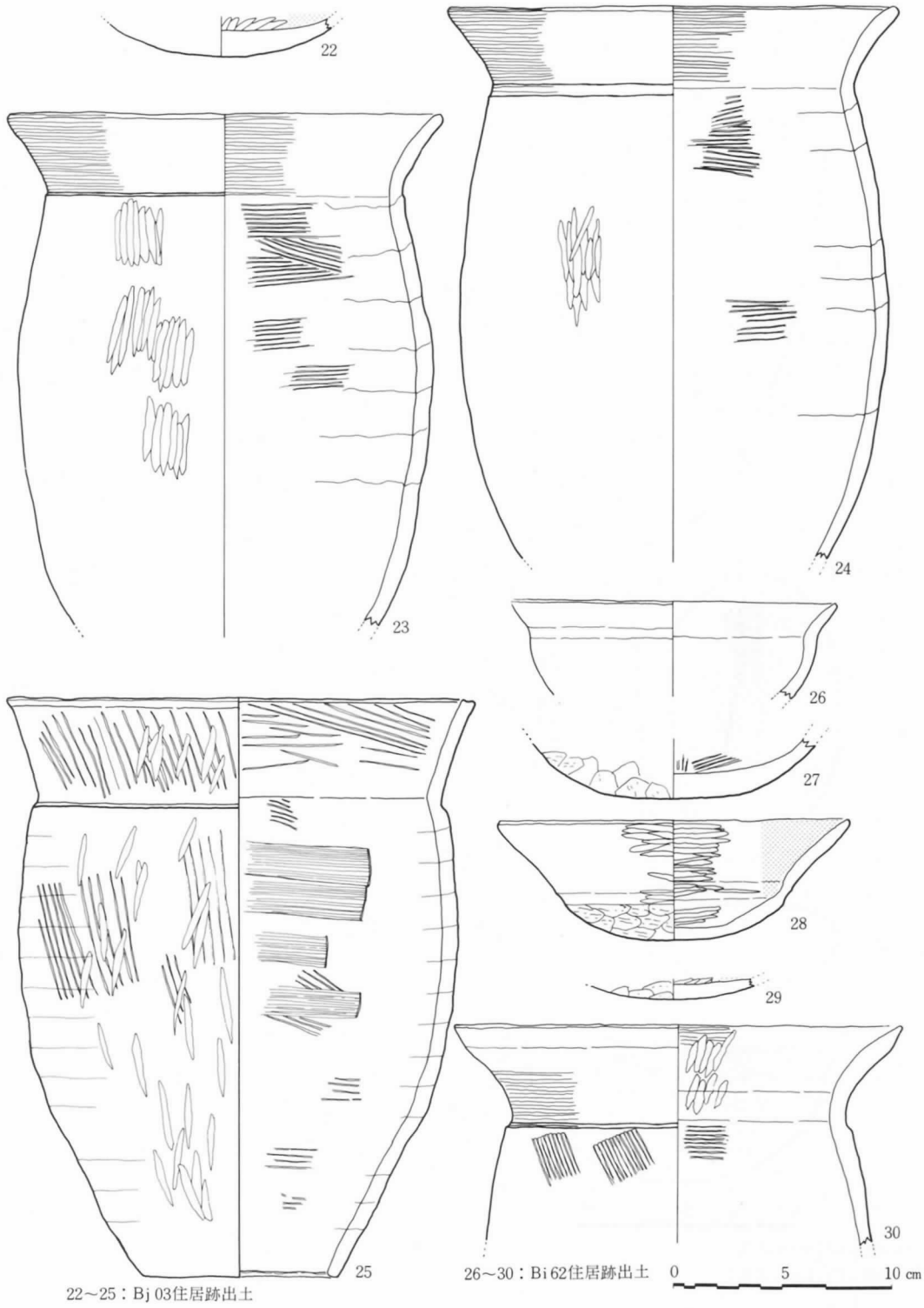


第15図　Cf53竪穴住居跡出土遺物

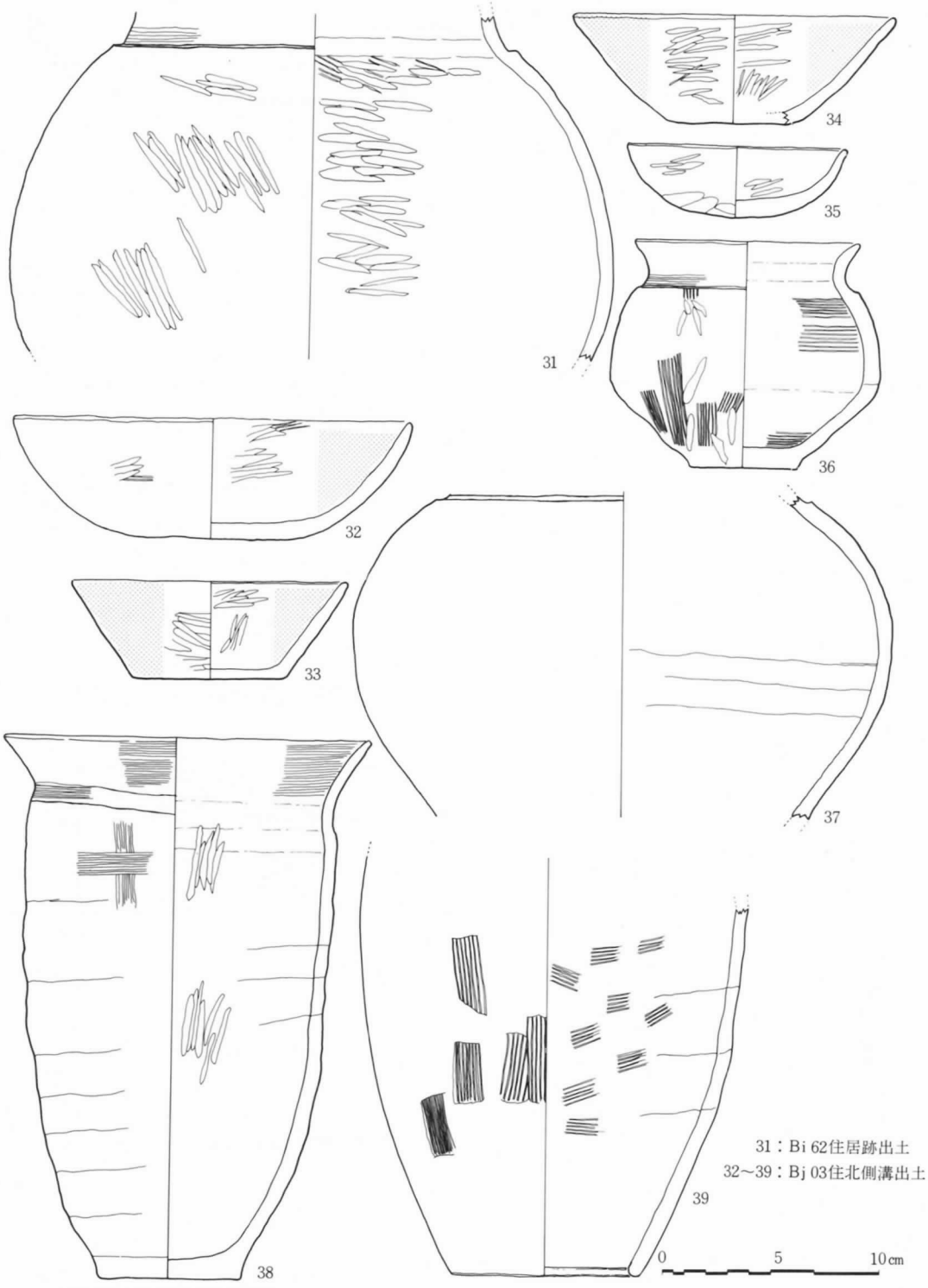


14～18：Cf53住居跡出土
19～21：Ca21住居跡出土

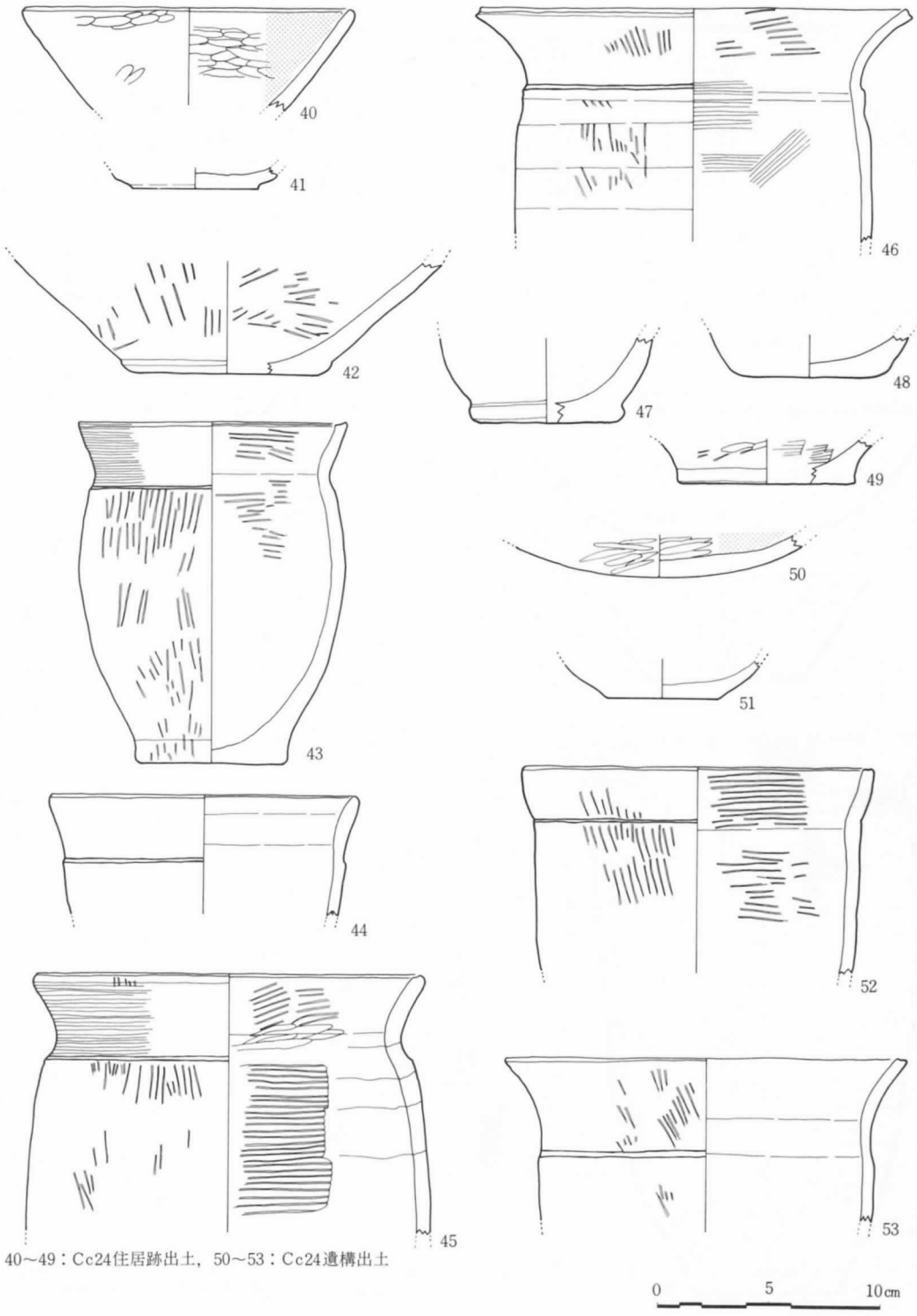
第16図　Cf53住・Ca21住出土遺物



第17図　Bj03住・Bi62住出土遺物



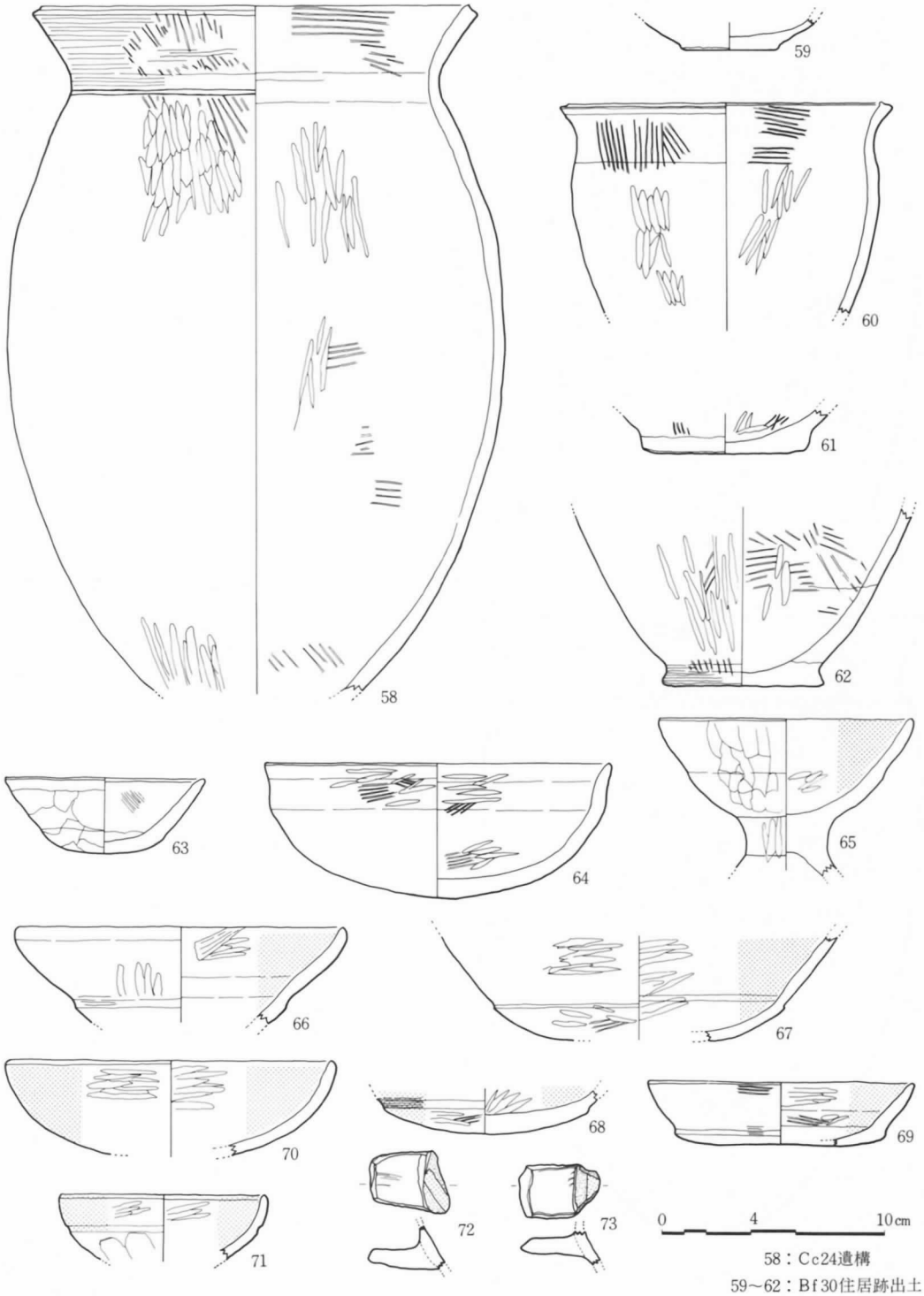
第18図　Bi62住，Bj03住北側溝出土遺物



40～49：Cc24住居跡出土，50～53：Cc24遺構出土

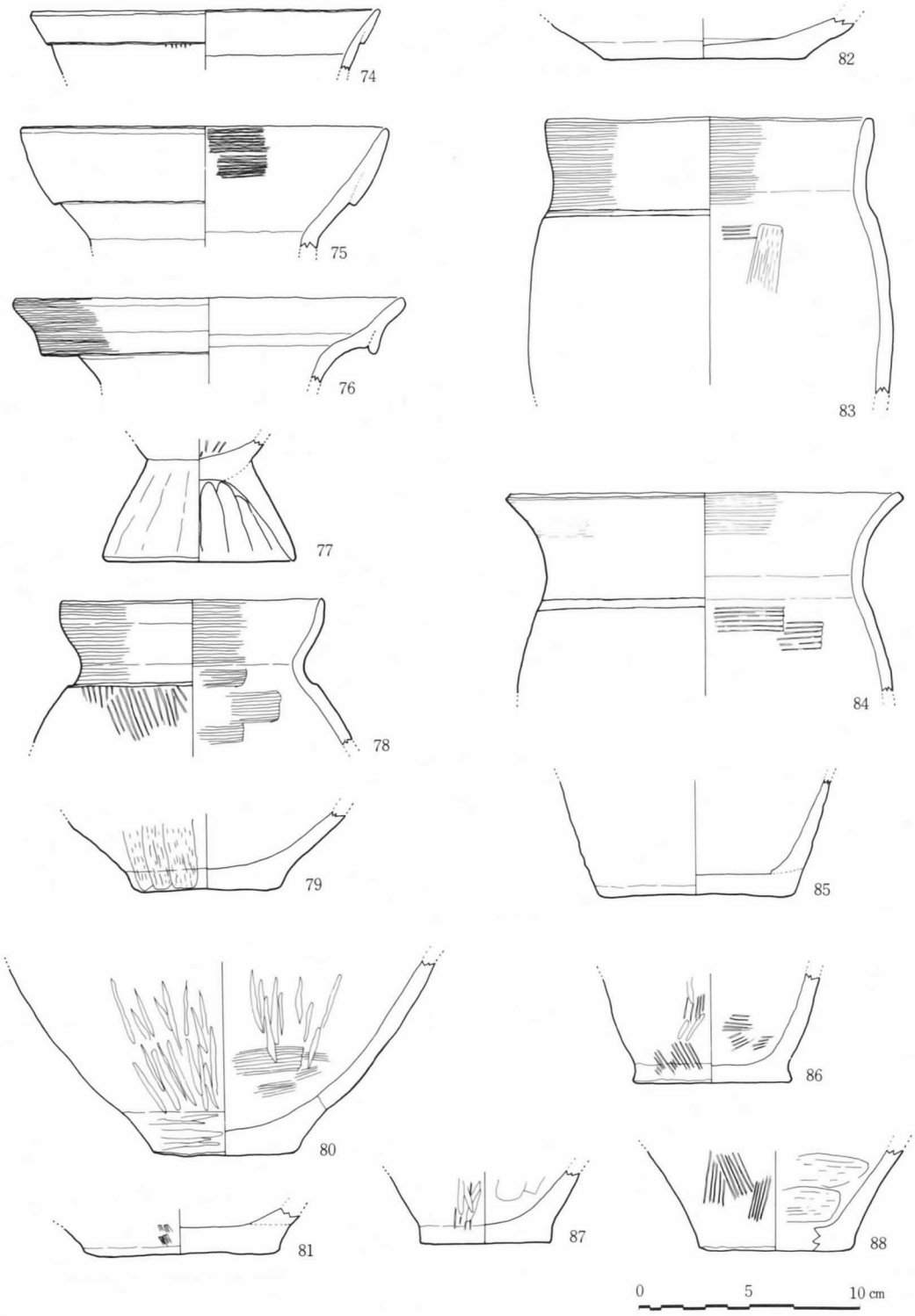
第19図　Cc24住・Cc24遺構出土遺物

第20図　Cc24遺構出土遺物

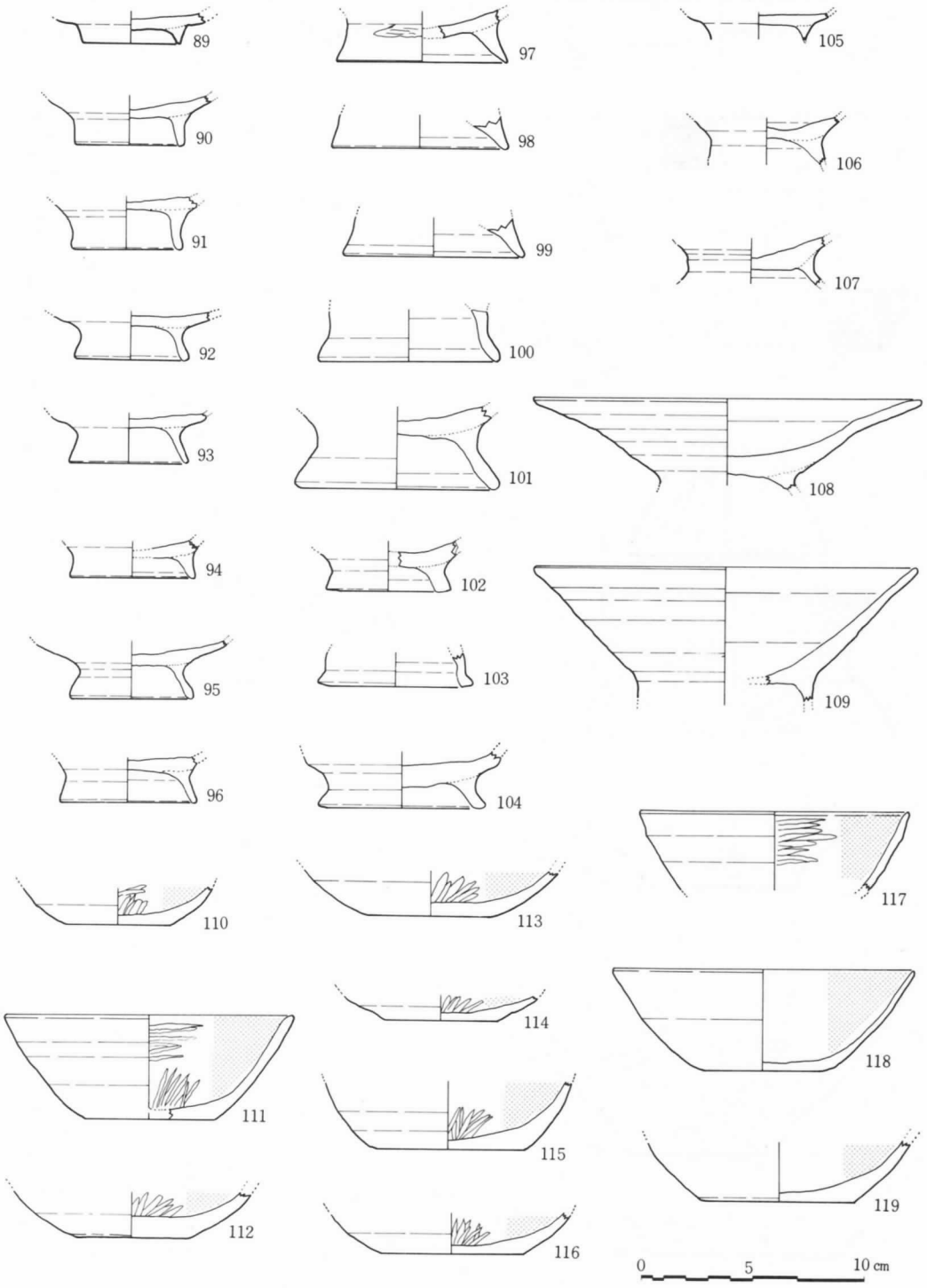


58：Cc24遺構
59～62：Bf30住居跡出土
63～73：溝、その他出土

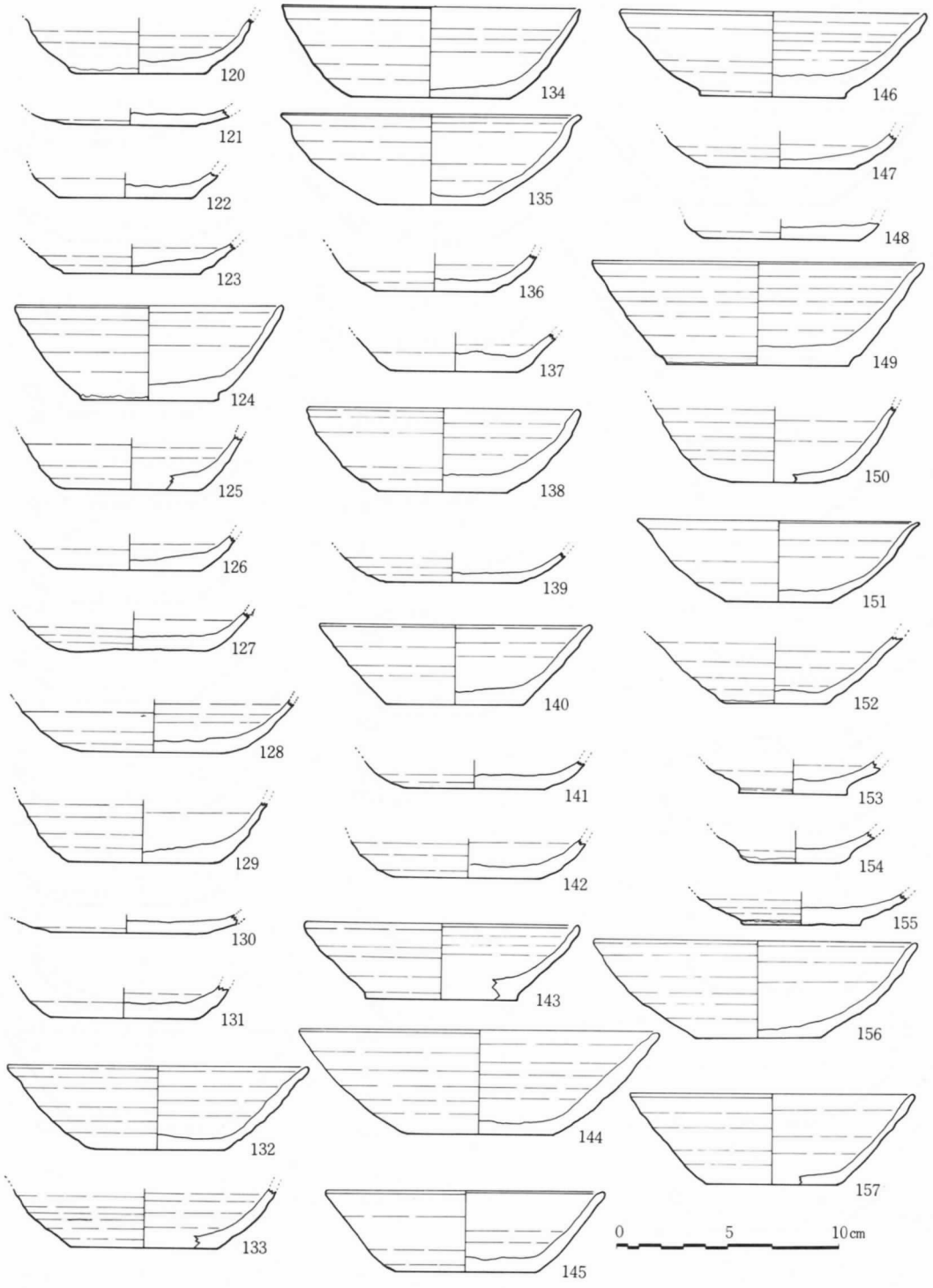
第21図　Cc24遺構・Bf30住居跡・溝その他出土遺物



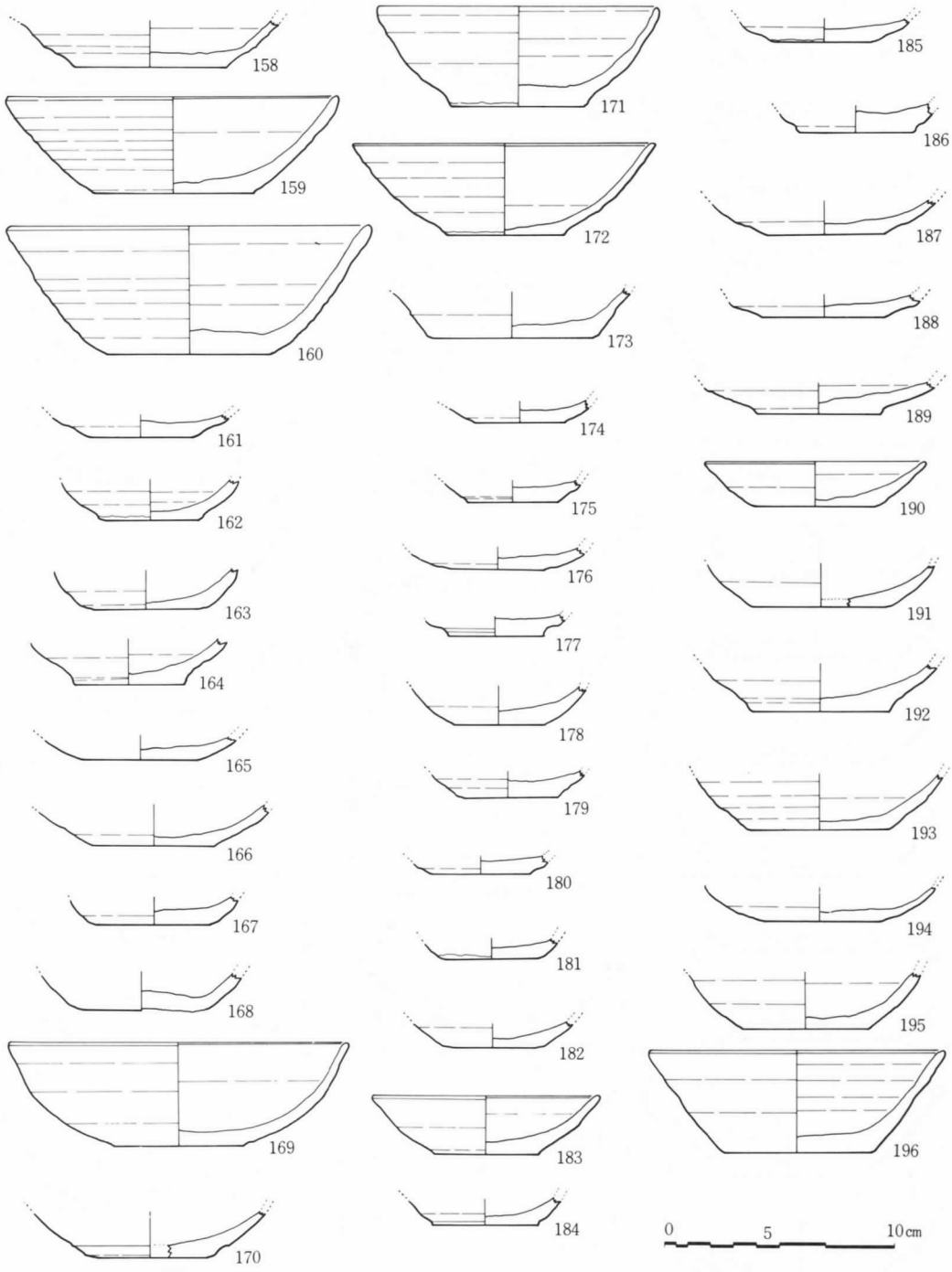
第22図　溝その他出土遺物



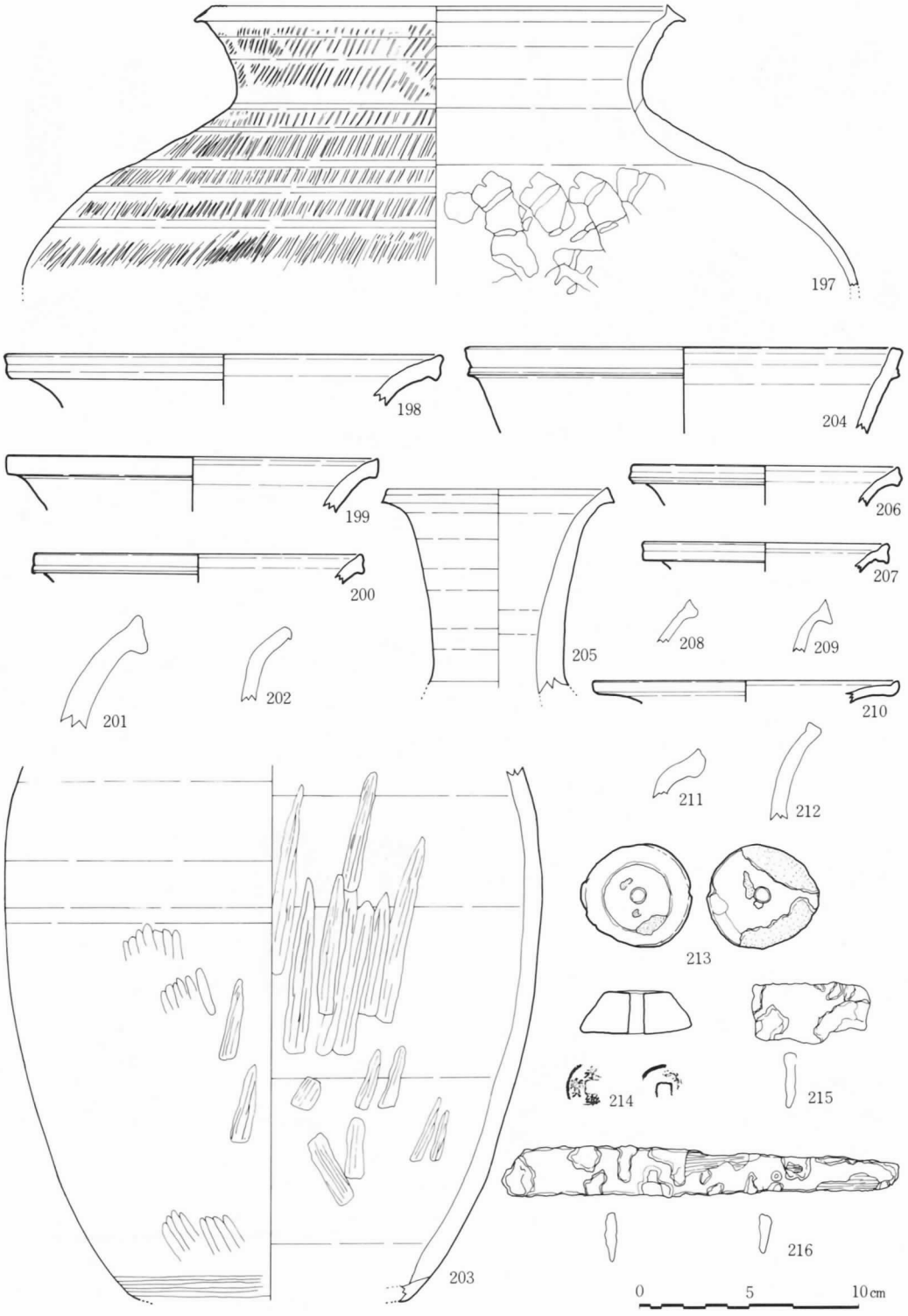
第23図　遺物包含地その他の遺物



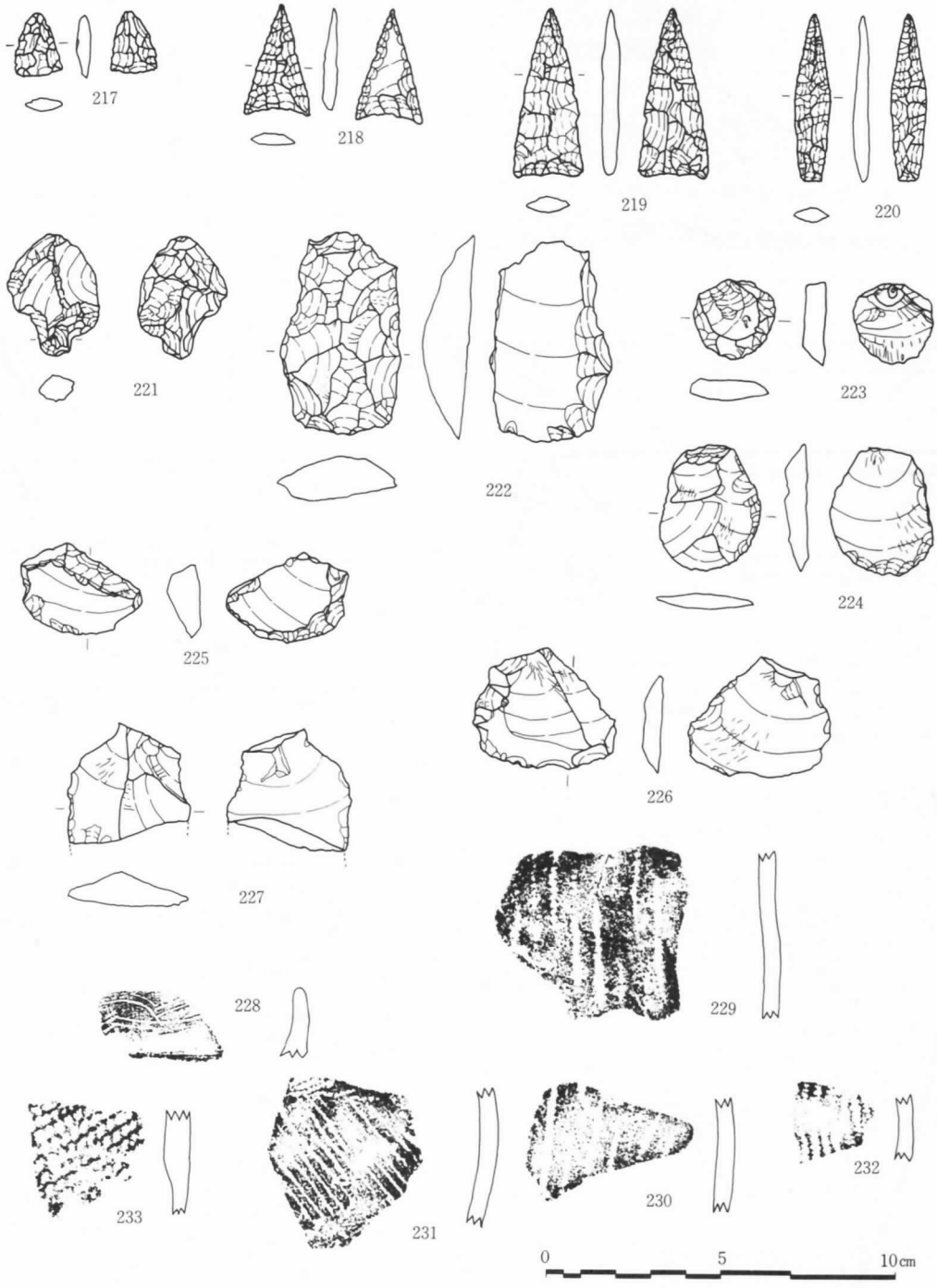
第24図　遺物包含地その他の遺物



第25図　遺物包含地その他の遺物



第26図　遺物包含地その他の遺物



第27図　遺物包含地その他出土遺物

Ⅵ　考察とまとめ

溝状土壙

段丘縁部微高地のやや平坦地に構築され、広範囲にまばらに分散して分布する。分布状態や配置の規則性等については限られた範囲の調査であり、4基だけの検出なので不明である。規模において多少の相違はあるが、いずれも同じ形態である。即ち開口部は狭小の溝状、底部は更に狭小の溝状を呈し、下に行く程せばまる。土壙内埋土は自然堆積であり、石鏃1点だけの出土である。周辺には多量の土師器・須恵器等の破片が分布するが、土壙内への混入は皆無であり、土器分布以前に埋没したものと思われる。竪穴住居跡や掘立柱建物跡により一部が切られている。形態や占地・出土遺物等より、縄文時代に構築された、けもの捕獲のための落し穴と思われる。

この土壙の名称は種々に仮称されており、又性格についても種々な説があるが、ここではその形態から溝状土構と仮称し、平面形・断面形・堆積土等から落し穴と思われる。県内各所より検出されており、都南村湯沢遺跡[1]では「陥し穴状遺構」と呼称し、縄文中期末～後期初頭に位置づけている。久慈市三崎(Ⅲ)遺跡[2]では「楕円形土壙」とし、伴出した炭化材の年代測定値結果によれば縄文後期末～晩期初頭に属するもののようである。

出土土器

当遺跡調査区内出土の土器を各器種の分類や出土状況等により、従来の土器型式等[3]との比較検討をする。

① 複合口縁の壺Aや台付の甕A等はBj 3住居跡西方の溝とその周辺出土で、器面はかなり磨滅し調整は不明な点が多いが、器形上の特徴から古墳時代前期の土師器塩釜式期のものに近似する。尚この段丘縁部が続く西方400m程に古墳時代前期の高山遺跡[4]がある。

② 非ロクロ非内黒丸底の坏A_1類、単純口縁で体部球形の小形壺B、体部球胴形で頚部に段を形成しない甕B_1、頚部に段のない長胴の甕C_1等は各住居跡で共伴し、その器形・器面調整等の特徴から古墳時代中期の南小泉式の土師器に類似するものと思われる。

③ 非ロクロ内黒の丸底或いは平底の坏A_2～A_4、体部が球胴形で頚部に段を形成する甕B_2B_3、長胴形で頚部に段を形成する甕C_2C_3の一部は夫々各住居跡から共伴して出土し、その特徴から古墳時代末期から奈良時代前半の栗囲式の土師期に類似するものである。

④ 掘立柱建物跡や南西部遺物包含地に集中して多量に分布する遺物は共伴関係にある可能性が強いものと思われ、次のようなものがある。非ロクロ土師器で、頚部有段の長胴甕C_2C_3・土師器ロクロ内黒の坏で、底部外面にケズリ調整のあるBⅠa、糸切無調整のBⅠb等は従来表杉ノ入式といわれるもので、9世紀中頃から11世紀中葉頃までと推定されている。ロクロ非内黒の坏には、灰色・灰白色・にぶい橙色・淡橙色等の色調で、硬質・軟質があり、篦切り・

糸切り・ケズリ調整等のあるBⅡa～BⅡcで須恵器といわれているものである。9世紀～11世紀初頭と推定される。又、坏BⅡd～BⅡeはにぶい橙色や淡橙色・浅黄橙色の軟質なもので、全て糸切り無調整で底部が小さい。これは須恵系土器や土師質土器に相当するものと思われ、11世紀～12世紀末頃と言われている。高台坏は坏BⅡeと胎土・焼成・色調等が類似し、遺物包含地でも坏BⅡeと混在して出土している。この高台坏も須恵系土器や土師質土器に相当するもので、この中には器形的には高台皿に相当するものも一括した。須恵器壺・鉢・長頸瓶も全て破片であり、口縁部破片からの推定で壺7個体、鉢1個体、長頸瓶8個体の出土で、遺物包含地ではⅡ層の上位出土である。尚ロクロ内黒坏、ロクロ坏、高台坏、須恵器壺・鉢・長頸瓶は胆沢城出土[5]のものと近似するもののようである。これらロクロ成形・調整の土器は平安時代に属するもので、非ロクロ土師器甕もこれらに共伴するものと思われる。

竪穴住居跡（第28・29表）

竪穴住居跡は8棟の検出で、調査区の段丘縁部全域に分布する。竪穴の構造・伴出遺物等の特徴から大きく2つに分けられる。

第1類：竪穴平面形が方形で、カマドをもたないもの。これには平面形がやや正方形に近い大形のもので、各辺が夫々東西・南北方向に沿い、壁際に部分的に周溝がめぐるCf53住居跡、Cb50住居跡と平面形が長方形をした小形のもので、方向がばらばらなCa21住居跡・Bf30住居跡がある。4個の主柱穴と壁際に2個の柱穴を有する。Ca21住居跡では炉が確認されたが、他は削平や攪乱等により不明である。

伴出土器は全て非ロクロ土師器で、須恵器を伴なわない。坏は非ロクロ非内黒丸底の坏A_1類で、ハケメやミガキ等の調整痕があり、朱塗りのものもある。甕は球胴形頸部無段の甕B_1類と長胴形頸部無段の甕C_1類で、ハケメやミガキが施される。甑は長胴形甕の底部を欠いた形の無底式で、ミガキが加えられる。その他小形壺や砥石が伴出する。これらの特徴は南小泉式の土器に類似すると思われ、古墳時代中期頃の竪穴住居跡と推定される。

第2類：平面形が隅丸方形で、カマドを有する竪穴。Bj3住居跡、Cc24住居跡、Cc24遺構等は方向がほぼ南北で、北壁にカマドを有し、煙道から南流する溝をもつ。Bi62住居跡はこれ等3棟とは方向が異なり、全掘してないので規模やカマド等不明であるが、伴出土器が共通するのでここに入れた。竪穴第2類の伴出土器は全て非ロクロで、須恵器を伴なわない。坏は非ロクロ内黒坏A_2～A_4類である。甕は頸部有段の球胴甕B_2類や長胴甕C_2C_3類である。坏や甕の特徴は栗囲式に類似するものであり、カマドが普遍的にある事から末期古墳から奈良時代初期にかけての竪穴住居跡と思われる。

掘立柱建物跡（第30表）

北西部微高地に6棟の掘立柱建物跡がある。北の4棟は柱掘り方の重複関係から、Be24A・

Be24B・Bf21A・Bf21Bの順に建てられたものであり、各建物の磁北に対する振れが同じで、南側柱列が重なる事から建て替えが行なわれたものと思われる。柱掘り方混入土器や周辺分布土器で多量なのは非ロクロ土師器甕、須恵器壺・鉢・長頸瓶、ロクロ内黒坏、ロクロ坏、高台坏等で破片であり、建物内で使用されたものと考えられる。

Bh27建物跡は前記4棟の南に隣接し、柱筋で最も接近している所では1.4m、建物の磁北に対する振れも異なり、同時存在とは考えられない。Be24A・B、Bf21A・B建物跡に接近している北側柱列の柱掘り方に土器片が多く混入しており、北の4棟より後に建てられたものであろう。建物周辺にも土器片が多く分布し、この建物内では使用されたものと思われる。

Bh27建物跡の南4.3m程にCa21建物跡がある。建物の磁北に対する振れが異なる。東妻北柱掘り方にロクロ坏、非ロクロ土師器甕の破片が各1点ずつ混入しており、北からの流れ込みと考えられ、6棟の中では最も新しいかもしれない。建物周辺には多量の土器片が分布するが、柱掘り方に入っておらず、この事はこの建物内でこれ等の土器が使用されたものと思われる。

以上6棟の掘立柱建物跡は、占地・規模・使用されたと思われる土器類に共通するものがあり、前後はあるが、ある限られた期間に継続して建てられたものと思われる。これら建物の伴出土器と考えられるものの内、ロクロ内黒坏、ロクロ坏、高台坏、須恵器甕・鉢・長頸瓶等は明らかに平安時代に属するものである。限られた範囲内の調査ではあるが、この時期の竪穴住居跡は検出されず、掘立柱建物跡だけの検出であり、伴出土器が胆沢城出土のものと類似する事等から、何か特殊な施設としての建物であった可能性も考えられる。

調査区南東のCe65建物跡は前期6棟とはかなり異なる点が多い。これらの建物とは離れた低地にあり、建物の磁北に対する振れが異なり、東西両妻中柱の掘り方がない。等間ではあるが、梁行と桁行が直角でなく、平行四辺形に近い形の建物と思われる。柱掘り方が小さく、埋土出土遺物は皆無であり、柱穴も14cmと小さい。周辺分布遺物は肩部有段、ハケメ後ミガキ痕のある土師器長胴甕4個体分、球胴甕1個体分だけであり、柱掘り方に1片も混入していないので、建物内で使用されたものかもしれない。これ等の甕は栗囲式のものに近似すると思われ、7～8世紀の建物跡であるかもしれない。

南西部遺物包含地

南西部遺物包含地は崖を境にして北の段丘縁部より1m程下がって低湿地の沖積地にあり、遺構は認められず、土器片が集中して分布している。多量に出土したのは非ロクロ土師器甕、ロクロ坏、須恵器壺・鉢・長頸瓶、ロクロ内黒坏、高台坏等の破片で、これ等は掘立柱建物跡周辺分布の土器と同類のものである事から、掘立柱建物で使用された土器が人為的に廃棄されたものであり、廃棄場所であったものと思われる。土器廃棄が行なわれたのはⅡ層の下位がある程度堆積した頃で、掘立柱建物使用時期の平安時代と思われる。

以上の事からこの段丘縁部は縄文時代から種々に利用されてきた事がうかがえる。

縄文時代：竪穴住居跡は検出されなかったが、少量ではあるが土器片、石器等が分布する事から生活が営まれた可能性もある。遺構としては落し穴と思われる溝状土壙の検出があり、狩猟の場として利用されたものと思われる。

弥生時代：遺構は検出されなかったが、少量の土器片出土から生活が営まれたかもしれない。

古墳時代～奈良時代前半：多量の出土遺物、竪穴住居跡の検出があり、集落が営まれていたものと思われる。

平安時代：多量の土器出土があり、掘立柱建物跡が検出されたが、竪穴住居跡は検出されない事から何か特殊な施設が置かれていたものかもしれない。

《注　記》

(1) 岩手県埋蔵文化財センター「都南村湯沢遺跡」(1978)

(2) 久慈市教育委員会「三崎(Ⅲ)遺跡発掘調査報告書」(1978)

(3) 氏家和典「東北土師器の型式分類とその編年」『歴史第14輯』(1957)
園田茂弘・桑原滋郎「多賀城周辺における古代坏形土器」『研究紀要Ⅰ』宮城県多賀城跡調査研究所 (1974)

(4) 新田賢「高山遺跡」岩手県水沢市文化財報告書第1集 (1978)

(5) 水沢市教育委員会「胆沢城」(1977)

第28表

竪穴住居跡一覧表

住居跡名	遺構確認面	平面形	大きさ（床面積）	方向	床面構築	主柱穴の配置	炉またはカマド	貯蔵穴状ピット（大きさ・深さ）
Cf53住居跡	表土下黄褐色シルト質土	正方形	6.2×6.0m（35㎡）	南一北	床面下に掘り方なし	竪穴内に規則正しく方形に4個配置	不明	隅丸方形（62×54×28cm）（90×68×19cm）
Cb50住居跡	表土下黄褐色シルト質土	正方形（推定）	5.7×(4.5)m（推定23.1㎡）	南一北	床面下に掘り方なし	竪穴内に3対の配置	不明	楕円形（85×60×25cm）（68×52×30cm）
Ca21住居跡	表土下黄褐色シルト質土	長方形	3.8×2.85m（10.5㎡）	東一西	床面下に掘り方なし	竪穴内に方形に4個配置	床面の東壁寄りが焼けている。（45×40cm）	楕円形（78×58×33cm）
Bf30住居跡	表土下黄褐色シルト質土	長方形	2.9×2.45m（6.44㎡）	北東一南西	床面下に掘り方なし	竪穴内に方形に4個配置	不明	楕円形（40×35×22cm）
Bj 3住居跡	表土下黄褐色シルト質土	隅丸方形	5.0×4.6m（21.8㎡）	南一北	床面下に掘り方なし	竪穴内に規則正しく方形に4個配置	北壁中央にカマド設置、燃焼部、煙道部、煙出し部に分かれる。	不整形（102×70×27cm）
Cc24住居跡	表土下黄褐色シルト質土	隅丸方形（推定）	3.5×2.8m（9.18㎡）	南一北	床面下に掘り方なし	不明	北壁西寄りにカマド、煙道部、煙出し部残存	円形（85×85×25cm）
Bi 62住居跡	表土下黄褐色シルト質土	方形（推定）	(4.7)×(3.7)m（残存部8.32㎡）	北東一南西	床面下に掘り方なし	不明	不明	不明

第29表　　竪穴住居跡出土遺物一覧

住居跡	器種	個体数	器形分類　( )内は実測図番号
Cf53住居跡	坏	7	坏A_1類(1・2・3・4・5・6)　坏A類(7)
	壺	1	壺B類(8)
	甕	7	甕B_1類(10・11・12・13・14・15)　甕C_1類(9)
	甑	1	長胴甕形無底式(16)
	砥石	1	(17)
	管玉	1	(18)
Cb50住居跡	甕	1	甕B_1類
Ca21住居跡	坏	1	坏A_1類(19)
	甕	1	甕B_1類(21)
	砥石	1	(20)
Bf30住居跡	坏	1	坏BⅡc類(59)　撹乱混入
	甕	3	甕C_2類(60)　甕C類(61・62)　撹乱混入
Bj 3住居跡	坏	1	坏A類(22)
	甕	2	甕C_2類(23・24)
	甑	1	(25)
Cc24住居跡	坏	2	坏A類(40)　坏BⅡd類(41・混入)
	甕	8	甕B類(42)　甕C_2類(43・44・46)　甕C_3類(45)　甕C類(47・48・49)
Cc24遺　構	坏	2	坏A類(50)　坏BⅡd類(51)
	甕	7	甕C_2類(52・53・56)　甕C_3類(54・55・57・58)
Bi 62住居跡	坏	4	坏A_1類(26)　坏A_2類(28)　坏A類(27・29)
	甕	2	甕B_2類(31)　甕C_2類(30)

第30表　掘立柱建物跡一覧表

A—旧棟、B—新棟、空白は不明、1尺—約30.3cm

建物名	棟方向	規模	梁行 m ( )内は尺	桁行 m ( )内は尺	柱間寸法 梁間m ( )は尺	柱間寸法 桁間m ( )は尺	柱掘り方 平面形 辺・径 cm	柱掘り方 深さ cm	柱あたり径 cm	柱掘り方埋土内出土遺物 数字は破片数 ロクロ不使用土器 各棟	ロクロ不使用土器 A・B棟混合	ロクロ不使用土器 Be24Bf21混合	ロクロ使用土器 各棟	ロクロ使用土器 A・B棟混合	ロクロ使用土器 Be24Bf21混合
Be24A	東西棟	2間×4間					方形 74	46		小形手捏土器1 土師器甕 11	縄文土器 4 土師器坏 1 小形手捏土器1 土師器内黒坏4 土師器甕 66	土師器朱塗坏1 土師器坏 2 土師器内黒坏 3 土師器甕 59	土師器内黒坏1 須恵器坏 4	土師器内黒坏15 須恵器坏 4 土師質坏 6 須恵器甕 1	土師器内黒坏52 土師質土器坏20 土師質高台坏1 須恵器甕 2
Be24B	東西棟	2間×4間	6.3 (20.8)	10.00 (33.0)	3.15 (10.4)	2.5 (8.2)	方形 57	57	25	土師器坏 2 土師器内黒坏4 土師器甕 111			土師器内黒坏67 須恵器坏 10 土師質土器坏61 須恵器甕 4		
Bf21A	東西棟	2間×3間					方形 48	22			土師器坏 2 土師器内黒坏2 土師器甕 18		土師器内黒坏1 土師質土器坏1	土師器内黒坏5 須恵器坏 1 土師質土器坏33	
Bf21B	東西棟	2間×3間	4.8 (15.8)	7.99 (26.4)	2.40 (7.9)	2.66 (8.8)	方形 円形 54	48	21.5	土師器朱塗坏1 土師器内黒坏2 土師器甕 39			土師器内黒坏30 須恵器坏 3 土師質土器坏26		
Bh27	東西棟	2間×5間	5.4 (17.8)	10.80 (35.5)	2.70 (8.9)	2.16 (7.1)	方形 61	47	22	縄文土器 3 土師器坏 1 土師器甕 142	土師器朱塗坏 1 土師器内黒坏 7		土師器内黒坏 11 土師質土器坏 81	須恵器坏 11 土師質高台坏 5	
Ca21	東西棟	2間×3間	4.15 (13.6)	8.85 (29.1)	2.075 (6.8)	2.95 (9.7)	方形 円形 41	31	21	土師器両面朱塗坏 1 土師器甕 3			須恵器坏回転糸切 1		
Ce65	東西棟	1間×3間	4.4 (14.5)	7.00 (23.0)	4.40 (14.5)	2.33 (7.6)	方形 円形 33	40	14	出土遺物なし					

南 矢 中 遺 跡

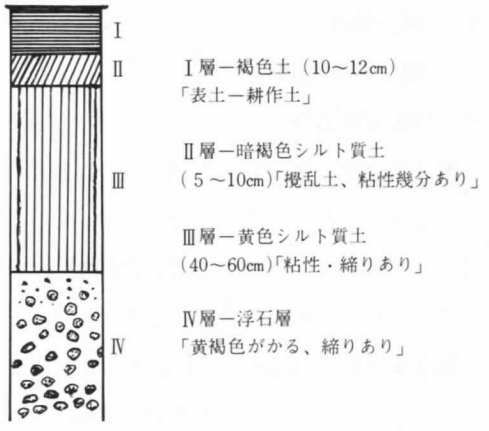
1．遺　跡　名　南矢中遺跡（MYN74・75）
2．所　在　地　岩手県水沢市福原字南矢中
3．調 査 主 体　岩手県教育委員会・日本道路公団
4．調 査 担 当　岩手県教育委員会
5．調 査 期 間　昭和49年10月29日～12月 9 日
　　昭和50年 6 月 9 日～ 9 月 6 日
6．調査対象面積　5800㎡
7．発掘調査面積　3820㎡

Ⅰ　位置と立地（第１図、写真１図）

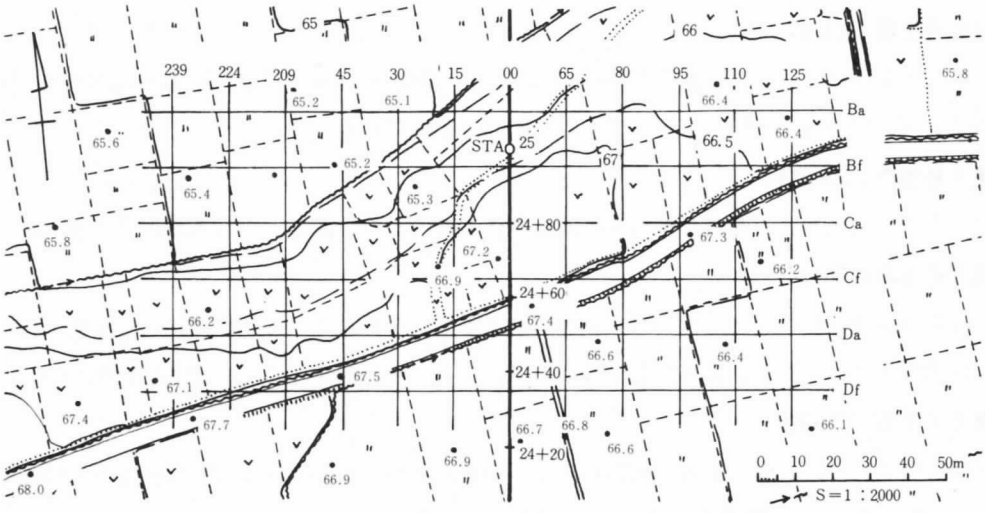
本遺跡は東北本線水沢駅西方約2.3kmの中位段丘最下段（胆沢段丘福原面）の北縁にあたり、東西に長く延びる段丘平坦面及び緩斜面に遺跡が立地する。海抜約66mで原状は畑地、水田宅地であった。調査範囲は工事用道路分、本線分及び県道付替えのための用地分であるが遺跡範囲としては東西に更に延びると思われる。周辺の遺跡としては鶴田の古墳群が西方に、東方には駈上の遺跡、南方には本調査関連の前谷地、北東には梨畑遺跡がある。

Ⅱ　遺物包含層

1　〔**基本層序**〕　段丘形成後、自然営力及び人為的作用により地形及び層序の変化があった。右記の模式断面図は現状におけるものであるがⅣ層は周辺火山の噴出物に由来する村崎野浮石層である。歴史時代に於ける火山噴出物については、秋田焼山や十和田火山に由来するものが周辺の遺跡に見られる様であるが、本遺跡にてば、その存在を確認出来なかった。



第２図　基本層序模式断面図



第１図　南矢中遺跡（地形及びグリッド配置図）

2 〔遺物包含層〕 分布調査にて土師器片の表面採取が行なわれた。出土物全体から見ると何らかの形で遺構との関わりを持つものが多く、層単独にて出土している遺物は少ない。また時代毎に成層状態を示すものは無く、単一層である。時期及び種類等は、縄文早期土器片及び石器等があり、寛永通宝らしき古銭に及ぶ。包含部位は基本層序の第Ⅰ・Ⅱ層である。

Ⅲ 検出された遺構と遺物（第３図遺構配置図、写真１図）

本遺跡には縄文時代の陥し穴状遺構（楕円形状・溝状の二種）や平安時代の竪穴式住居跡及び方形の溝、小溝跡等があり、そのそれぞれの時代に応じる遺物が出土している。

1 〔縄文時代〕

（陥し穴状遺構）

イ．楕円形状遺構（この形式のものは底面に柱穴状のものをもつ。１号より６号まである。）

第１号土壙（Bc 71）（第16図、第１表）

平安期住居のカマドにて切られている。底面長軸方向に対してほぼ直角の東西に２柱穴が設けられている。この柱穴の深さは約30㎝程である。堆積層は壁上部の崩落土を含み、自然流入を示している。断面形は長方形であったろうと思われる。

第２号土壙（Bh 53）（第４図・第１表以下同）

平面形に比して、浅いのは表土の削平によるものと考えられる。底面の２柱穴は本土壙のほぼ長軸方向に配列している。それぞれは底面より北側55㎝、南側42㎝と深く落込んでいる。また２柱穴の断面は下部ほど細くなって居り、杭等を差し込んだものと考えられる。埋土の状況より本来の断面は方形を成したと思われる。埋土の最下底は踏込まれた感じの褐色土である。

第３号土壙（Cb 18）

円筒形の落込みで底面に２柱穴が（東側）34.8㎝、（西側）39.5㎝の深さを持ち検出された。埋土の状況は不明であるが断面形は方形を成していたと思われる。

第４号土壙（Ci 215）

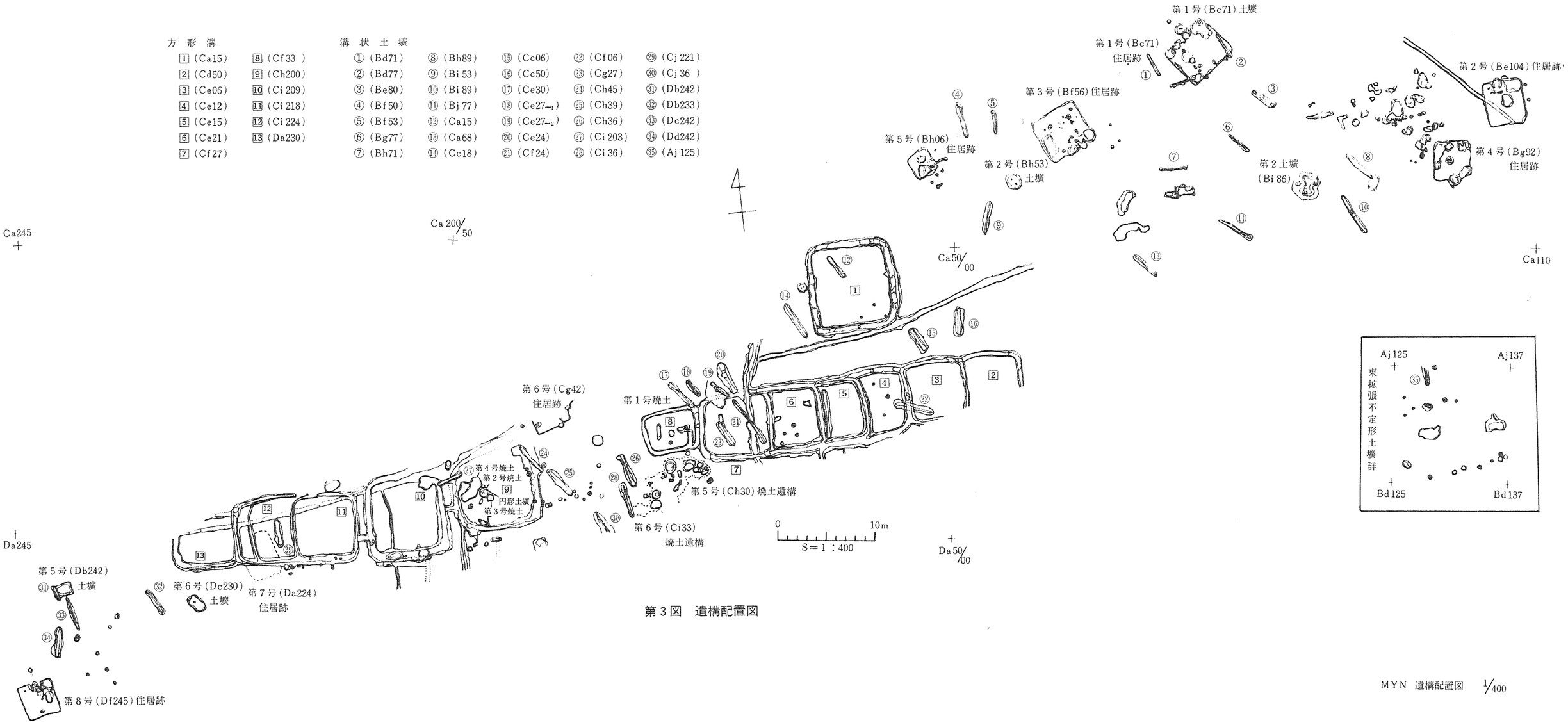
平面形が楕円に近い。明確に施設を持たぬ性格不明のものである。方形溝の傍に位置する。

第５号土壙（Db 242）

平面形は隅丸方形に近い。西端を第33号溝状土壙にて切られている。底面に柱穴等見られない。検出埋土は一層で一気に埋没したものと思われる。他の土壙と異なった機能が考えられる。

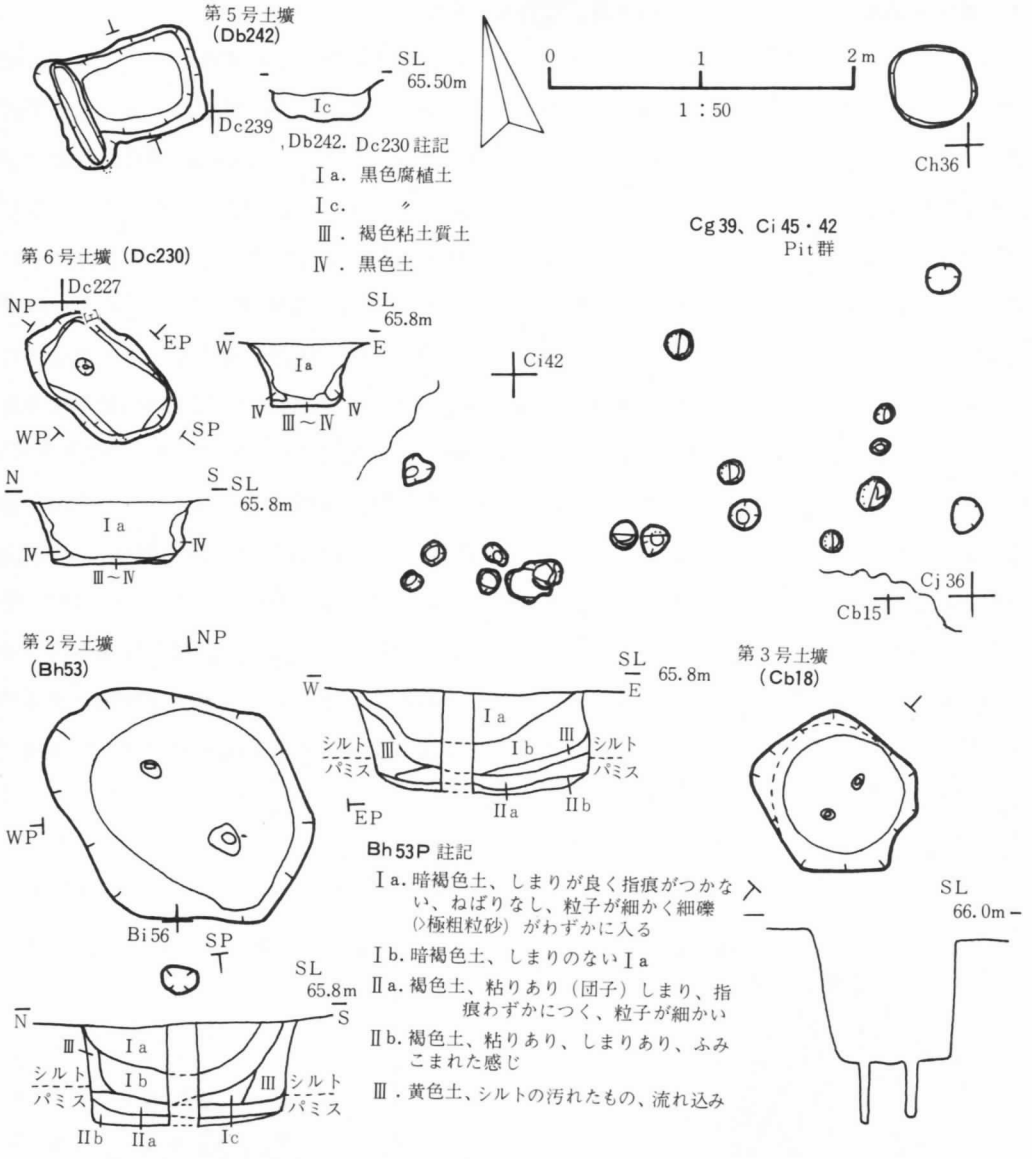
第６号土壙（Dc 230）

底面形は隅丸の長方形である。北寄りに深さ約47㎝の柱穴があるがこの断面形は下部程細くなる。埋土の状況よりは断面壁は直に立って居り、平面形も隅丸方形であったと思われる。



第3図　遺構配置図

MYN　遺構配置図　1/400



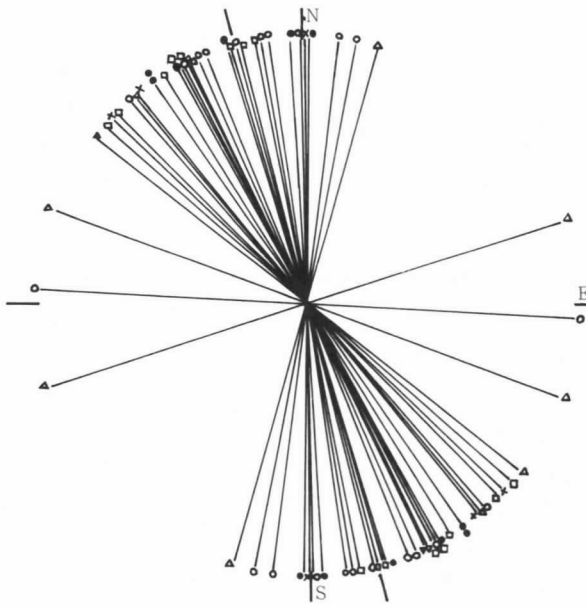
第4図　第2・3・4・5・6号土壙

(第1表)	図番号	写真番号	検出面径 m	底面径 m	深さm	方位	検出平面形	検出断面形	その他	埋土状況	件出遺物	他遺構との関連	備考
第1号 土壙(Bc71)	16	13	1.40×1.25	0.9 ×1.0	1.05	(N)	不整円形	ピーカー形	底面に2小土壙	4層 自然堆積	なし	第1号 竪穴式住居跡	カマドにて切られる
2 〃 (Bh53)	4	2－1	1.50×1.80	1.1 ×1.5	0.66	N35°W	楕円形	方形状	〃	3層 〃	〃	なし	
3 〃 (Cb18)	4	2－3	1.1 ×1.1	0.85×0.8	0.80	N60°E	不整円形	(鬼分フラスコ形)	〃	－	－	なし	断面等の記録なし
4 〃 (Ci215)	3	25－1	1.6 ×1.3	1.4 ×1.0	0.52	N77°E	不整円形	－	－	－	－	第11号(Ci218)方形溝北	断面等の記録なし
5 〃 (Db242)	4	2－5	1.7 ×1.3	1.3 ×0.85	0.43	N80°E	方形	半楕円形	中端をもつ	1層 自然堆積	なし	第31号溝状土壙に切られる	
6 〃 (Dc230)	4	2－4	1.2 ×2.1	0.8 ×1.7	0.48	N43°W	不整円形	方状形	底面に小土壙1	3層 〃	〃	なし	深さ46cmの小土壙
(円形土壙 〈ch200〉)	39		1.05×1.05	0.7 ×0.7	1.29	－	円形	長方形状	底面に2小土壙	5層 〃	あり	南北の浅い小土壙と接す	底面に深さ39cmの小土壙

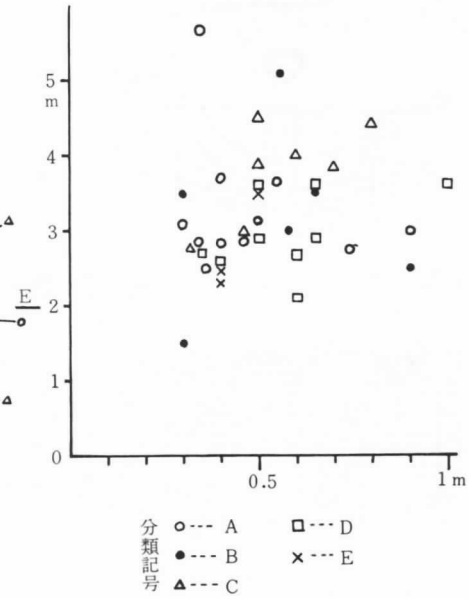
ロ．溝状土壙遺構（第７～14図・第２表、写真３～６図）

検出された総数は35基、その形状により５型式に区分して見た。それぞれについては遺構配置順に図示し、一覧表にては区分した型式毎にまとめた。　型式区分の規準は…Ａ－底部が直線的で上場より狭い、Ｂ－底部は直線的で一端が壁より中にもぐる、Ｃ－底部両端が壁より中にもぐり膨らむ、Ｄ－底部両端平面形開く、Ｅ－Ｄより両端平面形更に開く（Ａ11基、Ｂ５基、Ｃ７基、Ｄ９基、Ｅ３基）の以上である。各型式と埋土の関係についてはそれぞれ断面図中に示してあるが、縦断面の記録は少い。大半のものは自然流入による堆積であるが第４号遺構（Ｂf50）のみ人為的に投げ込まれた形跡がある。断面図及び埋土註記を欠くものはほぼ他例に順ずる。それぞれの型式についての共通点は以下の通りとなる。(掘り下げ到達層)基本層序Ⅳの浮石層。(平面形)軸方向の長短は見られるが復元形として隅丸の長方形である。(横断面形)検出形は下端の平らな楔状を呈する。(縦断面形)検出形は型式分類基準で示したごとくの５形態の区分が出来る。(方位)下図に示すごとくN40°W付近への振れの集中が見られる。(配列)同一型式のものがまとまりを見せ平行に配置し、地形等高線にもほぼ平行である。(使用目的)陥し穴説を本遺跡にても採用する(注1)。この使用目的において形態の５型式がどの様な意味を持つかについては今後の検討に待つ所であるが、その為の資料の一つとしては縦断面上層図が必要であろう。(遺構の年代等)年代を判定する資料遺物を伴出しないので決定出来ないが、ほぼ縄文時代後期までのものと考えられる(注2)。

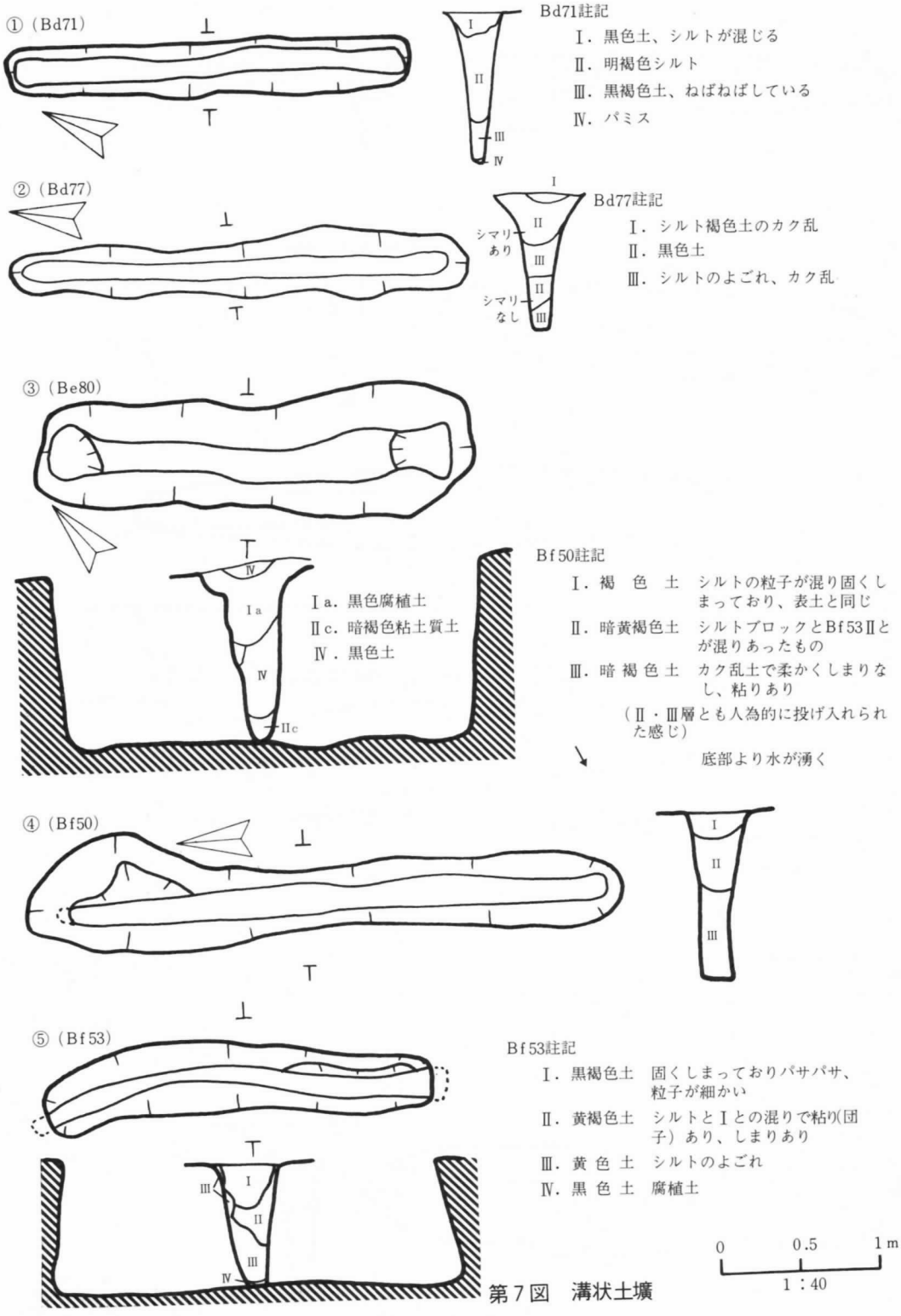
（注１）　本調査関連報告書第Ⅰ集　高屋敷、大久保、大緩、高柳遺跡文中
（注２）　岩手県(財)埋文センター調査報告書第２集　湯沢遺跡（昭和52年度）



第５図　方位集積図

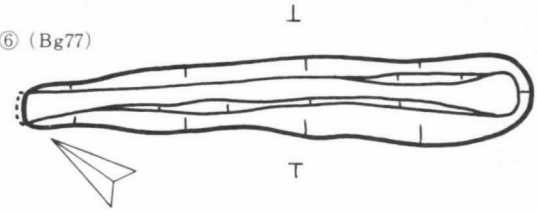


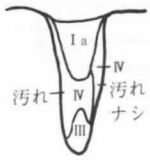
第６図　規模集積図


① (Bd71)
Bd71註記
Ⅰ. 黒色土、シルトが混じる
Ⅱ. 明褐色シルト
Ⅲ. 黒褐色土、ねばねばしている
Ⅳ. パミス
② (Bd77)
シマリあり
シマリなし
Bd77註記
Ⅰ. シルト褐色土のカク乱
Ⅱ. 黒色土
Ⅲ. シルトのよごれ、カク乱
③ (Be80)
Ⅰa. 黒色腐植土
Ⅱc. 暗褐色粘土質土
Ⅳ. 黒色土
Bf50註記
Ⅰ. 褐 色 土 シルトの粒子が混り固くしまっており、表土と同じ
Ⅱ. 暗黄褐色土 シルトブロックとBf53Ⅱとが混りあったもの
Ⅲ. 暗 褐 色 土 カク乱土で柔かくしまりなし、粘りあり
(Ⅱ・Ⅲ層とも人為的に投げ入れられた感じ)
底部より水が湧く
④ (Bf50)
⑤ (Bf53)
Bf53註記
Ⅰ. 黒褐色土 固くしまっておりパサパサ、粒子が細かい
Ⅱ. 黄褐色土 シルトとⅠとの混りで粘り(団子)あり、しまりあり
Ⅲ. 黄 色 土 シルトのよごれ
Ⅳ. 黒 色 土 腐植土
0 0.5 1m
1：40

第7図 溝状土壙

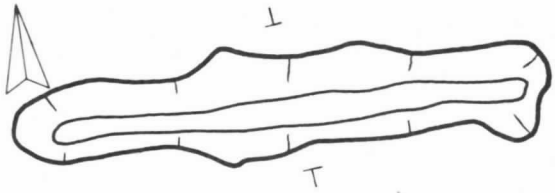
⑥（Bg77）

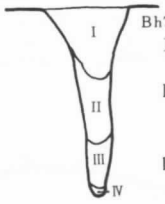




Bg77註記
Ⅰa．黒色腐植土
Ⅲ．褐色粘土質土
Ⅳ．黒色土

⑦（Bh71）

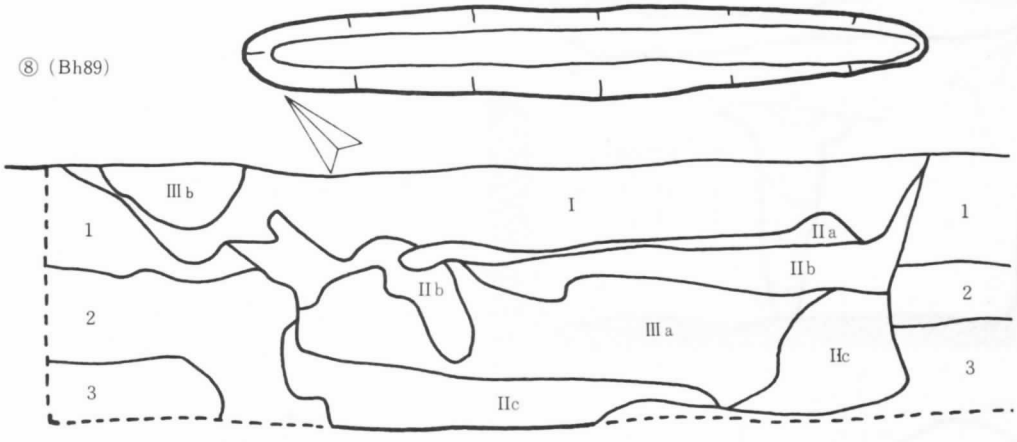




Bh71註記

Ⅰ．黒 色 土	粒子が細かく粘性少なくしまっている
Ⅱ．明褐色シルト	粘性あり、やわらかく黒色の混りがみられる
Ⅲ．黒 色 土	ややねばねばする、水分多く粘性
Ⅳ．パ ミ ス	（遺物なし）

⑧（Bh89）

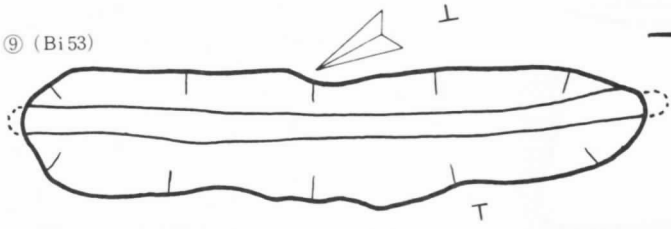


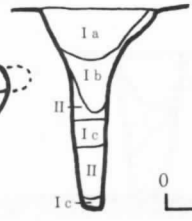
Bh89註記
1．地山　褐色粘土質土
2．地山　黄褐色土、砂っぽく黄色の砂質ブロックが混じる
3．地山　褐色粘土質土、1より暗く砂質である。
Ⅰ．黒褐色腐植土、密度中
Ⅱa．黄色粘土質土と暗褐色土のまじり、密度小、全体に黄色っぽい
Ⅱb．暗褐色土に黄色粘土質土小ブロックがまじり、密度小、暗褐色っぽい
Ⅱc．暗褐色粘土質土、泥が堆積した感じ、わずかながら黄色土ブロック（径1cm位）がまじる、密度小
Ⅲa．褐色粘土質土、少し暗褐色によごれている、密度小
Ⅲb．褐色土、Ⅲaよりは暗い感じ、ボソボソして粘りなし、密度中

Bi53註記

Ⅰa．黒色土	ねばり・団子状、しまり、指痕がすぐにつく、粒子は細かくまじりものなし、腐植土
Ⅰb．黒褐色土	粘りあり、しまりなし、シルトがまじる
Ⅱ．黄褐色土	シルトの汚れ、人為的に入れたものか
Ⅰc．黒色土	粘りあり腐植土

⑨（Bi53）

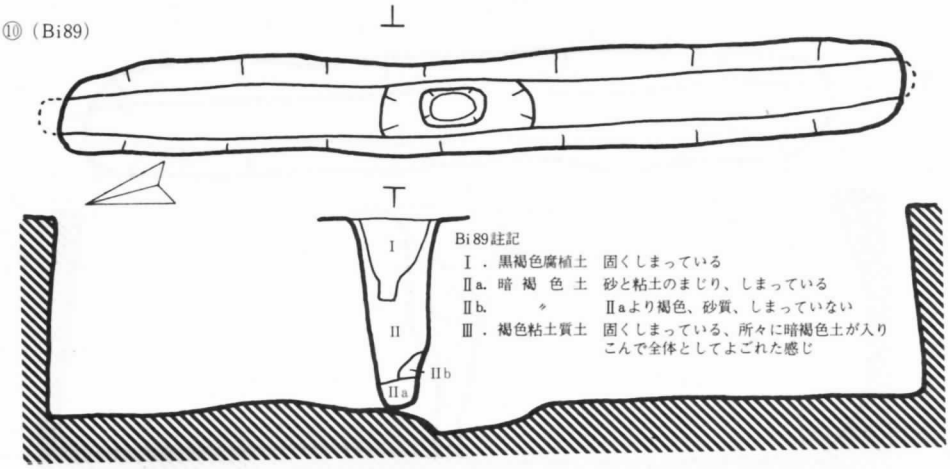




0　0.5　1m
1：40

第8図　溝状土壙

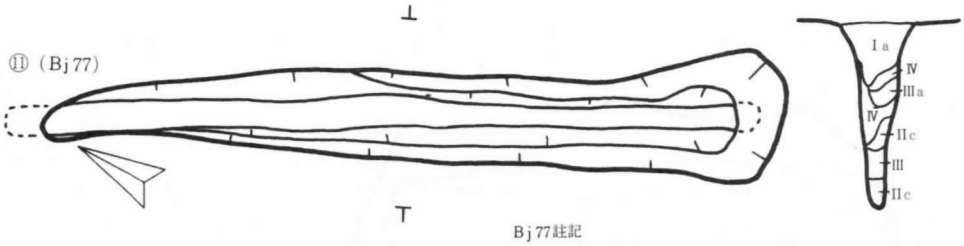
⑩（Bi89）



Bi89註記

Ⅰ．黒褐色腐植土　固くしまっている
Ⅱa．暗褐色土　砂と粘土のまじり、しまっている
Ⅱb．〃　Ⅱaより褐色、砂質、しまっていない
Ⅲ．褐色粘土質土　固くしまっている、所々に暗褐色土が入りこんで全体としてよごれた感じ

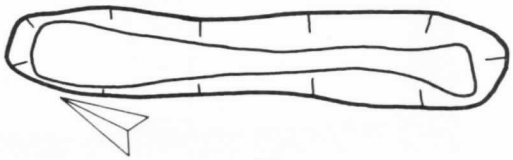
⑪（Bj77）



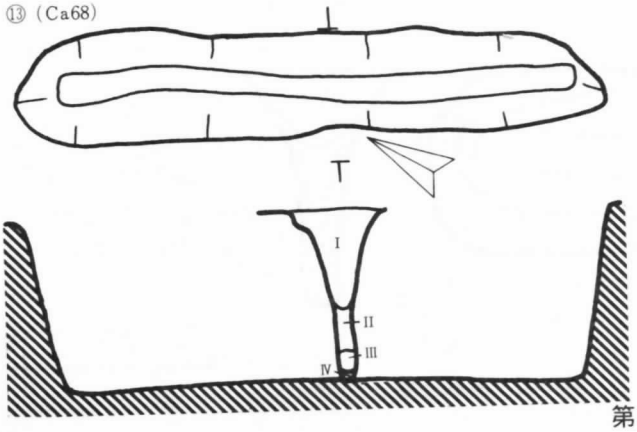
Bj77註記

Ⅰa．黒色腐植土　Ⅲa．褐色粘土質土、汚れ
Ⅱc．暗褐色粘土質土　Ⅳ．黒色土
Ⅲ．褐色粘土質土

⑫（Ca15）



⑬（Ca68）



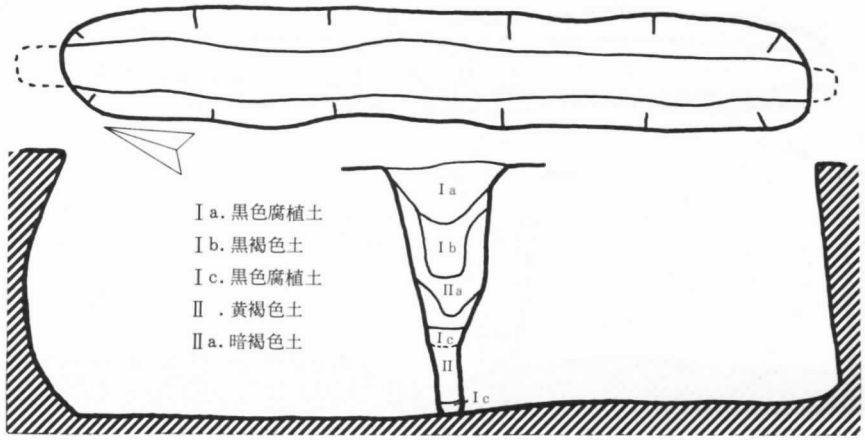
Ca68註記

Ⅰ．黒色土　やわらかい感じ、下に行くに従ってさらにやわらかくなる。粒子が細かく粘性少、しまっている
Ⅱ．明褐色シルト　粘性あり、やわらかく黒色土のまじりがみられる
Ⅲ．黒色土　ややねばねばする、水分多く粘性
Ⅳ．パミス
（註．遺物なし）

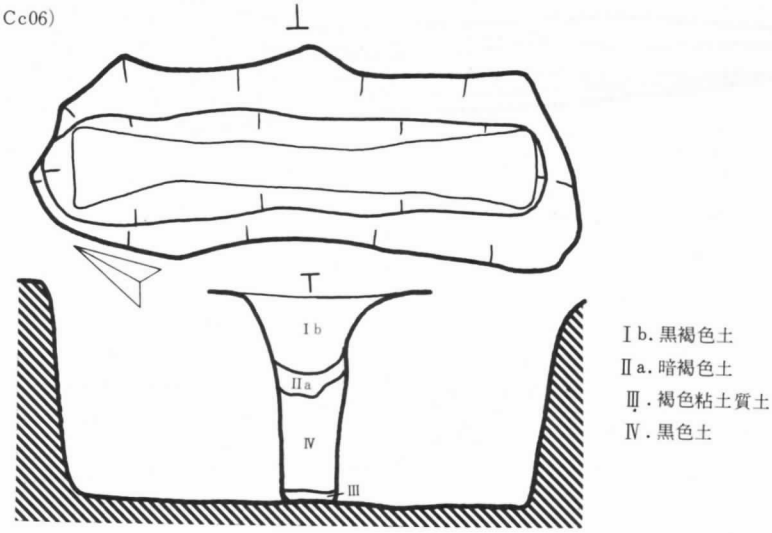
0　0.5　1 m
1：40

第9図　溝状土壙

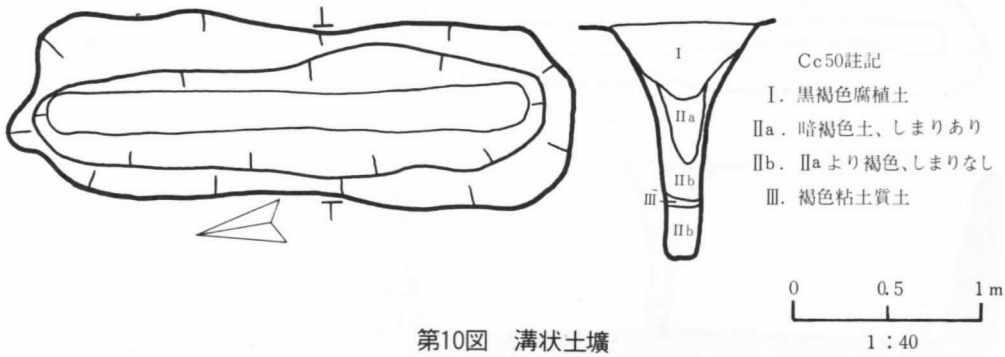
⑭（Cc18）



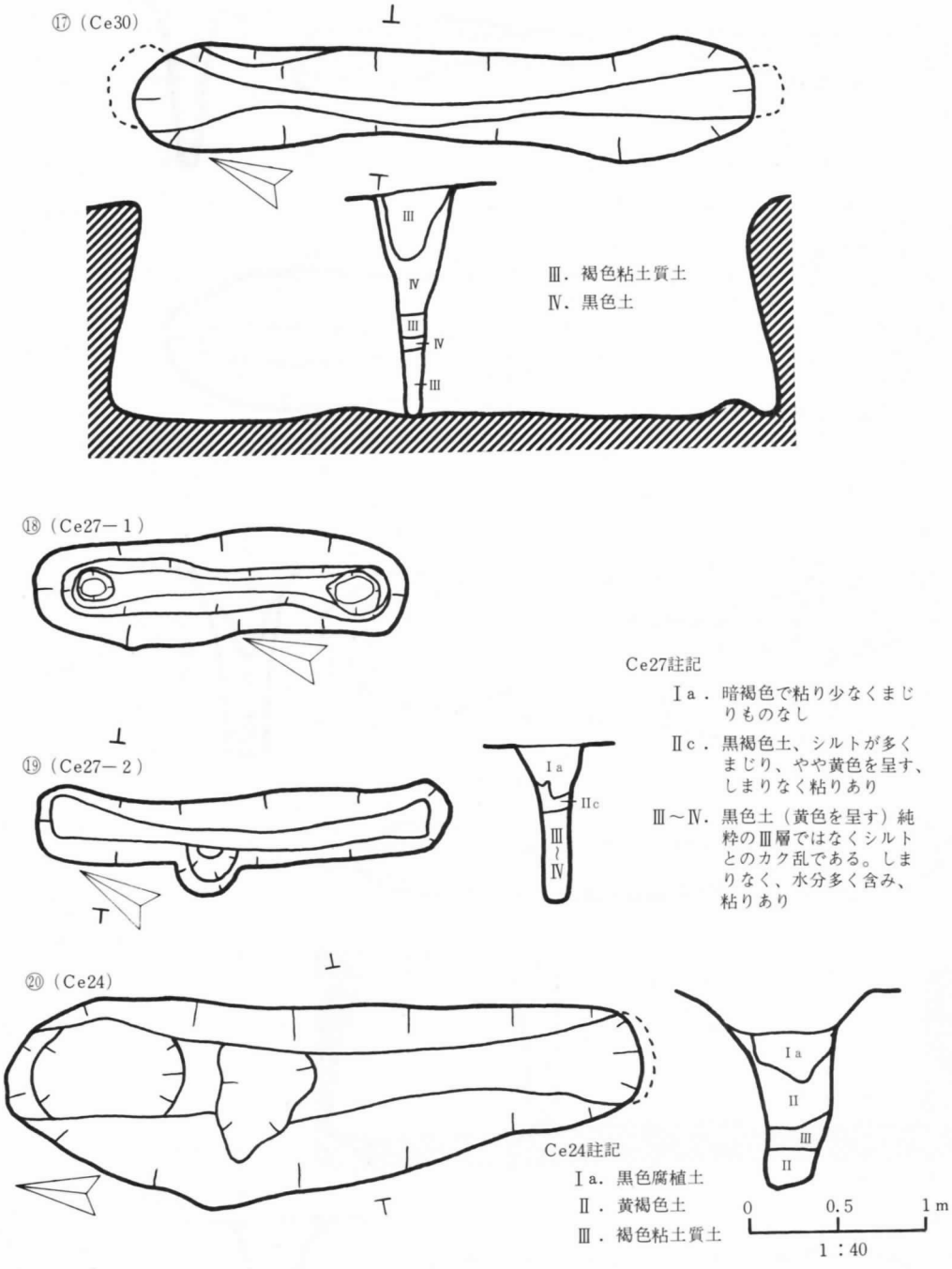
⑮（Cc06）



⑯（Cc50）

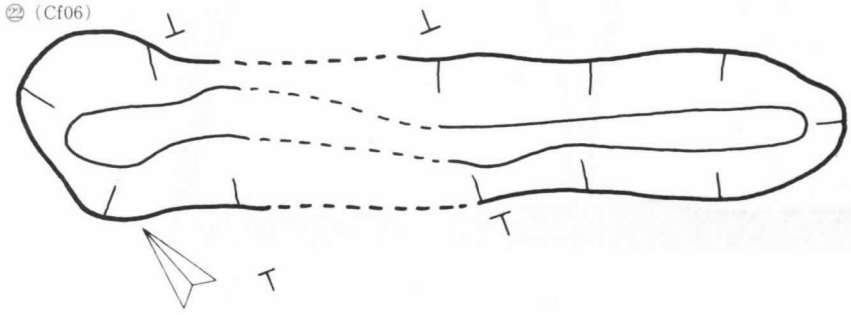


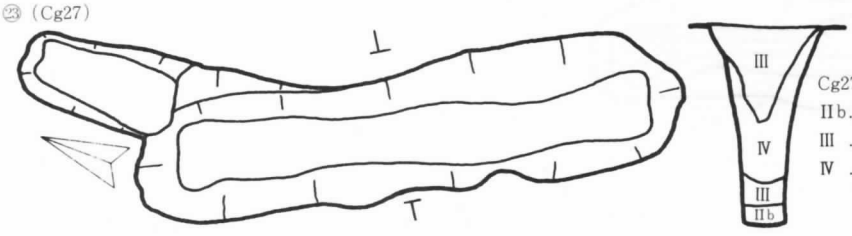
第10図　溝状土壙


⑰（Ce30）
Ⅲ
Ⅳ
Ⅲ
Ⅳ
Ⅲ
Ⅲ．褐色粘土質土
Ⅳ．黒色土
⑱（Ce27－1）
⑲（Ce27－2）
Ⅰa
Ⅱc
Ⅲ～Ⅳ
Ce27註記
Ⅰa．暗褐色で粘り少なくまじりものなし
Ⅱc．黒褐色土、シルトが多くまじり、やや黄色を呈す、しまりなく粘りあり
Ⅲ～Ⅳ．黒色土（黄色を呈す）純粋のⅢ層ではなくシルトとのカク乱である。しまりなく、水分多く含み、粘りあり
⑳（Ce24）
Ⅰa
Ⅱ
Ⅲ
Ⅱ
Ce24註記
Ⅰa．黒色腐植土
Ⅱ．黄褐色土
Ⅲ．褐色粘土質土
0
0.5
1m
1：40

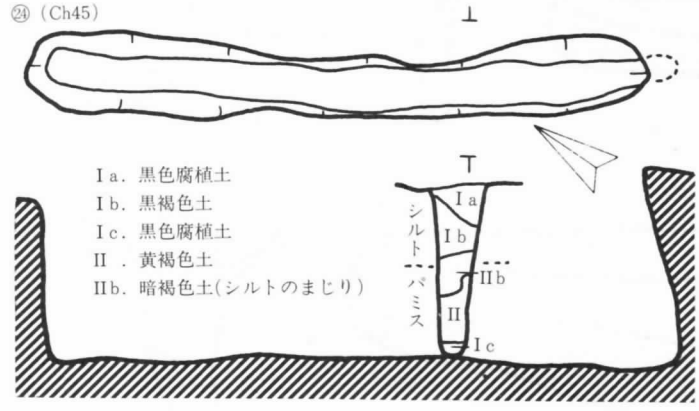
第11図　溝状土壙

Cf24註記
Ⅰb．黒褐色腐植土
Ⅱa．暗褐色土
Ⅲ．褐色粘土質土
Ⅳ．黒色土

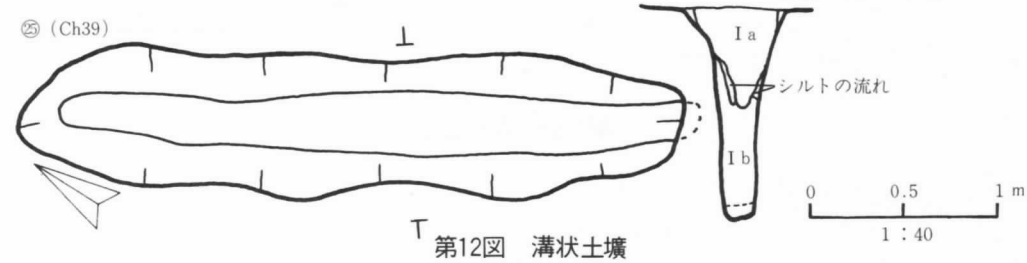




Cg27註記
Ⅱb．暗褐色土
Ⅲ．褐色粘土質土
Ⅳ．黒色土



Ch39註記
Ⅰa．黒色腐植土
Ⅰb．黒褐色土



第12図　溝状土壙

㉖（Ch36）

ほとんど汚れない

Ⅱc
Ⅳ
Ⅲ
Ⅳ′
Ⅳ
汚れがひどい
Ⅲ
Ⅳ
Ⅲ

Ch36註記
Ⅱc．暗褐色粘土質土
Ⅲ．褐色粘土質土
Ⅳ．黒色土
Ⅳ′．Ⅲ層が漸移

㉗（Ci203）

Ⅰa
Ⅱb

Ci203註記
Ⅰa．黒色腐植土
Ⅱb．暗褐色土

㉘（Ci36）

Ⅲ
Ⅳ
Ⅲ

Ci36註記
Ⅲ．褐色粘土質土
Ⅳ．黒色土

㉙（Cj221）

㉚（Cj36）

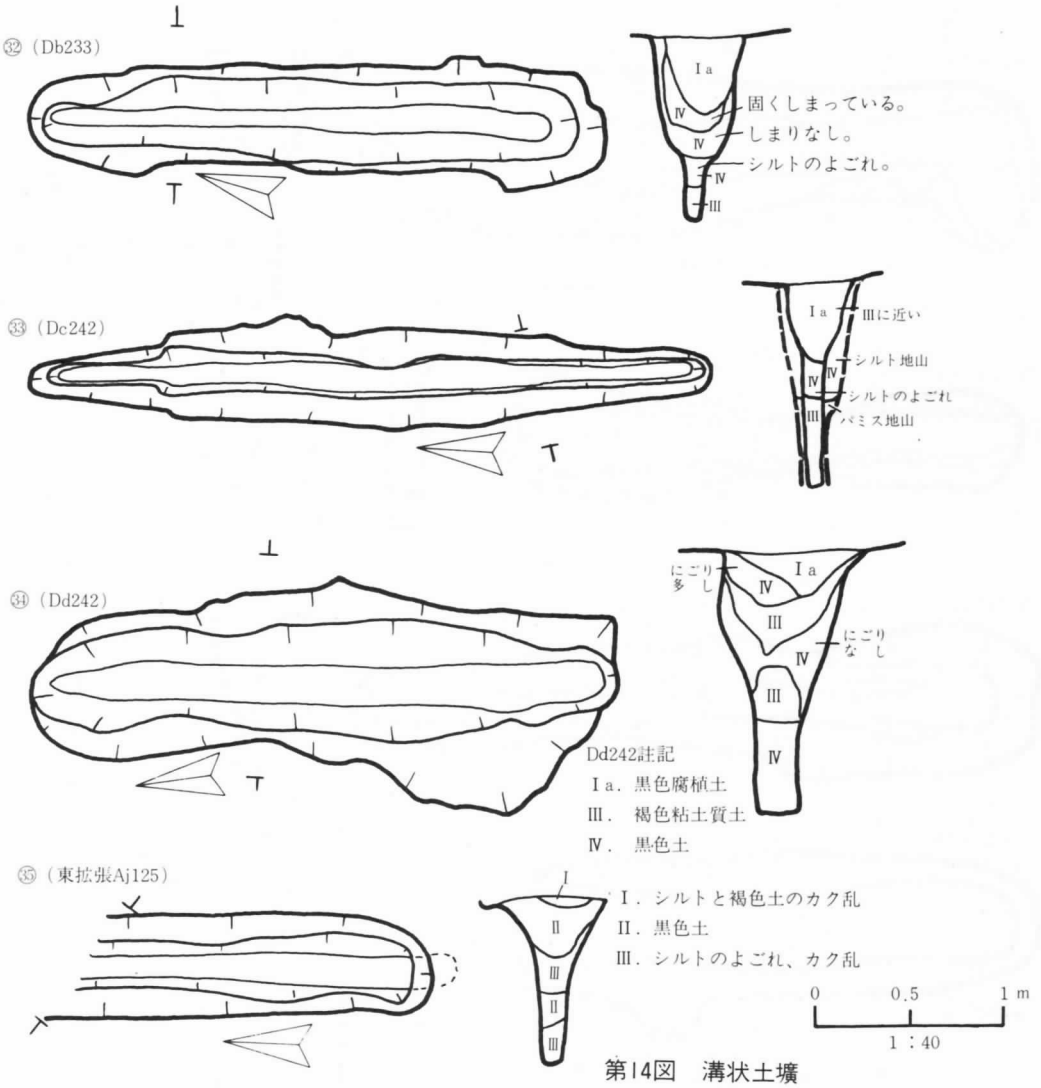
Db242註記
Ⅲ．褐色粘土質土
Ⅳ．黒色土

Ⅲ
Ⅳ にごり
Ⅵ～Ⅲカク乱

㉛（Db242）

0　0.5　1 m
1：40

第13図　溝状土壙



第14図　溝状土壙

（第2表）	2号Bd77	1号Bd51	4号Bf50	7号Bh71	13号Ca68	16号Ce50	21号Cf24	29号Cj221	32号Db233	33号Dc242	34号Dd242	35号Aj125	（Ce15）125	24号Ch45	25号Ch39	30号Cj36	31号Db242	8号Bb89
図番号	7－2	7－1	7－4	8－7	9－13	10－16	12－21	13－29	14－32	14－33	14－34	14－35		12－24	12－25	13－30	13－31	8－8
写真番号	13－	13－				4－1	5－1		6－1	6－2	6－4			5－4		5－8		
長軸長 m	2.86	2.50	3.70	2.86	3.14	3.00	5.65	2.78	2.85	3.65	3.10	(3.0)	5.11	3.50	3.50	2.50	1.50	3.00
短軸長 m	0.34	0.36	0.40	0.45	0.50	1.90	0.35	0.74	0.40	0.55	0.30	0.58	0.56	0.30	0.65	0.90	0.30	0.45
深さ	0.85	0.94	1.60	1.00	0.91	1.18	0.65		1.03	1.19	1.07	0.90	?	0.87	1.11	1.30	1.47	1.31
型式	A	同左	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	B	〃	〃	〃	〃	〃	C
方位	N23°W	N21°W	N8°W	N87°W	N40.5°W	N8°W	N10°W	N1°W	N28°W	N15°W	N11°E	N3°W	N1°E	N35°W	N34°W	N28°W	N17°W	N39°W
埋土	5層 自然	4層 自然	3層 自然	0層 自然	4層 自然	5層 自然	5層 自然	不明	5層 自然	3層 自然	6層 自然	5層 自然	不明	5層 自然	2層 自然	不明	3層 自然	5層 自然
関連遺構	1号Bc71住	1号Bc71住	なし	なし	なし	なし	1号Cd24溝	12号方形中央	なし	なし	なし	なし	5号方形西	9号方形北東	なし	なし	6号土壙西	なし
備考	切合い	同左			縦断図付		切合い						平行	切合い				縦断図付
	10号Bi89	9号Bi53	11号Bj77	14号Cc18	22号Cf06	27号Ci203	3号Be80	6号Bg77	12号Ca15	15号Cc06	19号Ce27	20号Ce24	23号Cg27	26号Ch36	28号Ci36	5号Bf53	17号Ce30	18号Ce27
図番号	9－10	8－9	9－11	10－14	12－22	13－27	7－3	8－6	9－12	10－15	11－19	11－20	12－23	13－26	13－28	7－5	11－17	11－18
写真番号	3－5	3－4	3－6	3－9	4－8		3－1	3－3	3－8		4－3	4－2	5－3	5－5	5－7	3－2	4－6	4－4
長軸長 m	4.50	3.85	3.90	4.00	4.40	2.75	2.70	2.70	2.60	2.90	2.10	3.60	2.90	3.60	3.60	2.45	3.50	2.30
短軸長 m	0.50	0.70	0.50	0.60	0.9	0.32	0.60	0.35	0.40	0.50	0.60	1.00	0.65	0.65	0.50	0.40	0.50	0.40
深さ	0.99	1.08	1.02	1.26	0.72	1.11	0.97	0.67	1.26	1.06	1.24	1.07	1.34	1.23	0.94	0.75	1.26	0.96
型式	C	同左	〃	〃	〃	〃	D	同左	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	E	同左	〃
方位	N26°W	N16°E	N51°W	N25°W	N69°W	N72°E	N48°W	N44°W	N31°W	N27°W	N28°W	N16°W	N28°W	N14°W	N11°W	N1°E	N38°W	N64°W
埋土	4層 自然	6層 自然	7層 自然	6層 自然	不明	2層 自然	4層 自然	4層 自然	不明	4層 自然	5層 自然	4層 自然	4層 自然	4層 自然	3層 自然	4層 自然	2層 自然	不明
関連遺構	なし	なし	なし	なし	2号方形東溝	8号方形北西	なし	なし	1号方形北西	なし	7号方形北溝	同左	7号方形中央	なし	なし	なし	8号方形北東	なし
備考	底に穿み			縦断面図	切合い	切合い	縦断図付			縦断図付	不明		27－2			縦断図付	切合い	27－1

（遺　　物）

〔**土器**〕図示破片資料５点（15図１～５、第3表、写真第１図）

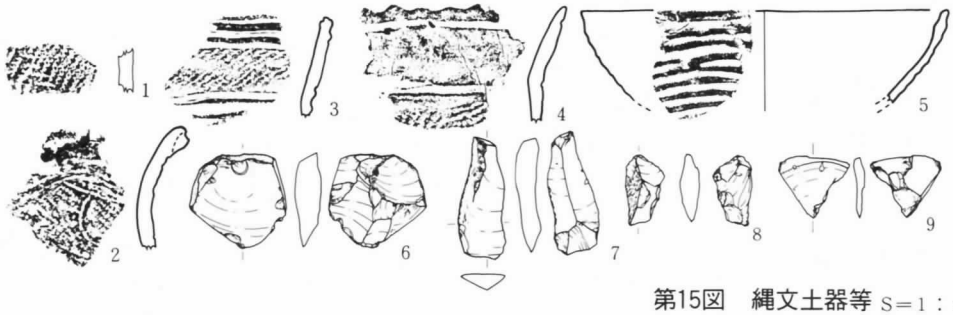
1)図示の１片のみで遺物中一番古い。　2)古代住居跡への流れ込みか重複関係かは明確でない。3)粗砂も含み磨きは粗末である。口縁帯状地文部は沈線にて区画され頸部下に沈線による文様帯が続くと思われる。　4)全体的に磨滅し地文も不鮮明であるが羽状施文である。胎土中の雲母も黒味を残している。　5)口唇内面を周る隆帯が付されその表面は丁寧に磨かれている。内面等の黒変は内容物の浸み付きか廃棄後のものか不明である。一部に酸化鉄様色調を示す物質が付着している。輪積痕が凸凹段の下部に認められる。　6)粗雑な作りの感がある。含まれる雲母は上記5)より大きく比較的量も多い。以上縄文土器片は早期1)、中期2)3)、晩期5)6)と年代が推定出来る。

〔**石器**〕（第15図６～７、第3′表、写真１図）

少量の出土で器種としても少い。　1)は支持面が自然面である。刃は最下端に付されその両端縁には使用による剝離が逆向きに生じている。　2)は一面に陵を残し不整形であるが２側縁には使用痕が認められる。先端部は対称形に調整が試みられている。上部側縁の抉りを行えば石匙の形態となる。　3)意図的な調整の認められない剝片である。巾の狭い端の使用痕は他端より幾分明確である。　4)使用痕は極少部分である。淡桃色を呈し古代住居跡より出土しているが3)と同様伴出との判定は出来ない。

（第３表）	図番号	写真番号	出土位置	器形	部位	色調	土性	調整等（内面）	調整・施文等（外面）	備考
縄文式土器	1	15－1	1－1	Ab68　II層	鉢形	頸部	橙色	石英目立つ	磨き	貝殻圧痕文（千鳥）	縄文早期から前期初頭
	2	－2	1－2	4号住　埋土	鉢形	口縁部	純橙色	小礫含む	横撫で	地文L-R、口縁貼付、口縁部沈線文	住居内南土壙中　縄文中期（大木８）
	3	－3	1－3	Cf09　I層	鉢形	〃	橙色	角内石含む	筬磨き（横）	口縁部（貼付沈線）、地文L-R、頸部沈線	外面に極消部、黒斑あり
	4	――	1－6	Ch30　埋土	不明	体部	純橙色	黒雲母含む	（磨耗）	地文L-R	炭質物付着（時期不明）
	5	－4	1－4	東拡土壙 埋土	鉢形	口縁部	純橙色	黒雲母含む	筬撫で	地文L-R、口縁小波形、帯状極消、沈線	外面炭質物付着、縄文晩期（大洞A′）
	6	－5	1－5	〃	浅鉢？	〃	淡黄橙色	雲母細片含む	筬磨き（横）・段	輪積痕を残す。磨き	黒変有る、縄文晩期（大洞A′）（口径19.5cm）

（第3′表）	図番号	写真番号	出土位置	長さ cm	巾 cm	厚さ cm	重さ g	材質	備考
1（不定形）	15－6	1－7	Ab68　II層	5.1	5.1	1.4	37.3	硅質泥岩	（化石含有）
2 掻器	－7	1－8	東拡張部北土壙	6.3	2.3	1.1	16.6	硬質泥岩	調整痕は極く少い
3 剝片	－8	1－9	第８号住（Df245）埋土	3.8	2.1	1.0	6.7	硬質泥岩	（両端に使用痕有）
4 剝片	－9	1－10	第８号住焼土土壙中	3.4	3.8	0.5	5.5	泥岩	（受熱、一端に使用痕有）



第15図　縄文土器等 S＝1：4

〔2〕古代の遺構と遺物

1．竪穴式住居跡

第1号住居跡（Bc71）（第16図、写真10～12図）

〔遺構〕〔**確認面**〕Ⅲ層上面にて行う。掘込面は耕作等による攪乱にて不明（以下同様）

〔**保存状況**〕残存部壁高15cm内外、それより上部は耕作等による攪乱を受く（以下同様）

〔**平面形・規模・カマド方位**〕隅丸方形を呈し、東西約5.8m、南北5.0mの広さである。N35°Wの方向にカマドは向く。

〔**堆積土**〕黒褐色土中に明褐色シルト質が粒状に入り、炭化物及び土器片も混入している。

〔**壁**〕部分的には深さ20cm程の残存部も有る。東側程残っている。

〔**床面**〕中心部が固められている。南東・南西隅にて溝状土壙を切っている。

〔**柱穴**〕P_1～P_5が柱穴と思われるが断定出来ない。P_1径30cm、深さ35cm、P_2径25cm、深さ35cm、炭化物土師片混入、P_4径55cm、深さ18cm、混入物P_2に同じ。これ等の埋土は黒褐色土である。

〔**カマド**〕北壁中央東寄りに壁を削り込み構築、燃焼部焼土は焼け締っている。北東部に焼土混在の落込み、南西部のものは土師器も出土する。第1号土壙（Bc71）を煙道等で切る。

〔出土遺物〕（須恵器坏7点、甕3点、土師器坏2点、甕12点、砥石2点）（第17図、第4表）

〔**須恵器**〕**：坏**（完形図上復元した物6点、破片1点）

回転篦切底が目につく。回転糸切底も篦による削りや撫で調整している。器面の凹凸目立つ。

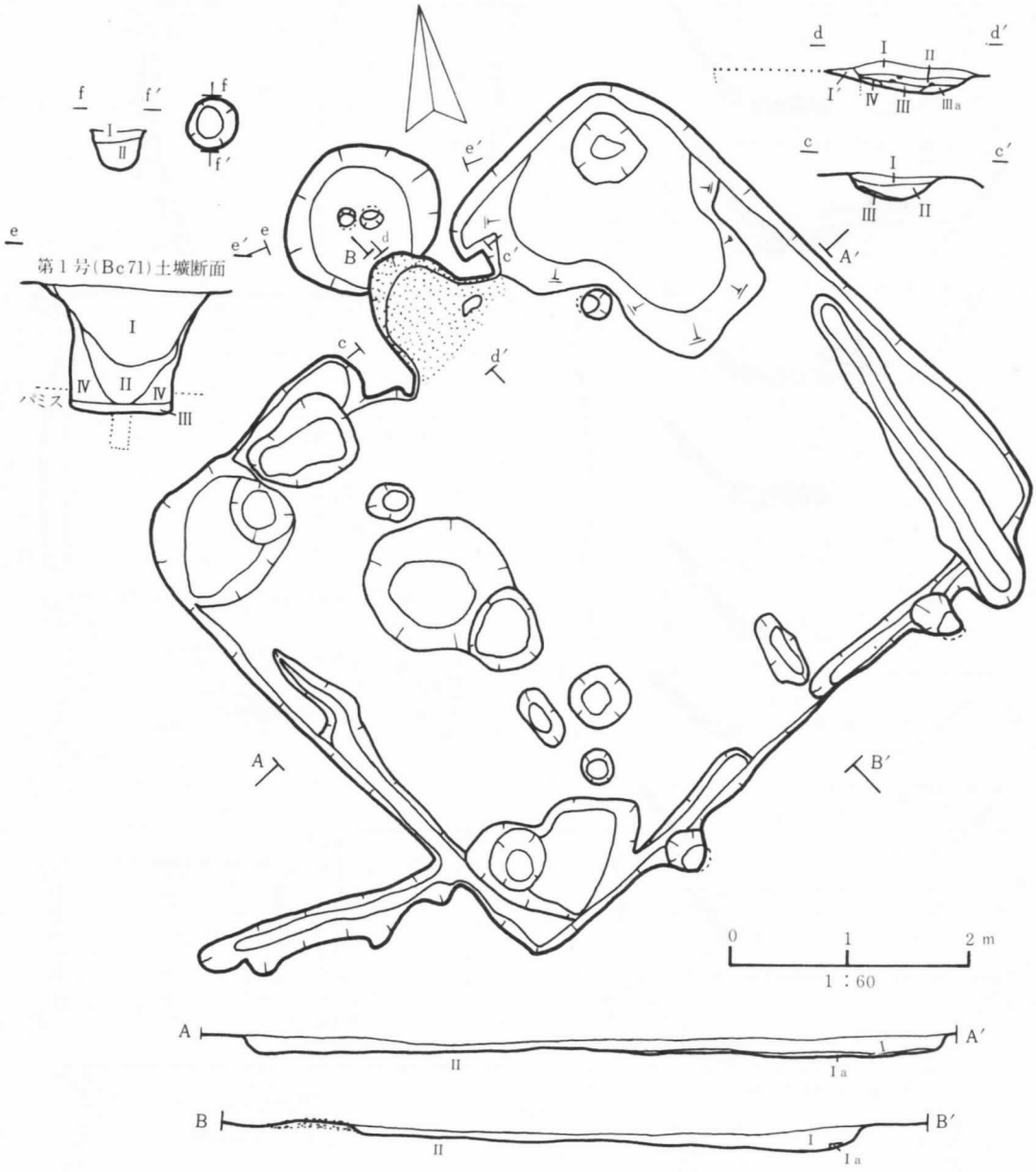
：壷（破片2点）（17図1、写真10図11～13）　1)には自然紬が垂れ、2)は表面に鈍い光沢を有する。破片断口部を砥石としているものは叩目を有する。

〔**土師器**〕**：坏**（17図9、写真10図6）回転篦削底と回転糸切底のそれぞれ1である。(1)の大き目の内黒処理したものは最後に横方向に磨いてある。

：甕（17図10～17、18図1～12、写真10～11図）大半が口縁部から胴部にかけてのものである。最大胴径については表中の底径の欄に(　)にて示したものもある。床面出土のものは、図示したうちの3点である。焼土及び小土壙中より出土したものは埋設過程での変化の為か焼成胎土等不良である。

：その他の出土遺物（17図18～19、18図13～14）（砥石2、刀子1、石玉1）

砥石（凝灰岩を使用したものと前述の須恵片を利用したものであるが、前者は比較的大きく使用面も2面である。その1面はまだ平滑でなく刻線様の傷も有る。またこれは北西の小土壙より出土している。）　刀子（喫先より刀身の部分である。銹により形態等不明確である。）

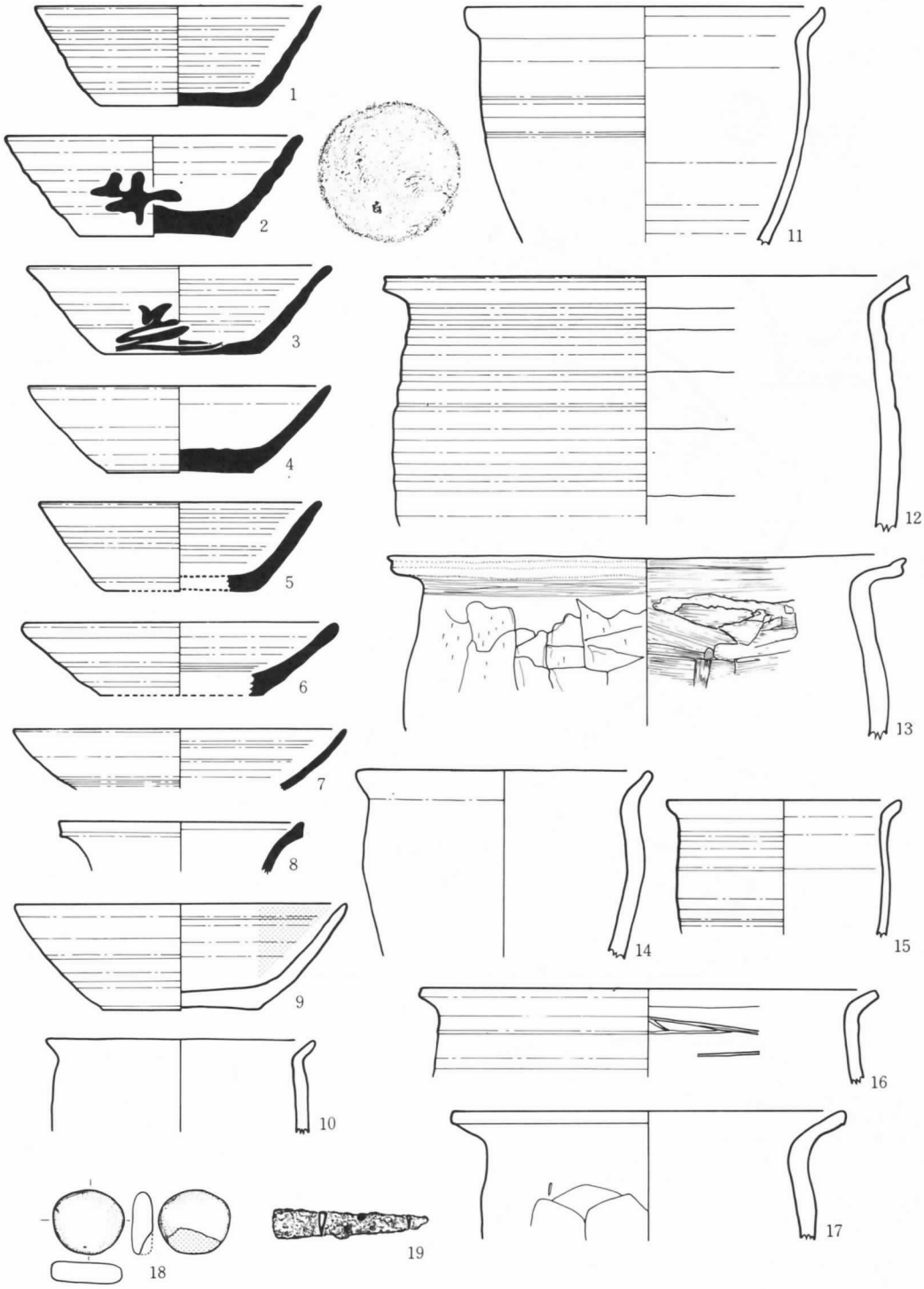


A Ⅰ. 黒色土 炭化物及び土師器片の混入がみられる。しまっているが特にQ4ではカマドの近くは固くなっている。
B
Ⅰa. 黒色土 固くしまっている。
Ⅱ. 明褐色土 固くかためられている。
f Ⅰ. 炭化物まじり(焼土も)黒褐色土粘りあり
Ⅱ. シルトまじり黒褐色土、ボサボサ(土師器片出土)

c Ⅰ. 黒色土に炭化物が混じる。
d Ⅰ'. 黒色土、Ⅰに比べてややわらかい。
Ⅱ. 焼土に褐色土が若干混じる。土師器が混在。
Ⅲ. 焼土に黄褐色土が混じる。固い。
Ⅲa. 焼土(赤)のみで固くしまっている。
Ⅳ. 明黄褐色土、非常に固くしまっている。

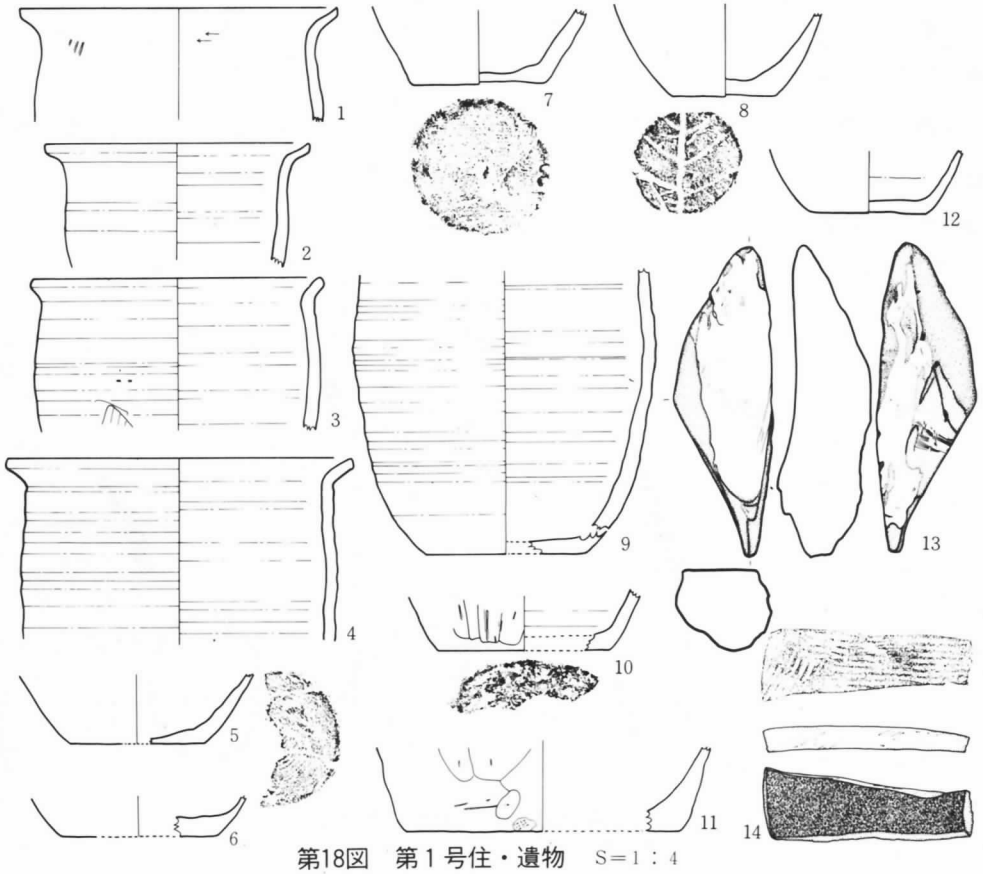
e Ⅰ. 黒色土 しまり、ねばりあり。粒子が細かく上部にはBc71住のカマド焼土の小ブロックが入る。上部ほどしまる。
Ⅱ. 暗褐色土 黒色土とシルトの撹乱でしまりはない、粘りあり、炭化物等はみられない。
Ⅲ. 暗褐色土 しまりありつき固めた様な感じがする。粒子が細かくねばりあり。炭化物等は見られない。
Ⅳ. 黄褐色土 シルトのにごり。
※柱穴の埋土はⅡ層である。パミスを掘り込んでいる。

第16図 第1号(Bc71)住居跡



第17図　第１号住・遺物　S＝1：3

(第4表)			図番号	写真番号	出土位置	法量 cm 口径	底径	器高	口縁部形態	底部形態	成形技法	底部切離技法	胎土含有物	調整 外面	内面	焼成 炎	良否	備考
第1号(Bc7)住居跡出土遺物	須恵器	坏	1	17-1	11-1	Q₁床面	13.0	8.0	4.5	直	凹	平底	ロクロ	回転糸切	砂粒		還元	普	No18埋土小土拓、粘土資料
			2	-2	11-2	Q₁埋土	13.1	6.5	4.5	直	凹	平底	ロクロ	回転糸切	小石	口縁底部撫で	口縁撫で	〃	不良	墨書(台帳にはQ₁床)
			3	-3	11-3	Q₁埋土	13.8	7.0	4.0	やや外反		平底	ロクロ	回転糸切	石英	下部撫で		〃	普	火襷、墨書
			4	-4	11-4	Q₁埋土	13.0	6.3	3.9	直	凹	平底	ロクロ	回転糸切	砂(小粒)	底部削り		〃	普	火襷、底内外凹凸
			5	-5	11-5	Q₁II層	12.8	6.4	4.0	直	凹	平底	ロクロ	回転糸切	微小砂			〃	普	(No4,10,28,Q₁)火穴
			6	-6	—	Q₁床面	14.2	7.2	3.2	直	凹	平底	ロクロ	回転糸切	微小砂			〃	不良	No2
			7	-7	—	Q₁床面	15.0			内彎		—	ロクロ	—	石英	—	—	〃	〃	No3火穴(No21)
		(蓋)	1	—	11-11	Q₁床面	—	(18.0)	—	—		—	ロクロ	—	砂粒多	—	—	〃	〃	(胴径)、No10、4片、自然釉
			2	—	—	Q₁床面	—	—	—	—		—	—	—	砂粒多	体部明目	刷毛目・当板	〃	普	Bd68IIに類似
			3	17-8	11-13	Q₁床面	11.0			複合		—	ロクロ	—	小礫含む	—	—	〃	普	薄手、朱彩
	土師器	坏	1	17-9	11-6	Q₁床面	15.0	6.0	4.7	直	凹	平底	ロクロ	回転糸切	砂微少	—	平色処理	酸化	普	
			2	—	—	Q₁床面	—	7.0	—	—		平底	ロクロ	(回転)撫削	石英	2方向撫で	—	〃	不良	Q₁小土壙、Q₁No2
		甕	1	17-10	11-7	Q₁床面	12.0	(11.6)	—	(短い)		—	ロクロ	—	角閃石	—	—	〃	〃	No4カマド、No7磨耗(胴径)
			2	-11	11-8	〃	16.0	(14.8)	—	内彎		—	ロクロ	—	細礫	—	—	〃	〃	No3全体的に磨耗
			3	-12	11-9	Q₁小穴	23.6	(22.8)	—	複合		—	ロクロ	—	角閃石	体下部・撫で	体下部・撫で	〃	〃	No2カマド
			4	17-13	12-1	Q₁焼土	23.4	(21.8)	—	複合		—	非ロクロ	—	雲母	口縁磨、体部刷目	口縁磨、体部撫で	酸化	不良	Q₁小土壙
			5	-14	12-2	焼土土壙	13.0	(12.7)	—	内彎		—	ロクロ	—	細礫	—	—	〃	〃	半分復元
			6	-15	12-4	Q₁焼土土壙	10.4	(9.6)	—	内彎気味		—	ロクロ	—	石英	—	—	〃	〃	No9・27
			7	-16	12-5	カマド	20.4	—	—	外反		—	ロクロ	—	細礫	—	体部刷毛目	〃	〃	No4
			8	-17	12-6	〃	17.6	(15.1)		外反		—	ロクロ	—	角閃石	体上部削り	—	〃	〃	No1
			9	18-1	12-10	カマド北側	17.0	(15.4)		内彎気味		—	非ロクロ	—	細礫	—	体部横方向刷毛目	〃	〃	磨耗
			10	-2	12-8	カマド	14.0	(12.0)	—	複式		—	ロクロ	—	細礫	—	—	〃	〃	輪積痕？炭素付着
			11	-3	12-9	Q₁埋土	15.2	(15.2)	—	(短い)		—	ロクロ	—	角セン石	—	—	〃	良	Q₁床？ Q₁埋土
			12	-4	12-11	Q₁埋土	18.4	(17.0)	—	—		—	ロクロ	—	細礫	—	—	〃	不良	6と類似
			13	-5	12-12	Q₁床面	—	7.2	—	—		平底	ロクロ	回転糸切	細礫	体下部・磨き	—	〃	〃	Q₁床面
			14	-6	12-13	Q₁床面	—	8.4	—	—		平底	—	磨耗	〃	体下部撫で	—	〃	〃	No2
			15	-7	12-15	カマド	—	7.0	—	—		平底	ロクロ	〃	角閃石	底部刷毛目様	—	〃	〃	No9
			16	-8	12-16	Q₁火穴	—	5.5	—	—		平底	ロクロ	—	石英	本葉底	—	〃	〃	No29
			17	-9	17-17	Q₁小土壙	(16.2)	8.4	—	—		平底	ロクロ	—	〃	底磨き	—	〃	〃	No25
			18	-10	13-1	Q₁小土壙	—	9.2	—	—		平底	—	—	細礫	削り	撫で	酸化	良	No5 撫切底
			19	-11	13-2	Q₂ II	—	14.6	—	—		〃	—	—	〃	削り	磨耗	〃	不良	刷目痕
			20	-12	13-3	Q₂ II	—	6.2	—	—		〃	ロクロ	—	〃	撫で	磨耗	〃	〃	カマドNo5



第18図　第1号住・遺物　S＝1：4

第２号住居跡（Be104）（第20図、写真14図）

〔遺構〕〔**保存状況**〕残存部壁高20㎝内外である。

〔**平面形・規模・カマド方位**〕隅丸の長方形を呈し長軸長５ｍ、短軸長4.3ｍの広さである。長軸・カマドはほぼ北向きである。

〔**堆積土**〕上位の暗褐色土は幾分締まり焼土ブロック炭化物等を少量含む。下位は黒褐色土であり、以上の２層に大別出来る。

〔**壁**〕西・南壁が多く残り、高さ約25㎝である。後世の溝によって北西部が切られている。

〔**床面**〕下部堆積土程締っていない。中央部に落込みがあり炭化物が極少量含まれる。北東部の落込み内部西側に焼土ブロックが多い。

〔**柱穴**〕床面上に検出出来ない。東壁外部に２つの柱穴様小土壙が認められる。この２小土壙の平面形は方形である。

〔**カマド**〕北壁中央寄りに新（西側）、旧（東側）の２つが検出された。古い方は壁面より更に地山を削り込み構築している。

〔遺物〕（須恵器坏１・甕１、土師器坏６・甕４）（第19図・写真14図・第５表）

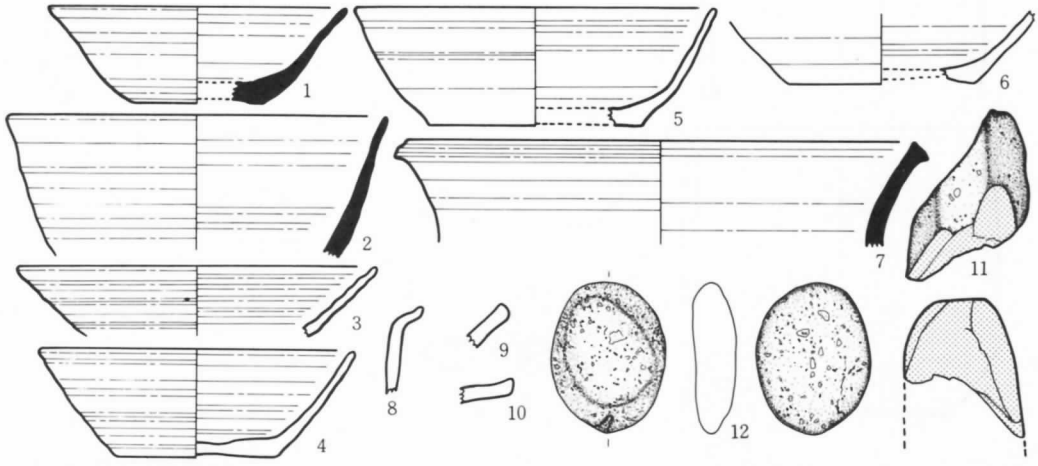
〔**須恵器**〕：**坏**　底部内面に沈線様の凹線が円形に周る。

：**甕**（同図７）直口気味の口縁を有するものと思われる。

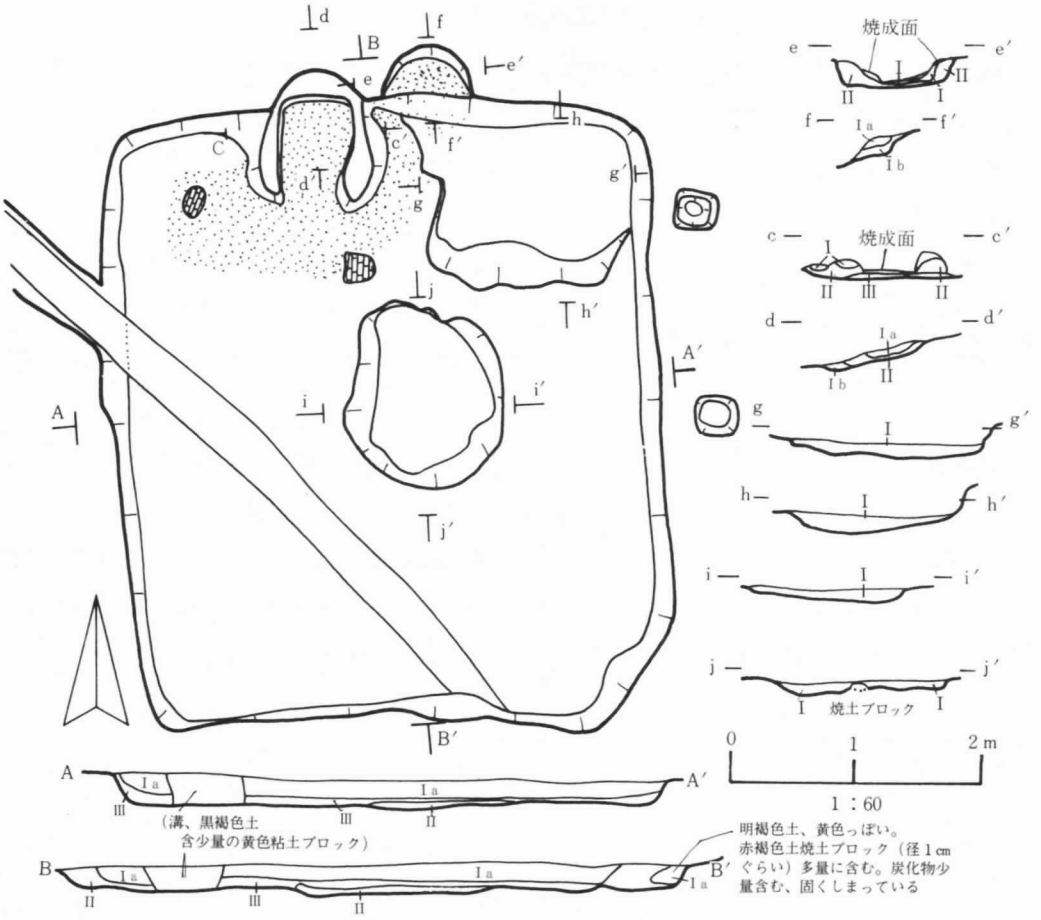
〔**土師器**〕：**坏**（19図３～６）内黒様のものが大半でロクロ仕様である。　2)は須恵質である。

：**甕**（19図８～10）ロクロ調整で大半が複合口縁である。

〔**石製品**〕：**砥石**（安山岩製欠損品）　：**磨石**（風化している。床面出土）



第19図　第２号住・遺物　S＝1：3



A　Ⅰa. 暗褐色土、ごく少量の焼土ブロック・炭化物、黄色粒土ロック、固くしまっている
B　Ⅱ. 層上面に1cm位の厚さで焼土の小ブロック混じる。炭化物はごく少量含まれる
　　Ⅲ. 黒褐色土、ごく少量の炭化物、赤褐色焼土ブロック、黄色粘土ブロック含む。Ⅰaよりはしまっていない
C　Ⅰ. 焼土が上にのり、明褐色を呈す。カマドの袖(つくり)
　　Ⅱ. 暗褐色土、焼土がわずかにまじり固くしまっているカマドの袖(つくり)
　　Ⅲ. 黄色土、シルト

d　Ⅰa. 赤褐色土、焼土、固くしまっている
e　Ⅰb. 赤褐色土、焼土、焼成面
　　Ⅰc. 赤褐色土、壁面の焼成面で、固くやかれている
　　Ⅱ. 褐色土、焼土ブロック、炭化物を含む
f　Ⅰ. 暗褐色土、炭化物・焼土が上にのる。特にしまってはいない
　　Ⅱ. 黄色土、シルト地山（地山を切って壁よりつき出した形でカマドをつくっている）

g, h　中央落込みより焼土のブロックが多く入る。西側により多い
i, j　褐色土とシルトの攪乱、シルトはブロック状に入る。しまり、粘りともにあり炭化物もごく少量

第20図　第2号(Be104)住居跡

(第5表)			図番号	写真番号	出土位置	法量 cm 口径	底径	器高	口縁部形態	底部形態	成形技法	底部切離技法	胎土含有物	調整 外面	内面	焼成 炎	良否	備考
第2号(Be104)住居跡出土遺物	須恵器	坏	1	19−1	14−1	埋土	12.0	5.0	3.9	外傾気味	揺底風	ロクロ	回転糸切	細礫	−	−	還元	不良	軟質（方形溝出土と接合）
			2	−2	14−2	床面	15.4			直口	−	ロクロ	−	細砂	−	−	〃	普	幾分光沢あり
		甕	1	19−7	14−3	焼土	21.4			複合	−	〃	−	細礫	−	−	〃	〃	自然釉少量、住居断面西部
	土師器	坏	1		14−4	カマド	10.0	7.2		外反気味	平底	〃	−	石英	−	−	酸化	〃	方形溝出土と接合
			2	19−3	14−5	床面	14.2			直口	−	〃	−	細砂	−	−	〃	〃	内面凹凸、軟質
			3	−4	14−6	埋土	12.6	6.6	4.3	外反気味	平底	〃	不明	角閃石	−	−	〃	〃	細礫も含む
			4	−5	14−7	カマド		4.8		−	〃	−	−	石英	−	−	〃	〃	内黒？2次受熱
			5	−5	14−7	埋土	14.4			直口	−	ロクロ	−	細〃	−	−	〃	〃	内面に凹凸
			6	−6	14−8	埋土		7.4		−	平底	ロクロ	−	細礫	−	−	〃	〃	内黒、磨耗
			7	——	14−9	焼土											〃	〃	
		甕	1	19−8	14−10	焼土	14.0			複合	−	ロクロ	−	細礫	体部叩目	−	酸化	普	薄手磨耗（断面西）
			2	−9	14−11	焼土	30.4			〃	−	ロクロ	−	細礫	−	−	〃	〃	厚手　（同上）
			3	−10	14−12	〃	29.0			〃	−	〃	−	〃	−	−	〃	〃	幾分薄手
			4	−	14−13	埋土		7.0		−	平底	〃	不明	角閃石	−	−	〃	〃	底部近く巻上げ痕

第３号住居跡（Ｂｆ56）（第21図、写真15図）

〔遺構〕〔**保存状況**〕残存部壁高15㎝内外。

〔**平面形・規模・カマド方位**〕隅丸方形一辺約５ｍである。カマドはＳ22°Ｅの方向を向く。

〔**堆積土**〕暗褐色土と黄褐色土であり自然流入と思われる。

〔**壁**〕西壁の残存高は５㎝である。崩壊により床と壁面は直角でない。

〔**床面**〕中央部程固く締っている。炭化材（年代測定資料）がある。４柱穴が考えられる。

〔**カマド**〕南壁南東隅にあり、袖部には構築に使用したと思われる石が散乱している。

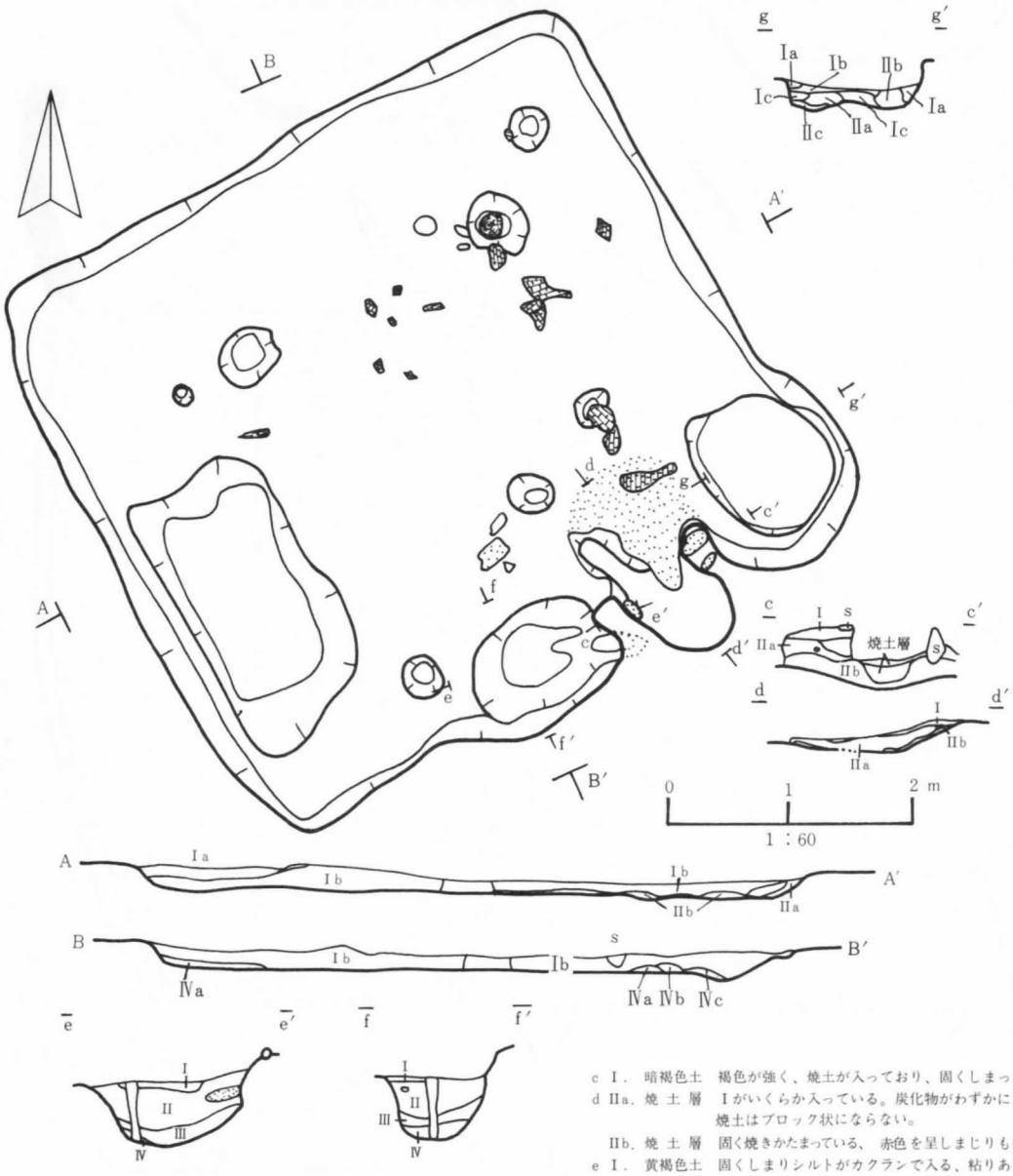
〔**貯蔵穴**〕カマド西側のものは50㎝程の深さで焼土炭化物粒を埋土中に含む。東側のもの浅い。

〔遺物〕（須恵器坏５・甕１、土師器坏６・甕12）

〔**須恵器**〕：**坏**（第22図１～３、写真15図１～３）　1)は歪みを持ち小振りである。　2)は重ね焼の跡がある。　ロクロ仕様で直口が多い。　：**甕**（22図16、写真15図４）自然釉あり。

〔**土師器**〕：**坏**（第22図１、写真15図６～10）　1)は器壁が半ばで立ち上がる。　ロクロ仕様回転糸切無調底のものが大半である。　：**甕**（22図５～15、写真16図１～12）ロクロ調整が大半である。　1)は叩目を有する。　1)2)9)はＢｆ27溝遺物と接合している。

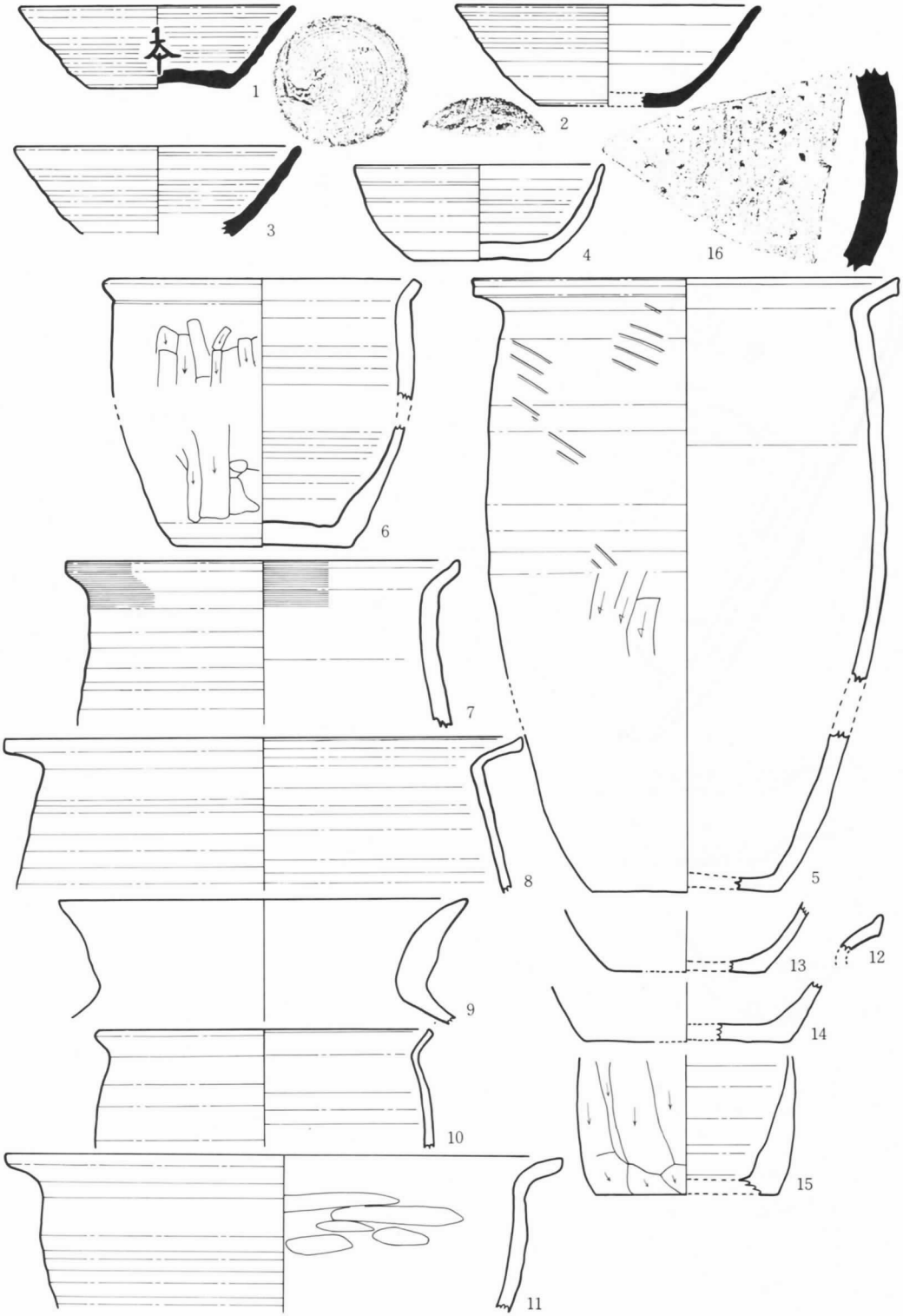
（第６表）			図番号	写真番号	出土位置	法量cm 口径	底径	器高	口縁部形態	底部形態	成形技法	底部切離技法	胎土含有物	調整 外面	内面	焼成 炎	良否	備考
第３号（Ｂｆ56）住居跡出土遺物	須恵器	坏	1	22－1	15－1	床面	12.7	6.2	3.8	直口	平底	ロクロ	回転糸切	細礫	－	－	還元	普	浅い、本の墨書
			2	－2	15－2	小土壙	14.0	6.6	4.7	〃	〃	〃	荒切	石英	－	－	〃〃	〃	火舞、カマド西
			3	－3	15－3	床面	13.2			〃	－	〃	－	細砂	－	－	〃	〃	成型痕・火舞
			4	──		床面	14.0			〃	－	〃	－	〃	－	－	〃	〃	爆様付着物
			5	──		〃	14.8			外反気味	－	〃	－	石英	－	－	〃	〃	下部内彎
			6	──		小土壙	9.8			直口	－	〃	－	砂粒	－	－	〃	〃	内外成型痕、カマド西
	土師器	坏	1	22－4	15－6	床面	11.5	6.2	4.4	〃	平底	〃	回転糸切	石英粒	－	－	酸化	〃	磨耗、口縁暗色部残
			2	──	15－7	〃	14.2	7.8		〃	平底	〃	不明	〃	－	－	〃	〃	
			3	──	15－8	小土壙	14.6			〃	－	〃	－	浮石	－	－	〃	〃	全体磨耗
			4	──	15－9	埋土 Q_3		7.0		－	平底	－	－	細礫	－	－	〃	〃	赤味強い色調
			5	──	16－13	〃		7.0		－	〃	ロクロ	回転糸切	石英	－	－	〃	〃	Ｂｆ27北溝出土と接合
			6	──	15－10	〃		5.4		－	〃	〃	〃	雲母	－	－	〃	〃	褐色
		甕	1	22－5	16－1	床面	19.6	8.3		複合	〃	〃	荒切	石英	叩目、荒刷り	－	〃	普	Ｂｆ27溝出土と接合
			2	－6	16－2	小土壙	14.6	8.2	(12.4)	複合気味	〃	〃	－	細礫	荒削り	指撫で付	〃	〃	カマド・西焼土溜部流線、同上
			3	－7	16－3	〃	18.1			内彎気味	－	〃	－	石英	－	－	〃	〃	
			4	－8	16－4	床面東	23.8			複合	－	〃	－	角閃石	－	－	〃	〃	Q_3に類似物
			5	－9	16－5	小土壙	18.8			外反	－	非ロクロ	－	細礫	－	刷毛目	〃	〃	反り大きい（カマド西）
			6	－10	16－6	〃	15.6			複合	－	ロクロ	－	角閃石	－	－	〃	〃	薄手（カマド西）
			7	－11	16－7	〃	12.8			外反	－	〃	－	砂粒	－	磨き	〃	〃	内黒、朱様部あり、(1)編同
			8	－	16－8	〃	9.6			〃	－	－	－	石英	不明	不明	〃	〃	磨耗、小型（カマド西）
			9	－12	16－9	カマド	27			複合	－	ロクロ	－	角閃石	－	－	〃	〃	焼土中、(1)編同
			10	－13	16－10	床面		7.2		－	平底	－	－	細礫	－	－	〃	〃	磨耗
			11	－14	16－11	〃		9.6		－	〃	非ロクロ	－	〃	－	－	〃	〃	粗雑な削り
			12	－15	16－12	小土壙		8.2		－	〃	－	－	〃	荒削り	指撫で付	〃	〃	



A Ia. 暗褐色土　粒子は細かいがIbよりやや黒ずむ。
B Ib. 暗褐色土　粒子は細かくしまりややあり、指痕がかすかにつくシルト粒がわずかに入る。
IIa. 黒褐色土　腐植土が大部分でやわらかく、まじりもの少ない。
IIb. 黄褐色土　シルトとのカクラン、しまりねばりあり、シルトはブロック状に入っている。
III、明黄褐色土　シルトと腐植土とのカクラン。
IVa. 暗褐色土、シルト粒の混入なし。
IVb. 褐色土　シルト混入
IVc. 暗褐色土　Ibと同成分だが、ややシルトがブロック状になっている。

c I. 暗褐色土　褐色が強く、焼土が入っており、固くしまっている。
d IIa. 焼土層　Iがいくらか入っている。炭化物がわずかに入る。焼土はブロック状にならない。
IIb. 焼土層　固く焼きかたまっている、赤色を呈しまじりものなし。
e I. 黄褐色土　固くしまりシルトがカクランで入る、粘りあり。
f II. 暗褐色土　粘りあり、焼土粒・炭化物がまじる、しまりあり、団子状。
III. 黄色土　シルトの流れ。
IV. 黒褐色土　しまりなく粘りあり、炭化物を含む。
g Ia. 褐色土　しまり・粘りあり、ヒモ状、シルトブロック少量入る。（カマド袖が流れ込んだもの）
Ib. 赤褐色土　Iaに焼土粒が混入したもの。
Ic. 赤褐色土　Ia・Ibのカクラン。
IIa. 暗褐色土　粒子は細かくシルトブロックが入る、しまり・粘りあり、焼土粒のまじりは少ない。
IIb. 黒褐色土　しまりなくパサパサした感じ、下部に焼土粒が少し入る。
IIc. 黄褐色土　シルトのよごれたもの。

第21図　第3号（Bf56）住居跡



第22図　第３号住・遺物　S＝1：3

第4号住居跡（Bg98）（第23図、写真14図）

〔遺構〕〔**保存状況・壁**〕残存壁高13cm内外。南西及び南東部は明確な区画を示さない。

〔**平面形・規模・カマド方位**〕隅丸方形に近く一辺約4.0m、カマドは東向きである。

〔**堆積土**〕黒褐色土、暗褐色土・ブロック状黄褐色シルト質土（地山）が散在している。

〔**床面**〕ほぼ平坦であるが中央及び南西隅を除く部分に性格不明の落ち込みが見られる。

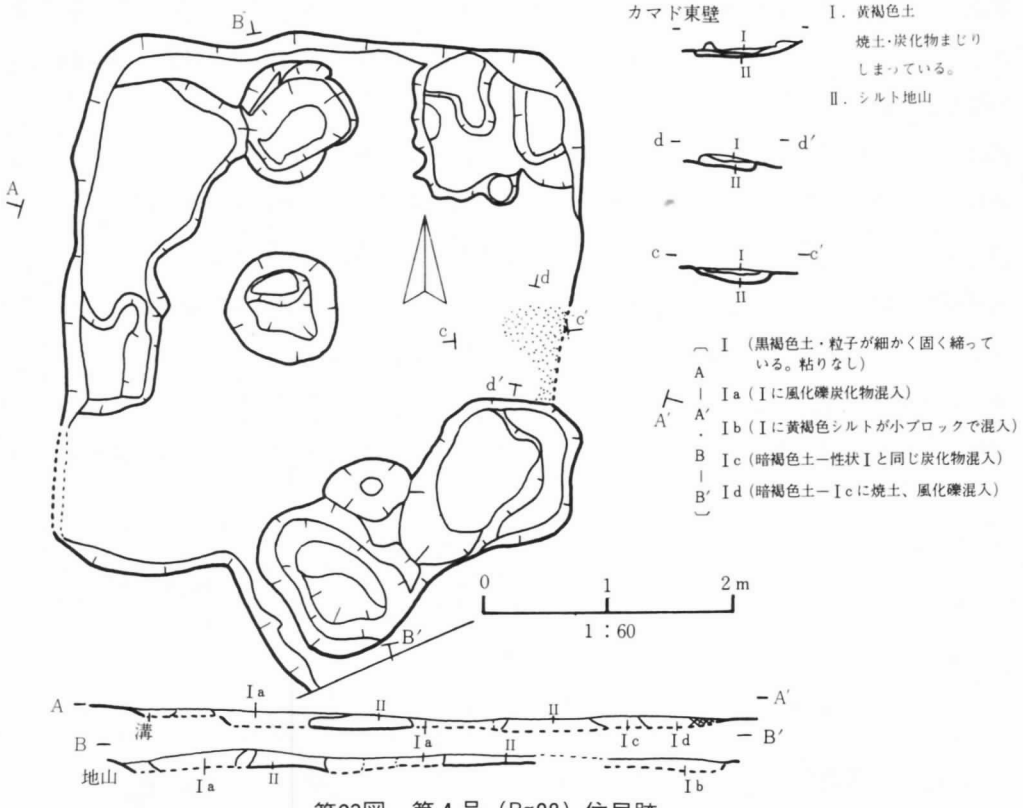
〔**カマド**〕東壁南隅近くに焼土の広がりが認められる。他の付属施設はない。

〔遺物〕（須恵器、土師器坏3点・甕3点）（第24図、写真14図、第7表）出土総数は少い。

〔**須恵器**〕：**壺片**　焼成及び胎土不良のもので軟質である。

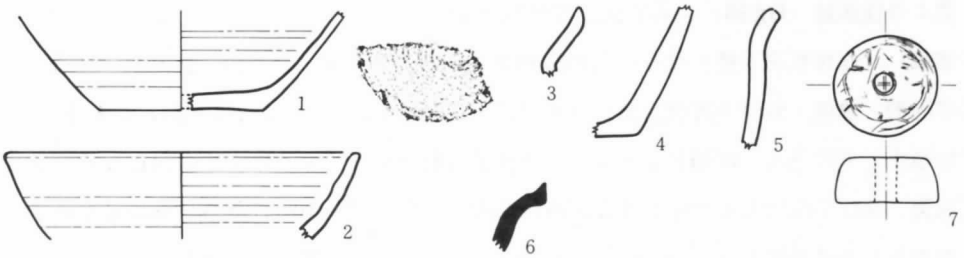
〔**土師器**〕：**坏**　ロクロ仕様で、磨滅している。　：**甕**　破片で、落込み部より出土した。

〔**石製品**〕紡錘車（表面に少々傷がある。中央穴の1部に打欠き痕がある。滑石製。）



第23図　第4号（Bg98）住居跡

（第7表）				図番号	写真番号	出土位置	法量 cm 口径	底径	器高	口縁部形態	底部形態	成形技法	底部切離技法	胎土含有物	調整 外面	内面	焼成		備考
第4号（Bg98）住居跡遺物	須恵器			24－6	14－19	埋土	20.2			複合	－	ロクロ	－	砂	－	－	還元	不良	軟質
	土師器	坏	1	24－1	14－15	南小土壙	13.0	6.4	4.0	直口	平底	ロ×クロ	回転糸切	細礫	－	－	酸化	普	口縁かすかに残る
			2	——	14－20	〃	10.4			外反	－	〃	－	〃	－	－	〃	〃	小型（1片のみ）
			3	24－2	14－14	埋土	14.2			直口	－	〃	－	石英	－	－	〃	〃	方形溝遺物と接合
		甕	1	24－3	14－16	南小土壙	15.2			複合	－	〃	－	角閃石	体部叩目	－	〃	〃	
			2	－4	14－17	小土壙		8.6		－	平底	非ロクロ	不明	角閃石等	－	－	〃	〃	
			3	－5	14－18	埋土	14.0			外反	－	〃	－	細砂	横方向磨滅	横撫で刷毛目	〃	不良	口縁欠く



第24図　第４号住遺物　S＝1：3

第５号住居跡（Bh06）（第26図、写真17図）

〔遺構〕〔**保存状況・壁**〕残存部壁高18㎝内外。崩落のため壁立たず皿状である。

〔**平面形・規模・カマド・方位**〕隅丸方形2.4×2.6m、短軸方向のカマドはN65°Eと偏し東壁南東隅近くに河原石にて袖・天井を構築している。焚口・煙出底は水平な煙道より一段低い。

〔**堆積土**〕暗褐色土・黄褐色土・黒褐色土の自然流入である。

〔**床面**〕北側に傾斜し、南西方向及び北東方向の落込みがある。

〔遺物〕（須恵器坏１点、土師器坏１点・小壷１点）（第25図、写真17図、第８表）

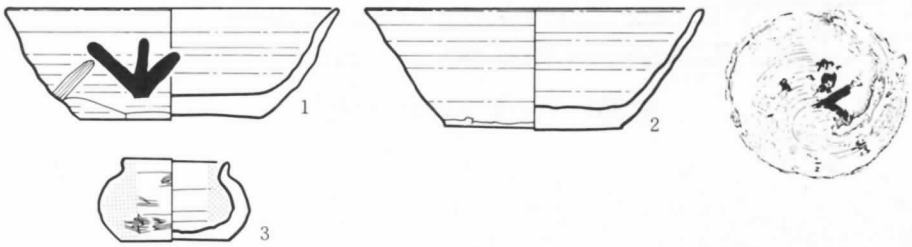
〔**須恵器**〕：**坏**　胎土・焼成不良で、底部の墨書も判読出来ぬ程に磨耗している。

〔**土師器**〕：**坏**　内面にロクロ撫で痕が残存している。褐色外面及び黒変のため墨書は判読出来ない。　：**小壷**　内外黒色処理で所々に篦磨きの跡が見られる。

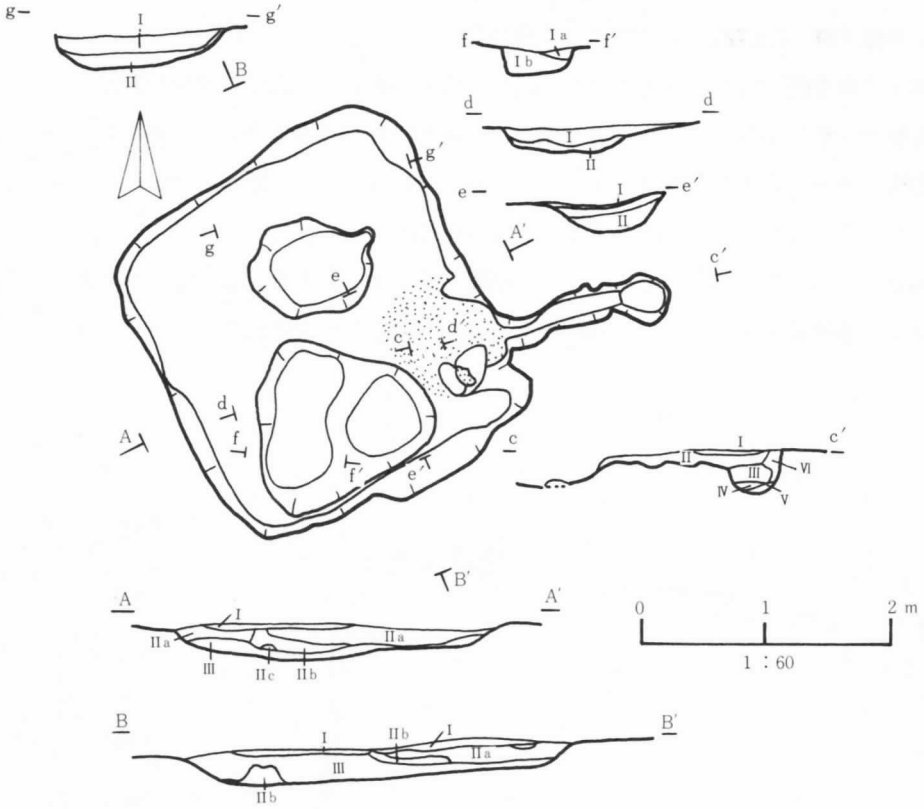
第６号住居跡（Cg42）（第26図）

〔遺構〕〔**保存状況・壁**〕南半部検出掘上げのみで詳細不明。残存壁高５㎝内外である。

（第８表）			図番号	写真番号	出土位置	法量 cm 口径	底径	器高	口縁部形態	底部形態	成形技法	底部切離技法	胎土含有物	調整 外面	内面	焼成 炎	良否	備考
第５号住居跡 Bh06	須恵器	坏	25－2	17－1	床面	13.6	7.0	4.9	直口	平底	ロクロ	回転糸切	細礫	－	－	還元	不良	底墨書赤焼き
	土師器	坏	25－1	17－2	埋土	13.3	7.1	4.5	〃	〃	〃	〃	石英	－	磨き	酸化	普	体底部墨書判読出来ず、内黒
		小壷	25－3	18－3	床面	4.3	4.3	3.3	外反	〃	〃	回転糸切	角閃石	磨き削り	磨き	〃	〃	両黒、胴径6.1cm



第25図　第５号住・遺物　S＝1：3

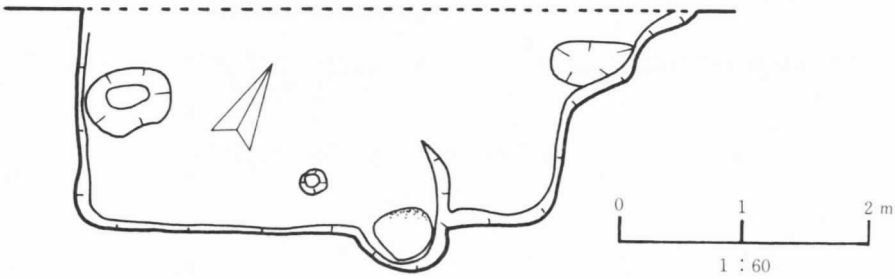


A I．　暗褐色土　やや明るみをもちシルト粒が多く入っておりしまりはあるが粘りなし。
B
IIa．　暗褐色土　やや暗くなる。
IIb．　黄褐色土　シルトがブロック状に入る。
IIc．　暗褐色土　しまりなくIIa層と同じ質である。
III．　黒褐色土　しまりなく柔らかい、シルト粒が少くなる。

c d e I．黒褐色土　焼土ブロックなし。
c d e II．黒褐色土　焼土ブロックまじり。
III．黒褐色土　腐植土、焼土ブロックなし。
IV．黒褐色土　焼土ブロック層。
V．黒褐色土　焼土と炭化層。
VI．黒褐色土

f Ia．　焼土とシルトが混じり、やや粘りしまりあり。
Ib．　焼土、パサパサしている。（赤褐色土）
g I．　黒褐色土　シルトとのカクラン、最上部は固くしまっている、粘りあり（団子）しまりゆるやか、シルトはブロック状に入っている。上部には焼土粒がまじる、上部が生活面と思われる。
II．　黄褐色土　シルトの流れ込みと思われ、黒く汚れている、カマドに近くなると特にそうである。（遺物の出土は皆無、底部に焼土粒さえない）

第５号（Bh06）住居跡



第26図　第６号（Cg42）住居跡

第７号住居跡（Ｄａ224）（第27図、写真18図）

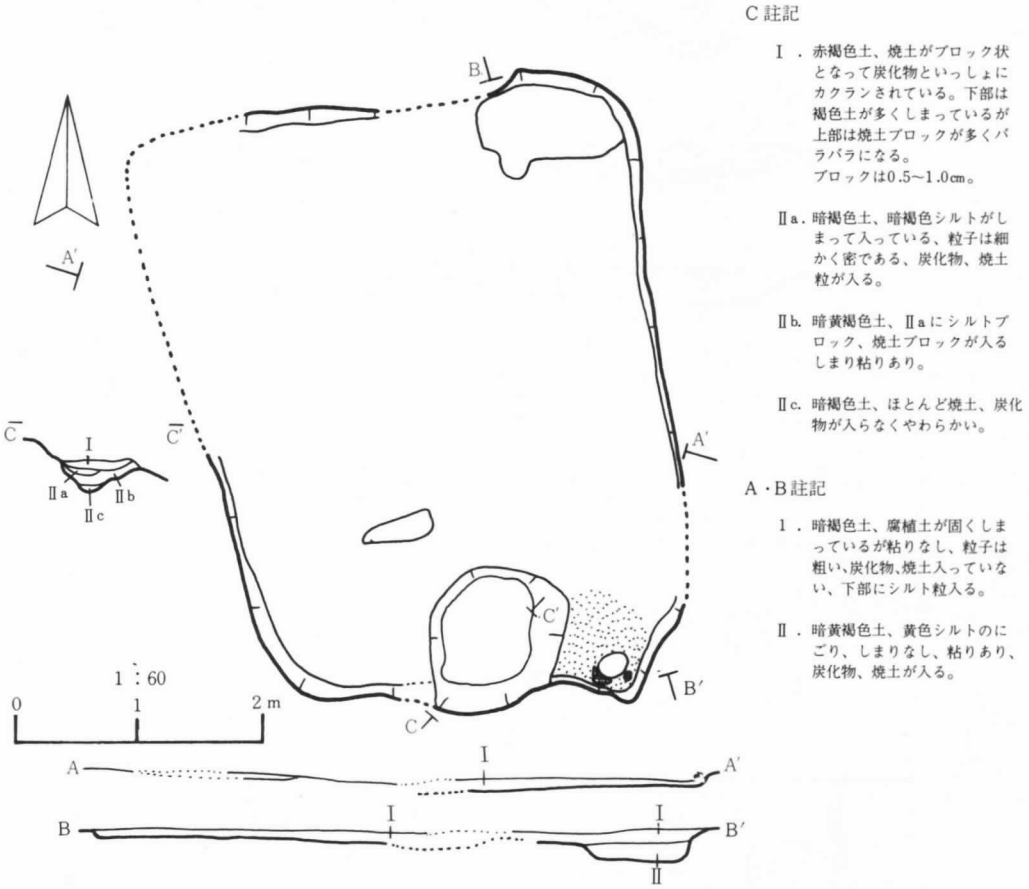
〔遺構〕〔**確認面**〕同前。掘込面は方形状溝の構築に関する攪乱にて不明である。

〔**保存状況・壁**〕残存壁高17㎝内外。南東より北西隅にかけ方形溝により切られている。

〔**平面形・規模・カマド・方位**〕隅丸の長方形で3.4×4.4m。長軸方向南東の隅に袖石らしきものと焼土が見られるのでこの方位とすればＳ12°Ｅを示す。

〔**堆積土**〕暗褐色土一層のみである。　〔**床面**〕ほぼ水平である。南壁際に小土壙がある。

〔遺物〕〔**須恵器**〕**坏**　第８号住居跡埋土口縁片と接合した床面出土のものである。



第27図　第７号（Da224）住居跡

第８号住居跡（Ｄｆ245）（第29図、写真18図）

〔遺構〕〔**保存状況・壁**〕残存壁高15㎝内外。ほぼ水平に残るが、壁は崩落している。

〔**平面形・規模・カマド・方位**〕隅丸方形一辺3.6mの広さ。両袖に土を用いたと思われるカマドの煙道が第５号住居跡の形状に似たものならば、焚口・煙出の関係も同様になろう。北向きの焚口附近には遺物が集中している。

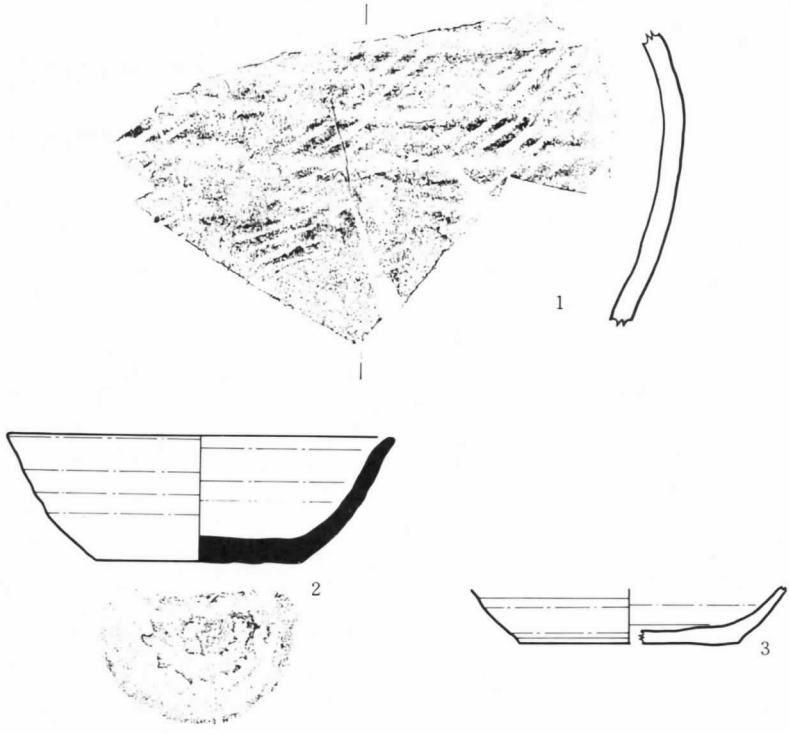
〔**堆積土**〕暗褐色土、黒褐色土であり自然流入である。

〔**床面**〕南側中央・カマド袖東側に小土壙がある。北東隅に落込みが見られる。

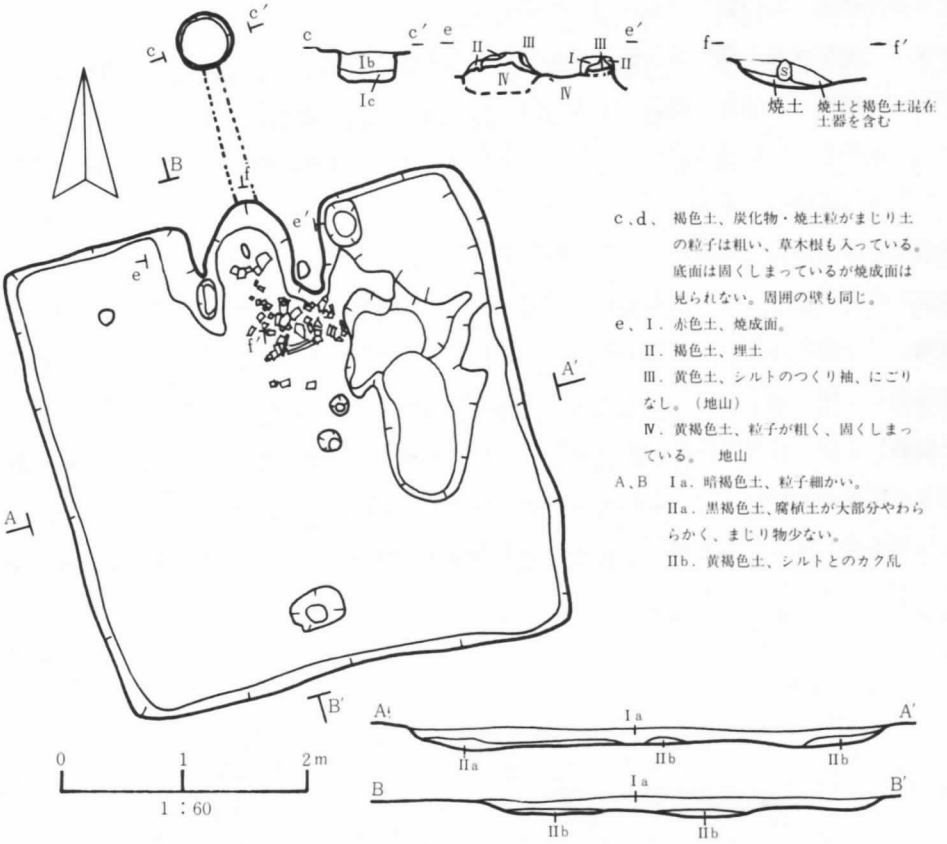
〔遺物〕（須恵器坏１点、土師器坏３点・甕13点）（第28・30・31図・写真18～20図・第９表）

〔**須恵器**〕：**坏**　第７号住居跡床面出土底部と接合した埋土口縁片である。

〔**土師器**〕：**坏**　ロクロ仕様で磨耗している。　：**甕**　非ロクロとロクロ調整と半々である。篦削りと篦撫の調整技法が大半のものに見られるが、２点程体部に叩目痕を有する物もある。胎土は細礫等も含まれるが良好である。焼成状態は普通である。カマド附近に10点程集中して出土した。



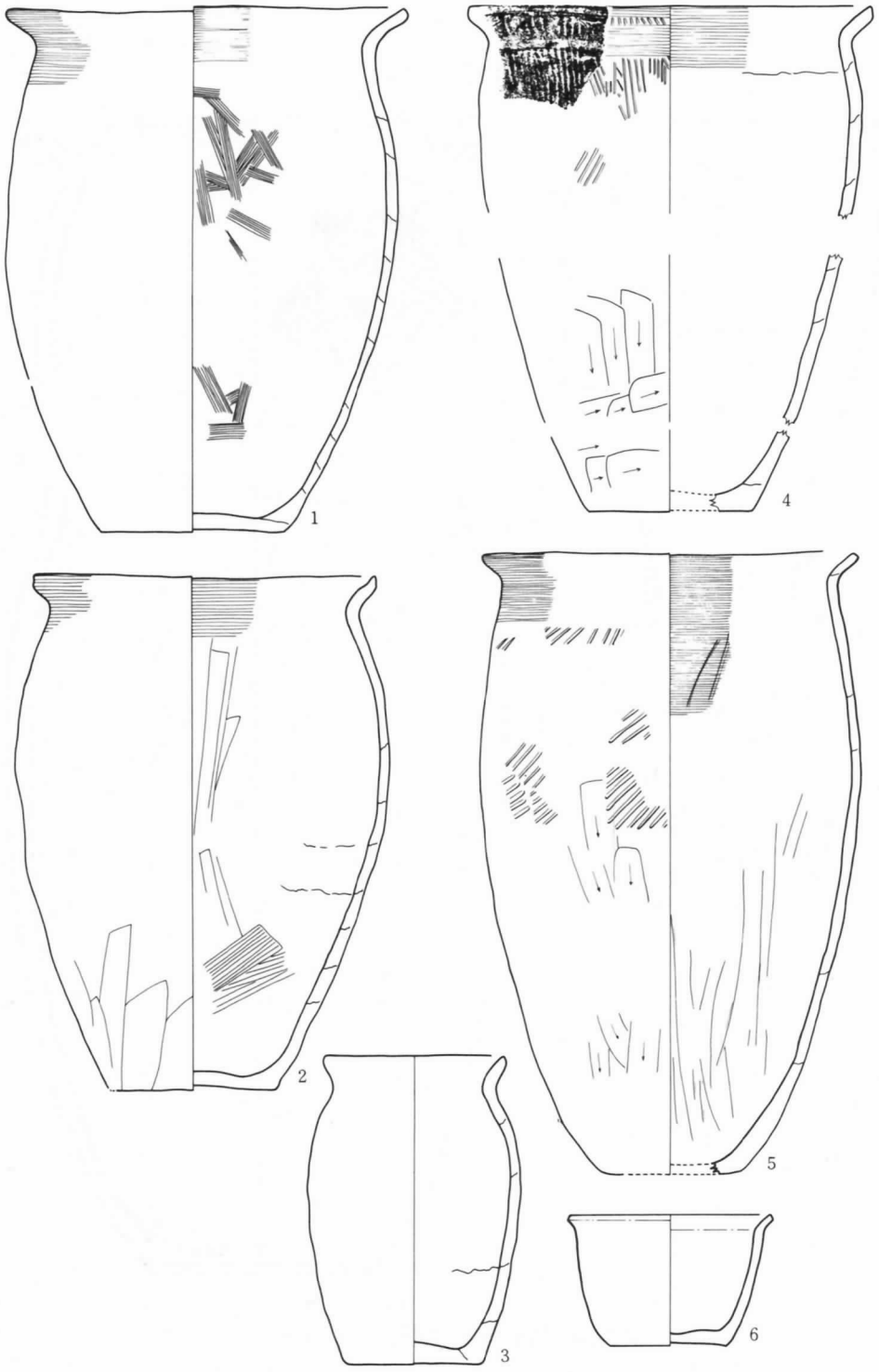
第28図　第８号住・遺物　S＝1：3



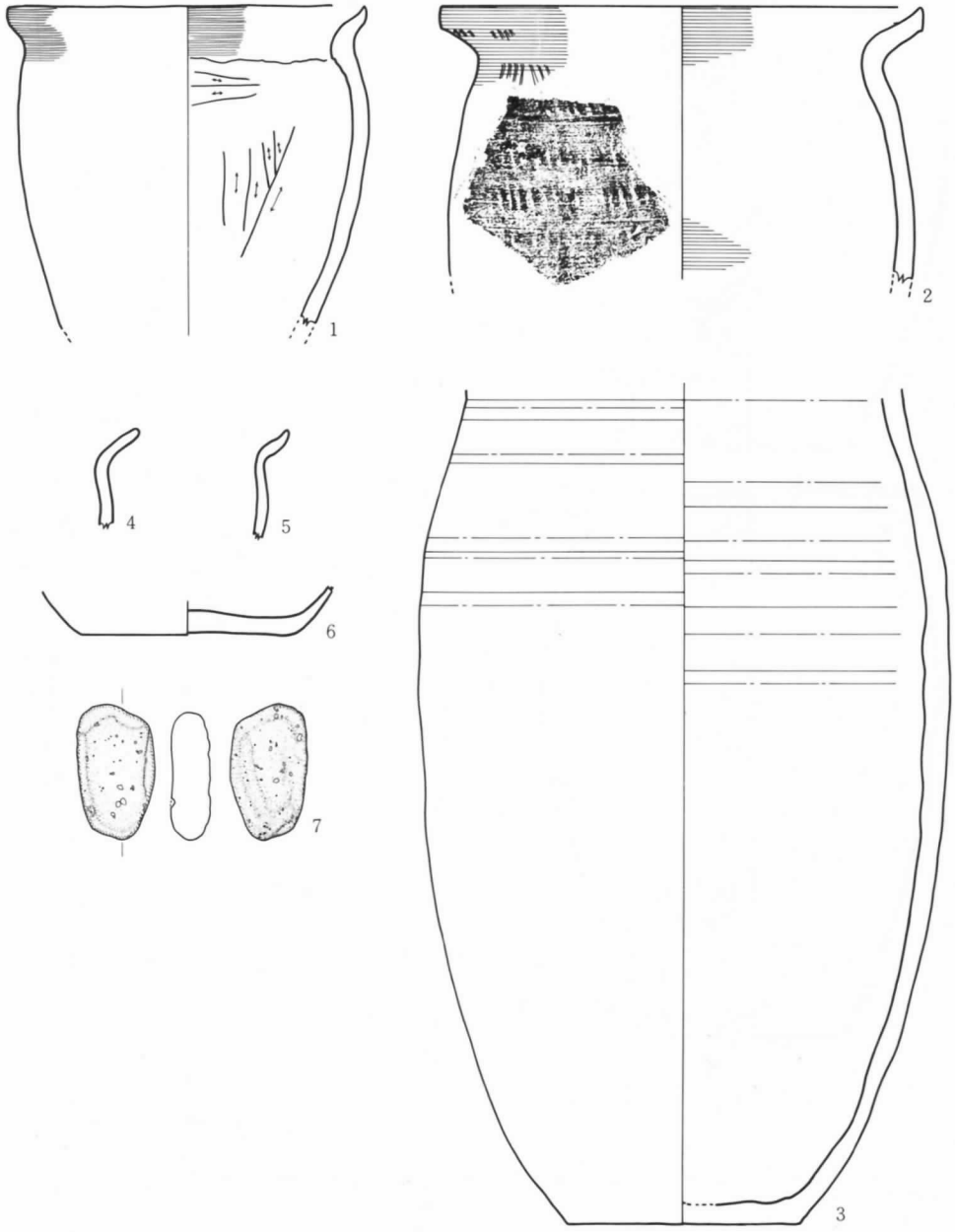
第29図　第８号（Df245）住居跡

（第９表）

		図番号	写真番号	出土位置	法量 cm 口径	底径	器高	口縁部形態	底部形態	成形技法	底部切離技法	胎土含有物	調整 外面	内面	焼成 炎	良否	備考
第8号（Df245）住居跡出土遺物	土師器 坏	1	28－3	20－9	床面		8.8		－	平底	ロクロ	不明	細礫	－	－	酸化	並	2次受熱
		2	──	18－1	焼土小土壙	11.4			直口	－	〃	－	浮石	－	－	〃	〃	須恵的
		3	──		小土壙	－	－	－	－	－	〃	－	石英	－	－	〃	〃	磨耗片
	土師器 甕	1	30－1	19－1	カマド	23.1	10.6	30.0	外反	平底	非ロクロ	荒切り	細礫	削り撫で磨き	撫で刷毛目	〃	〃	胴径22.5、頸径19.4
		2	－2	19－2	カマド	19.7	9.5	29.6	複合	〃	〃	〃	石英	削り撫で	〃	〃	〃	胴径21.5、頸径18.1、黒変、木葉
		3	－3	19－3	〃	10.5	7.4	17.8	複合気味	〃	〃	不明	石英	不明	不明	〃	〃	胴径12、頸径9、黒斑、磨耗
		4	－4	20－1	〃	23.4	9.4	29.0	外反	〃	ロクロ	不明	〃	削り撫で	撫で刷毛目	〃	〃	胴径22、頸径21、焼土々壙中
		5	－5	19－4	Q_1 埋土	21.6	7.8	35.7	〃	〃	非ロクロ	〃	細礫	叩目荒削り	荒磨き	〃	〃	全体橙色、磨耗
		6	－6	20－2	カマド	11.8	6.6	7.5	複合	〃	ロクロ	回転糸切	石英	－	－	〃	〃	浅い小型
		7	31－1	20－3	〃	14.6	(14.2)		内彎	〃	非ロクロ	不明	細礫	撫で	削り、撫で	〃	〃	頸径13.3、巻上げ痕
		8	－2	20－4	〃	19.6	(18.8)		複合気味	〃	ロクロ	－	〃	－	－	〃	〃	(胴径)頸径16.4、叩目(工具痕)
		9	－3	20－5	〃		9.2	(21.5)	－	〃	〃	不明	角閃石	削り	撫で	〃	〃	(＃1、床面、火穴出土接合
		10	－4	20－6	〃	12			外反	－	非ロクロ	－	石英	不明	不明	〃	〃	径幾分小さい
		11	──	20－7	〃	17.2			複合的	－	〃	－	〃	〃	〃	〃	〃	磨耗大
		12	－5	26－2	埋土	21			〃	－	ロクロ	－	細礫	叩目様	－	〃	〃	第8号方形溝付近出土物と接合
		13	－6	20－8	〃		8.8		－	平底	不明	不明	石英	不明	磨き？	〃	〃	灰白色
		14	──	26－3	〃		7.5		－	〃	〃	〃	細礫	〃	不明	〃	〃	第8号方形溝付近出土物と接合

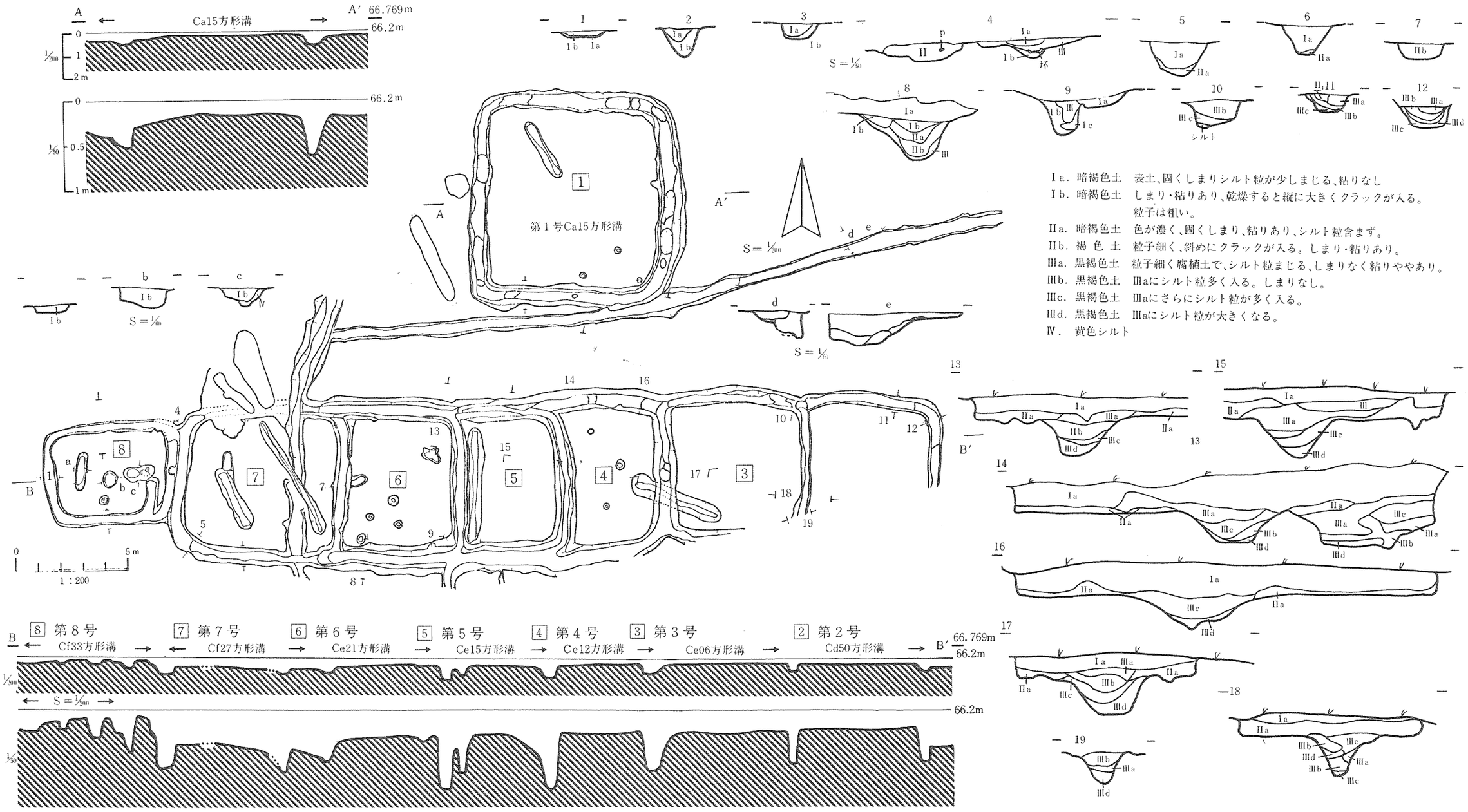


第30図　第８号住・遺物　S＝1：4



第31図　第８号住・遺物　S＝1：3

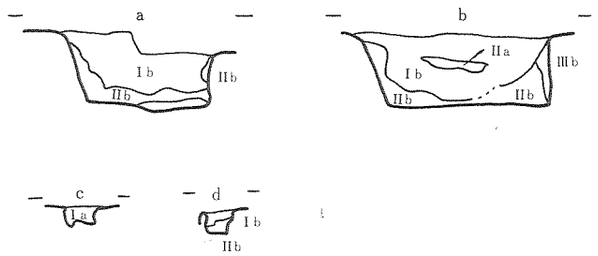
第32図　第１号～８号方形溝



第10表

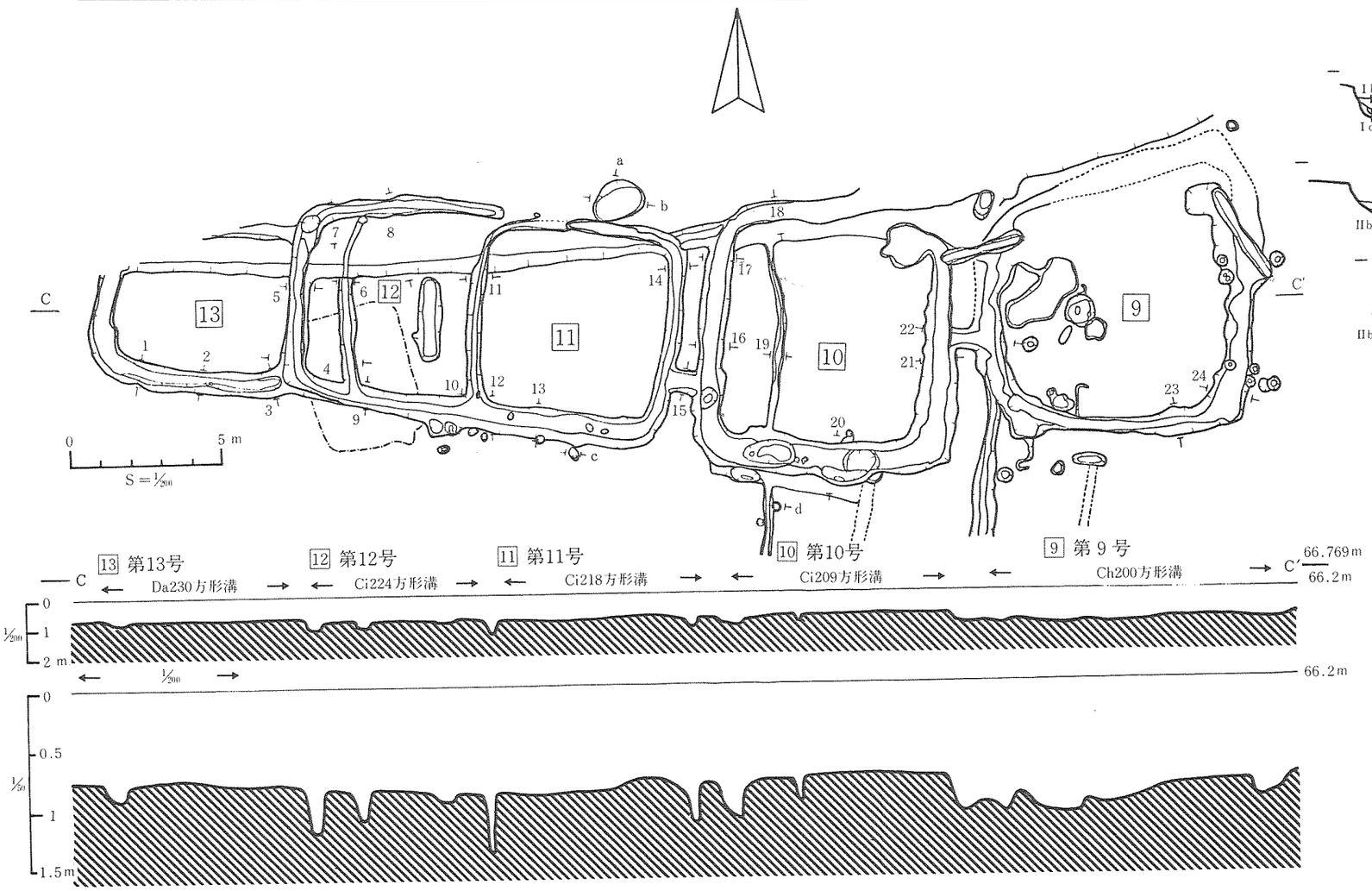
	第1号方形溝（Ca15）	第2号方形溝（Cd50）	第3号方形溝（Ce06）	第4号方形溝（Ce12）	第5号方形溝（Ce15）	第6号方形溝（Ce21）	第7号方形溝（Cf27）
東西巾m	9.2	5.6	5.8	4.4	4.1	5.8	7.1
南北巾m	11.0	5.1	6.9	7.7	7.6	7.5	7.2
溝 巾 m	1.2	0.5	0.4	1.0	0.9	0.9	0.6
溝深さm	0.33	0.22	0.44	0.45	0.53	0.57	0.19
写真番号	21－1	21－2	21－4	21－5	21－7	21－9	（22－2）

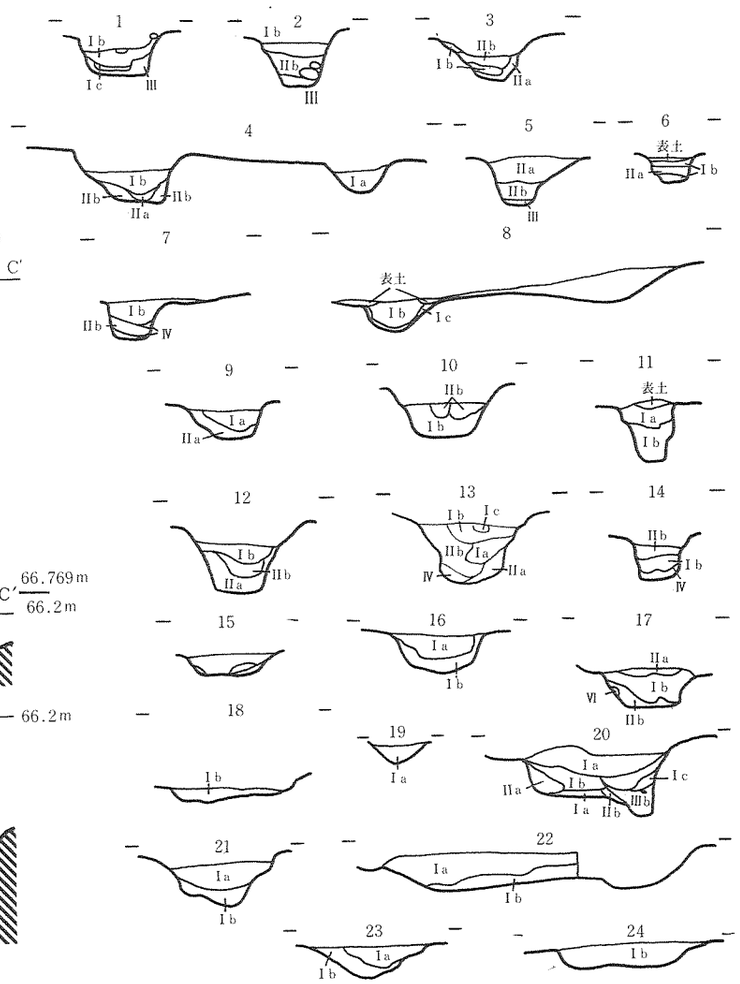
	第8号方形溝（Cf33）	第9号方形溝（Ch200）	第10号方形溝（Ci209）	第11号方形溝（Ci218）	第12号方形溝（Ci224）	第13号方形溝（Da230）	
東西巾m	5.9	8.7	7.8	6.9	5.7	6.4	
南北巾m	4.6	8.8	8.2	7.1	7.1	5.7	
溝 巾 m	1.0	0.9	1.2	0.5	0.7	0.7	
溝深さm	0.71	0.13	0.39	0.37	0.54	0.16	
写真番号	22－7	（22－5）	22－5	25－Ⅰ	25－Ⅰ	24－8	



Ⅰa．暗褐色土　表土、固くしまりシルト粒が少しまじる粘りなし。
Ⅰb．暗褐色土　しまり・粘りあり、乾燥すると縦に大きくクラックが入る、粒子は粗い。
Ⅱa．暗褐色土　色が濃く、固くしまり、粘りあり、シルト粒含まず。
Ⅱb．褐 色 土　粒子細く、斜めにクラックが入る。しまり粘りあり。
Ⅲa．黄褐色土　パミス混りの撹乱土 } Ⅲ
Ⅲb．黄褐色土　パミスとシルトの撹乱土 } Ⅲ
Ⅳ．黄色シルト

a～d．1～24　S＝1/60





第33図　第9号～13号方形溝

2　方形溝状遺構（第32・33図、第10表、写真21～26図）

検出された総数は13基、その内の第１号遺構は独立している。その他はそれぞれ東西に連らなり、７基と５基の２つの連続遺構を作っている。

〔**平面形・方位**〕　第１号遺構より基本形として隅丸方形の溝が考えられ、２連続遺構もその発展形態として見る事が出来る。東側の７基連続した遺構は西より第８号・７号とあり第６～２号と延びる。第７～５号までと第４～２号では形状の違いが見られる。第７号と第６号ではほぼ方形の連続であるが追設と思われる第６号は幾分南北に長い方形である。この様に追設は正方形で行なわれず延長される様だが、第４号は台形状になされ第３号では正方形に近くなっている。第２号については未調査部もあるが正方形に近い形であると思われ、第８号と第７号の様な連らなり方と異なる事が考えられる。第９～13号の西側５基のうち、第９・10号は溝を共有せず繋溝があり第10と11号も同様である。第11～13号は西側に追設した形で延びている。第12号では更に小さい連続を有していた様であるが北部不明により断定出来ない。

〔**規模**〕最大は第１号遺構の約９×９ｍで、最小は第８号の約６×4.5mである。

〔**縦断面形**〕個々の溝断面はほぼ半長円形が検出されている。上部構造は削平を受けたものと思われる。第１号遺構の溝は東西方向にて東側底部が低くなっている。第２～８号では第６・５号・第５～４号のそれぞれの境の溝底が一番低くなっている。遺構図で示した通り第６と５号の境より南側に延びる溝があり前述した溝底の低さと関係を有すものと思われる。

〔**溝堆積土**〕大半に於いて黒褐色土及び地山崩落土混土であるが、第７号の東溝及び第６号の南溝にては褐色土及び暗褐色土の卓越が見られる。この傾向は８号にても見られる。黒褐色土を欠く理由として、短期間の開口、または短期間内の埋設等が考えられる。

〔**溝底表面**〕平滑ではなく凹凸があり、第１・９・10号の様に独立した形のもの程、小土壙等が見られるが遺構に伴うものか否かについては不明である。

〔**切合・新旧関係及び時代の推定**〕方形溝の追設という事で切り合い関係にないとも言えるが追設に関してまだ決定的な根拠を欠いている。一応追設と言う事で見れば、第７～２号では第２号が一番新しく追設された事になる。第11～13号では第13号が１番新しく追設された事になる。第７号と第８号にては追設は考えられず、新旧関係は不明である。第１号と２つの連続遺構の新旧も不明である。追設の新旧は各号の溝の同時存在を否定する材料とはならない。この事は断面形の項で述べた南側に伸びる溝との関係で同時存在の可能性も考えられるからである。また西側の第９～13号については、第９・10号及び11号間の溝が繋として機能していたとすればこれらも同時に存在した可能性もある。この事は北溝・南溝及び両端の東西の溝において一層強くなる。これらの時期については第12号方形溝が第７号住居跡を切っている事より考えられる事がある。第７号住居跡は出土遺物より平安時代前期（９Ｃ）以後とほぼ考えられるから

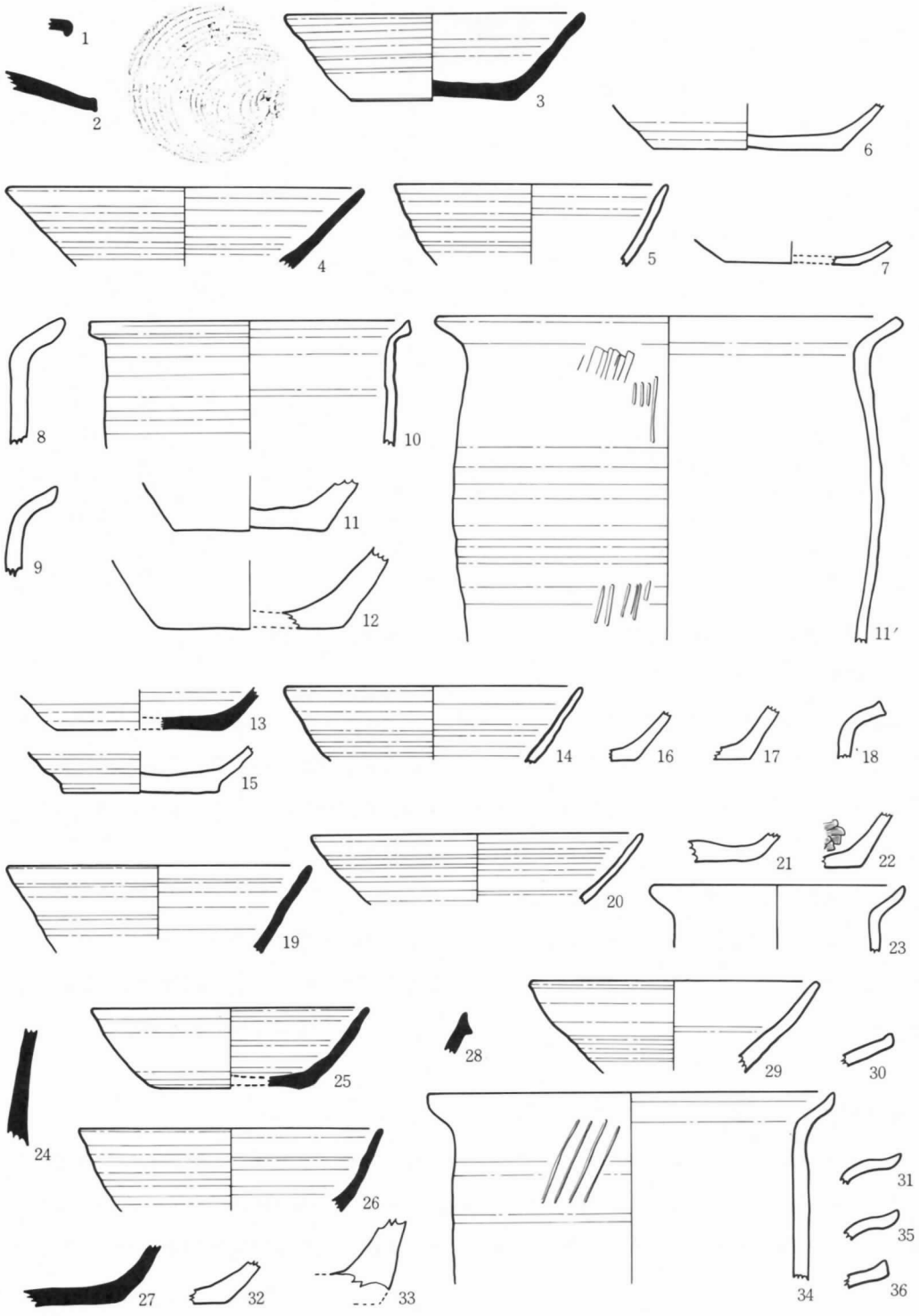
少くとも第11～13号方形溝はそれより新しい事になる。そして他の方形溝遺構も第11～13号方形溝と同時存在していたならば同様に考えられる。第７号方形溝は遺物として、須恵器の坏で回転篦切調整有るもの、土師器坏で内黒・墨書のものを出土しているから、平安時代中期（10Ｃ）より新しい物である事を示す。第７号方形溝については第１号南北溝（Ｃｄ24）との切合関係もある。溝の機能の一要素としての水路の役割は新しく出来た南北溝により少くなり埋土層にも他との相異が生じた。南北溝とこれら方形溝の機能的共通性は少いようにも思える。

〔**出土遺物**〕遺構平場（削平平坦面）より出土のものに、第６号方形溝の須恵器甕片があるが、これは南西方向の第５号焼土遺構（Ｃｈ30）埋土出土や第２号住居跡カマド・第４号住居跡出土遺物と胎土技法等酷似しているのでそちらの所属とした。同遺構平場よりは須恵器坏3)が出土している。その他の出土物は溝埋土よりのものである。それら埋入された遺物の時代差はあろうがそれぞれの遺構の時期区分資料とは成し得なかった。第７号方形溝須恵器坏6)は第６号出土物と接合している。同７号遺構出土物で第３号住居跡、カマド焼土よりの土師器甕9)や床面出土の甕1)と接合している。

第９～13号方形溝出土遺物は関連として第７号住居跡及び円形土壙（第９号方形溝削平平場上にあり同時存在または方形に併う施設との判断も出来ないが）第２～４号焼土（Ｃｈ200)(同前）のもの等がある。第６号方形北溝埋土遺物の甕は胎土技法等酷似の(Ｃｈ30）遺構出土須恵器甕6)にまとめた。記銘が方形溝の須恵器坏底部は第２号住居跡の口縁部と接合している。

時代差については須恵器坏の場合、第７号方形溝の3)のように底部篦撫で調整の物があるが他の大半は回転糸切無調整である。土師器甕では、第５号方形溝3)・第７号方形溝1)の様なロクロ調整でも叩目を有する物があるが他はロクロ調整が主である。

(第11表(1))			図番号	写真番号	出土位置	法量 cm 口径	底径	器高	口縁部形態	底部形態	成形技法	底部切離技法	胎土含有物	調整 外面	内面	焼成 炎	良否	備考
第8号方形溝（Cf33）	須恵器	坏	1	34－3	26－1	北側埋土	13.6	7.3	3.9	外傾	平底	ロクロ	回転糸切	石英	－	－	還元	普	
			2	——	——	中央土壙	11.8			〃	－	〃	－	浮石	－	－	〃	〃	幾分内彎気味
			3	——	——	東側埋土	9.6			〃	－	〃	－	細砂	－	－	〃	〃	幾分外反気味，青黒色
			4	34－4	26－6	埋土	16.0			〃	－	〃	－	細礫	－	－	〃	〃	Ch24出土と複合，7号方形類似
			5	——	——	〃		4.8		－	平底	〃	回転糸切	浮石	箆撫で	－	〃	〃	軟質
			6	——	——	〃				外傾	〃	〃	〃	石英	底箆撫で	－	〃	不良	北側埋土々壙
			7	——	——	〃				－	〃	〃	〃	浮石	〃	－	〃	普	第7号方形と類似物
		甕	1	——	——	埋土				－	〃	〃	〃	石英	〃	－	〃	不良	小片
	土師器	坏	1	34－5	26－10	東側埋土	12.2			外傾	－	〃	－	浮石	－	内黒	酸化	普	
			2	34－6	26－11	埋土		8.4		－	平底	〃	回転糸切	〃	不明	不明	〃	〃	内黒か
			3	34－7	26－12	〃		6.3		－	〃	〃	〃	細砂	〃	内黒	〃	〃	(他に口縁片底片各1)
			1	34－8	26－3	埋土	19.0			複合	－	〃	－	角閃石	－	－	〃	〃	頸部沈線文様，磨耗
			2	－9	26－4	〃	19.2			〃	－	〃	－	細礫	－	－	〃	〃	内黒？ 磨耗
			3	－10	26－5	〃	14.5			〃	－	〃	－	石英	－	－	〃	〃	浅黄橙色
			4	－11	26－6	〃		6.8		－	平底	〃	不明	細礫	不明	不明	〃	〃	磨耗，2次受熱
			5	－12	26－7	〃		8.0		－	〃	〃	〃	石英	〃	〃	〃	〃	〃 〃受熱(他に2片)
第7号方形溝（Cf27）	須恵器	坏	1	34－13	——	南側埋土II	14.0			外傾	－	ロクロ	－	砂	－	－	還元	普	
			2	——	——	〃	12.6			〃	－	〃	－	浮石	－	－	〃	〃	内面に沈線様文
			3	34－16	——	〃				－	平底	〃	回転糸切	細砂	底箆撫で	－	〃	〃	小破片
			4	——	——	〃				－	〃	〃	〃	〃	体部指撫で	－	〃	不良	
			5	——	——	東溝表土				外傾気味	－	〃	－	細砂	－	－	〃	普	粗口3層状
			6	——	26－18	東溝埋土		7.4		－	平底	〃	箆切り	細礫	底周箆撫で	－	〃	〃	(Cg21溝17第6号方形北層と複合
			7	——	——	南溝埋土II				－	－	〃	－	〃	－	－	〃	〃	22片第8号方形類似底部分含
			—	——	——	南溝埋土				－	－	〃	－	〃	明日	箆撫で	〃	〃	磨耗
			—	——	——	〃				－	－	〃	－	石英	－	－	〃	〃	溝内面平滑？
	土師器	坏	1	34－14	26－19	南溝埋土II	13.4			外傾	－	〃	－	細礫	不明	不明	酸化	〃	磨耗，片口様式，第8号方形片
			2	——	－	〃	12.8			〃	－	〃	－	石英	－	－	〃	〃	第8号方形片と類似
			3	——	26－21	〃		7.4		－	平底	〃	回転糸切	〃	不明	不明	〃	〃	第8号方形に類似，他に口縁3
			4	——		南溝埋土				外傾	－	〃	－	〃	－	－	〃	良	灰白片
		甕	1	——	26－3	南溝埋土II	20.2			複合	－	〃	－	〃	明日様	刷毛目	〃	普	2片
			2	34－17	26－27	〃	21.6			〃	－	〃	－	〃	不明	不明	〃	〃	磨耗
			3	34－18	——	埋土		6.8		－	平底	〃	回転糸切	〃	指撫で	－	〃	良	底部刻印(他に体部4種41片)
			4	——	——	東溝埋土		7.0		－	〃	〃	〃	細礫	－	－	〃	〃	成型良好



第34図　方形溝等、遺物　S＝1：3

(第11表(2))			図番号	写真番号	出土位置	法量 cm 口径	底径	器高	口縁部形態	底部形態	成形技法	底部切離技法	胎土含有物	調整 外面	調整 内面	焼成 炎	焼成 良否	備考
第6号方形溝（Ce21）	須恵器	坏	1	34-19	26-16	北溝理土	13.8			内彎(気味)	－	ロクロ	－	細砂	－	－	還元	良	内面釉狐Bj50と接合
			2	—	—	〃	13.4			外開	－	〃	－	細礫	－	－	〃	〃	青黒色断口3層
			3	—	—	平場	13.6			内彎(気味)	－	〃	－	粗砂	－	－	〃	不良	内側に段を有す
	土師器	坏	1	34-20	26-20	北溝理土	14.8			外開	－	〃	－	細礫	－	－	酸化	良	
			2	34-21	26-23	〃		6.2		－	平底	〃	回転糸切	石英	－	－	〃	良	内面成型痕(他に坏3片)
			3	—	—	〃		7.8		－	〃	〃	〃	細礫	－	－	〃	良	赤橙色(他に底1・体2)
		甕	1	34-22	26-25	〃		5.4		－	〃	〃	〃	石英	－	掻目	〃	良	磨耗
			2	34-23	26-26	理土	11.4			内彎(気味)	－	不明	－	〃	不明	不明	〃	〃	〃（他に体部4種20片）
			3	—	—	〃				外開気味	－	非ロクロ	－	粗砂	撫で	刷毛目	〃	〃	（古手？）
			4	—	—	北溝				－	－	ロクロ	－	石英	－	－	〃	良	灰橙色
			5	—	—	〃				－	－	〃	－	－	－	－	〃	良	体部片1
第5号方形溝（Ce15）	須恵器			34-24	26-28	東溝Ⅰ層	（推径－6.0）			－	－	ロクロ	－	細礫	－	－	還元	良	外面光沢あり
	土師器	坏				〃		6.4		－	平底	〃	回転糸切	石英	－	－	酸化	〃	1/4片
		甕								－	〃	不明	不明	浮石	不明	不明	〃	〃	磨耗
第4号（Ch200③）焼土遺構	須恵器	坏	1	34-25	25-5	焼土中	11.6	6.2	3.6	外開	平底	ロクロ	回転糸切	細砂	－	－	還元	良	底は丸味を帯ぶ
			2	34-26	25-6	〃	13.6			〃	－	〃	－	〃	－	－	〃	〃	墨書、火襷
			3	—	—	〃	15.6			〃	－	〃	－	〃	－	－	〃	〃	厚手か
			4	—	—	〃	13.2			〃	－	〃	－	石英	－	－	〃	不良	橙色凹凸内彎気味
			5	—	—	〃				〃	－	〃	－	細砂	－	－	〃	良	内彎気味
			6	34-27	25-7	理土		7.4		－	平底	〃	回転糸切	〃	－	－	〃	〃	掻傷等多し、第8号方形に類似物
			7	—	—	焼土中		8.2		－	〃	〃	〃	角閃石	－	－	〃	〃	Ci33に類似物
	土師器	坏	1	34-29	25-8	〃	14.8			外開	－	〃	－	粗砂	－	－	酸化	良	磨耗、他に3片
			2	—	—	理土	10.6			〃	－	〃	－	浮石	不明	不明	〃	良	磨耗
			3	—	25-2	〃	13.8			〃	－	〃	－	細砂	－	－	〃	良	墨書判読不可(他に2片)
		甕	1	34-30	25-9	焼土中	24.0			複合	－	〃	－	角閃石	－	－	〃	良	内折
			2	34-31	25-10	〃	21.6			〃	－	〃	－	〃	－	－	〃	〃	2次受熱
			3	34-32	25-11	〃		6.8		－	平底	〃	不明	浮石	不明	－	〃	〃	磨耗、円形土壙Ch200①上と接合
			4	34-33	—	〃		8.0		－	〃	不明	〃	石英	〃	－	〃	〃	橙色、磨耗
			5	34-34	25-3	理土	21.4			複合	－	ロクロ	－	角閃石	〃	不明	〃	〃	磨耗(他に14種40片)
			6	34-35	25-20	（断面）	18.2			複合気味	－	〃	－	〃	明目？	－	〃	〃	
円形土壙（Ch200）	須恵器			—	25-12	理土	17.4			複合	－	〃	－	細砂	－	－	還元	良	
	土師器	坏		—	—	焼土		8.0		－	平底	不明	不明	細礫	撫で	撫で	酸化	〃	両黒？
		甕		34-36	25-15	（②理土）	18.4			内彎(気味)	－	ロクロ	－	角閃石	不明	不明	〃	〃	磨耗

3　焼土遺構（第39図、写真10・23・25図、同7～9図、12～13表）

第1号遺構（Cf33）（写真10図、第11表）

第8号方形溝の北側70cmのところに検出された。東西80cm、南北55cm、長楕円形の焼土を伴なう土壙である。出土遺物は須恵器・完形坏である（第8方形溝遺物一覧に記載）。

本遺構との関連は不明であるが、第8号方形溝の北西付近に焼土の広がりが見られ埋土中より遺物も出土して、調査時にては住居跡との仮定もなされた。

第2号遺構（Ch200②）（第39図、写真10図、第11表）

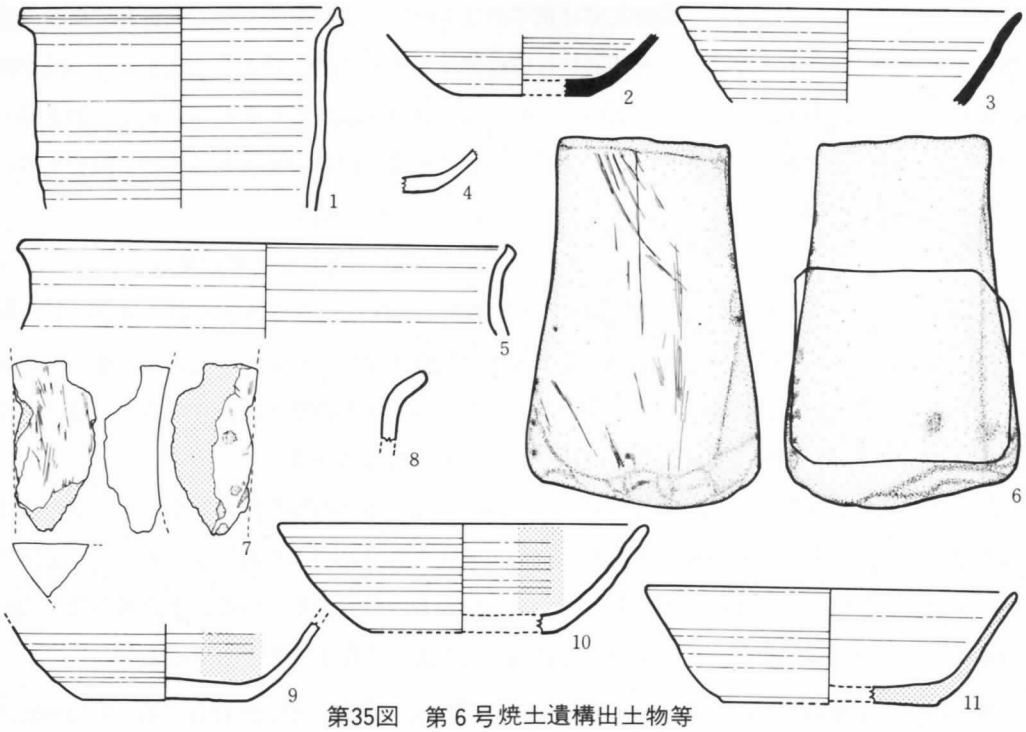
第9号方形溝平場上にて、円形（Ch200）土壙によって南西部を切られている。平面形はほぼ円形で直径約46cm・深さ25cmである。固く締った焼土下の2層には焼土団塊が下程減少して含まれている。遺物は上より2層目に出土している。最下層には炭化物も含まれている。これらの2層は攪乱土である。

第3号遺構（Ch200①）（第39図、写真10・25図、第11表）

第2号焼土同様、切合の関係にあり北西部を切られている。平面形は不整円形で、直径約75cm・深さ約15cmである。断面形は第2号焼土の鍋底状と異なり浅い鉢状である。堆積土は2層であるが上位の赤褐色土層が厚い。焼結の跡は見られず焼土団塊及び炭化物が攪乱土中に混在している。

第4号遺構（Ch200小土壙③）（第33図、写真10・25図、第11表）

第9号方形溝の北西隅近くにある。長軸長約1.5m短軸長約0.5mで北東方向に向いている。



第35図　第６号焼土遺構出土物等

(第12表)			図番号	写真番号	出土位置	法量 cm 口径	底径	器高	口縁部形態	底部形態	成形技法	底部切離技法	胎土含有物	調整 外面	内面	焼成 炎	良否	備考
第5-1号 (Ch27)焼土	須恵器	坏	—	26-18	埋土		6.1		—	平底	ロクロ	回転糸切	石英	荒削,撫で	—	還元	普	淡褐色同心円状編模様
	土師器	坏	35-4	26-24	〃		5.0		—	平底	〃	〃	角閃石	—	—	酸化	普	1/4底部(上記は方形溝出土と接合)
		甕	35-1	26-22	〃	13.0			複合	—	〃	—	石英	—	—	〃	〃	沈線様口縁部段(他約30片)
Ch30～24区域遺物	須恵器 坏	1	35-3	26-17	Ⅰ層	13.9			外傾	—	ロクロ	—	細礫	—	—	還元	普	薄手
		2	—	--	〃	11.6			〃	—	〃	—	細砂	—	—	〃	〃	火襷,他に類似片あり
		3	—	(26-21)	〃		9.0		—	平底	〃	回転糸切	石英	—	—	〃	〃	薄手,内面凹凸
			—	—	〃	(体部片)			—	—	〃	—	細砂	—	—	〃	〃	沈線模様が2本
	土師器 坏	1	—	(26-19)	〃	15.4			外反	—	〃	—	細砂	—	—	酸化	〃	須恵質
		2	—	—	〃		6.0		—	平底	〃	回転糸切	石英	—	—	〃	〃	磨耗
第6号(Ci33)焼土遺構	須恵器	坏	35-2	26-13	② 埋土		5.7		—	平底	ロクロ	回転糸切	石英	底周荒撫で	—	還元	普	丸味を帯ぶ
	土師器	坏	—	—	② 〃	13.2			外反気味	—	〃	—	角閃石	—	—	酸化	〃	荒仕上げ(他に口-1,底-1)
		甕	35-5	26-14	② 〃	20.0			複合	—	〃	—	石英	—	—	〃	〃	他に口-1片
須恵器	坏		—	—	Ag68 Ⅱ		○		—	平底	ロクロ	回転糸切	細砂	荒撫で	荒撫で	還元	普	No 3
須恵器	甕		—	—	Bd68 Ⅱ		○		—	平底	ロクロ	不明	〃	—	—	〃	〃	底部内面粗,第2号住出土類似
土師器	坏		—	—	〃 Ⅱ	8.6			直口	—	〃	—	石英	—	—	酸化	良	No 6 須恵質
須恵器	坏		—	—	Bf65 Ⅱ		○		—	平底	〃	回転糸切	〃	荒撫で	—	還元	普	その他1片
土師器	坏	1	35-10	25-18	〃 〃	14.8	7.2	4.3	直口	平底	〃	不明	〃	—	内黒	酸化	普	厚く凹凸激い('74Cb68)
		2	35-11	25-17	〃 〃	14.8	8.4	4.6	〃	〃	〃	静止糸切	細礫	荒撫で	—	〃	良	須恵質('74Ca65)
		甕	35-8	25-16	〃 〃	18.0			複合	—	〃	—	〃	—	—	〃	普	口唇沈線様文,第3号住関連?
土師器	坏	1	34-15	26-29	Bf27 溝		7.0		—	平底	〃	回転糸切	雲母	荒撫で	—	〃	〃	軟質,淡褐色,2重切,第7号方形へ
		2	—	—	〃	○			直口	—	〃	—	細砂	—	—	〃	〃	須恵質,第8号方形溝出土片と接合
須恵器	坏		—	—	2号溝埋土		○		—	平底	〃	回転糸切	細礫	—	—	還元	〃	同心円状編模様
土師器	坏		35-9	—	Bh65土壙Ⅰ		6.6		—	〃	〃	〃	粗砂	—	内黒	酸化	〃	墨書・荒書き痕('74Cd65に)
須恵器	蓋		—	25-13	Bj53						〃							
〃	坏		—	—	Ccd65 表土		○		—	平底	〃	回転糸切	石英	荒撫で(底)	—	還元	不良	
〃	壺		—	—	Cd53 埋土			(頸部)	—	—	〃	—	細砂	—	—	〃	普	小片
〃	坏		—	—	Cd12 Ⅱ			(体部)	—	—	〃	—	角閃石	—	—	〃	〃	小片(他に土師甕底1片)
〃	蓋		—	25-14	Ce56 表土	(18)			—	—	〃	—	細砂	—	—	〃	〃	小片
〃	〃		—	—	Cf53				—	—	〃	—	〃	—	—	〃	〃	Bj53類似
〃	坏		—	—	Ⅱ	○			—	—	〃	—	〃	—	—	〃	〃	内面荒仕上
土師器	坏		—	—	Ce37 埋土	14.8			直口	—	〃	—	細礫	—	—	酸化	〃	Cf18-1に若干類似

不整形で深さは15cm程である。遺構北部は削平の為か境界は不明瞭である。一覧表に掲載の遺物は焼土より出土のものが多い。全体的には口縁部体部半々の出土である。焼土よりの出土物は磨耗片が多い。須恵器坏にロクロ仕様・回転糸切無調整が確認されるものもある。須恵器・土師器坏には墨書のものがあるが判読出来ない。土師器甕3)はCh200土壙出土物と接合する。

第5号遺構（Ch30）（第39図、第13・14表、写真7～9・26図）

調査地区Chi27線上の土壙を5－1号とし、西に5－2号、東に小土壙の集合した5－3号の集まりである。東西約2.4m、南北約1.5mの不整楕円形状に広がる落込み中に前述の小土壙が検出された。他の遺構確認面と同面にて褐色土中に焼土粒を含む広がりがあり、その下には、焼土団塊をレンズ状に載せた黒色土層がある。この黒色土は下の焼土、シルト質土と更に下の黒色土とシルト質土の攪乱土がレンズ状に残存した上に載っている。

出土土器としては5－3号よりほぼ完形の土師器内黒坏等3個体が出土している。その他にも多数の土器片が出土している。須恵器坏にては調整の痕跡が認められるものもある。土師器坏の場合は、回転糸切り後篦削り調整した内黒処理のものが出土している。甕は須恵器・土師器とも出土し前述の方形溝状遺構や第2号住居跡出土物と接合するものもある。

他の遺物：小型石盤（直径17.0mm、厚さ5.5mm円形に近い隅丸方形、砂岩質で第1号住居跡にもこれより幾分大き目の物が出土、用途その他未詳）　穂摘み具様鉄製品（注1）（長さ10.7cm、巾1.8cm、厚さ約3mm、目釘様残存部長7.0mm、目釘様残存部2心間8.6cm、反り身状に残存しているが刃部不明、目釘様残存部は銹瘤中にあり周りに炭化物の細片が残っていた。銹化面には木質部が貼付いた形で僅かに残存）（注1）青森県教育委員会（碇ヶ関村）古館遺跡（昭和54年度）他

第6号遺構（Ci33）（第39図、第12表、写真26図）

上端径45cm、中端を有し下端は窄む袋状を呈す6－1号は上部西部にて焼土を層状に挟んだ落込を有する。6－2号の平面形はほぼ円形で径は0.48m、断面形は鍋底状で深さは18cm程である。埋土は2層で下部は汚れた細粒土、その上部は黒褐色土である。　出土遺物は少ない。土師器甕口縁部は頸部より上が窄まり複合部は内彎の形になっている。

4．その他の遺構

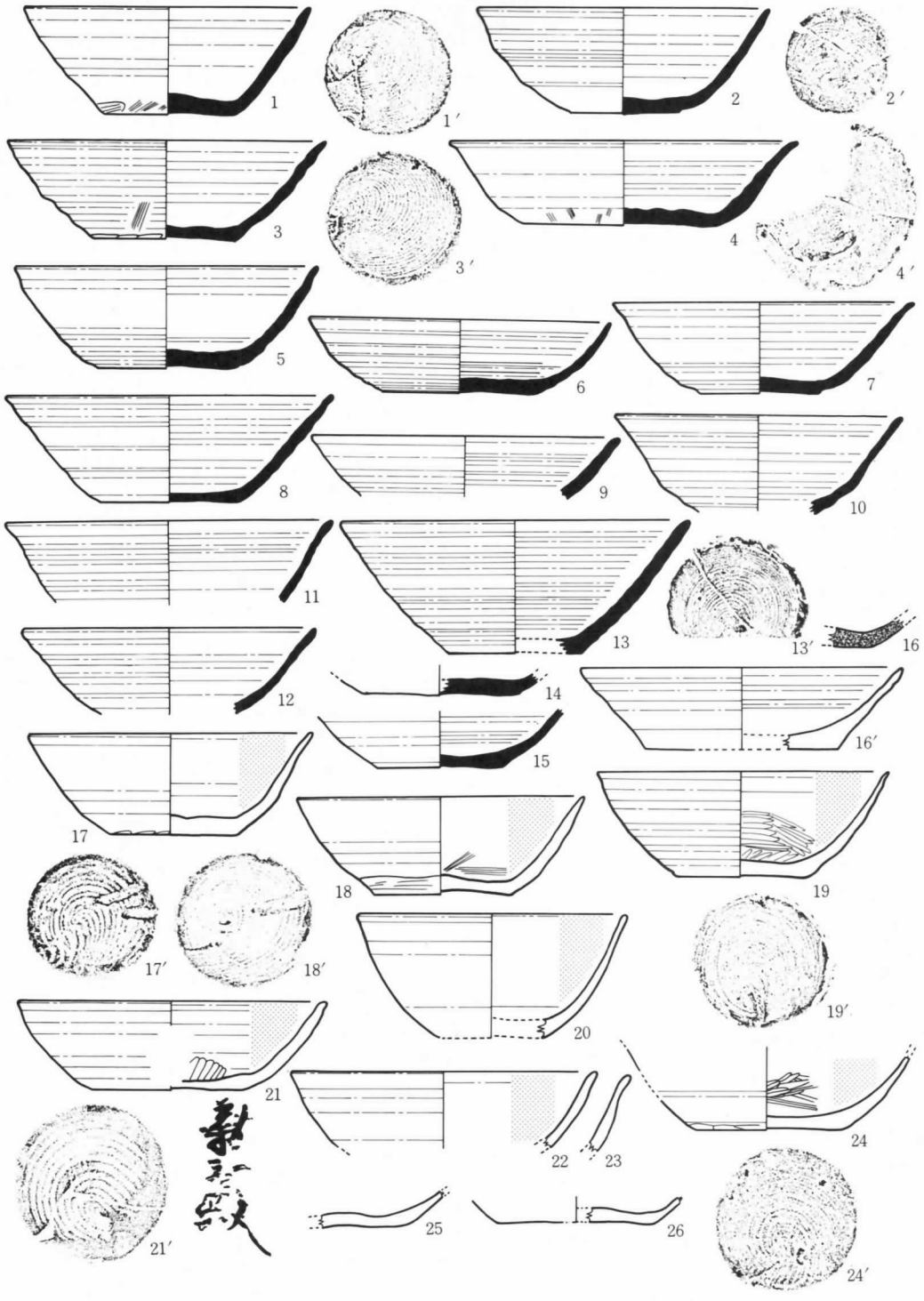
1)溝遺構（第3・32・33図、写真1図・21図・26図他）

第1号溝（Bc95）

調査地点B$^{c}/_{d}$96地点より南東方向B$^{f}/_{g}$107地区へ延び第2号住居跡の西壁及び南壁を切っている。埋土等の状況より近世のものと思われる。

第2号溝（Cd21）

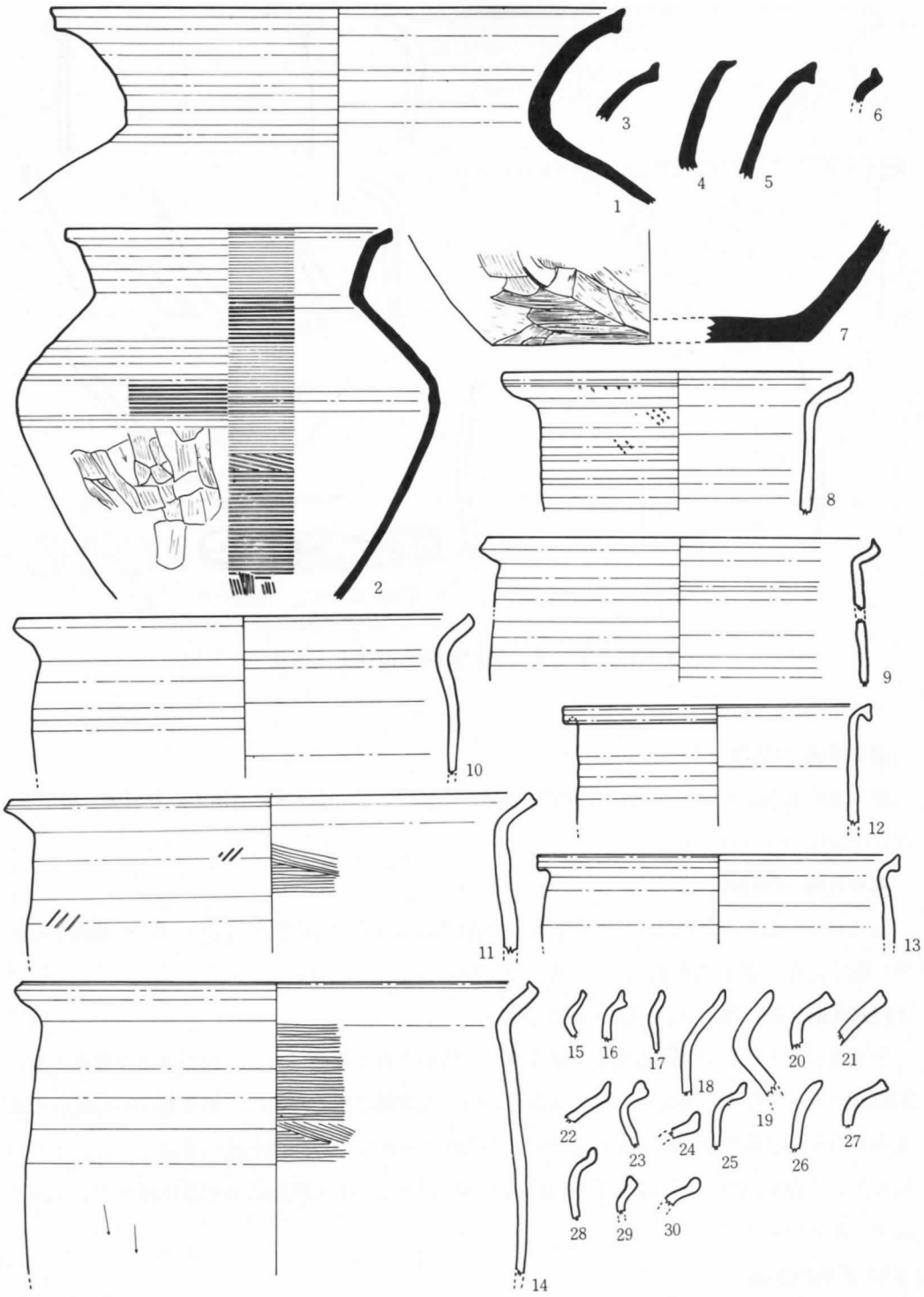
調査地区Cb21より南のCh21に延びる溝で第7号方形溝を切っている。これらは時期差も大きくなく、同時存在とも考えられる。



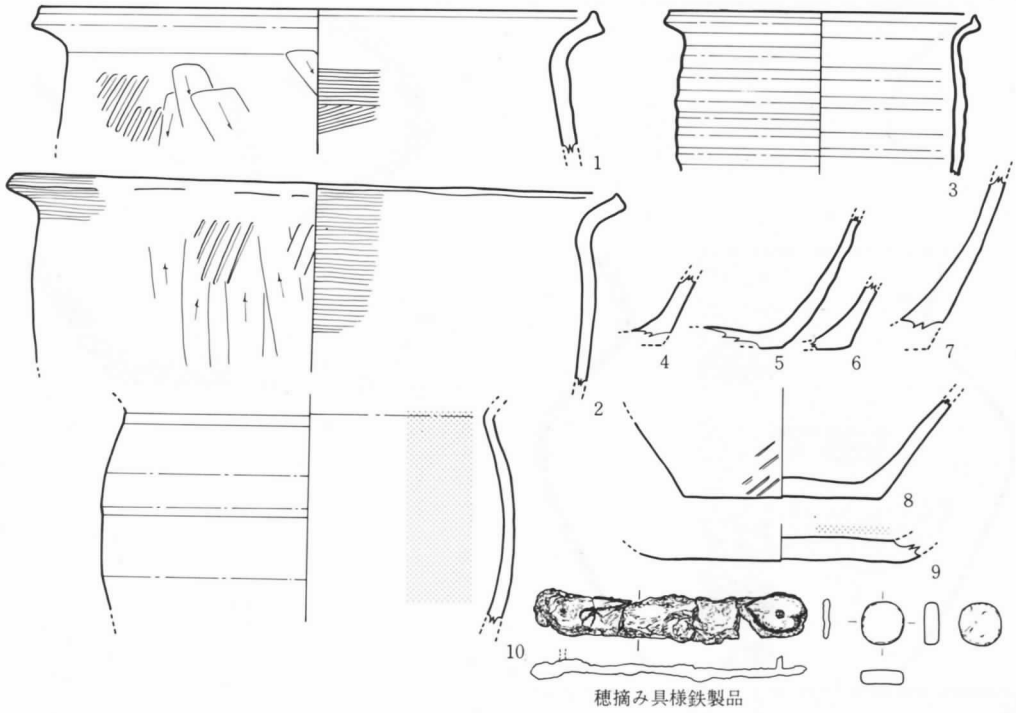
第36図　第５号（Ch30）焼土遺構関連遺物　S＝1：3

(第13表)				図番号	写真番号	出土位置	法量 cm 口径	底径	器高	口縁部形態	底部形態	成形技法	底部切離技法	胎土含有物	調整 外面	内面	焼成 炎	良否	備考
第5号(Ch30)焼土遺構	須恵器	坏類	1	36－1	7－1	Q3床面	12.9	5.8	4.8	外傾	平底	ロクロ	回転糸切	細礫	－	－	還元	普	幾分軟質、撫調整
			2	－2	7－2	〃	13.2	4.9	4.8	〃	〃	〃	〃	〃	－	－	〃	〃	少し歪み
			3	－3	7－3	〃	14.3	6.3	4.3	〃	〃	〃	〃	〃	－	－	〃	〃	漆様付着物
			4	－4	7－4	〃	15.7	8.6	3.8	外反	〃	〃	〃	〃	体底境磨き	－	〃	〃	平型
			5	－5	7－5	Q3床面	13.7	5.9	4.6	外反(僅少)	〃	〃	〃	石英	－	－	〃	不良	軟質、灰白色
			6	－6	7－6	小土壙	13.6	6.7	3.3	外反	〃	〃	回転糸切	〃	－	－	〃	普	内面肌荒、縦状痕
			7	－7	7－7	Q3床面	13.5	5.3	4.0	〃	〃	〃	〃	細礫	－	－	〃	〃	火襷、Ch24・Cf33出土と接合
			8	－8	7－8	Q2埋土	14.7	6.0	4.8	外反(僅少)	〃	〃	〃	〃	－	－	〃	〃	Q1表採物と接合、図上復元
			9	－9	7－9	Q3床面	13.9			外傾	－	〃	－	〃	－	－	〃	〃	厚手
			10	－10	7－10	Q1Q3床面	12.9			外反(僅少)	－	〃	－	〃	－	－	〃	〃	半ばより外傾
			11	－11	7－11	Q3床面	14.8			外反	－	〃	－	浮石	－	－	〃	〃	厚さ均一
			12	－12	7－12	Q2埋土	13.2			外傾(僅少)	－	〃	－	〃	－	－	〃	〃	紫色がかる、もみ痕
			13	－13	7－13	Q4床面	(15.6)	6.0	(5.9)	(外傾)	平底	〃	回転糸切	石英	－	－	〃	〃	火襷内面(Ch18・Cf33の類似)
			14	－14	7－14	Q3床面		7.2		－	〃	〃	〃	〃	－	－	〃	〃	幾分薄手、開く器形
			15	－15	7－15	撹土		5.6		－	〃	〃	〃	細礫	－	－	〃	〃	幾分薄手
			16	－16		Q4埋土		6.2		－	〃	〃	〃	細砂	－	－	〃	〃	幾分軟質
		甕類	1	37－2	7－17	Q3床面	14.8	(19.1)	17	複合	－	〃	－	細礫	毘削り	刷毛目	〃	〃	薄い、叩目痕(最大胴径)
			2	－1	7－18	Q3埋土	26.0	(19.1)		〃	－	〃	－	〃	叩目痕	－	〃	〃	1・2号住関連
			3	－3	8－1	Q3床面	9.0			〃	－	〃	－	〃	－	－	〃	不良	幾分軟質
			4	－4	8－2	No2	21.2			(薄い)	－	〃	－	細砂	－	－	〃	普	1片のみ
			5	－5	8－3	Q2埋土	(11.8)			複合	－	〃	－	細礫	叩目	叩目	〃	良	接合関係にない類似片あり
			6	－7	8－7	〃		(14.3)			平底	〃	不明	〃	毘削り	毘撫で	〃	普	Cf27東隣にも
			7	－	8－4	〃		頂径8cm		－	－	〃	－	〃	〃	－	〃	〃	
			8	－8	8－5	Q3床面	16.0			複合	－	〃	－	〃	叩目	毘撫で	〃	不良	口縁外面、叩目痕跡
			9	－9	8－6	Q4床面	18.3			〃	－	〃	－	〃	毘削り	〃	〃	〃	Q2、Q3
			10	－6		Q1	16.0			〃	－	〃	－	石英	口縁部叩目	－	〃	〃	叩目は頂部にかけて
	土師器	坏類	1	36－17	8－8	Q2床面	12.8	5.6	4.5	外傾	平底	〃	回転糸切	細礫	陶様痕	－	酸化	〃	
			2	－18	8－9	〃	12.8	6.0	4.5	〃	〃	〃	〃	細砂	下部撫調	内黒	〃	普	
			3	－19	8－10	〃	13.2	5.6	4.8	〃	〃	〃	〃	細礫	－	〃	〃	〃	磨き粗雑
			4	－20	7－16	Q2床面	12.1	4.5	5.6	〃	不明	〃	不明	細砂	－	〃	〃	〃	磨耗大
			5	－21	8－11	焼土土壙	13.9	6.8	4.6	〃	平底	〃	回転糸切	〃	毘削り	〃	〃	〃	外底墨書、漆様付着
			6	－22		第1断面	13.7			〃	－	〃	－	石英	－	〃	〃	〃	磨耗
			7	－23		Q3埋土	14			外反気味	－	〃	－	細礫	－	－	〃	〃	軟質、磨耗
			8	36－24	8－12	Q3床面		6.3		－	平底	ロクロ	回転糸切	石英	底部毘削り	内黒	酸化	良	
			9	－25		Q3埋土		6.6		－	〃	〃	〃	細礫	－	－	〃	不良	黄色磨耗
			10	－26		Q4埋土		7.2		－	〃	〃	〃	〃	－	－	〃	普	幾分軟質
		甕類	1	37－10	8－13	Q1床面	20.8			複合	－	〃	－	角閃石	－	－	〃	〃	口縁外面に叩目僅かに残る
			2	－11	8－14	〃	24.1			〃	－	〃	－	石英	叩目	刷毛目	〃	不良	焼縮んす
			3	－15	9－7	〃	20.0			〃	－	〃	－	〃	－	－	〃	普	磨耗
			4	－12	8－15	Q2埋土	14.0	5.2		〃	平底	〃	不明	〃	－	－	〃	〃	2次受熱
			5	－16	9－20	Q3床面	13.0			〃	－	〃	－	〃	－	－	〃	〃	磨耗Ch27焼土遺構と同一
			6	－13	9－13	Q3床面	16.4			〃	－	〃	－	〃	－	－	〃	〃	4に類似
			7	－14	9－2	〃	23.7			〃	－	〃	－	角閃石	－	刷毛目	〃	〃	
			8	－17	9－8	〃	10.4			〃	－	〃	－	石英	－	－	〃	〃	磨耗、内面橙色
			9	38－1	－	Q4床面	23.0			〃	－	〃	－	〃	刷毛目、叩目	刷毛目	〃	〃	
			10	37－18	9－9	〃	18.6			外傾	－	〃	－	角閃石	叩目	磨き	〃	〃	磨耗
			11	－19	9－10	南第1土壙	0			〃	－	〃	－	石英	不明	不明	〃	〃	磨耗
			12	－20	9－11	Q2埋土	22.2			複合	－	〃	－	〃	－	刷毛目	〃	〃	頂部叩目痕
			13	－21	－	Q3埋土				〃	－	〃	－	〃	－	－	〃	〃	橙色第4号住類似物
			14	－22	9－12	〃	15.0			〃	－	〃	－	角閃石	－	磨き	〃	〃	内黒処理
			15	38－2	－	Q4埋土	24.8			〃	－	非ロクロ	－	石英	横撫で、叩目、毘削り	横撫で	〃	〃	口縁内面に明確に段
			16	37－23	9－14	〃	16			〃	－	ロクロ	－	〃	－	－	〃	〃	口縁部厚い

(第14表)				図番号	写真番号	出土位置	法量 cm 口径	底径	器高	口縁部形態	底部形態	成形技法	底部切離技法	胎土含有物	調整 外面	内面	焼成 炎	良否	備考
第5号(Ch30)焼土遺構	土師器	甕類	17	37－24	9－17	Q4埋土	17.7			複合	－	ロクロ	－	石英	－	－	酸化	普	磨耗、赤橙色(No2)
			18	－25	9－15	〃	18.0			〃	－	〃	－	角閃石	－	－	〃	〃	薄手、内面上半部褐
			19	－26	9－21	〃	14.0			外傾	－	〃	－	細砂	－	－	〃	〃	
			20	38－3	9－5	〃	12.6			複合	－	〃	－	石英	－	－	〃	〃	磨耗(No2)
			21	37－28	9－16	第1断面	16.0			〃	－	〃	－	〃	－	－	〃	〃	口縁内竹管様工具痕
			22	－29	9－19	〃	17.4			〃	－	〃	－	〃	－	－	〃	〃	角を有し外折
			23	37－30	9－18	第3盛土	18.0			複合	－	〃	－	〃	－	－	〃	〃	灰白色
			24	38－4	——	Q1床面		8.2		－	平底	不明	不明	〃	不明	不明	〃	〃	胎土灰色磨耗(No2)
			25	－5	9－22	〃		5.2		－	－	ロクロ	〃	細礫	毘削り	－	〃	〃	浅橙色(No2)
			26	——	——	Q4床面		5.2		－	〃	〃	〃	浮石	不明	磨き	〃	〃	内黒様
			27	38－6	——	Q3埋土		6.2		－	〃	〃	〃	石英	〃	不明	〃	〃	磨耗
			28	－7	——	Q3埋土		7.0		－	〃	〃	〃	〃	毘削り	磨き	〃	〃	外側褐色(推定値)
			29	－8	9－23	第2断面		7.8		－	〃	〃	〃	〃	叩目	－	〃	〃	外面に黒変あり
			30	－9	9－24	小土壙		9.6		－	〃	不明	〃	〃	毘撫で	内黒	〃	〃	外面に黒斑あり
			31	－10	9－25	第1断面		(15.1)		－	－	ロクロ	－	〃	(黒斑)	(内黒)	〃	〃	(頂径)



第37図　第５号（Ch30）焼土遺構出土遺物　S＝1：3



第38図　第５号（Ch30）焼土遺構出土遺物　S＝1：3

第３号溝（Cd21－１）

調査地点Bd/e20付近より東北東のCa 59付近へ延び、Cc 07付近にて第１号方形溝と接するが、前後関係は不明である。

第４号溝（Da 209）

第11号方形溝と切合い関係にある。北側は削平により不明、南側については方形溝底より高位に底がある。第２号溝と同機能のものか不明である。

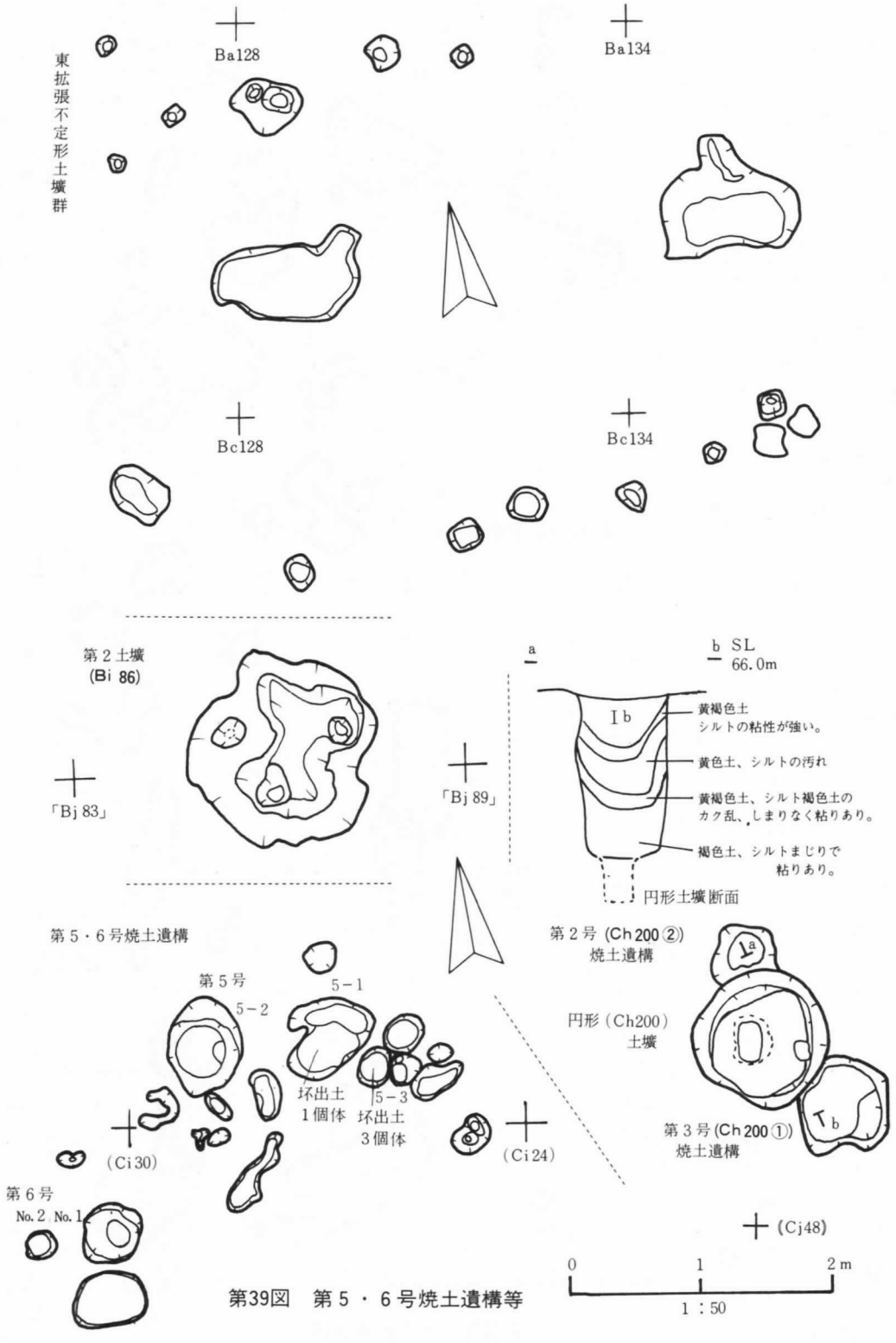
2)円形土壙（Ch 200）（第39図・第１表）

第９方形溝平場上で既述の焼土遺構を切って構築されたものである。底部は幾分窄まるが、断面形は方形に近く、円筒状に掘込まれている。北東隅に水の浸出口があり井戸等の機能も考えられるが底中央の更に掘込まれた小穴との関係が不明にて可能性を述べるに止める。この小穴の深さは約40㎝で、東側にも深さ約10㎝の小穴がある。出土遺物に須恵器口縁片や、土師器両黒坏片等がある。

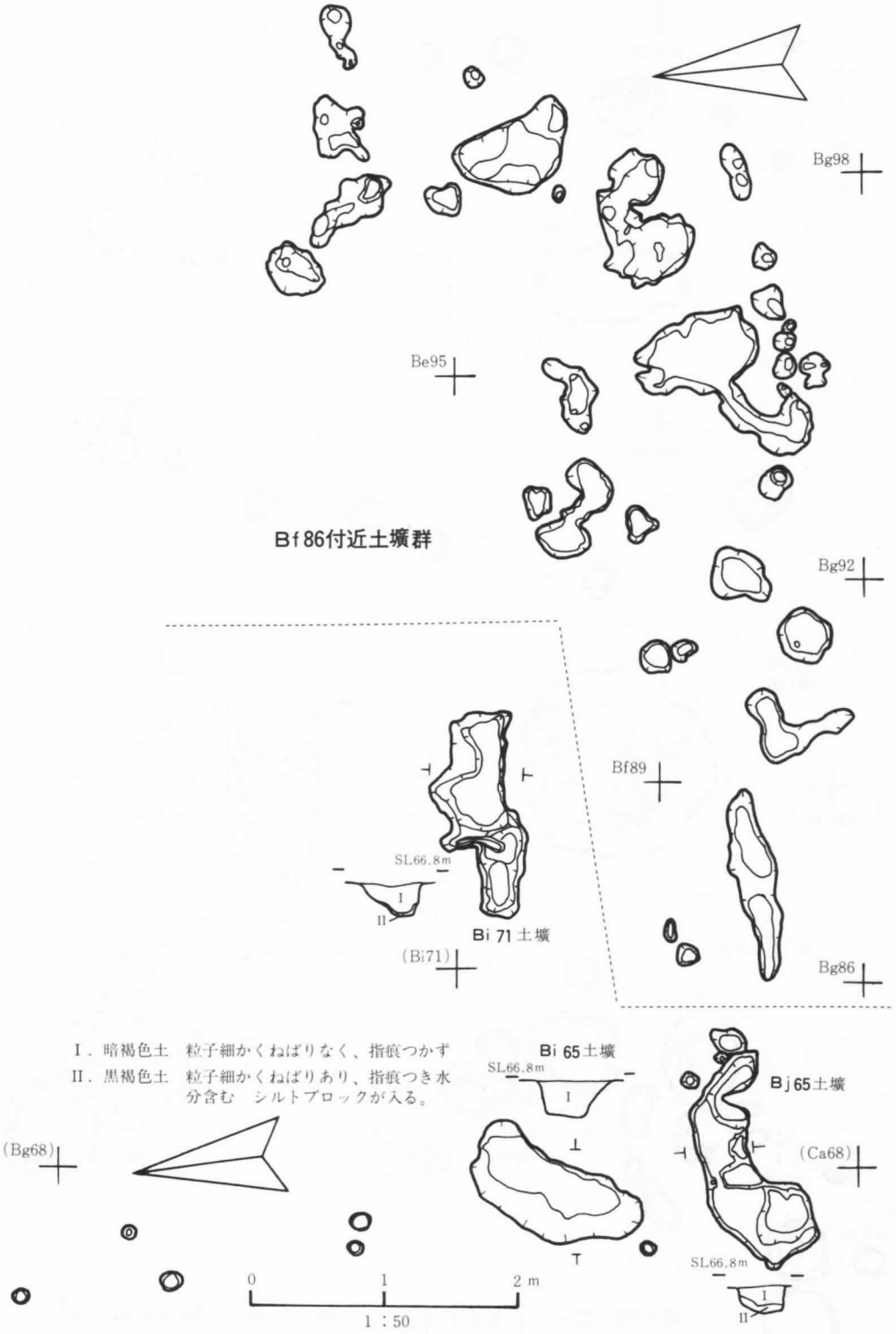
〔３〕その他の遺構

第１不定形土壙群（Ba 128地区）

縄文晩期片出土小土壙周辺である。形状は不整いで配列の規則性も不明確である。



第39図　第5・6号焼土遺構等


Bg98
Be95
Bf86付近土壙群
Bg92
Bf89
SL66.8m
I
II
Bi 71 土壙
(Bi71)
Bg86
I．暗褐色土　粒子細かくねばりなく、指痕つかず
II．黒褐色土　粒子細かくねばりあり、指痕つき水分含む　シルトブロックが入る。
Bi 65土壙
SL66.8m
I
Bj 65土壙
(Bg68)
(Ca68)
SL66.8m
I
II
0
1
2 m
1：50

第40図　その他の土壙

第2土壙（Bh83）

平面形は不整円で底面もほぼ相似である。深さは約47cm、底面に小穴が認められる。

第3土壙（Bi 65）

北東方向に長い不整形の落込みで1.4×0.55m、深さ28cm、埋土は暗褐色細粒土である。

第4土壙（Bi 71）

小土壙が1.5×0.5mの範囲で東西に3基連らなる。前後関係は不明である。断面(南北)の1例は片掘り状で底面に黒褐色土層が薄在する。深さは約22cmである。

第5土壙（Bj 65）

東西に延びる1.8×0.4m、深さ0.2mの規模の不整形より小穴の連続等も考えられるが、性格等不明である。埋土は第4土壙よりⅡ層が厚い。

第6土壙群（Bf 86付近）

調査地Be95付近へ広がる浅い落込みを有する群であるが、それぞれの関連は不明である。出土遺物はない。

Ⅳ　まとめ及び今後の問題

1．遺構とその出土遺物の年代について

本調査地検出遺構の内、竪穴住居跡、方形溝遺構についてその概要とその年代を考察する。

(1) 竪穴住居跡

既述の8棟のおもな点について第15表にまとめた。

(第15表)	東西 m	南北 m	壁高 cm	カマド方位	煙道等	柱穴	周構	出土遺物等
1号 Bc 71住	5.8	5.0	15	N35°W	(有)	4	有	砥石(北西Pit)、刀子(床面)、石製(Qa)、須恵坏回転ヘラ切(II)・床
2号 Be 104住	4.3	5.0	21	N	無	無	無	須恵器(回転糸切離し)、土師(同)、砥石
3号 Bf 56住	5.2	5.0	15	S22°E	無	4	無	須恵器坏(墨書)、土師器坏甕片、鉄製品
4号 Bg 98住	4.0	4.0	13	E	無	無	無	土師器、石製紡錘車、鉄製品
5号 Bh 06住	2.4	2.6	18	N65°W	有	無	無	回転糸切離し、墨書、小型壺(内外黒)
6号 Cg 42住	3.6	不明	5	不明	不明	不明	無	土器片のみ
7号 Da 224住	3.4	4.4	17	S12°E	不明	無	無	須恵坏、箆切り底、第8号住遺物と接合
8号 Df 245住	3.6	3.6	15	N15°W	有	1	無	土師、甕(5個体カマド付近)、坏少い

〔遺構〕〔**保存状況**〕壁高15cm内外の残存にて遺構はもとより遺物の共件関係を明確にするにも困難点は多い。

〔**平面形・規模・カマド方位**〕方形溝遺構に切られている第7号住居跡を除いてほぼ隅丸の方形である。大きさは時期等を抜きにして第1号(Be71)・3号(Bf 65)住居跡と第2号(Be107)・4号(Bg98)・6号(Cg42)・8号(Df 245)住居跡と第5号(Bh06)住居跡の3群に分けられる。カマド方位は第1号(Bc71)・2号(Be104)・8号(Df 245)住居跡の北方向と第3号(Bf 56)～7号(Da224)住居跡の東または南方向がある。

〔**堆積土**〕焼土ブロックや炭化物粒を含む例もあるが大半は自然流入堆積土である。

〔**壁**〕保存状況の項でも記した通り、上部以上の構造を知る手がかりは少ない。施設との関係で第2号～4号住居跡の様に外側へ幾分の張り出しをもつ物もある。

〔**床面**〕第1号(Bc71)・第3号(Bf56)住居跡の様に中央部が固く締っているものはある。

〔**柱穴**〕第1号・第3号住居跡に4本、他に第8号(Df245)住居跡の1本が認められる。第1号(Bc71)住居跡の場合は2本が南壁際に設けられてある。

〔**カマド**〕石を使用して構築していると考えられる第3号(Bf56)・7号(Da224)・8号(Df245)住居跡がある。地山を削り出したと思われる第1号(Bc71)・第2号(Be104)住居跡があるが、第2号住居跡は2基のカマドを有する。

〔**貯蔵穴等**〕カマド左右に設けられており、後述の遺物を伴出する。

〔**重複切合い等**〕第1号(Bc71)住居跡か第1号(Bc71)円形土壙及び第2号(Bd77)溝状遺構を切っている。第2号(Be107)住居跡は第1号(Bc95)溝にて切られている。第6号(Da224)住居跡は方形溝遺構に切られている。

〔出土遺物〕〔**須恵器**〕：**坏**　篦切のものは第1号(Bc71)住居跡床面出土(胎土分析資料)、第3号(Bf56)住居跡小土壙出土、第7号(Da224)住居跡床面出土底(第8号(Df245)住居跡埋土出土口縁部と接合)等である。回転糸切離し無調整のものは第3号(Bf56)住居跡床面出土。赤焼き土器を含めると第5号(Bh06)住居跡床面出土である。

：**甕**　口縁部は第1号(Bc71)・2号(Be104)・4号(Bg98)住居跡に出土している。第8号(Df245)住居跡には須恵片を欠く。

〔**土師器**〕：**坏**　篦による整形・調整を受け内黒処理を施こされているものは第1号(Bc71)住居跡出土。内黒処理の認め難いもの第3号(Bf65)・4号(Bg98)・8号(Df245)住居跡である。

：**甕**　ロクロ不使用のものは第1号(Bc71)住居跡焼土及びカマド出土・第3号(Bf65)住居跡床面小土壙出土・第8号(Df245)住居跡カマド出土である。叩きを有するもの第2号(Be104)住居跡焼土出土、3号(Bf56)住居跡床面出土、4号(Bg98)住居跡南小土壙出土、8号(Df245)住居跡カマド出土等である。

：**その他**　第5号(Bh06)住居跡小土壙より内外面黒色処理の土師器小壷(猫谷地1号墳中より高さ3.8cm、口径3.2cm、最大腹径4.5cmの類似物がある。)が出土している。第1号(Bc71)住居跡よりは刀子及び砥石・石玉、2号(Be104)住居跡に砥石、4号(Bg98)住居跡には石製紡錘車が出土している。

〔時期及び年代その他〕遺構の形態及び出土遺物のその両者の組合せによる時期的特徴をまとめあげた編年資料は巻末に示す通りであるが、当遺跡の竪穴式住居跡に対応させて見た。(遺物同定の統一性に難が有り今後の課題ともなるが) 第1号(Bc71)住居跡、8号(Df245)住居跡はⅧ群(平安時代初期～前半)に相当する。第6号住居跡及び第7号(Da224)住居跡を除いた残りはⅨ群(平安時代前期～後期)に相当する。第5号(Bh06)住居跡は出土遺物の特異性をも考慮する必要があろう。第7号(Da224)住居跡床面出土の須恵器坏は篦切無調でⅧ群相当のものであるが第8号(Df245)住居跡埋土出土口縁部と接合する事等より前記の結果の様になった。^{14}C測定を行なった第3号住居跡出土の炭化材については(資料番号N－3860－13－13)(1290±60yBP(1250±60yBP))という結果を得ている。資料の流れ込み等は考慮する必要はないが、測定結果よりのAC660±60yはⅨ群10世紀代と約300～180年の差を示す。今後の類例を待ちたい。なお、材質はナラ及びクリで混合の形で測定を行った。

(2)方形溝遺構について

本遺構の類例、性格、時期等についてだけ記する。

紫波町上平沢新田遺跡、江刺市宮地遺跡、二戸市上里遺跡、紫波町宮手遺跡、都南村湯沢遺跡等に見られる。形態的には連続しているという点で前二者は良く似ている。上里遺跡の場合は独立したものでありこれも類似している。また上里遺跡は円形周湟との兼ねあいで墓址との性格が考えられようが上部構造を欠く事より墓址との断定はさけている。時期的な点では、これら5遺跡とも、平安時代とし、上平沢新田遺跡にては中期(9世紀中半以降～10世紀代)以降、宮地にては平安時代初期以降、上里遺跡では中期(9世紀～10世紀)としている。当遺跡において性格を明示する材料は類例と同様皆無と言ってよいが、西方段丘延長上に鶴田古墳、南西方向に見分森古墳(平安初期造営)があり、幾分なりとも墓址との関連の可能性が出て来る。方形周湟墓は古くは弥生時代に見られる。当遺跡の本方形溝遺構は、切合い関係等よりⅨ群相当(平安時代後半)期以降としたい。

2．遺跡の年代等

本遺跡の年代については、縄文時代早期末前期初頭より平安時代まで、途中に長い空白を有しながらも時を経過して来た。遺構よりは平安時代が最大の生活空間を占めた事が伺がわれる。

遺跡としては地形の延長方向への広がりが考えられ、東西に範囲は広がる。

本報告に関しては色々な未解決部分、分析不足の点があり、今後の類例研究の成果に期待したい。

《参考文献》

(自然科学関係)

中川　ほか　　北上川中流沿岸の第四系及び地形(地史)　地質学雑誌第69巻812号　1963.5

日本地質学会第80年総会見学旅行２資料　北上川低地帯の鮮新統第四系地形　1973

佐藤二郎　　考古学のための地質学—岩手県文化課における講演資料—　1978.8

町田　洋　　火山灰　岩手県(財)埋蔵文化財センター主催講演会資料　1979.6

考古学と自然科学　第１号～第10号

経済企画庁　　土地分類基本調査　水沢(１：５万)　国土調査　1963

岩手県農政部北上山系開発室　　北上山系開発地域土地分類基本調査　北上(1：5万)　国土調査　1978

北上市教育委員会　　北上市教育センター理科講座資料

(縄文時代関係)

今村啓爾　　縄文時代の陥穴と民族誌上の事例の比較　物質文化№27

宮沢・今井　　縄文時代早期後半における土壙をめぐる諸問題—いわゆる落し穴について—　1976

調査研究集録第１集　港北ニュータウン埋蔵文化財調査団

霧ヶ丘調査団　　霧ヶ丘　1973

岩手県教委・日本道路公団　　岩手県文化財調査報告書第31集　本調査関連報告書—Ⅰ—　1979

(財)埋文センター　　岩手県(財)埋文センター報告書第２集　都南村湯沢遺跡　1977

(古代関係)

水沢市教育委員会　　岩手県水沢市佐倉河　胆沢城跡—昭和49～54年度発掘調査概報—

多賀城跡調査研究所　宮城県多賀城跡調査研究年報—昭和47～50年度発掘調査概報—

福島県考古学会　　福島県の土師器編年(第18回福島県考古学大会シンポジュウム資料)　1976

桑原・岡田　　多賀城周辺における古代坏形土器の変遷　研究紀要Ⅰ　多賀城研究所

岩手ビルKK・都南村教育委員会　　百目木遺跡発掘調査報告書(岩手県都南村)　1979

県教委・国鉄　　岩手県文化財調査報告書第48集　東北新幹線関係報告書Ⅳ宮地遺跡　1980

県教委・日本道路公団　　〃　　第32集　本調査関連報告書Ⅱ　1979

〃　　〃　　第52集　　〃　　Ⅲ「上平沢新田」　1980

渡辺泰伸　　東北古墳時代須恵器の様相と編年(試論)　考古学雑誌　第65巻第４号　1980

青森県教育委員会　　青森県埋蔵文化財調査報告書第52集　大平遺跡(東北自動車道関連)　1979

〃　　〃　　第54集　碇ヶ関村古舘遺跡(東北自動車道関連)　1980

県土木部・(財)埋文センター　　岩手県(財)埋文センター報告書第８集　力石Ⅱ遺跡　1979

〃　　〃　　第９集　54年度略報　上里遺跡　1980

〃　　〃　　第13集　繋Ⅲ遺跡　建設省御所ダム事務所

水沢市史編纂委員会「水沢市史Ⅰ　原始—古代」　水沢史刊行会　1974

本堂寿一　　「極楽寺伝座主坊跡緊急発掘調査報告書—付、寺院跡出土土器の再整理とその考察—北上市立博物館研究報告第３号　1980

草月・玉川　　長沼古墳(岩手県和賀町)　和賀町教育委員会　1974

広島県教育委員会((財)埋文センター)　　恵下遺跡　1980

神奈川県教育委員会　神奈川県埋蔵文化財調査報告17—新羽大竹遺跡—　1980

福島県教育委員会・(財)県文化センター　　福島県文化財調査報告第84集　母畑地区Ⅳ　1980

石田茂作(監)　　新版仏教考古学講座第７巻　墳墓　雄山閣　1975

斎藤　忠　　墳墓(日本史小百科)　近藤出版社　1978

西　田　遺　跡

前谷地遺跡

西　田　遺　跡

1．遺　跡　名　　西田遺跡（略号ＮＤ74）
2．所　在　地　　水沢市福原字西田
3．調 査 主 体　　岩手県教育委員会・日本道路公団
4．調 査 担 当　　岩手県教育委員会
5．調 査 期 間　　昭和50年６月26日～６月27日
6．遺跡対象面積　　2,500m²
7．発掘調査面積　　2,450m²
8．調 査 概 要

本遺跡推定地は、福原段丘面に存在し、表面調査において
土師器片を採集している。調査は表土剝ぎをブルをもって行なったが
表土中より土師器細片が、数点出土したのみで、遺構の検出はでき得なかった。

前 谷 地 遺 跡

1．遺　跡　名　　前谷地遺跡（略号ＭＹ74）
2．所　在　地　　水沢市福原字前谷地
3．調 査 主 体　　岩手県教育委員会・日本道路公団
4．調 査 担 当　　岩手県教育委員会
5．調 査 期 間　　昭和50年６月26日～６月27日
6．遺跡対象面積　　1,200m²
7．発掘調査面積　　1,175m²
8．調 査 概 要

本遺跡推定地は、福原段丘に存在し、表面調査において
土師器片を採集しておる。表土剝ぎをブルをもって行ったが
遺構、遺物の検出は出来得なかった。

福原
後藤寿庵
西田遺跡
STA22
STA21
STA20
STA19
前谷地遺跡
0 10 50 100m

袖谷地遺跡

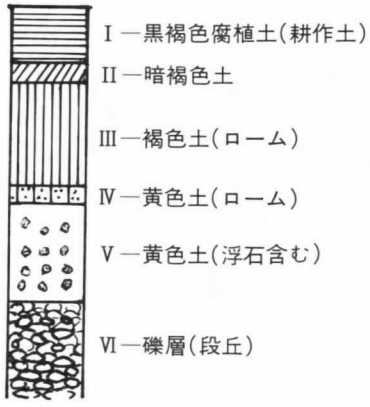
1．遺　跡　名　袖谷地遺跡（略号SYT74）
2．所　在　地　岩手県水沢市福原字袖谷地
3．調査主体　岩手県教育委員会・日本道路公団
4．調査担当　岩手県教育委員会
5．調査期間　昭和49年10月9日～12月4日
6．調査対象面積　4790㎡
7．発掘調査面積　4200㎡

Ⅰ　位置と立地（第１図）

本遺跡は東北本線水沢駅南西方約5.0kmの中位段丘最下段（胆沢段丘福原面）の南縁近くにあたり、東西に長く延びる段丘平坦面に立地している。標高は約68ｍで現状は宅地・畑・屋敷林であった。調査は段丘平坦面を南北に横断する形で行なわれた。周辺の遺跡としては、西に合野遺跡（縄文前・晩期）東に公園遺跡（縄文・中期）南西の方向では見分森遺跡等があり、古墳、縄文時代のものである。本調査に関連するものは北方に、西田、前谷地の遺跡がある。

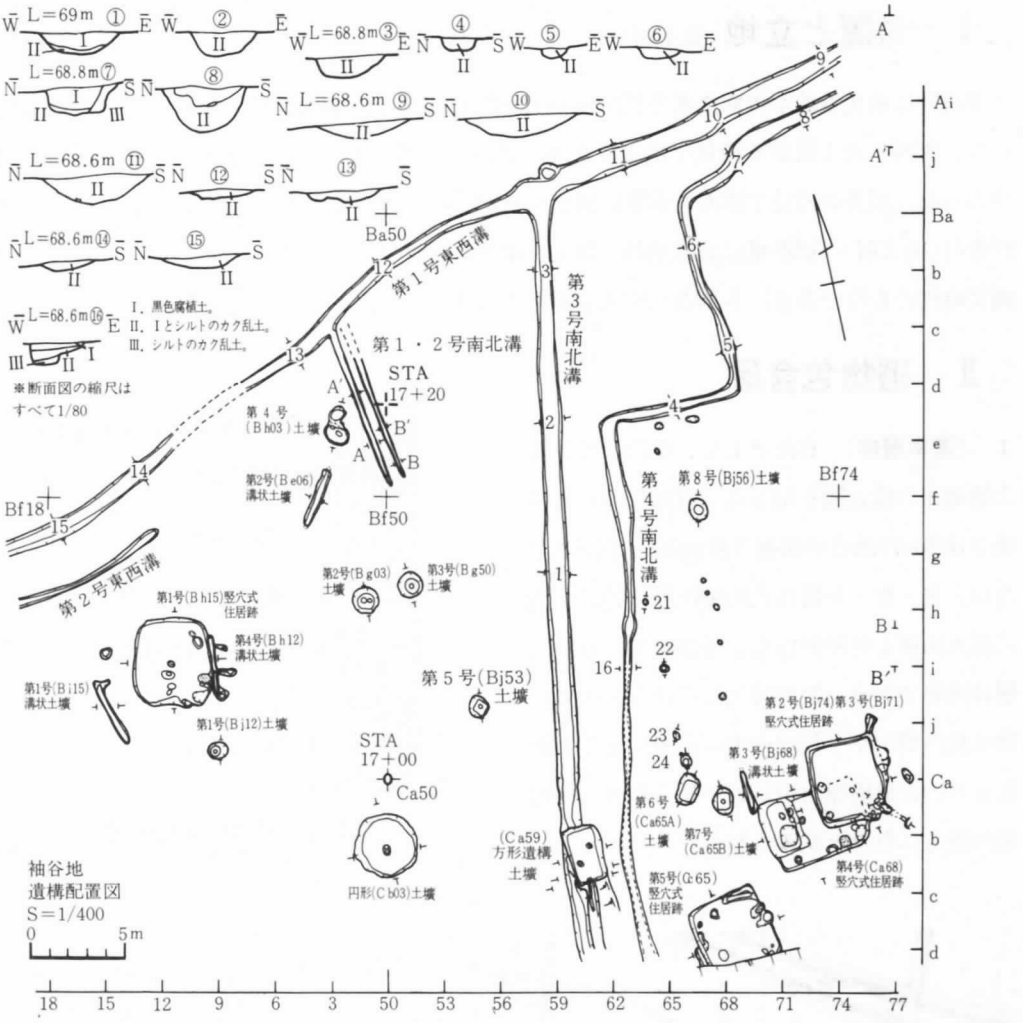
Ⅱ　遺物包含層

1　〔基本層序〕　右記として、現状における土層断面の模式図を示した。詳細については第３図Bh77地点の深掘り断面図を参照されたい。Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ層は火山墳出堆積物で、黒沢尻火山灰と村崎野浮石と呼ばれている。Ⅵ層は礫層である。歴史時代に於ける火山噴出物は秋田焼山や十和田火山に由来すると思われるものが遺構埋土中に若干見られる。供給源の特定は色々と試みられている。



第２図　基本層序模式図

第１図　袖谷地遺跡・地形図及びグリッド配置図



第3図　遺構配置図・溝断面図